

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第1集

西 牧 野 遺 跡

(2010年度調査)

2013

愛知県埋蔵文化財調査センター

愛知県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第1集

にし まきの 西 牧 野 遺 跡

(2010年度 調査)

2013

愛知県埋蔵文化財調査センター

序

西牧野遺跡は、岡崎市の東部（旧額田町）檜山町・牧平町に位置する遺跡です。

遺跡の発掘調査は、第二東海自動車道建設工事に伴う事前調査として平成 21 年度に（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが調査を行い、平成 22 年度には愛知県埋蔵文化財調査センターが調査を行いました。

平成 22 年度調査においては、21 年度に引き続き旧石器時代の遺構・遺物が数多く確認され、特に礫群については豊川市駒場遺跡に次ぐ、本県 2 例目となります。また、新たに、中世の屋敷群の存在が確認されたことも、この地域の歴史を考える上で大きな成果と言えます。

今後は、これらの資料が検討・活用され当地域の歴史研究がより一層進むことを期待するとともに、埋蔵文化財に対するご理解の一助となれば幸いです。

最後に発掘調査にあたり、地元住民の方々をはじめ関係者及び関係諸機関の皆様にご理解とご協力をいただきましたことに対し、深くお礼を申し上げます。

平成 25 年 3 月

愛知県埋蔵文化財調査センター
所長 梅本博志

例 言

1. 本書は、岡崎市榎山町・牧平町に所在する西牧野遺跡（遺跡番号：620028）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、中日本高速道路株式会社による第二東海自動車道横浜名古屋線建設に伴い愛知県教育委員会が受託し、平成 21 年度に（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが 13,440 m²、22 年度には愛知県埋蔵文化財調査センターが 24,810 m²、合わせて 38,250 m²を実施したが、本書は、このうち平成 22 年度の調査成果をまとめたものである。
3. 平成 21 年度の調査については、（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター編『西牧野遺跡（2009 年度調査）』にまとめられており、遺跡調査の概要及び旧石器時代の遺跡としての評価等については、同書を参照されたい。
4. 愛知県埋蔵文化財調査センターによる調査は、平成 22 年 5 月から平成 23 年 3 月であり、平成 23 年度に整理及び報告書作成のための作業を実施した。
5. 調査担当者は、宇佐見守（本センター調査研究課長補佐）・石原真吾（現 岡崎市立連尺小学校）・亀甲真史（現 愛知教育大学付属特別支援学校）・榊原清人（現 半田市立乙川東小学校）・白井克尚（現 豊川市立三蔵子小学校）・永井宏幸（公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）・伊奈和彦・本田英貴（本センター主任）・成瀬友弘（本センター主査）である。発掘調査は株式会社パスコの支援を受けて実施した。
6. 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、岡崎市教育委員会、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、中日本高速道路株式会社をはじめとする、多くの関係諸機関のご協力を得た。
7. 執筆と編集は成瀬友弘が担当したが、一部に分担執筆がある。
第 3 章 第 5 節 山内 基樹（株式会社文化財サービス）
第 4 章 パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
8. 整理作業は成瀬友弘が担当した。遺物の整理作業・実測・トレース作業・写真撮影（石器・石製品）と報告書の編集作業は株式会社文化財サービスに、放射性炭素年代測定は株式会社パレオ・ラボに、また写真撮影（石器・石製品以外）を写真工房遊（金子知久）にそれぞれ作業を委託した。
9. 遺物は、本書に掲載された遺物図版番号を登録番号として整理した。
10. 写真や図面等の調査記録・出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4164)
11. 本書を作成に至るまでに、本センター職員をはじめとして下記の方々から多くのご指導とご助言を受けている。記して感謝したい。
岩野見司 川井啓介 河合仁志 神取龍生 齊藤基生 白石浩之 都築暢也 西松賢一郎 余合昭彦 平井義敏 藤澤良祐 山口遙介 森勇一（五十音順、敬称略）

目 次

第1章	調査の経緯・経過	1
第1節	調査の経緯・体制	1
第2節	調査の経過	1
第2章	遺 構	5
第1節	基本層序	5
第2節	遺 構	10
第3章	遺 物	99
第1節	出土遺物の概要	99
第2節	土器・陶磁器類	99
第3節	金属製品	108
第4節	木製品	108
第5節	石器・石製品	111
第4章	放射性炭素年代測定	181
第5章	考察・総括	185
第1節	考察	185
第2節	総括	188

挿図目次

第1図	調査区位置図 (1:4000)	1	第59図	G区060SI内SK (SP) 断面図	71
第2図	基本層序1	6	第60図	G区1323SI・1324SI・1732SI 平面図・断面図	72
第3図	基本層序2	7	第61図	G区893SB平面図・断面図	73
第4図	基本層序3	8	第62図	G区1727SB平面図・断面図	74
第5図	基本層序4	9	第63図	G区1728SB平面図・断面図	75
第6図	A区049SK平面図・断面図	11	第64図	G区1729SB平面図・断面図	76
第7図	A区SD断面図	11	第65図	G区1730SB平面図・断面図	77
第8図	B区257SB・258SB平面図・断面図	12	第66図	G区1730SB内SK (SP) 断面図	78
第9図	B区SK平面図・断面図	13	第67図	G区1731SB平面図・断面図	79
第10図	B区SD断面図1	14	第68図	G区1731SB内SK (SP) 断面図	80
第11図	B区SD断面図2	15	第69図	G区SK平面図・断面図 (1)	82
第12図	C区SK平面図・断面図	16	第70図	G区SK平面図・断面図 (2)	83
第13図	C区016SD断面図	17	第71図	G区SK平面図・断面図 (3)	84
第14図	C区162SD断面図	18	第72図	G区SK平面図・断面図 (4)	85
第15図	Da区281SI平面図・断面図	19	第73図	G区SD平面図・断面図	86
第16図	Da区281SIエレベーション	20	第74図	G区SD・SU平面図・断面図	87
第17図	Da区SI平面図・断面図	21	第75図	G区SE平面図・断面図	88
第18図	Da区942SB・969SB平面図・断面図	23	第76図	H区SK平面図・断面図 SD断面図 SE平面図・断面図	90
第19図	Da区970SB・971SB平面図・断面図	24	第77図	I区SI平面図・断面図	91
第20図	Da区980SB・981SB平面図・断面図	25	第78図	I区656SB・657SB平面図・断面図	92
第21図	Da区SK平面図・断面図 (1)	26	第79図	I区658SB平面図・断面図	93
第22図	Da区SK平面図・断面図 (2)	27	第80図	I区SK平面図・断面図	93
第23図	Da区SK平面図・断面図 (3)	28	第81図	I区SK平面図・断面図 SD断面図	94
第24図	Da区SK平面図・断面図 (4)	29	第82図	I区045SE平面図・断面図	96
第25図	Da区006SD断面図・008SD 平面図・断面図・058SD断面図	30	第83図	Db区・F区礫群平面図・断面図	97
第26図	Da区SD断面図	31	第84図	G区礫群平面図・断面図	98
第27図	Db区SK平面図・断面図	33	第85図	縄文時代の遺物 (S=1/4)	100
第28図	Db区SD断面図	34	第86図	弥生時代の遺物 (S=1/4)	101
第29図	Db区1110SE平面図・断面図	35	第87図	B区・C区出土遺物 (S=1/4)	102
第30図	E区137SI平面図・断面図	37	第88図	Da区008SD出土遺物 (S=1/4)	103
第31図	E区326SI断面図・平面図	38	第89図	Da区SD・SK その他出土遺物 (S=1/4)	104
第32図	E区326SI内SK (SP) 断面図	39	第90図	Db区出土遺物 (S=1/4)	104
第33図	E区1478SB・1479SB平面図・断面図	40	第91図	E区出土遺物 (S=1/4)	106
第34図	E区1480SB平面図・断面図	41	第92図	F区出土遺物 (S=1/4)	106
第35図	E区1481SB平面図・断面図	42	第93図	G区出土遺物 (S=1/4)	107
第36図	E区1482SB平面図・断面図	43	第94図	I区出土遺物 (S=1/4)	107
第37図	E区1483SB平面図・断面図	44	第95図	加工円盤 (S=1/4)・陶丸 (S=1/2)	109
第38図	E区1485SB平面図・断面図	45	第96図	鍛冶関連遺物 (S=1/4)	109
第39図	E区1484SB・1486SB平面図・断面図	47	第97図	金属製品 (S=1/4)	109
第40図	E区SK平面図・断面図 (1)	48	第98図	木製品 (S=1/4)	110
第41図	E区SK平面図・断面図 (2)	49	第99図	石器群出土分布図1 (A・B・C区)	112
第42図	E区SK平面図・断面図 (3)	50	第100図	石器群出土分布図2 (Da区)	113
第43図	E区SK平面図・断面図 (4)	51	第101図	石器群出土分布図3 (Db区)	114
第44図	E区SD断面図	52	第102図	石器群出土分布図4 (E区東)	115
第45図	E区123SE平面図・断面図	53	第103図	石器群出土分布図5 (E区西)	116
第46図	E区420SE平面図・断面図	54	第104図	石器群出土分布図6 (F区東)	117
第47図	E区001SR平面図・断面図	55	第105図	石器群出土分布図7 (F区西)	118
第48図	F区972SB平面図・断面図	57	第106図	石器群出土分布図8 (G区東)	119
第49図	F区973SB・974SB平面図・断面図	58	第107図	石器群出土分布図9 (G区西)	120
第50図	F区SK平面図・断面図 (1)	59	第108図	石器群出土分布図10 (H・I区)	121
第51図	F区SK平面図・断面図 (2)	61	第109図	B・C・Da区出土石器 (S=2/3)	134
第52図	F区SK平面図・断面図 (3)	62	第110図	Db区出土石器1 (S=2/3)	135
第53図	F区SK平面図・断面図 (4)	64	第111図	Db区出土石器2 (S=2/3)	136
第54図	F区SK平面図・断面図 (5)	65	第112図	Db区出土石器3 (S=2/3)	137
第55図	F区SK平面図・断面図 (6)	66	第113図	Db区出土石器4 (S=2/3)	138
第56図	F区SD断面図	67	第114図	E区出土石器 (S=2/3)	139
第57図	F区SD・SX平面図・断面図	68			
第58図	G区060SI平面図・断面図	70			

第 115 図	F 区出土石器 1 (S=2/3)	140
第 116 図	F 区出土石器 2 (S=2/3)	141
第 117 図	F 区出土石器 3 (S=2/3)	142
第 118 図	G 区出土石器 1 (S=2/3)	143
第 119 図	G 区出土石器 2 (S=2/3)	144
第 120 図	G 区出土石器 3 (S=2/3)	145
第 121 図	G 区出土石器 4 (S=2/3)	146
第 122 図	G 区出土石器 5 (S=2/3)	147
第 123 図	G 区出土石器 6 (S=2/3)	148
第 124 図	G 区出土石器 7 (S=2/3)	149
第 125 図	G 区出土石器 8 (S=2/3)	150
第 126 図	G 区出土石器 9 (S=2/3)	151
第 127 図	G 区出土石器 10 (S=2/3)	152
第 128 図	G 区出土石器 11 (S=2/3)	153
第 129 図	G 区出土石器 12 (S=2/3)	154
第 130 図	I 区出土石器 (S=2/3)	155
第 131 図	敲石 1 (S=2/3)	156
第 132 図	敲石 2 (S=2/3)	157
第 133 図	敲石 3 (S=2/3)	158
第 134 図	B・C・Da 区出土石器 (S=2/3)	159
第 135 図	石皿 2 (S=1/2)	160
第 136 図	砥石 (S=1/2)	161
第 137 図	石製品 (S=1/2・2/3)	162
第 138 図	石製品 (S=1/2・2/3)	163
第 139 図	Db 区接合資料分布図 (接合資料 1) S=1/50	167
第 140 図	F 区接合資料分布図 (接合資料 2) S=1/50	168
第 141 図	F 区接合資料分布図 (接合資料 3) S=1/50	168
第 142 図	G 区接合資料分布図 (接合資料 4・5・8) S=1/50	169
第 143 図	G 区接合資料分布図 (接合資料 9) S=1/50	169
第 144 図	G 区接合資料分布図 (接合資料 6・10) S=1/50	170
第 145 図	G 区接合資料分布図 (接合資料 7・11) S=1/50	170
第 146 図	G 区接合資料分布図 (接合資料 12・20) S=1/50	171
第 147 図	I 区接合資料分布図 (接合資料 15) S=1/100	171
第 148 図	I 区接合資料分布図 (接合資料 13・14) S=1/50	172
第 149 図	I 区接合資料分布図 (接合資料 16～19) S=1/50	172
第 150 図	接合資料 1(S=2/3)	173
第 151 図	接合資料 2(S=2/3)	174
第 152 図	接合資料 3(S=2/3)	175
第 153 図	接合資料 4(S=2/3)	176
第 154 図	接合資料 5(S=2/3)	177
第 155 図	接合資料 6(S=2/3)	178
第 156 図	接合資料 7(S=2/3)	179
第 157 図	接合資料 8(S=2/3)	180
第 158 図	西牧野遺跡竪穴状遺構平面図 (S=1/100)	186
第 159 図	西牧野遺跡中世遺構変遷図 (S=1/4000)	187
第 160 図	遺構図 1 (A・B・C 区)	189

第 161 図	遺構図 2 (Da 区)	190
第 162 図	遺構図 3 (Db 区)	191
第 163 図	遺構図 4 (E 区東)	192
第 164 図	遺構図 5 (E 区西)	193
第 165 図	遺構図 6 (F 区東)	194
第 166 図	遺構図 7 (F 区西)	195
第 167 図	遺構図 8 (G 区東)	196
第 168 図	遺構図 9 (G 区西)	197
第 169 図	遺構図 10 (H・I 区)	198

表目次

第 1 表	出土石器組成表	122
第 2 表	B・C・Da 区出土石器	122
第 3 表	Db 区出土石器	123
第 4 表	E 区出土石器	124
第 5 表	F 区出土石器	124
第 6 表	G 区出土石器 1	127
第 6 表	G 区出土石器 2	128
第 6 表	G 区出土石器 3	129
第 7 表	I 区出土石器	130
第 8 表	出土石製品	131
第 9 表	接合資料	166
第 10 表	測定試料および処理	183
第 11 表	放射性炭素年代測定および 暦年較正の結果	184

写真図版目次

遺構写真	写真図版 1～14
遺物写真	写真図版 15～44

第1章 調査の経緯・経過

第1節 調査の経緯・体制

2010年度の発掘調査は、中日本高速道路株式会社からの依頼を受けて、愛知県埋蔵文化財調査センターが株式会社パスコの支援を受けて実施した。調査期間は、平成22年6月から平成23年3月で、調査面積は24,810㎡であった。

調査担当者は宇佐見守、石原真吾、伊奈和彦、亀甲真史、榊原清人、本田英貴、白井克尚、成瀬友弘（以上愛知県埋蔵文化財調査センター）、永井宏幸（（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）である。

支援業者の調査体制は以下の通り

現場代理人 遠藤民雄

調査補助員 佐藤好司（統括）、伊藤雅乃、小柳太一、後藤太一、下島健弘、小泉信吾

土木測量技師 播間大輔、屋嘉慎太郎

第2節 調査の経過

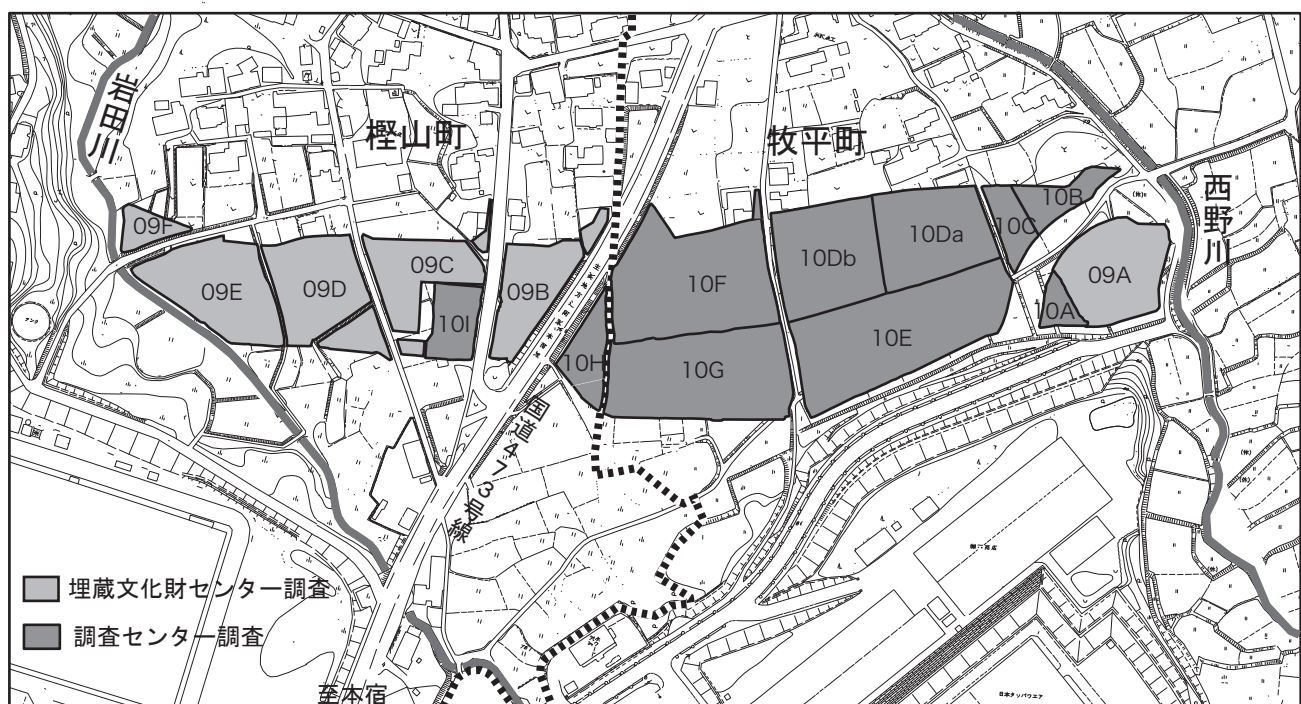
調査区は、前年度公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが行った調査に挟まれた区域で便宜上、東からA～I区（D区については排土の関係でDa区、Db区に分割）の10調査区に分けて実施した。調査方法は、バックホウにより耕作土等の表土を除去し、中世を中心とする遺構面まで掘削し、その後部分的に旧石器の出土する部分をさらに人力で掘削した。

調査区は5mグリッドを設定し、遺物は原則このグリッドごとに取り上げている。土坑類は半裁掘削、溝等は土層観察用のベルトを残して掘削し、必要な記録を採取した後に全掘作業を行った。遺構の実測は電子平板による測量を実施し、成果品はすべてデジタルデータで作成した。写真は6×7リバーサルフィルムとデジタルカメラによる撮影を調査補助員が行った。

平成22年10月16日には地元向け説明会を開催し、検出された遺構と出土した遺物について説明を行った。100名を超す参加者があった。

また、出土した遺物については現場で洗浄作業を実施し、その量は洗浄を終了した時点で27リットル入りコンテナで60箱に及ぶ。現地作業は平成22年3月18日に終了した。

整理・報告書作成作業は平成23年度に成瀬が担当し、弥富市の愛知県埋蔵文化財調査センターで実施した。遺物の整理作業は株式会社文化財サービスに委託し、旧石器については愛知学院大学白石浩之教授の指導のもと株式会社文化財サービスに原稿の執筆まで委託し行った。自然科学分析については、



第1図 調査区位置図 (1:4000)

黒曜石の産地同定を第四紀地質研究所に、火山灰の分析を古澤地質研究所に、放射性炭素年代測定を株式会社パレオ・ラボに委託し行った。遺物の写真撮影については、石器類は株式会社文化財サービスが、その他は写真工房遊に委託し行った。

遺物は整理作業が終了した時点で、27 リットル入りコンテナ 55 箱に整理され、当センターで管理している。

調査日誌（抄）

7月26日（月）A 区表土掘削開始。
7月27日（火）B 区表土掘削開始。半田市立雁宿小学校 5 年生及び引率教諭（計 94 名）遺跡見学。県文化財保護室洲崎氏来跡。
7月28日（水）岡崎市立竜海中学校 2 年生 3 名来跡。
7月30日（金）A 区遺構検出開始。
8月2日（月）G 区表土掘削開始。A 区遺構検出写真撮影、遺構掘削開始。
8月3日（火）B 区遺構検出開始。愛知県立南陽高等学校 3 年生 1 名体験発掘。
8月4日（水）岡崎市立竜海中学校 2 年生 3 名職場体験学習（～6 日（金））。愛知県立熱田高等学校城ヶ谷氏、知多市立旭北小学校荒尾氏来跡。
8月6日（金）B 区遺構検出写真撮影、遺構掘削開始。
8月10日（火）G 区東半部の遺構検出開始。
8月11日（水）A 区全景撮影。岡崎市教委文化財課河合氏他 4 名来跡。
8月17日（木）岡崎市立河合中学校 1 年生 1 名体験発掘。岡崎市教委教育委員長平野氏、設楽岩石研究会（岡崎市立葵中学校長内田氏他 5 名）来跡。
8月20日（金）幡豆町大橋氏来跡。
8月23日（月）A 区下層確認後、埋め戻し開始。愛知県立岡崎西高等学校都築氏、山田氏、生徒 2 名（うち生徒 1 名体験発掘）、幡豆町大橋氏、幡豆町立横須賀小学校 5 年生 1 名と保護者来跡。
8月25日（水）A 区埋め戻し完了。
8月26日（木）岡崎市立美川中学校長石川氏他 2 名来跡。
8月27日（金）G 区東半部遺構検出写真撮影。
8月30日（月）G 区遺構掘削開始。
8月31日（火）B 区全景撮影。パスコによる安全点検。
9月6日（月）B 区埋め戻し開始。
9月7日（火）G 区西半部表土掘削開始。
9月9日（木）C 区表土掘削開始。
9月10日（金）B 区下層確認後、埋め戻しを行い調査終了。C 区遺構検出開始。G 区西半部遺構検出開始。
9月13日（月）C 区遺構掘削開始。
9月14日（火）I 区表土はぎ開始。
9月21日（火）G 区西半部遺構検出写真撮影。
9月22日（水）G 区西半部遺構掘削開始。岡崎市立宮崎小学校 3 年生・4 年生及び引率教諭（計 15 名）体験発掘。
9月24日（金）C 区遺構検出写真撮影。
9月27日（月）I 区遺構検出開始。県文化財保護室佐藤氏、企業庁の方 2 名、国際文化財坂野氏来跡。
10月1日（金）I 区遺構検出写真撮影、遺構掘削開始。
10月5日（火）H 区表土掘削開始。
10月6日（水）パスコによる安全指導。
10月7日（木）愛知県立岡崎西高等学校長都築氏来跡。
10月11日（月）岡崎市文化財移動教室（計 14 名）遺跡見学。
10月12日（火）パスコによる危険予知活動、安全提言表彰。愛知県立幸田高等学校川井氏来跡。

10月15日(金) C区・G区全景撮影。県文化財保護室佐藤氏、企業庁の方2名来跡。
10月16日(土) 地元説明会(見学者100名超)。
10月26日(火) C区下層確認を行い調査終了、埋め戻し開始。
10月27日(水) H区遺構検出開始。
10月28日(木) C区埋め戻し完了。
11月5日(金) G区・I区全景撮影。
11月8日(月) F区西半部表土掘削開始。岡崎市教委山口氏、他1名来跡。
11月9日(火) H区遺構検出写真撮影、遺構掘削開始。新編岡崎市史額田資料編編纂事務局中村氏、宇佐美氏他3名来跡。
11月12日(金) 県文化財保護室室長補佐梅本氏来跡
11月16日(火) H区全景撮影。
11月17日(水) H区調査終了、埋め戻し開始。
11月18日(木) H区埋め戻し終了。
11月19日(金) 愛知学院大白石氏来跡。
11月20日(土) 岡崎市社会科教員グループ4名遺跡見学。
11月25日(木) Da区表土掘削開始。I区下層確認。名古屋外国語大学齊藤氏、幸田町教委神取氏来跡。
11月26日(金) G区下層確認後、埋め戻し開始。I区調査終了、埋め戻し開始。
11月29日(月) I区埋め戻し完了。
11月30日(火) F区西半部遺構検出開始。(株)高木製作所藤井氏来跡。
12月1日(水) 荒木集成館館長岩野氏、岡崎市美術博物館副館長荒井氏、岡崎市教委河合氏、山口氏、新編岡崎市史額田資料編編纂事務局中村氏、宇佐美氏他1名来跡。
12月2日(木) F区西半部遺構検出写真撮影。岐阜県博物館長屋氏来跡。
12月6日(月) F区西半部遺構掘削開始。
12月8日(水) みよし市教委平井氏来跡
12月9日(木) Da区遺構検出開始。
12月10日(金) G区調査終了。
12月13日(月) G区埋め戻し完了。
12月14日(火) F区東半部表土掘削開始。
12月15日(水) 東海愛知新聞岩月氏来跡。
12月17日(金) Da区遺構検出写真撮影、遺構掘削開始。F区東半部遺構検出開始。
12月20日(月) パスコ安全パトロール。大口町歴史民俗資料館西松氏来跡。
12月22日(水) F区東半部遺構検出写真撮影。
12月23日(木) E区試掘トレンチ掘削開始。
12月24日(金) F区東半部遺構掘削開始。愛知県立岡崎西高等学校長都築氏来跡。
12月27日(月) 愛知教育大学元学長仲井氏、岡崎市立葵中学校長内田氏他2名、来跡。
1月7日(金) E区試掘トレンチ調査終了。ボーリング調査。
1月11日(火) Db区表土掘削開始。
1月13日(木) 岡崎市立豊富小学校竹内氏来跡。
1月14日(金) Da区、F区全景撮影。
1月20日(木) 新編岡崎市史額田資料編編纂事務局の方6名来跡。
1月21日(金) Db区遺構検出開始。岡崎市立豊富小学校5年生及び引率教諭(計42名)遺跡見学。
1月24日(月) E区表土掘削開始。Db区遺構検出写真撮影、遺構掘削開始。
1月25日(火) Da区埋め戻し開始。
2月3日(木) 愛知学院大学白石氏、みよし市教委平井氏、愛知学院院生長澤氏来跡。
2月4日(金) Da区調査終了。
2月5日(土) Da区埋め戻し終了。

2月7日(月) 地元の方 5 名遺跡見学。
2月8日(火) F 区下層確認、調査終了、埋め戻し開始。
2月9日(水) E 区遺構検出開始。
2月10日(木) 岡崎市立豊富小学校教員16名、地元の方2名遺跡見学。
2月15日(火) E 区東半部遺構検出写真撮影。
2月17日(木) Db 区全景撮影。E 区西半部遺構検出写真撮影、遺構掘削開始。
2月19日(土) E 区北東部遺構検出写真撮影。
2月23日(水) 愛知学院大学生6名発掘体験。
2月26日(土) 東海石器研究会(愛知学院大学白石氏他 10 名)、設楽談話会(元愛知教育大学学長仲井氏他3名) 来跡。
3月5日(土) E 区全景撮影。
3月9日(水) 額田を愛する会(4 名) 遺跡見学。
3月11日(金) 金城学院大学森氏来跡。
3月15日(火) Db 区下層確認。
3月16日(水) E 区調査終了、埋め戻し開始。
3月18日(金) Db 区調査終了、埋め戻し開始。E 区埋め戻し完了。
3月22日(火) Db 区埋め戻し完了。
3月30日(水) 発掘調査成果品納品。

第2章 遺 構

第1節 基本層序

西牧野遺跡における基本的な層序については調査区が広範囲に広がっていることもあり、調査区によって様相が異なるのでそれぞれについて紹介したい。

(1) A区～C区(第2図)

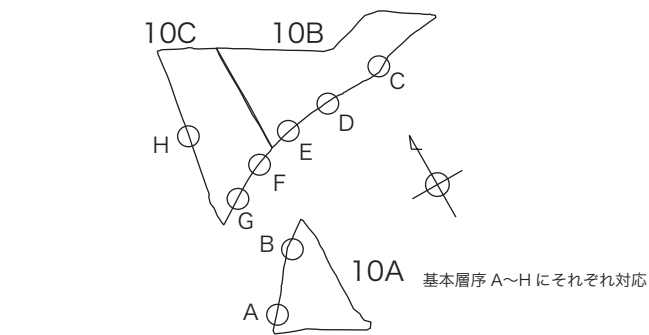
A区は調査区の東と西で様相が異なっている。西側は表土の下に黄褐色粘質シルト、明褐色粘質土、明黄褐色砂質シルトと堆積し、山裾を削平してつくられた面であった(第2図A)。一方東側では表土、耕作土の下に黄褐色粘質シルト、にぶい黄褐色シルト、黄褐色砂質シルト、オリーブ褐色砂質シルトなどが堆積(第2図B)し、東側の谷から運ばれた土砂の堆積が確認できており、一部には土石流などの痕跡と思われる礫の堆積なども確認された。B区は耕作土の下に黄褐色を中心とする旧耕作土、その下の層は東側では褐色中粒砂、黄褐色シルト、黄褐色粘質シルト、オリーブ褐色粘質シルトとなっている(第2図C)が、中央から西側については明褐色粘質シルト、明黄褐色・黄褐色粘質シルト・砂質シルトなど安定した台地となっている(第2図D・E)。調査区中央ではこうした層の上に黒褐色シルトの層があり、弥生土器などを含む包含層が確認できた(第2図D)。C区はB区との境付近に暗褐色砂質シルトで礫を多く含む土砂の堆積があり(第2図F)、中央付近では、耕作土の下に明褐色粘質シルト、オリーブ褐色粘質シルト、にぶい黄褐色粘質シルト、オリーブ褐色粘質シルトと堆積しており(第2図G)、西側では耕作土の下に黒褐色砂質シルトを主とする遺物包含層があり、この下に褐色粘質シルト・砂質シルトの層が堆積していた(第2図H)。A～C区の状況は調査区東側の西野川が流れる谷からの土石流などの影響を受け、浸食と堆積を繰り返しており、一部に残る包含層の状況から中世には安定した土地となっていたと考えられる。このため調査は、A区では西側では黄褐色粘質シルト、東側ではにぶい黄褐色シルトの層の上で検出し、B・C区では部分的に残る黒褐色砂質シルトの上面で検出・掘削をした後、黒褐色砂質シルトを除去し、再度検出作業を行う形で行った。なお、B区では黄褐色シルト層(第2図C)より旧石器が確認され一部掘り下げを行った。

(2) D区・E区(第3図)

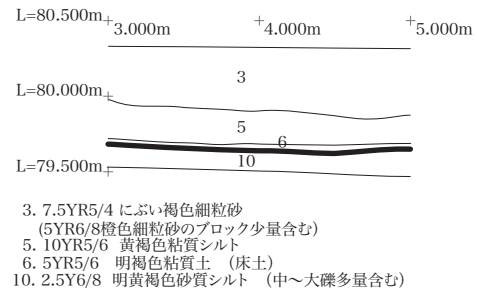
D区・E区は南東から北西にかけて耕作土の下に黒褐色砂質シルトの層が包含層としてあり(第3図A・C・D・E・F・G・I・J)、場所によっては黒褐色砂質シルトの間ににぶい黄色中礫層が入ったり(第3図D)、黒褐色砂質シルトの層が厚く数層に分割できること、さらにE区南東ではこれらの層の下に灰オリーブ極細粒砂の層があることなどから、A区～C区と同様に西野川が流れる谷からの影響を受けて形成されていると考えられる。(第3図G)。一方、E区南中央付近から西側にかけては山裾が削り取られた様相を示し、暗褐色砂質シルト、灰黄褐色砂質シルト、黄褐色砂質シルトなどの層に細礫から大礫などが含まれている(第3図H)。調査は、A～C区同様黒褐色砂質シルトの残存する部分を先行して検出・掘削をした後、その下層の黄褐色～明黄褐色砂質シルトの面で再度検出作業を行った。またDb区については、西壁トレンチ掘削時に旧石器の剥片が多数出土したため西側の区域を中心にさらに掘削を行い、黄橙色粘質シルトの上面まで掘削を行うこととなった。

(3) F区・G区(第4図)

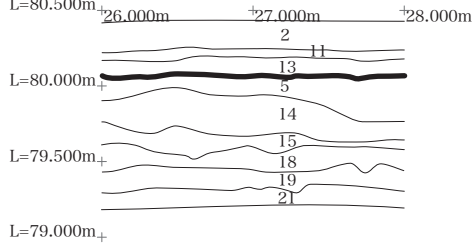
この区域では広い範囲で表土の下に近世以降と考えられる黒褐色砂質シルトの耕作土の層が展開する(第4図A・B・C・D・E)。これらの下層についてはF区中央南よりからG区中央南よりの区域までの範囲で黒褐色砂質シルトを中心とする包含層が堆積していたが(第4図E・G)、それ以外の場所では包含層は削平を受けているようで包含層の下層となる黄褐色砂質シルト・粘質シルトなどとなった。このため調査は包含層の上面での検出・掘削をした後、その下層の黄褐色～明黄褐色砂質シルト・粘質シルトの面で再度検出作業を行った。G区では調査区中央部に東西のトレンチを掘り層序を確認したところ、この過程で旧石器の剥片が出土したためトレンチを中心にさらに掘削を行い、にぶい黄褐色シルト付近まで掘削を行った。F区でもG区の延長でトレンチを掘削したところ中央南端で旧石器の剥片が出土したためG区同様掘削を行い、また調査区南東部でも石器の出土があったため同様に掘削した。



A

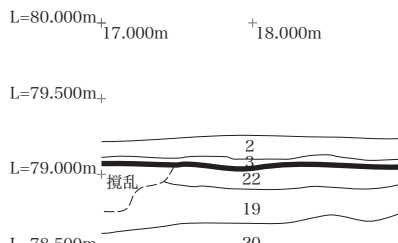


B



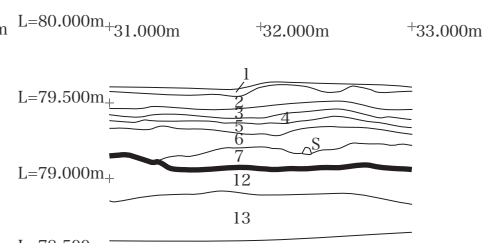
2. 2.5YR5/2 暗灰黄色細粒砂 (表土)
11. 5YR6/8 橙色粘質土 (床土)
13. 10YR4/4 褐色細粒砂 (沈鉄含む)
5. 10YR5/6 黄褐色粘質シルト
14. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
15. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト
18. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト
19. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト (中礫多量含む)
21. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト

C



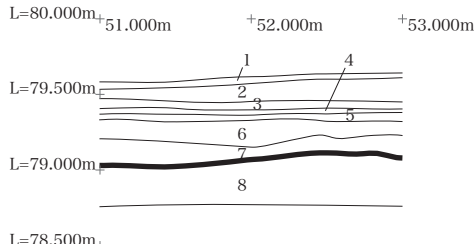
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂
と10YR5/6 黄褐色粘質シルトの斑土
3. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (沈鉄有り)
19. 2.5Y5/4 黄褐色シルト (沈鉄有り)
20. 2.5Y5/4 黄褐色粘質シルト
21. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質シルト
22. 7.5YR4/6 褐色シルト 中粒砂 (大礫多量含む)

D



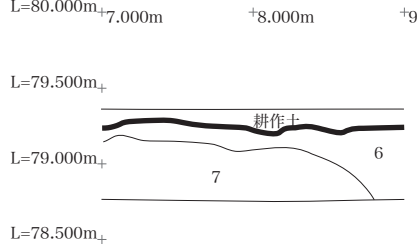
1. 耕作土
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂
と10YR5/6 黄褐色粘質シルトの斑土
3. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (沈鉄有り)
4. 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト
5. 10YR6/8 明黄褐色粘質シルト
6. 10YR3/3 暗褐色シルト
7. 10YR4/4 褐色シルト
12. 10YR2/2 黒褐色シルト (中礫少量含む)
13. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (大礫多量含む)

E



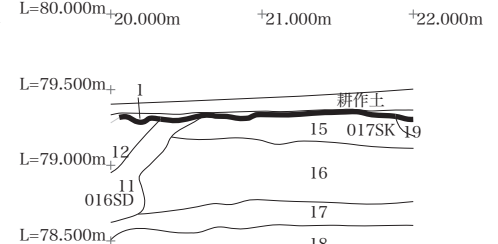
1. 耕作土
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂
と10YR5/6 黄褐色粘質シルトの斑土
3. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (沈鉄有り)
4. 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト
5. 10YR6/8 明黄褐色粘質シルト
6. 10YR3/3 暗褐色シルト
7. 10YR4/4 褐色シルト
8. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (大礫少量含む)

F



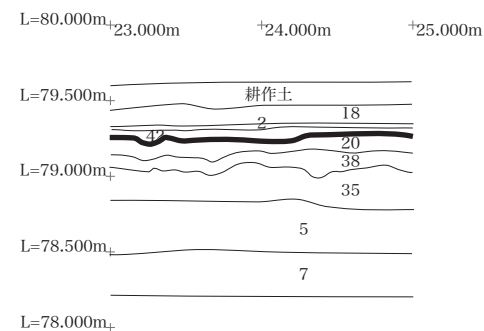
6. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
7. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト (中礫～大礫多量含む)

G



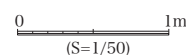
1. 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト
11. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト (016SD埋土)
12. 10YR2/2 黒色砂質シルト (016SD埋土)
19. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト (017SK埋土)
15. 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質シルト
16. 10YR4/4 褐色粘質シルト
17. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト
18. 2.5Y4/6 オリーブ褐色粘質シルト

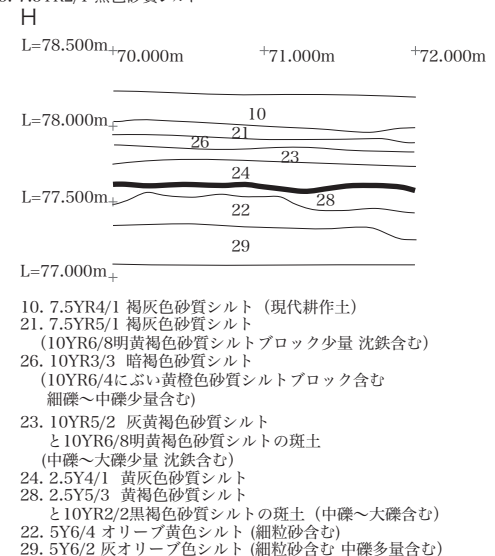
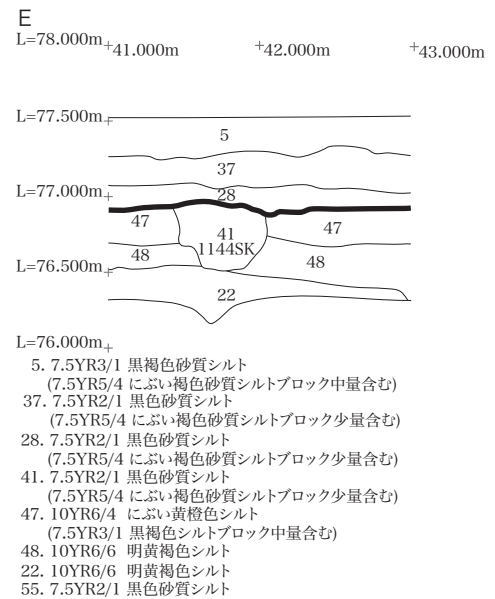
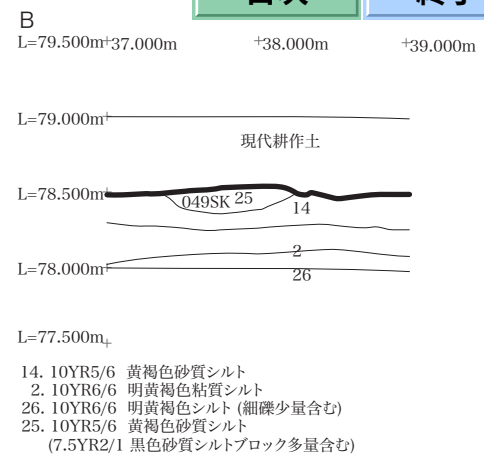
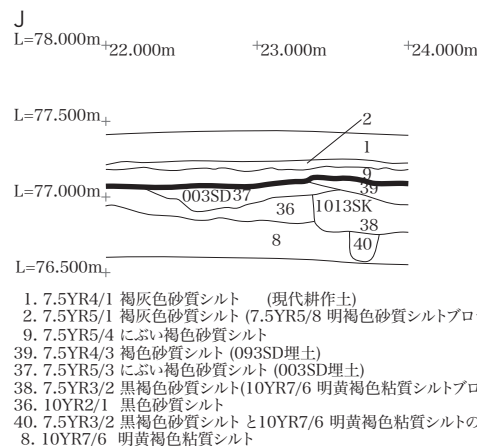
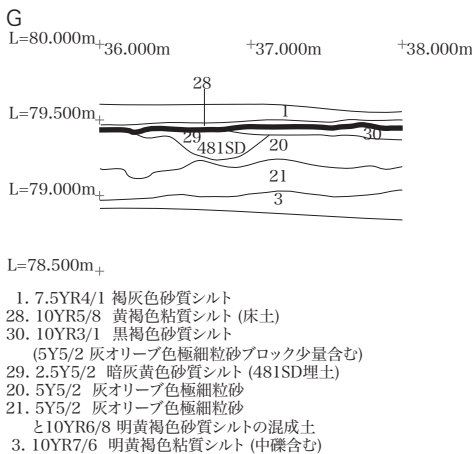
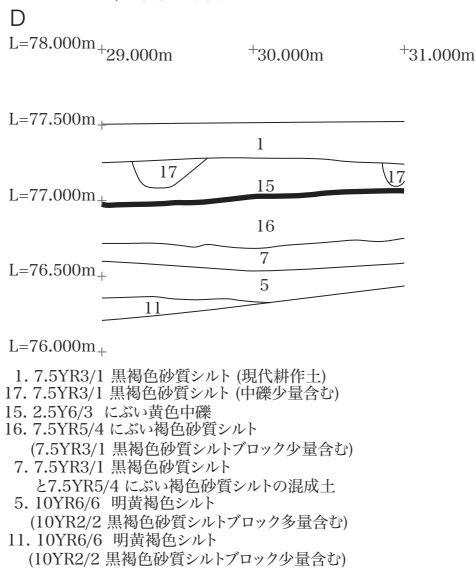
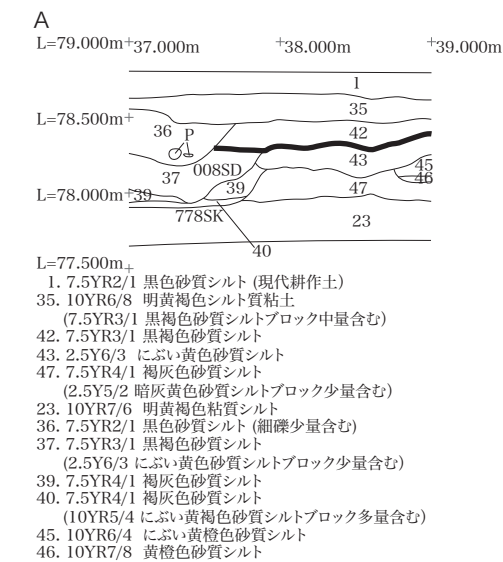
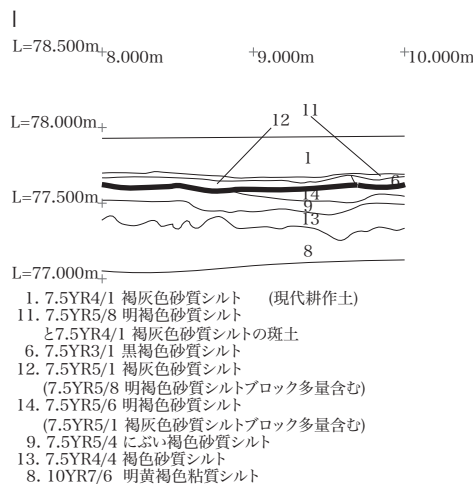
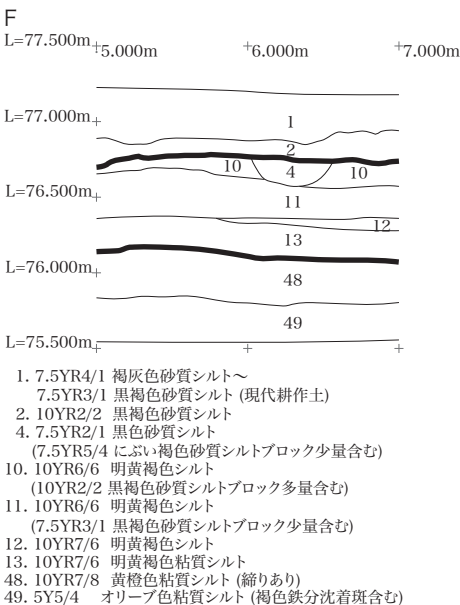
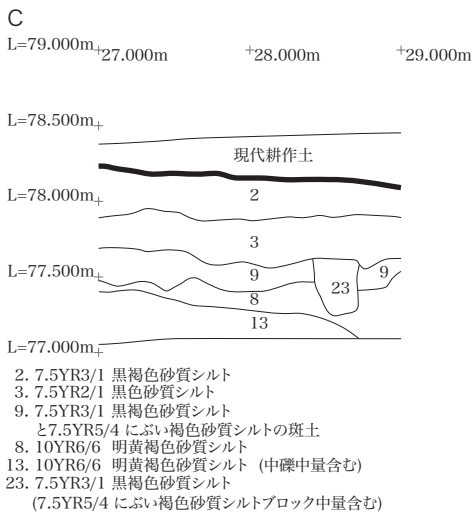
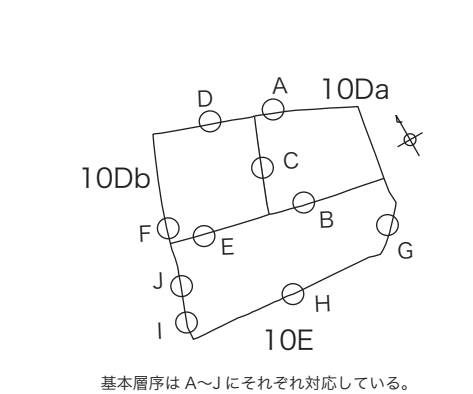
H



18. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト (沈鉄含む)
2. 10YR6/8 明黄褐色粘質シルト
42. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト
と10YR6/8 明褐色シルト質粘土の斑土
20. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト
38. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト
35. 7.5YR4/6 褐色粘質シルト
5. 10YR4/6 褐色砂質シルト
7. 10YR4/4 褐色粘質シルト

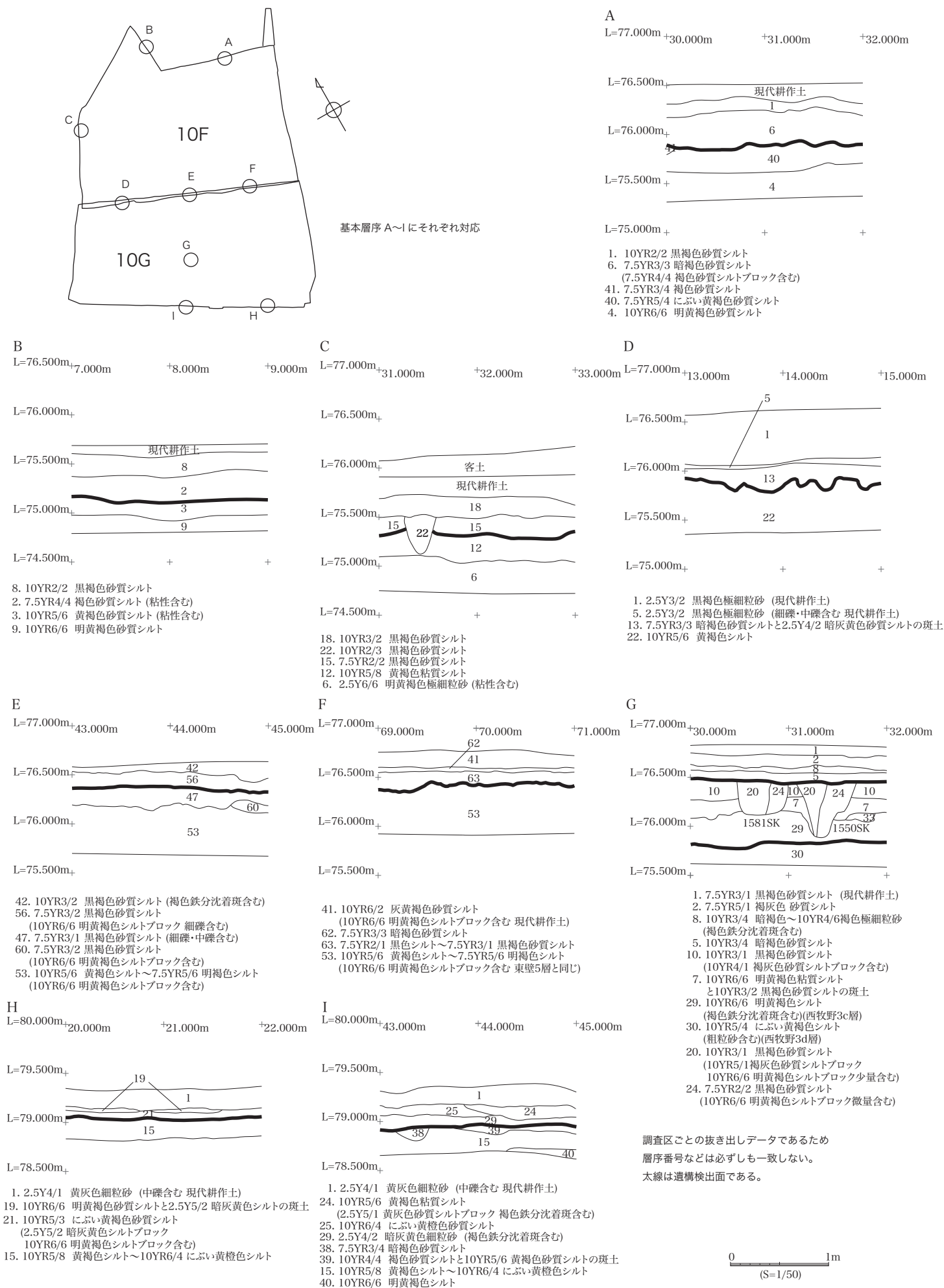
調査区ごとの抜き出しデータであるため、層序番号などは必ずしも一致しない。
太線は遺構検出面である。

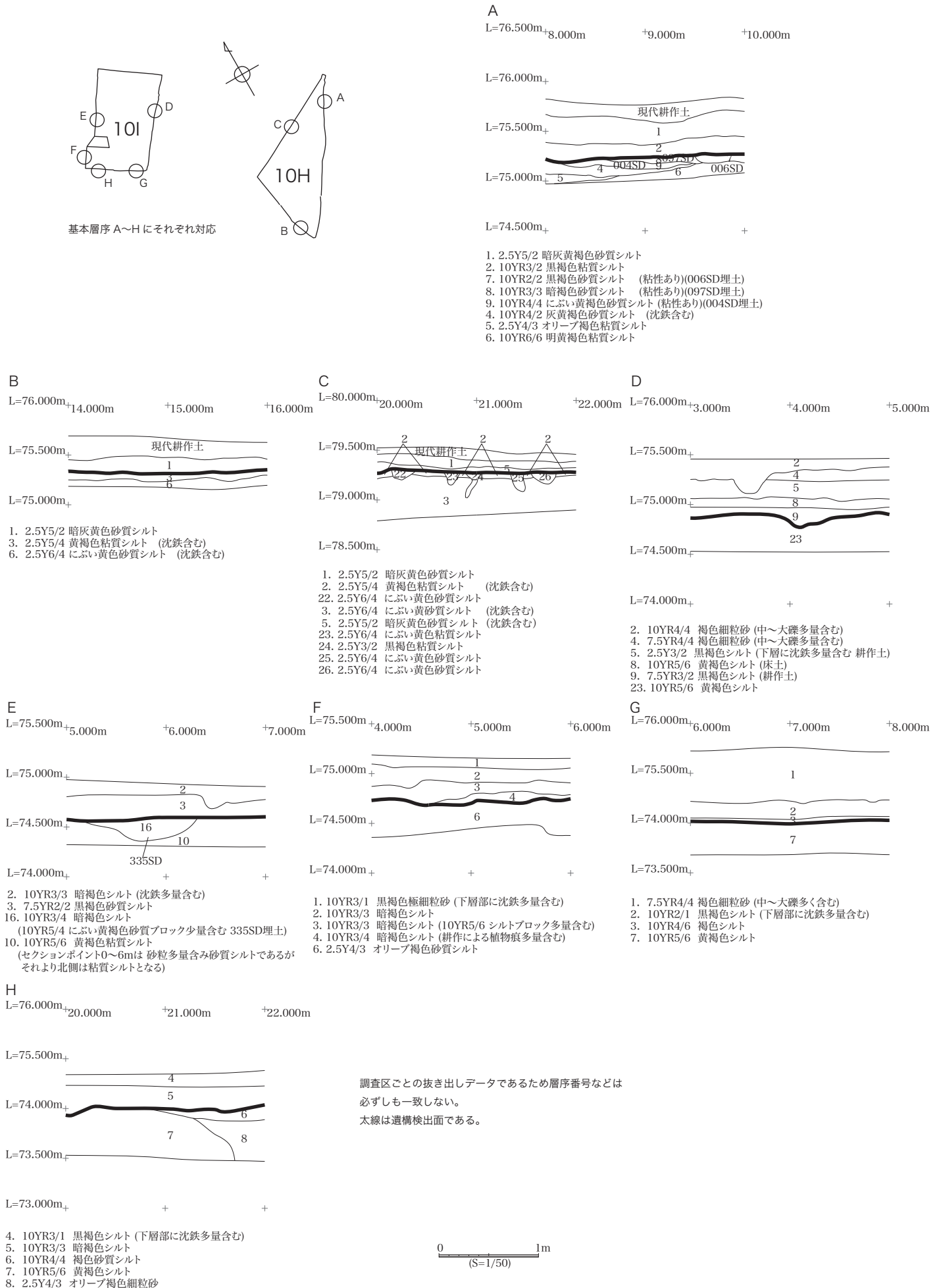




調査区ごとの抜き出しデータであるため
層序番号とは必ずしも一致しない。
太線は遺構検出面である。

0 1m
(S=1/50)





(4) H区・I区 (第5図)

H区は近代以降に大きく削平を受けており、表面の水田耕作土と床土と考えられる堆積を取り除いた黄褐色粘質シルトなどの堆積部分が検出面となった。I区は、整地土・旧耕作土を取り除くと黄褐色粘質シルトなどの堆積となりこれらの面が検出面となった。ただし調査区南西部については黄褐色シルト・オリーブ褐色細粒砂などの河川性の堆積が見られた(第5図H)。I区ではさらに調査区東側中央付近で旧石器の剥片が出土したため黄褐色シルトの下面まで掘削を行った。

第2節 遺構

今回の調査で検出された遺構は約7500基であった。これらの遺構は前記で説明した包含層の上面より掘削されたものとそうでないものを明確に区別して調査すべきであったが、実際の調査では厳密に区別した調査をすることができなかった。本来は遺構面、時期別に記述を進めるべきであろうが、ここでは調査区別、遺構種別に記述をしていきたい。中世についてはI期(13世紀以前)、II期(13世紀末～15世紀初頭)、III期(15世紀)に分けて記述する事とした。また、旧石器時代の礫群も今調査では確認しているがこれについては別に後述することとする。

(1) A区 (第160図)

A区では縄文～弥生時代と近世の遺構などが確認されている。

a. 土坑

049SK (第6図) 北西壁トレンチに接して検出された土坑である。規模は長辺約2.1m、短辺残存で約1.1m、深さ約0.5mを測る。土坑底部には土器棺ではないかと考えられる底部に穿孔を施した条痕紋系深鉢が正位で据えられてあった。このことから弥生前期の土壇墓の可能性が考えられる。

b. 溝

溝として検出したものの多くは谷から山裾へと流れる細い流路であった。

027・028・029・030・031SD (第7図) 調査区中央やや南よりを東から西に向かって流れる流路である。調査区東の西野川が流れる谷からの水の流れが少しずつ位置を変えて流れていたものと考えられる。黒褐色を中心とする埋土の中から縄文時代中期後葉に属すると考えられる土器が出土することからこの時期以降に埋没したものと考えられる。

033SD (第7図) 調査区南西壁トレンチに接して検出された溝で規模は幅約0.6m、深さ0.3mを測る。遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが、台地の裾を削平したと考えられる平坦面に存在することから近世以降の溝と考えられる。

034SD (第7図) 調査区東よりを南から北に流れる流路。規模は幅約1.3m、深さ0.4mを測る。遺物が出土していないため明確な時期は不明ながら、027SDなどを切って流れていることから谷からの水の流れが変わり形成されていたものと考えられる。

(2) B区 (第160図)

B区では縄文～弥生時代の土坑・溝、中世の掘立柱建物・土坑、近世の溝などが確認されている。

a. 掘立柱建物

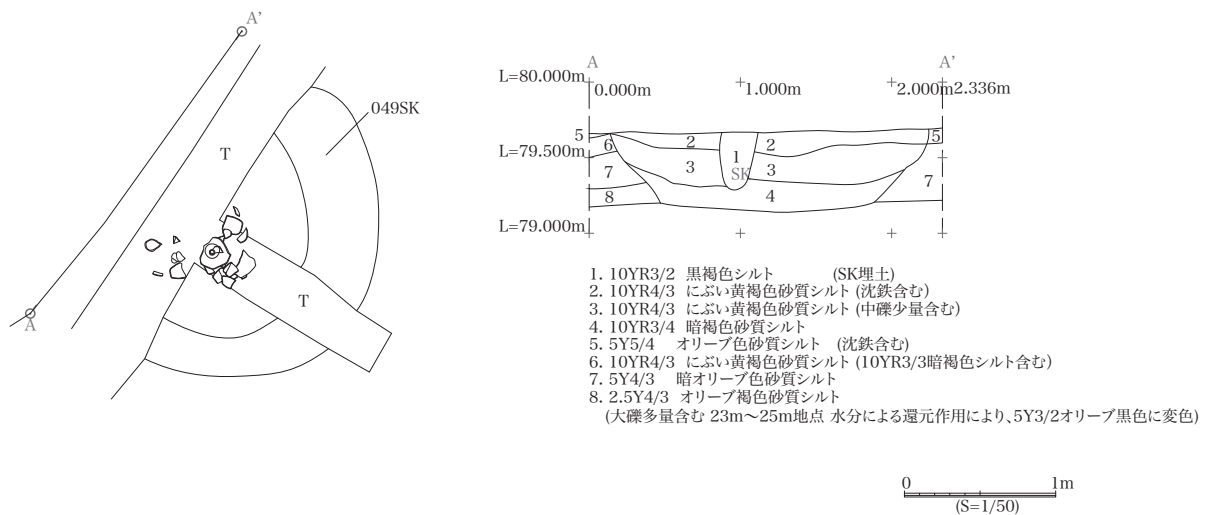
257SB (第8図) 1間×3間の建物で、規模は3.67m×6.83mを測り、柱穴195SP、197SP、198SP、200SP、203SP、207SP、216SP、239SPで構成されている。柱穴から遺物の出土はなく明確な時期は不明であるが258SBとほぼ平行して建っており、一緒に機能していたものと考えられ、059SKなどの時期よりも新しいと考えられることから中世II期以降のものであろう。

258SB (第8図) 2間×4間の建物で、規模は3.89m×7.77mを測り、柱穴077SP、194SP、204SP、205SP、206SP、211SP、212SP、222SP、228SP、230SP、231SPで構成されており、残念ながら西側中央にあたる柱穴は溝に切られており検出できなかった。206SPからは山茶碗が出土しており、257SBと同時期に機能していたものと考えられることから中世II期以降であろう。

b. 土坑

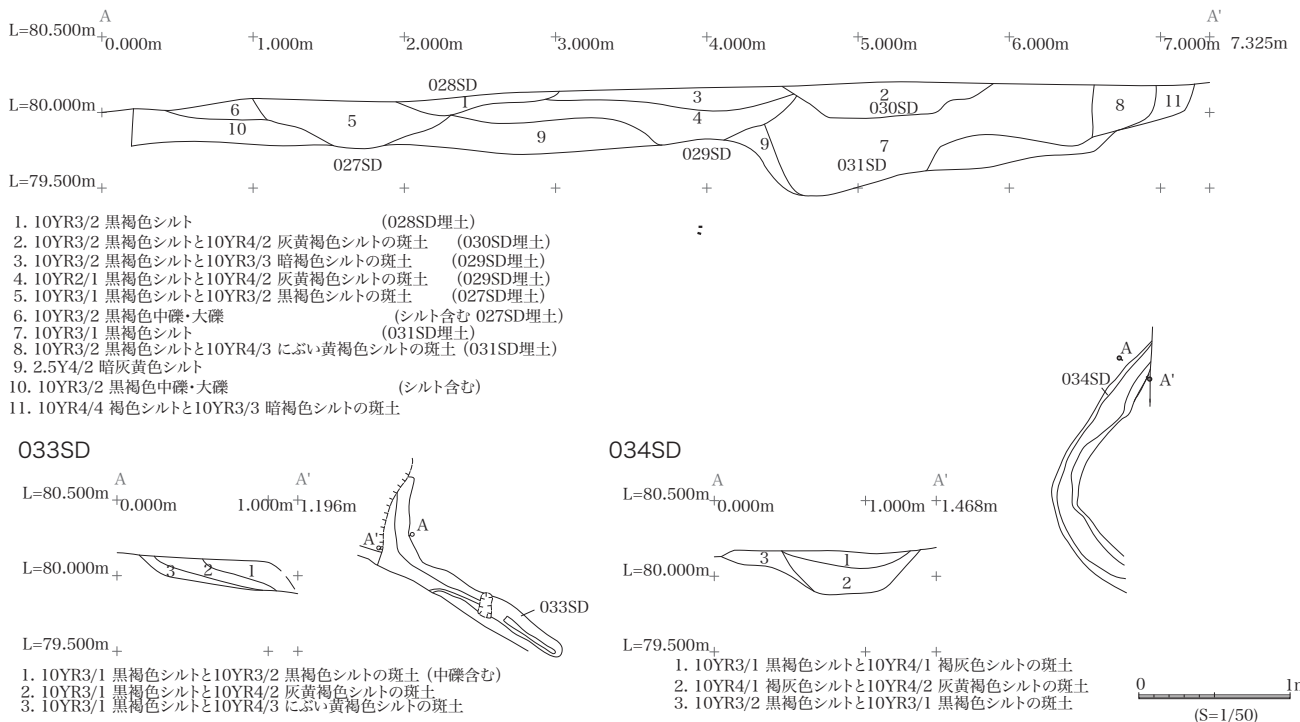
050SK (第9図) 長径1.37m、短径0.82m、深さ0.2mの規模を測る楕円形の土坑である。遺物がいないため時期は明確ではないが、周辺の同様の土坑などの遺物から考えると中世I期と考えられる。

049SK



第 6 図 A 区 049SK 平面図・断面図

T02(027・028・029・030・031SD)



第 7 図 A 区 SD 断面図

059SK (第9図) 長径 0.95 m、短径 0.82 m、深さ 0.18 m の規模を測る楕円形の土坑である。埋土の中に拳大の扁平な礫が多数入っていた。尾張型第 3 型式の山茶碗が出土していることから遺構の時期は 12 世紀 (中世 I 期) と考えられる。なお、遺構の状況から土壙墓の可能性も考えられる。

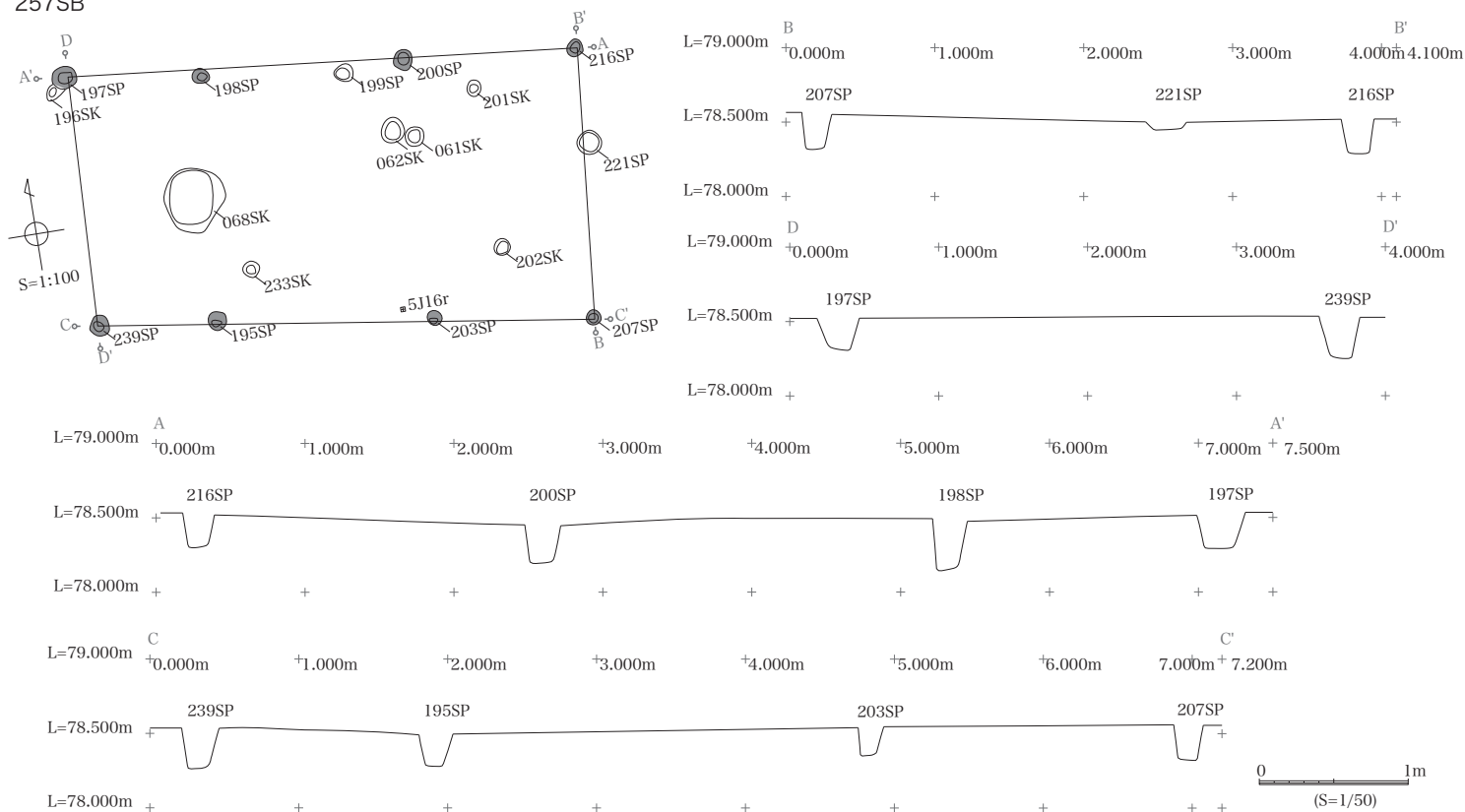
068SK (第9図) 長径 0.89 m、短径 0.82 m、深さ 0.09 m の規模を測る楕円形の土坑である。遺物として縄文土器と考えられる小片が出土しているが、050SK と同様に中世 I 期と考えられる。

069SK (第9図) 長径 1.18 m、短径 0.428 m、深さ 0.12 m の規模を測る溝状の土坑である。遺物が出土していないため時期は明確ではなく、埋土も他の土坑と違うことから中世の可能性は高いと考えるものの、近世の可能性もある。

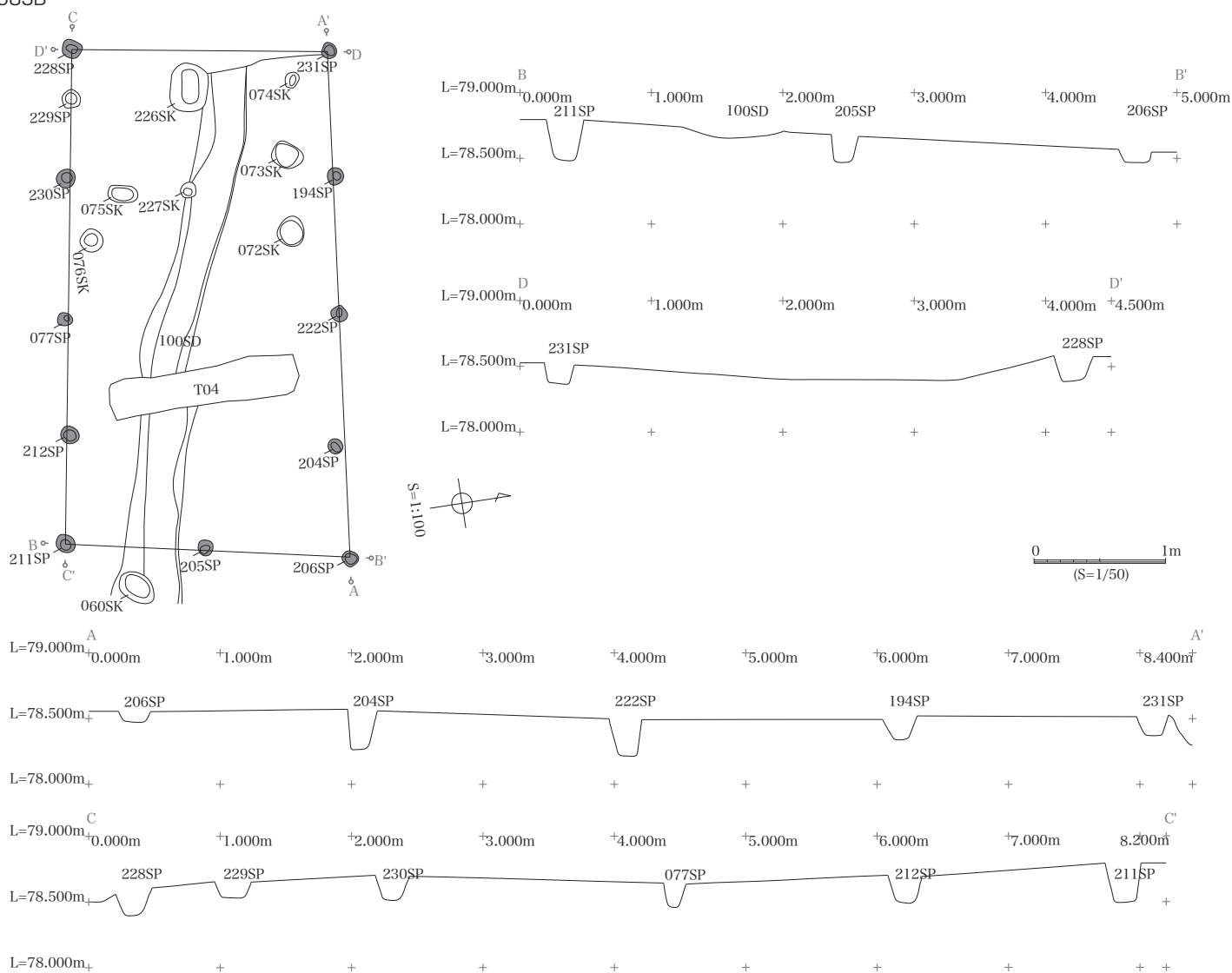
162SK (第9図) 長径 2.71 m、短径 0.68 m、深さ 0.21 m の規模を測る溝状の土坑である。山茶碗が出土しており、中世と考えられるが細かい時期は不明である。

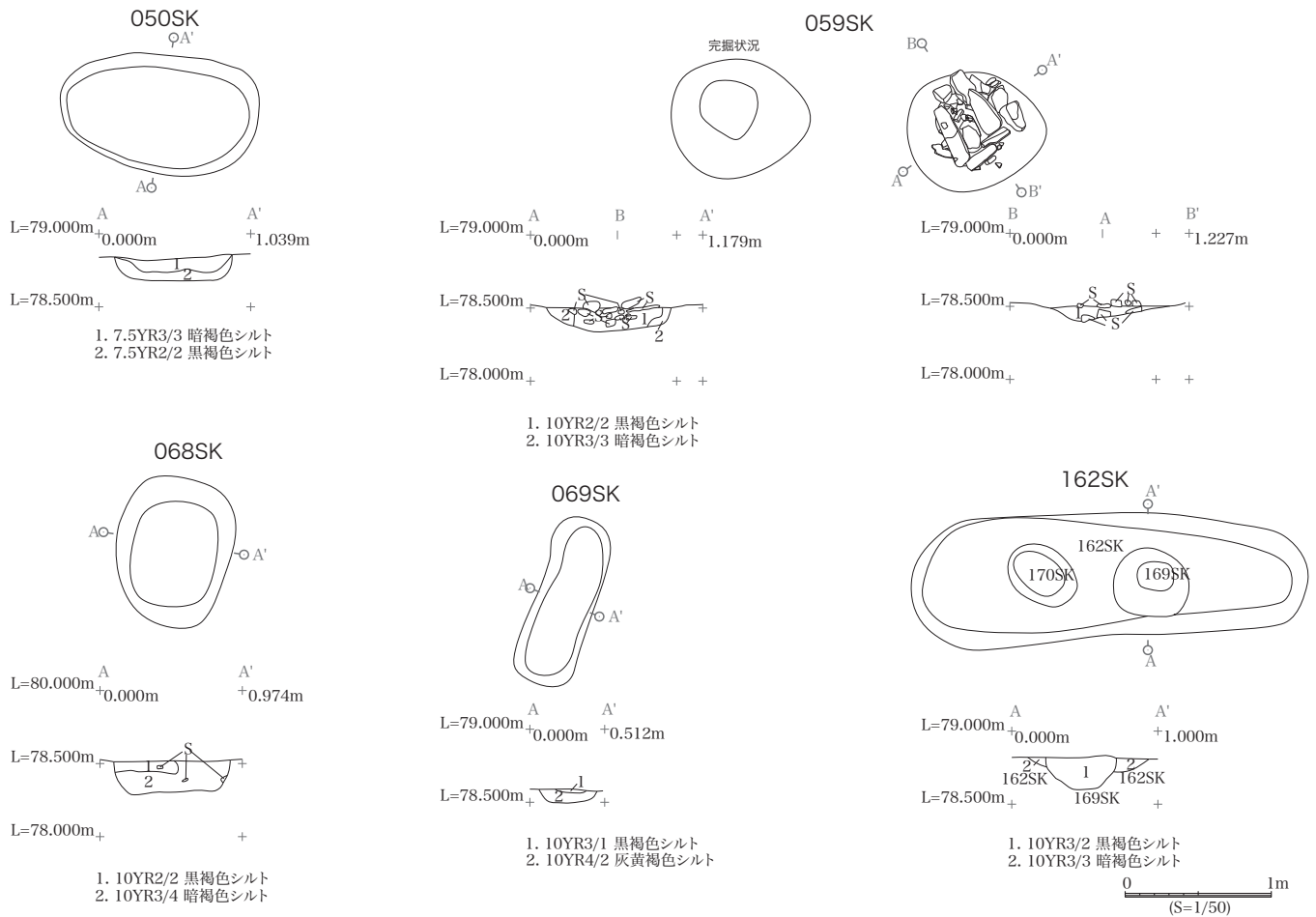
c. 溝

257SB



258SB





第9図 B区SK平面図・断面図

100SD (第10図) 幅2.35m、深さ0.52mの規模を測る東西方向にのびる溝である。遺物は土師器、山茶碗などが出土しているが、258SBの柱穴を切っていると考えられ、また調査区西側の近世の耕作に伴うと考えられる溝と方向が一致していることなどから近世と考えられる。

137SD (第11図) 幅1.17m、深さ0.12mの規模の調査区北東角でL字に曲がる溝である。出土遺物はないが、A区からC区を経由して流れてきているもので中世よりは古い自然流路と考えられる。

168SD (第11図) 幅0.42m、深さ0.22mの規模を測る東西方向にのびる溝である。遺物は山茶碗が出土しているが、埋土などから近世の耕作に伴う溝と考えられる。

184SD (第10図) 幅1.09m、深さ0.17mの規模を測る東西方向にのびる溝である。遺物は弥生土器、山茶碗などが出土しているが100SDを切っていることから近世以降の溝と考えられる。

188SD (第11図) 幅1.73m、深さ0.57mの規模を測る南北方向にのびる溝である。縄文時代もしくは弥生時代に該当する土器の小片が複数出土しており、埋土下層は中礫、大礫を含む激しい水の流れたあつた堆積などが見られることから弥生時代以前にあった東側の谷からのびる自然流路であると考えられる。

214SD (第11図) 幅0.88m、深さ0.18mの規模を測る東西方向にのびる溝である。出土遺物はないが、埋土などから近世の耕作に伴う溝と考えられる。

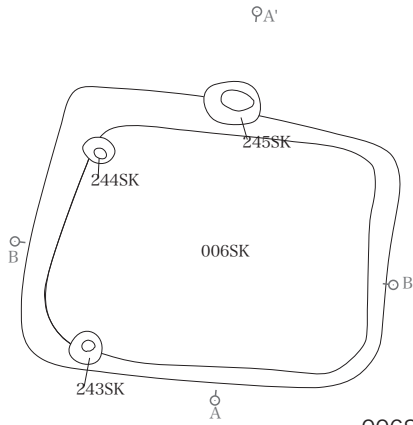
235SD (第12図) 幅1.12m、深さ0.14mの規模を測る東西方向にのびる溝である。出土遺物はないが、168SDなど複数の溝と方向などと平行してのびていることから近世の耕作に伴う溝と考える。

006SK

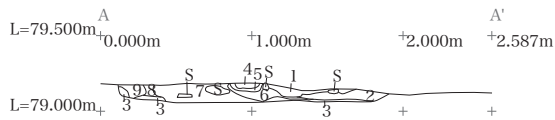
平面図

出土状況図

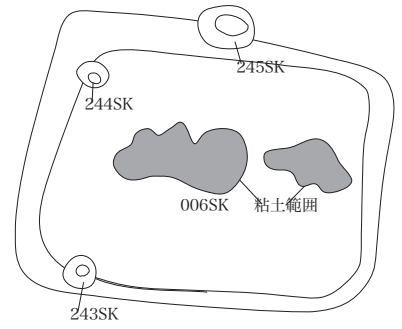
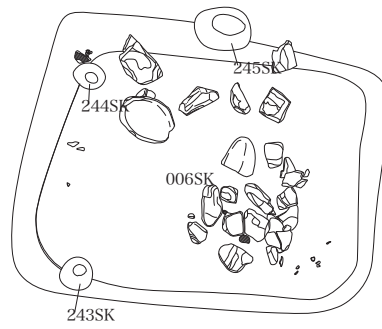
粘土範囲図



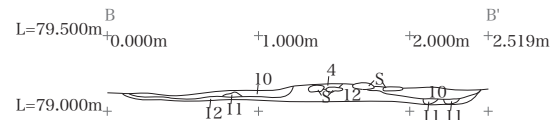
006SK A



1. 10YR4/4 褐色砂質シルト
2. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト
4. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
6. 7.5YR5/6 明褐色砂質シルト



006SK B



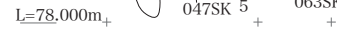
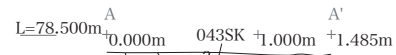
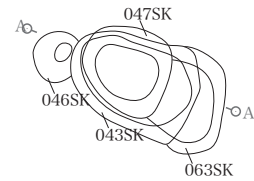
7. 7.5YR4/4 褐色砂質シルト
8. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
9. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
10. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
11. 10YR4/4 褐色砂質シルト
12. 7.5YR5/6 明褐色砂質シルト

038SK



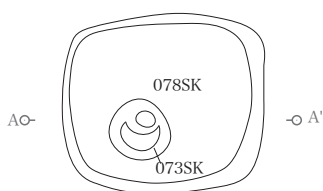
1. 10YR4/4 褐色砂質シルト
2. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
3. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトと 10YR5/6 黄褐色砂質シルトの斑土
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト

046SK 043SK 063SK 047SK



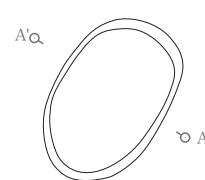
1. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト
2. 7.5YR4/4 褐色砂質シルトと10YR3/3 暗褐色シルトの斑土
3. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
4. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
5. 10YR4/4 褐色砂質シルト

078SK



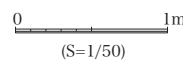
1. 10YR2/3 黒褐色砂質シルトと10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトの斑土
2. 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト
3. 7.5YR4/6 褐色粘質シルト

099SK

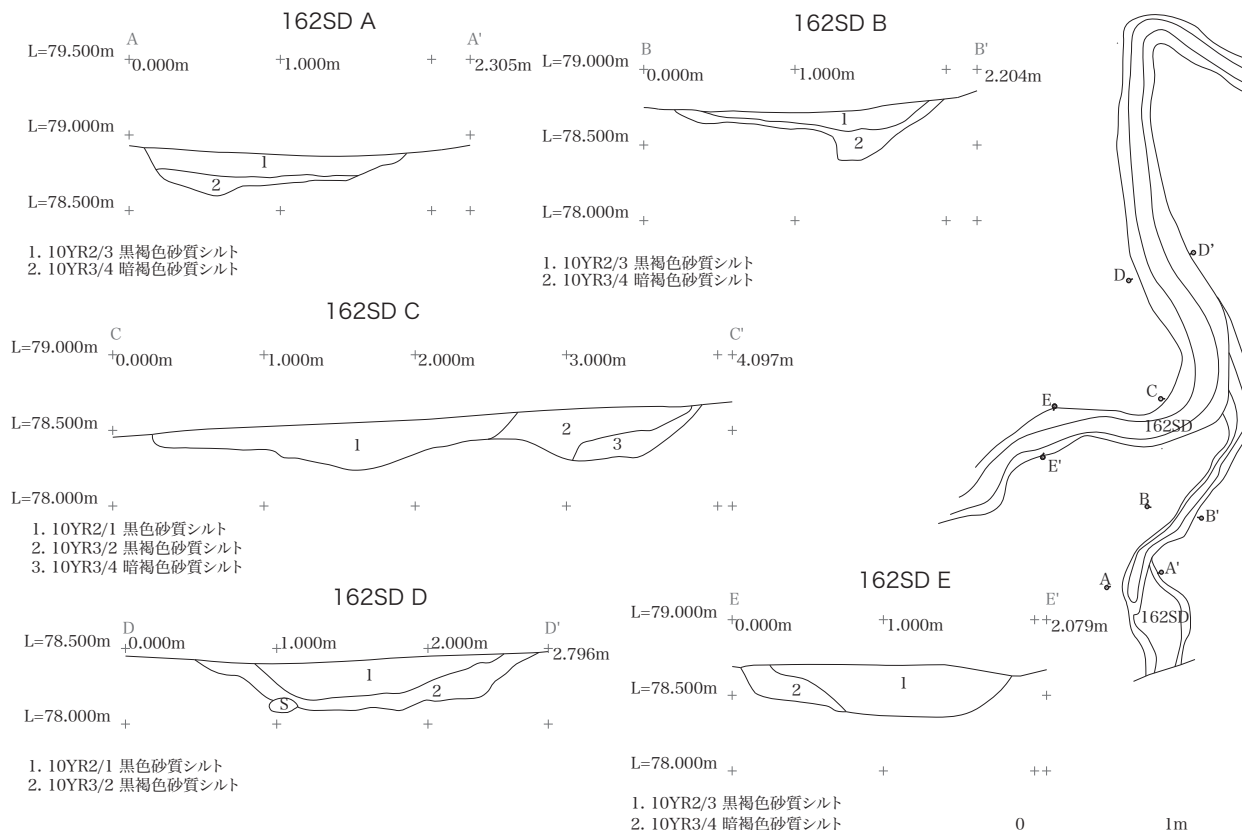


1. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト
2. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト

0 1m
(S=1/50)



第 13 图 C 区 016SD 断面图



第 14 図 C 区 162SD 断面図

(3) C 区 (第 160 図)

C 区では、縄文～弥生時代の溝、中世・近世の土坑などが確認されている。

a. 土坑

006SK (第 12 図) 長径 2.34 m、短径 1.88 m、深さ 0.1 m の規模を測る隅丸長方形の土坑である。大型の扁平な礫がほぼ同じレベルでまとまって確認されており、意図的に置いたものと考えられる。また、これら礫を取り除くと中央付近に粘土が数センチの厚みで検出された。礫や粘土には被熱が見られたことから大型のカマドの様なものとも考えられるが、他の調査区で確認されている竪穴状遺構の可能性もある。卸皿や伊勢型鍋が出土しており、中世Ⅱ期の土坑と考えられる。

038SK (第 12 図) 長径 1.02 m、短径 0.73 m、深さ 0.67 m の規模を測る楕円形の土坑である。出土遺物はないが、近世の可能性が高い。

043SK・047SK・063SK (第 12 図) 皿状の掘り方の楕円形の土坑が切りあって確認されたものであるが、一つの土坑である可能性もある。047SK からは山茶碗が出土しており、中世Ⅱ期以降と考えられる。

078SK (第 12 図) 長径 1.33 m、短径 1.18 m、深さ 0.12 m の規模を測る隅丸方形の土坑である。土坑底部しか残存していないため時期は明確ではないが、中世Ⅱ期以降であろうか。

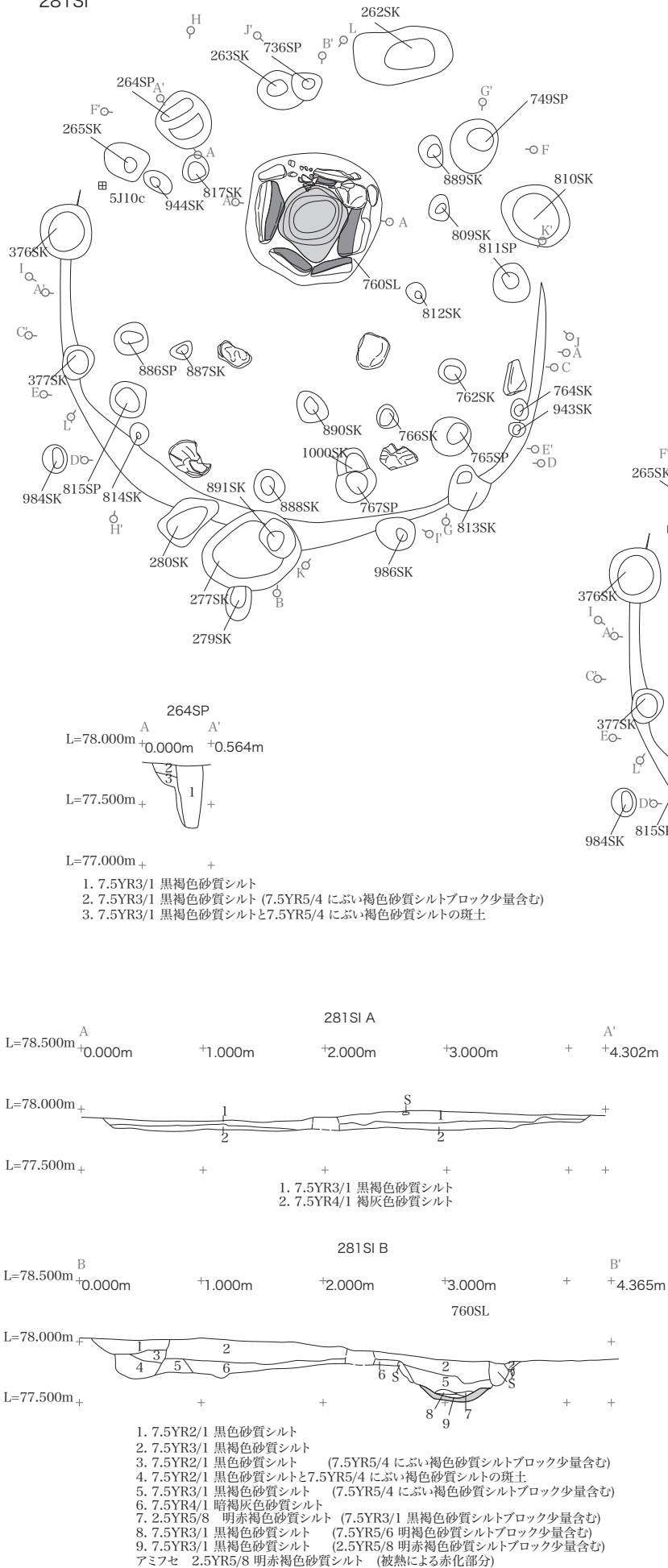
099SK (第 12 図) 長径 1.18 m、短径 0.88 m、深さ 0.44 m の規模を測る楕円形の土坑である。中世の土師器が出土しているが、038SK と同様の埋土であることから近世の可能性が高い。

b. 溝

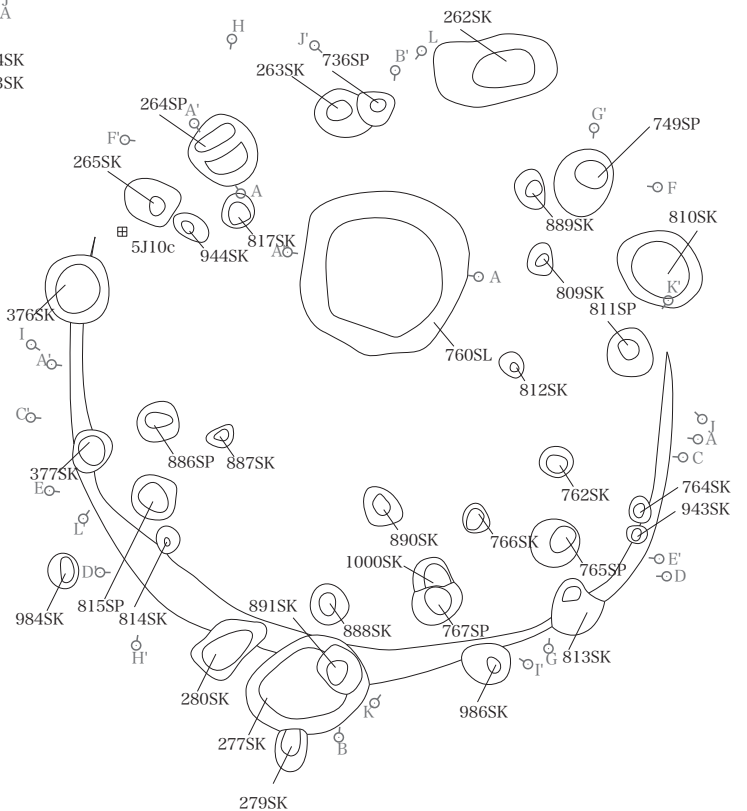
016SD (第 13 図) 幅 2.81 m、深さ 1.04 m の規模を測る南北にのびる溝である。溝の上層からは中世の遺物も一部でているが、中層では古井式を中心とする弥生土器が、下層からは巻貝条痕深鉢などの縄文土器が出土しており、溝の向きなどを考えると東側の谷を起源とする自然流路と考えられ、埋土中には大礫・中礫を多く含む層もあり土石流などの影響も受けた堆積と考えられる。

162SD (第 14 図) 幅 3.68 m、深さ 0.73 m の規模を測る南北にのびる溝で、B 区の 137SD と同一のものである。山茶碗など中世の遺物が出土しているが、状況からすると 016SD とともに流れていた自然流路ではないかと考えられる。

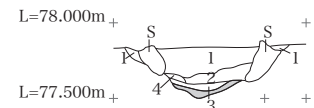
281SI



完掘状況



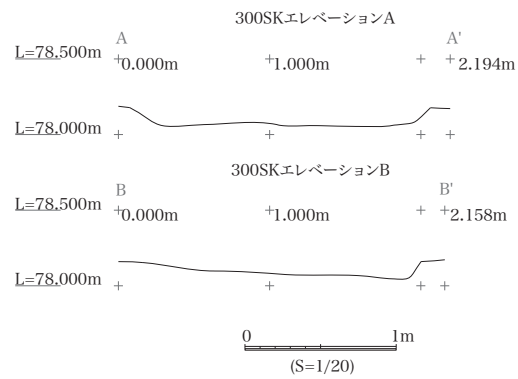
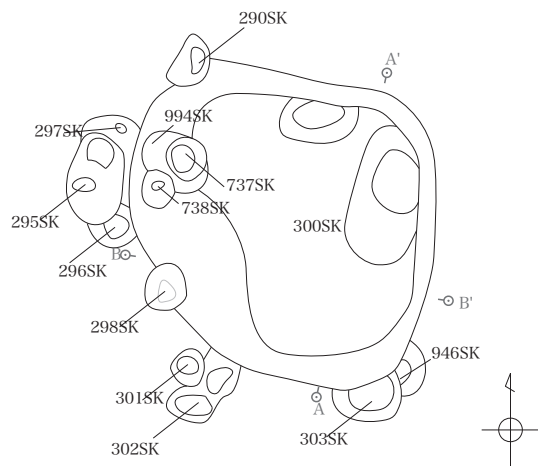
760SL
L=78.500m +0.000m + +1.274m
L=78.000m +
L=77.500m +



0 1m
(S=1/50)

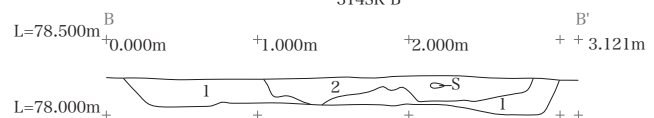
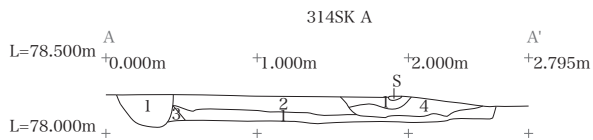
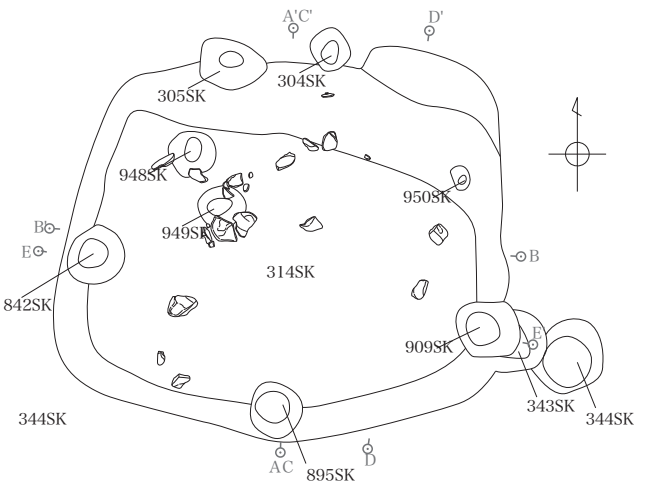
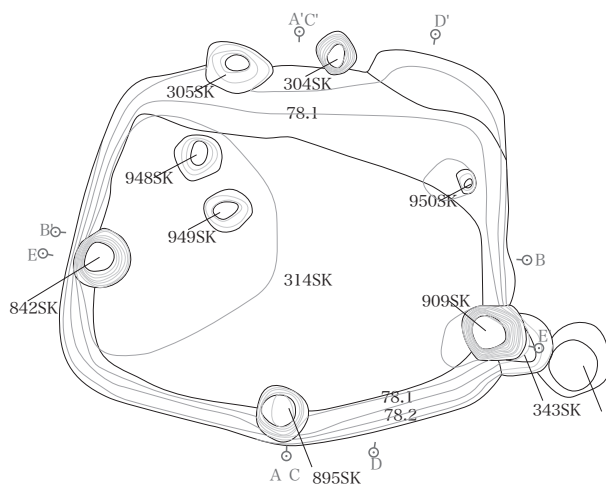
第 15 図 Da 区 281SI 平面図・断面図

300SK



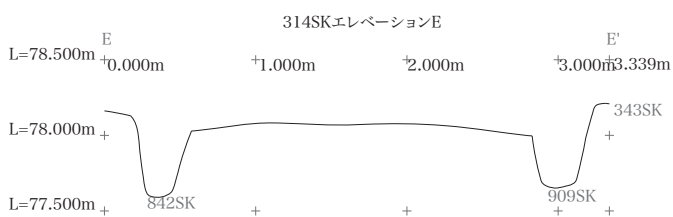
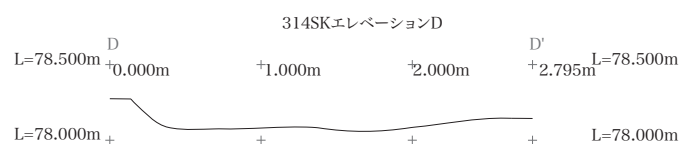
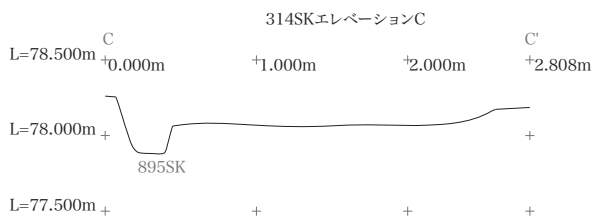
314SK

完掘状況



- 7.5YR2/1 黒色砂質シルト
- 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (10YR6/8 明黄褐色砂質シルトブロック含む)
- 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (7.5YR5/4 にふい褐色砂質シルトブロック含む)
- 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (10YR6/8 明黄褐色砂質シルトブロック 5YR5/8 明赤褐色砂質シルトブロック含む)

- 7.5YR2/1 黒色砂質シルト
- 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (10YR6/8 明黄褐色砂質シルトブロック含む)



0 1m
(S=1/50)

(4) Da 区 (第 161 図)

Da 区は縄文時代の竪穴建物、中世の竪穴状遺構・掘立柱建物・土坑・溝などが確認されている。

a. 竪穴建物・竪穴状遺構

281SI (第 15 図・第 16 図) 長径 4.00 m、短径 3.93 m の規模を測るほぼ円形の竪穴建物である。外周に沿うように柱穴が並んでおり、内部にも柱穴が確認されているが、中世の柱穴も周辺に多数存在するため建物の柱とすることはできない。また中央やや北よりには石囲い炉である 760SL が確認された。760SL は、長径 1.10 m、短径 1.08 m、深さ 0.30 m の規模を測るもので大型の地元産片麻岩の扁平な礫を立てた状態で配置しており、内部は被熱していた。これらの時期については、内部から出土したわずかな土器片と周辺の状況などから縄文時代中期後葉と考えられる。

300SI (第 17 図) 長径 2.38 m、短径 2.00 m、深さ 0.11 m の規模を測るやや不定形な隅丸方形を指向したような竪穴状遺構で、南東部がスロープ状を呈している。遺物などはなく、明確な時期は不明であるが他の竪穴状遺構の状況などから中世Ⅱ期と考えられる。

314SI (第 17 図) 長径 2.99 m、短径 2.94 m、深さ 0.20 m の規模を測る隅丸方形を指向したような五角形を呈する竪穴状遺構で、北東部がスロープ状を呈している。床面に扁平な礫が散在しているのが確認されている。山茶碗、土師器小片が出土している。他の竪穴状遺構の状況などから中世Ⅱ期と考えられる。

b. 掘立柱建物

942SB (第 18 図) 1 間×1 間の建物で、規模は 2.17 m×2.01 m を測り、柱穴 148SP、151SP、164SP、352SP で構成されている。この建物の内側に炉跡とも考えられる 155SK がある。155SK は長径 0.86 m、短径 0.64 m、深さ 0.20 m の規模を測る土坑で焼土、炭化物を含み底部に被熱が確認されている。992SB と 155SK は一体で機能していたと推定される。竪穴建物が削平されたものと考えられることから 281SI 同様縄文時代中期後葉のものであろうか。

969SB (第 18 図) 2 間×3 間の建物で、規模は 3.06 m×4.55 m を測り、柱穴 115SP、116SP、119SP、124SP、128SP、130SP、132SP、346SP、348SP、694SP で構成されている。明確な時期は不明ながら竪穴状遺構と併存していた可能性が高いことから中世Ⅱ期と考えられる。

970SB (第 19 図) 3 間×3 間の建物で、規模は 3.20 m×5.30 m を測り、柱穴 180SP、194SP、239SP、730SP、735SP、746SP、747SP、748SP、751SP で構成されている。明確な時期は不明ながら 969SB と同じく中世Ⅱ期と考えられる。

971SB (第 19 図) 1 間×3 間の建物で、規模は 2.22 m×5.88 m を測り、柱穴 441SP、451SP、453SP、530SP、532SP、533SP、536SP で構成されている。536SP から中世の土師器片が出土している。時期も中世Ⅱ期と考えられる。

980SB (第 20 図) 1 間×3 間の建物で、規模は 3.09 m×6.57 m を測り、柱穴 207SP、323SP、324SP、329SP、333SP、339SP、427SP、835SP で構成されている。明確な時期は不明ながら 969SB などと同様に中世Ⅱ期と考えられる。

981SB (第 20 図) 1 間×3 間の建物で、規模は 3.04 m×6.09 m を測り、柱穴 392SP、395SP、401SP、410SP、463SP、470SP、475SP、478SP で構成される。明確な時期は不明ながら 969SB などと同様に中世Ⅱ期と考えられる。

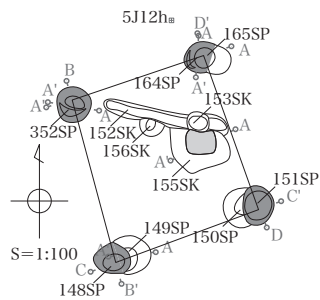
c. 土坑

435SK (第 21 図) 長径 2.04 m、短径 1.78 m、深さ 0.11 m の規模を測る隅丸方形の土坑である。土坑底部には扁平な大礫が多く確認された。伊勢型鍋や古瀬戸大皿などが出土している。中世Ⅲ期の土坑と考えられる。竪穴状遺構の可能性もあるが床面の被熱や硬化がないため、F 区 068SK と同様に土墳墓の可能性が高い。

614SK (第 21 図) 長径 2.82 m、短径 1.22 m、深さ 0.22 m の規模を測る隅丸長方形の土坑である。中世の土師器片などが出土している。中世Ⅲ期の土坑と考えられる。435SK 同様土墳墓の可能性が考えられる。

773SK (第 21 図) 長径 3.00 m、短径 1.92 m、深さ 0.16 m の規模を測る隅丸長方形の土坑である。

942SB



L=79.000m A +0.000m +1.000m +2.000m A' +2.578m

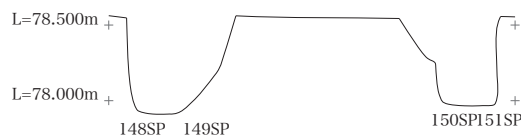


L=79.000m B +0.000m +1.000m +2.000m B' +2.781m

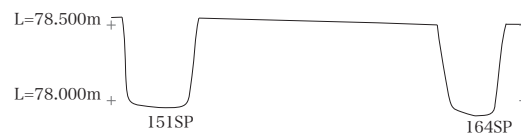


0 1m
(S=1/50)

L=79.000m C +0.000m +1.000m +2.000m C' +2.687m

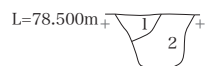


L=79.000m D +0.000m +1.000m +2.000m D' +2.728m



149SP

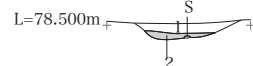
L=79.000m A +0.000m A' +0.628m



- L=78.000m +
1. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
と7.5YR5/4 にぶい褐色砂質シルトの斑土
 2. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト

155SK

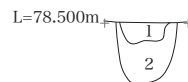
L=79.000m A +0.000m A' +0.951m



- L=78.000m +
1. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
(10YR6/8 明黄褐色砂質シルト拳大ブロック 炭化物含む)
 2. 5YR6/8 橙色砂質シルト

164SP

L=79.000m A +0.000m A' +0.356m



- L=78.000m +
1. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト
 2. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト
(7.5YR5/4 にぶい褐色砂質シルトブロック多量含む)

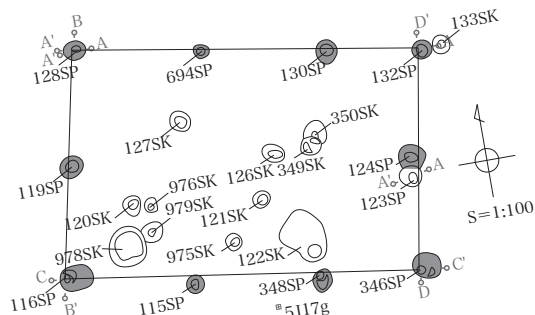
352SP

L=79.000m A +0.000m A' +0.687m

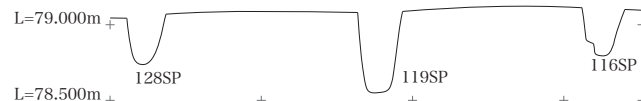


- L=78.000m +
1. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト
 2. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト
(2.5Y6/3 にぶい黄褐色砂質シルトブロック含む)
 3. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
 4. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
と2.5Y6/3 にぶい黄褐色砂質シルトの斑土

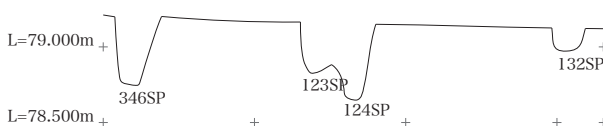
969SB



L=79.500m B +0.000m +1.000m +2.000m +3.000m B' +3.517m



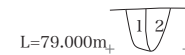
L=79.500m D +0.000m +1.000m +2.000m +3.000m D' 3.306m



L=79.500m A +0.000m +1.000m +2.000m +3.000m +4.000m A' +5.045m



L=79.500m A +0.000m A' +0.511m

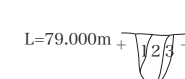


- L=79.000m +
1. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト
 2. 7.5YR2/1 黒色砂質シルトと2.5Y6/3 にぶい黄褐色砂質シルトの斑土

L=79.500m C +0.000m +1.000m +2.000m +3.000m +4.000m +5.000m C' 5.231m



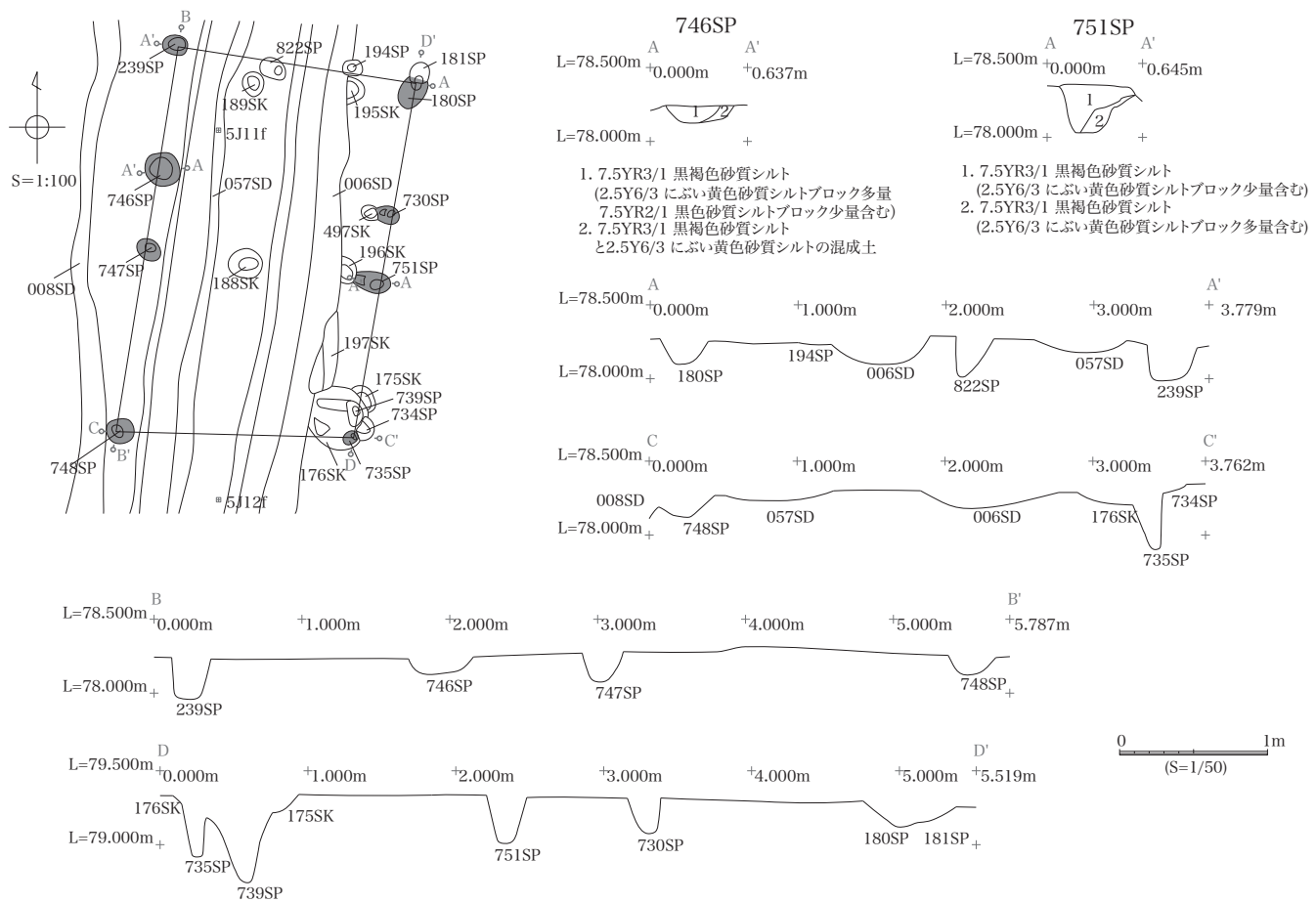
L=79.500m A +0.000m A' +0.426m



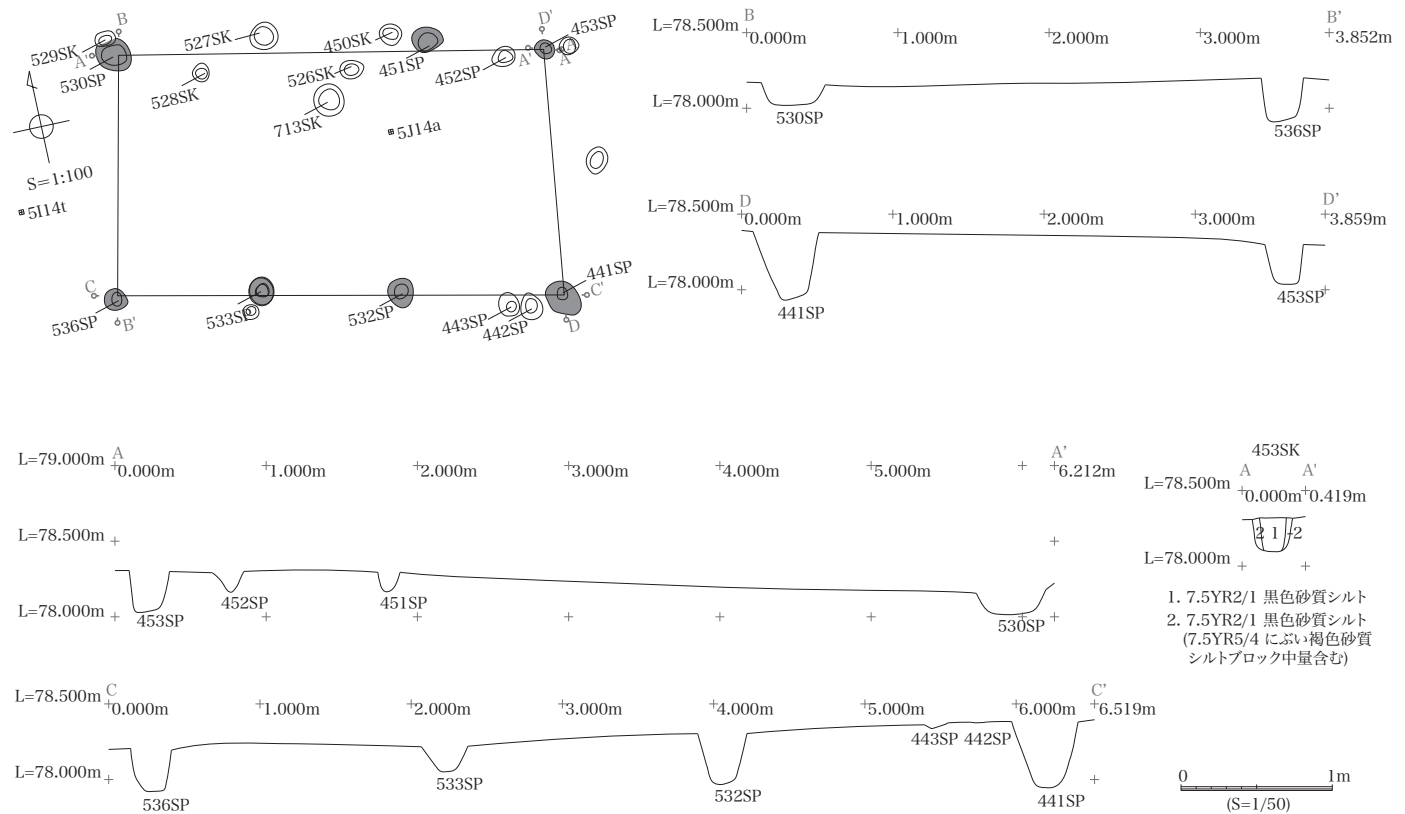
- L=78.500m +
1. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト(2.5Y6/3 にぶい黄褐色砂質シルトブロック多量含む)
 2. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト
 3. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト(2.5Y6/3 にぶい黄褐色砂質シルトブロック中量含む)

0 1m
(S=1/50)

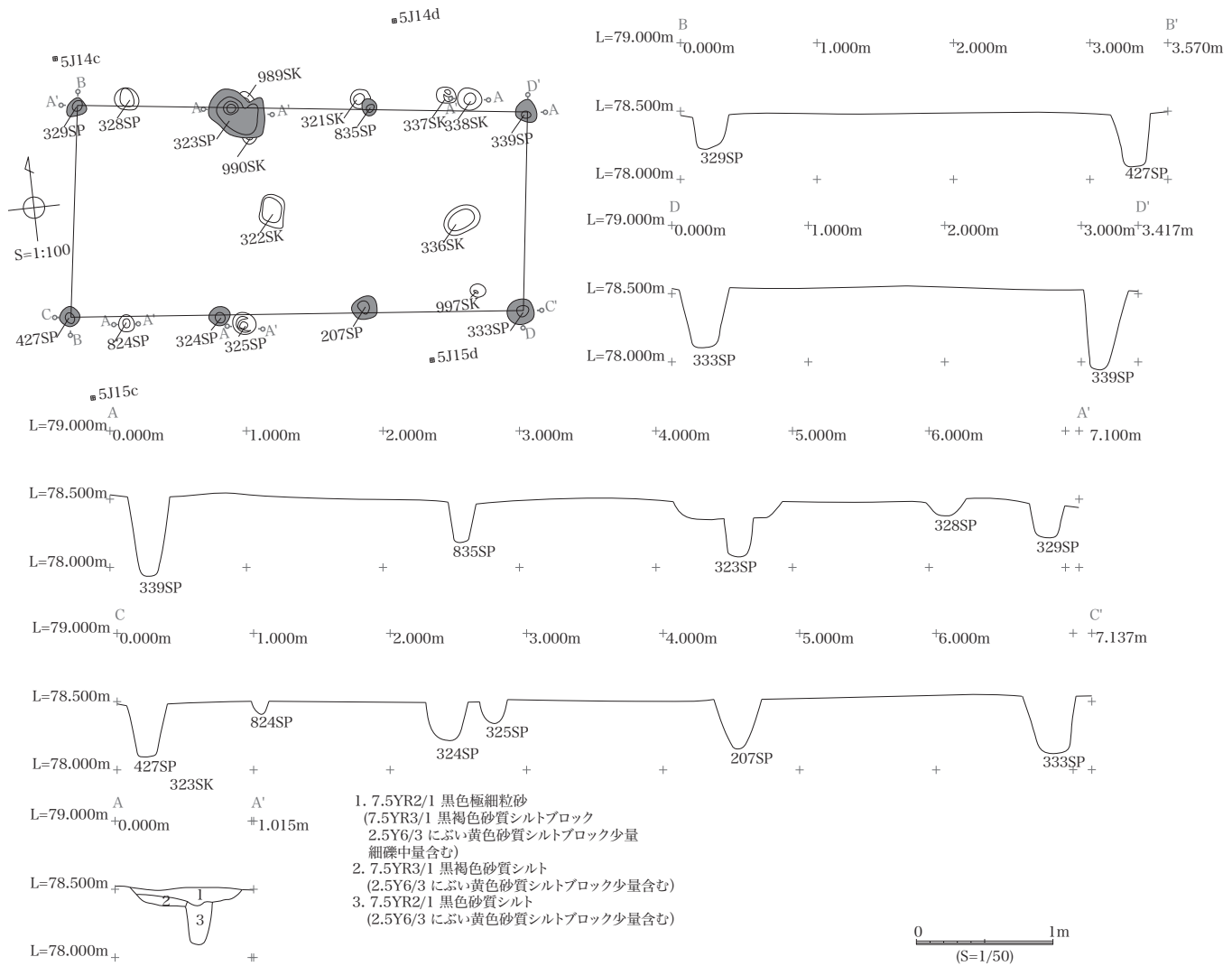
970SB



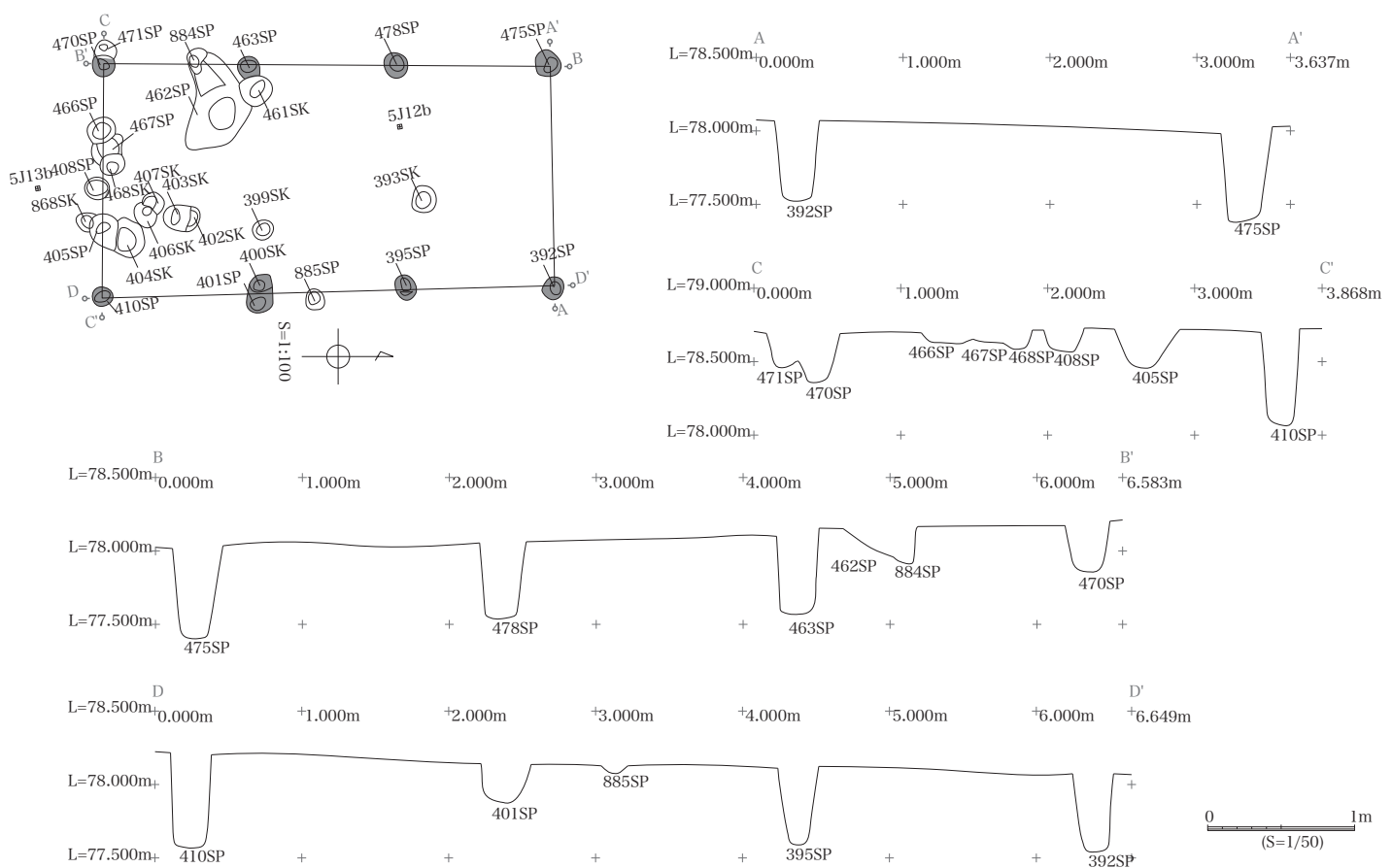
971SB



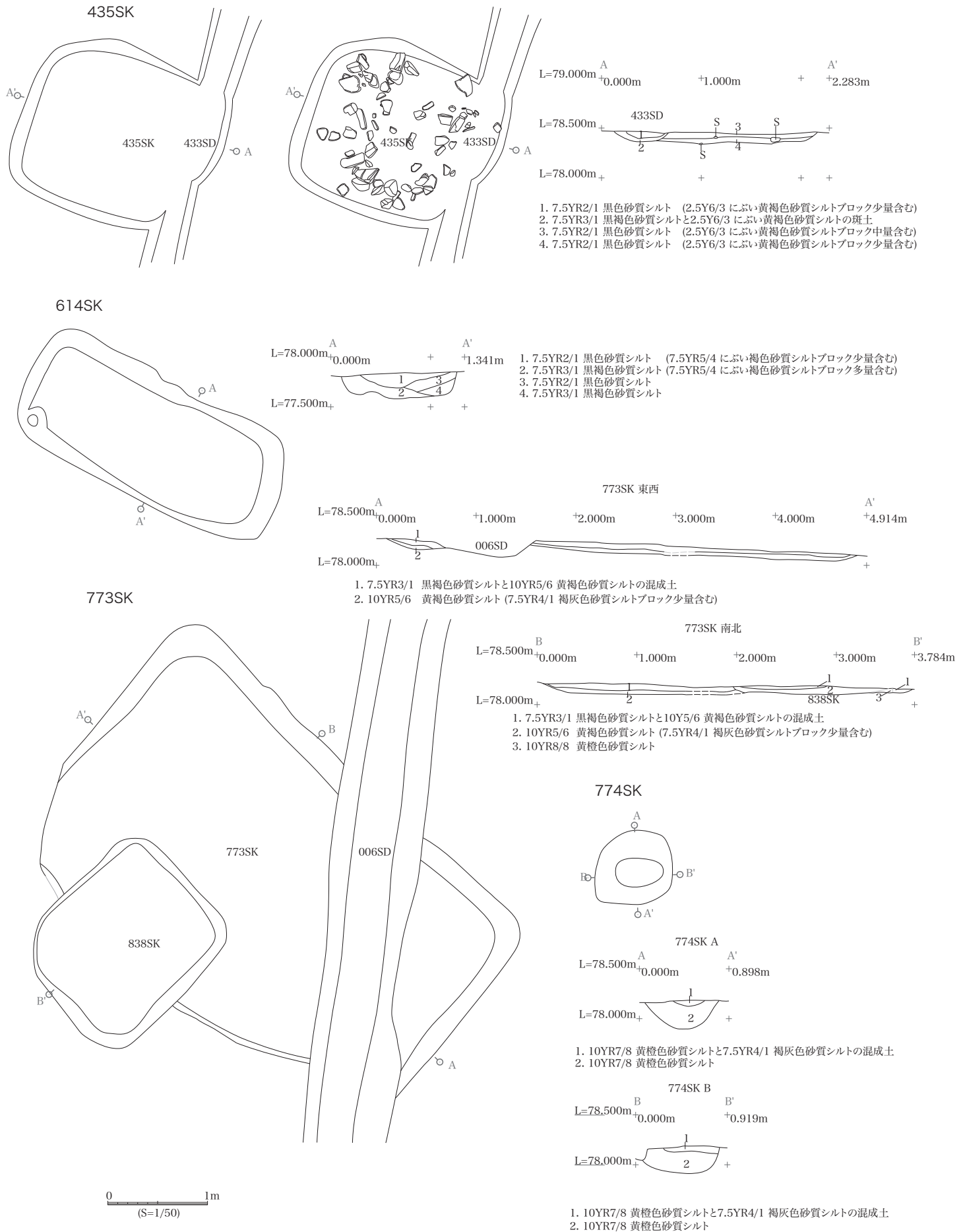
980SB



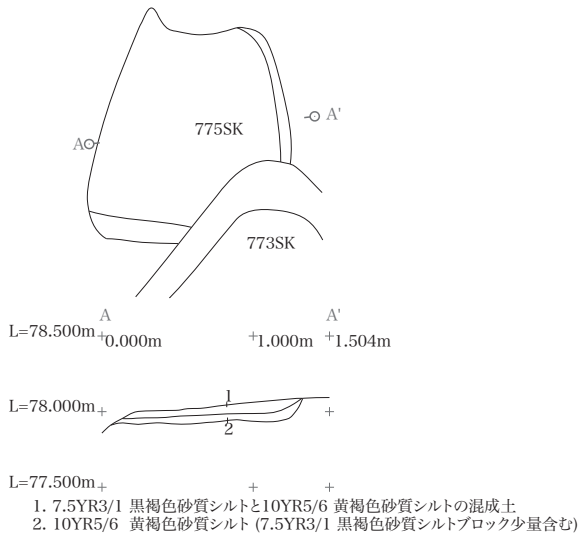
981SB



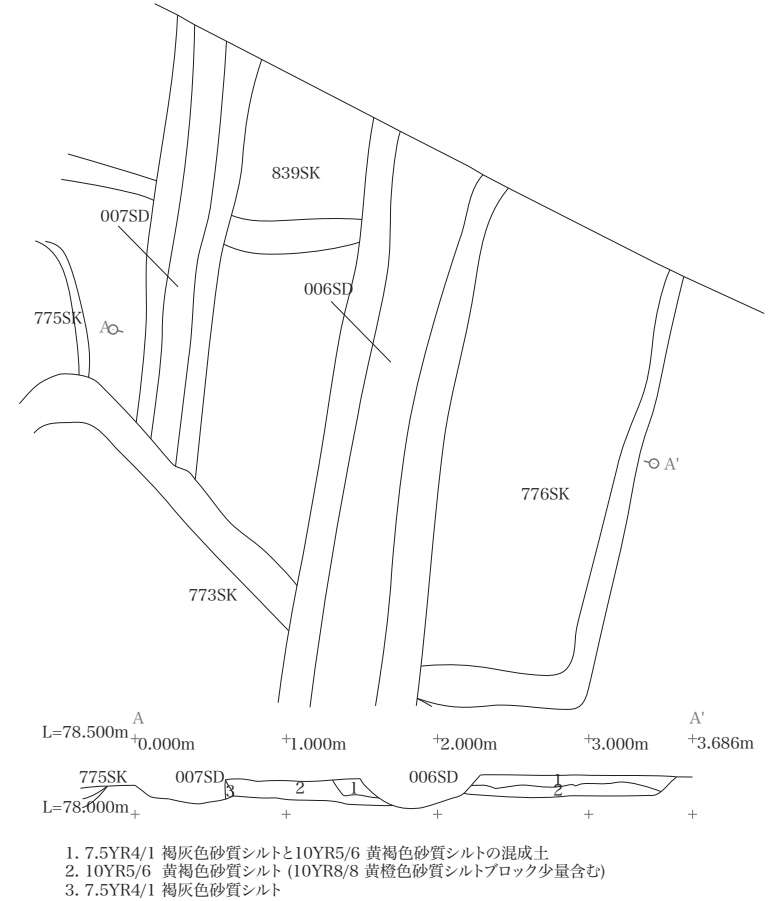
第 20 図 Da 区 980SB・981SB 平面図・断面図



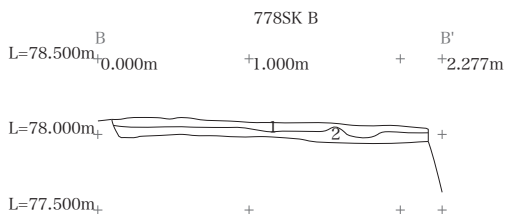
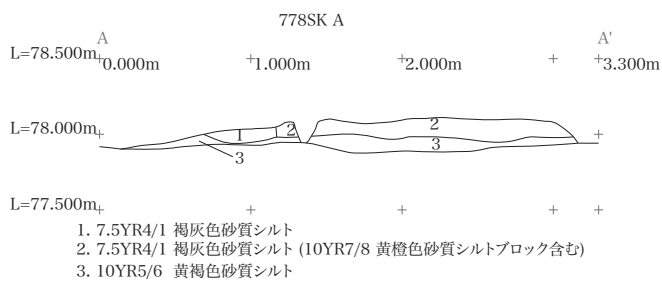
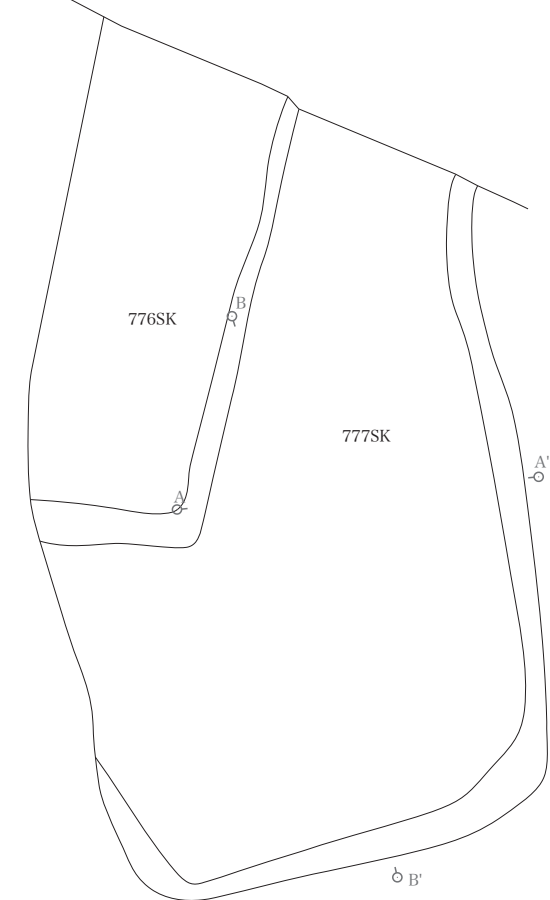
775SK



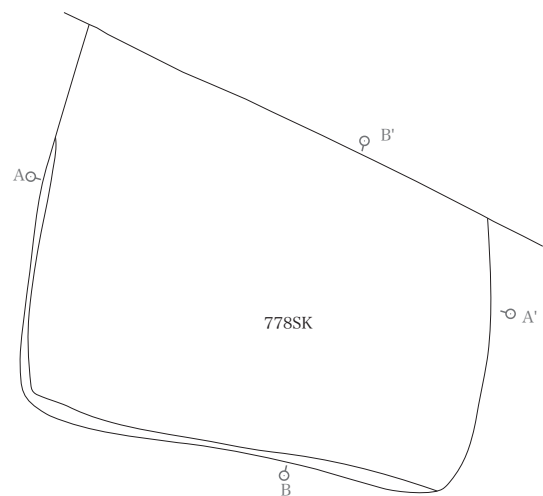
776SK



777SK

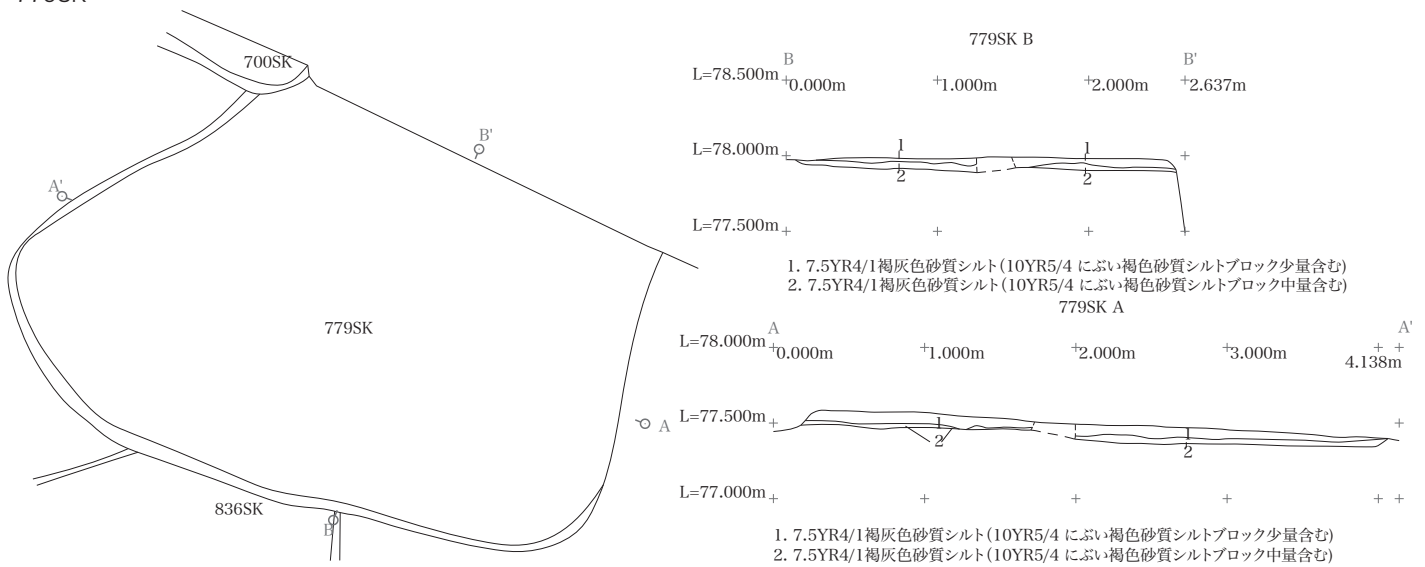


778SK

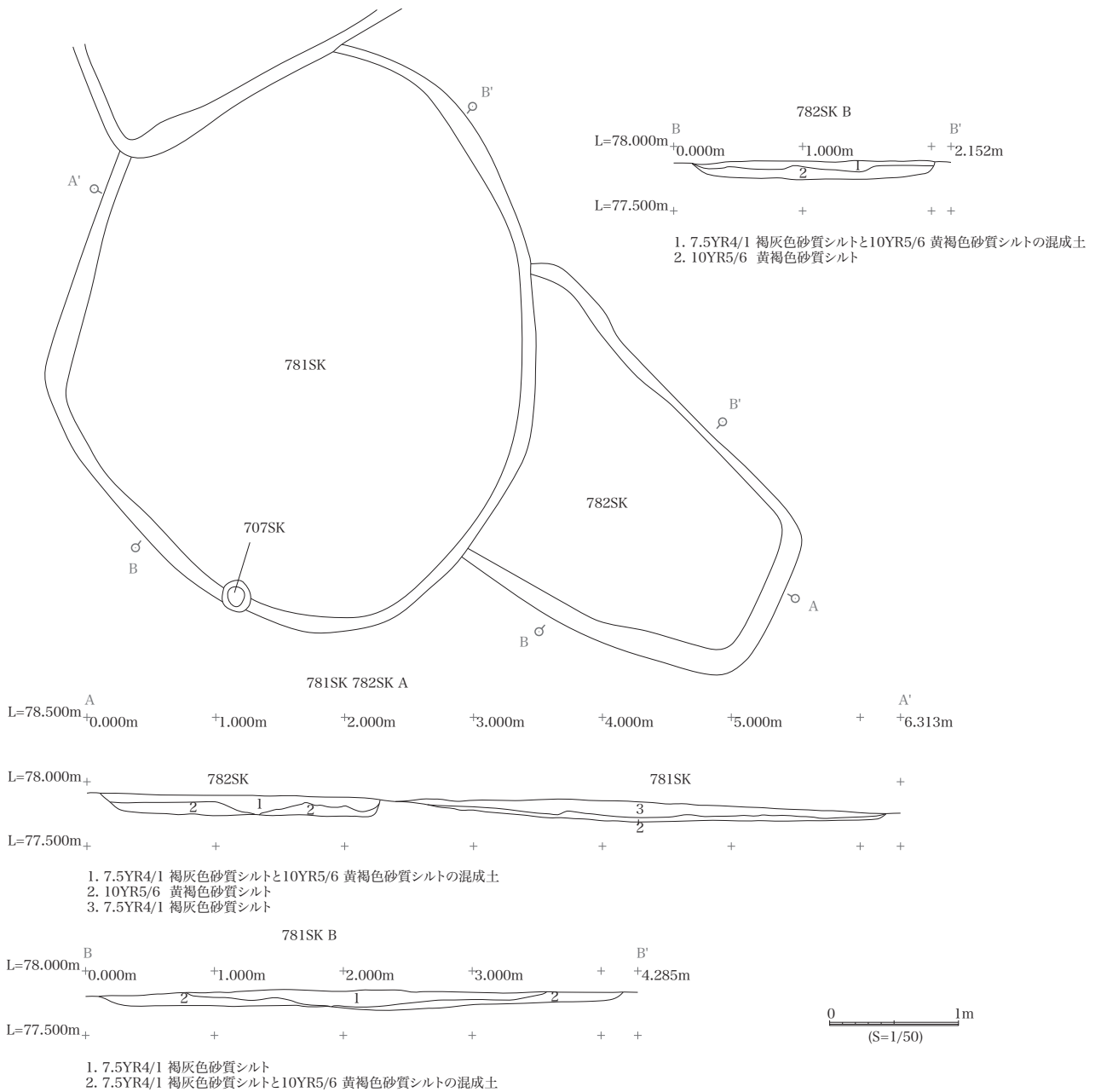


0 1m
(S=1/50)

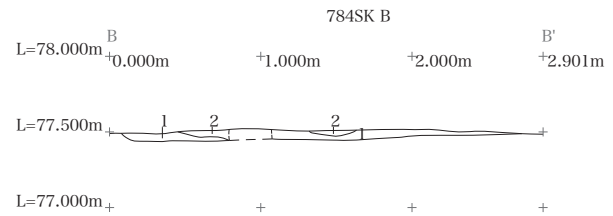
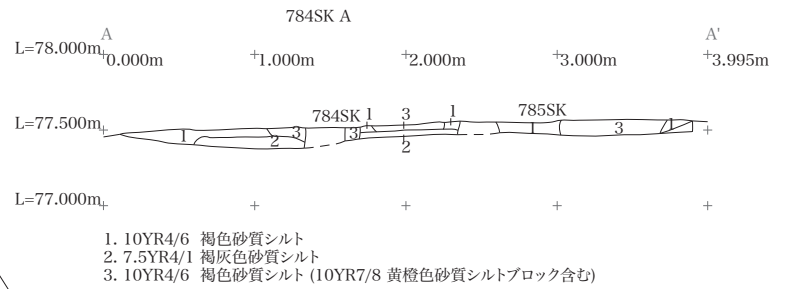
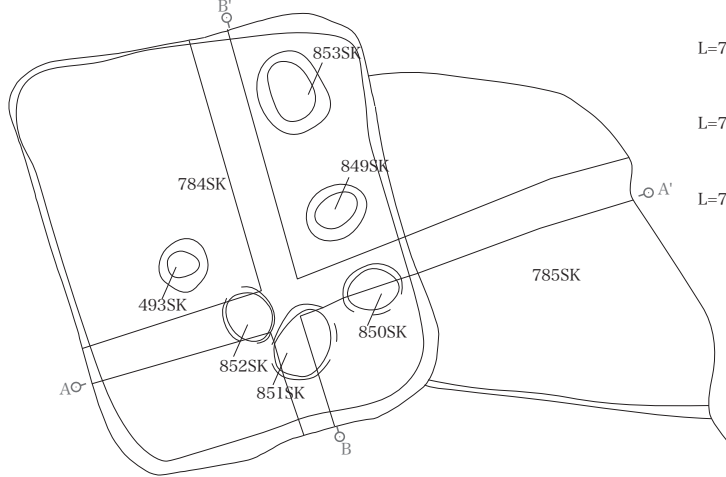
779SK



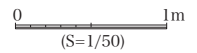
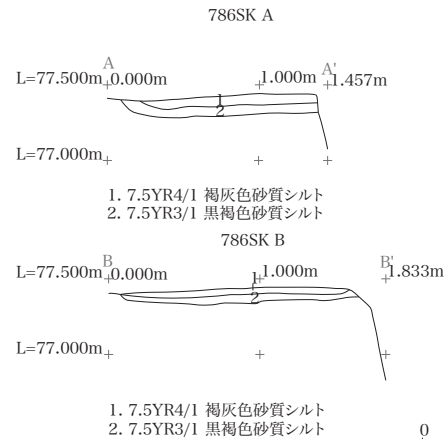
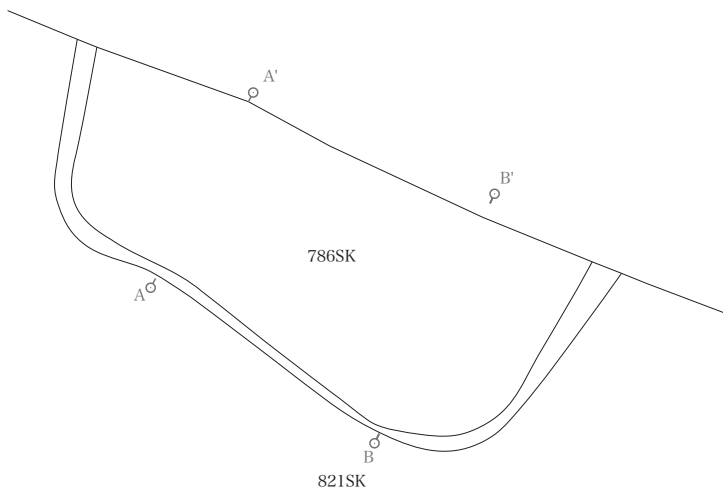
781SK・782SK



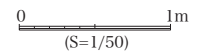
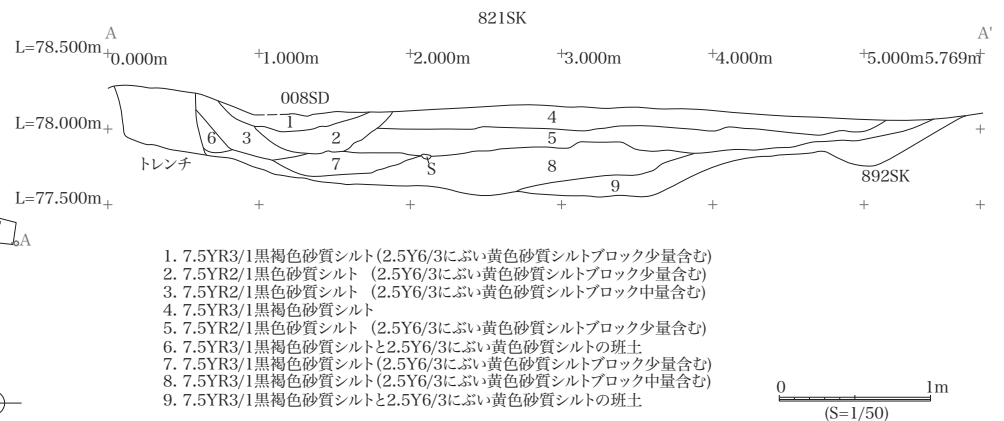
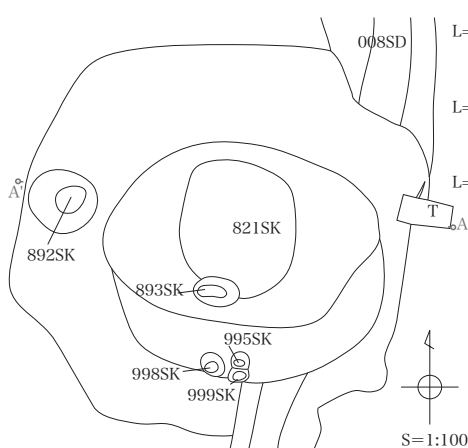
784SK・785SK



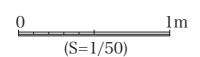
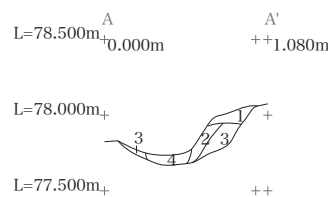
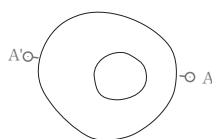
786SK

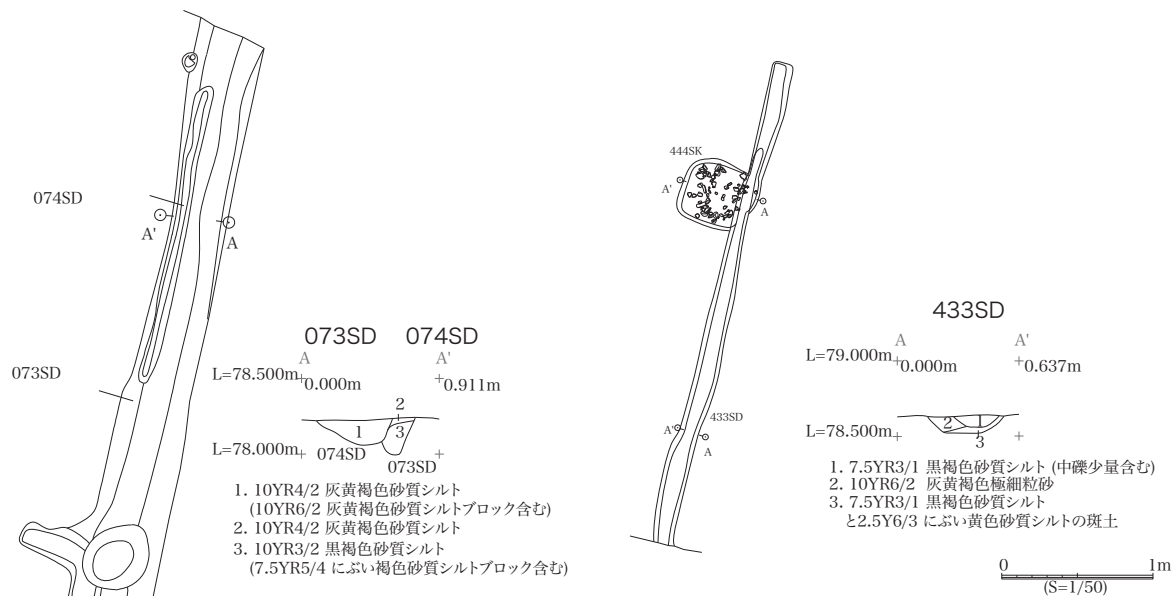


821SK



892SK





第 26 図 Da 区 SD 断面図

明確な時期は不明であるが中世の溝に切られていることから中世以前と考えられる。

774SK (第 21 図) 径 0.76 m、深さ 0.31 m の規模を測る隅丸方形に近い土坑である。黄橙色砂質シルトの埋土を持っており、他の遺構とは異なった様相を見せる。Da 区ではこうした黄橙色砂質シルトの堆積が薄く残っているのが散見されたが、炉跡の焼土のように炭化物なども伴っておらず、また遺物も出土しないため、時期も不明である。

775SK・776SK・777SK・778SK (第 22 図) 規模の差はあれどいずれも隅丸方形と考えられる浅い土坑である。中世の包含層の掘削後に検出されていることから中世以前である。

779SK・781SK・782SK (第 23 図) 規模の差はあれどいずれも浅い不定形の土坑である。中世の包含層の掘削後に検出されていることから中世以前である。

784SK・785SK・786SK (第 24 図) 規模の差はあれどいずれも隅丸方形と考えられる浅い土坑である。中世の包含層の掘削後に検出されていることから中世以前である。

821SK (第 24 図) 長径 5.20 m、短径 5.12 m、深さ 0.73 m の規模を測る円形に近い不定形の土坑である。古瀬戸掘鉢、常滑窯産甕、土師器内耳鍋など多数の遺物が出土している。中世Ⅱ期の土坑と考えられる。008SD に切られた状況で検出されたが、遺物などに時期差はなく 008SD と一体で機能していた水場のようなものが想定できる。

838SK (第 21 図) 長径 1.80 m、短径 1.54 m、深さ 0.07 m の規模を測る浅い隅丸長方形の土坑である。遺構の残りが悪く、時期は中世と考るが、詳細な時期は不明である。

892SK (第 24 図) 長径 0.92 m、短径 0.82 m、深さ 0.38 m の規模を測る楕円形の土坑である。明確な時期は不明ながら、821SK に切られていることから中世Ⅱ期以前のものである。

d. 溝

Da 区では調査区東より南北に走る多くの溝が確認されている。これらは区画溝などと考えられ、位置をずらしながら何度かの掘り直しが行われたと推定される。これらの状況について整理をしておきたい。中世Ⅱ期段階で 008SD と 007SD・057SD が溝として掘削され両者の間は道として機能してものと考えられる。その後、中世Ⅲ期に道の拡幅に伴い 007SD・057SD にかわって東に 006SD・058SD が掘削されたと思われる。さらに、近世にはこの道が C 区と Da 区の間にある現道の位置へと移動したと考えられ、それに伴い 073SD・074SD などが掘削されたと考えられる。

006SD (第 25 図) 幅 0.90 m、深さ 0.25 m の規模を測る 008SD・058SD と平行して南北に走る溝である。006SD と 058SD は一体のもので両者の間は東側の区画への入り口と考えられる。古瀬戸陶器片、

常滑窯産甕、土師器内耳鍋などが出土している。常滑窯産甕の中に赤物もあるため中世Ⅲ期から近世にかけて機能していた溝と考えられる。

008SD（第25図） 幅2.32 m、深さ1.01 mの規模を測る006SD・058SDと平行して南北に走る溝である。821SKと接する付近から北にかけて多量の礫と土師器内耳鍋を中心とする中世の遺物がまとまって出土しており821SKと一体で機能した後、821SKが埋まった後もしばらくは溝として機能していたと考えられ、中世Ⅱ期から近世まで機能していた溝と考えられる。

058SD（第26図） 幅1.92 m、深さ0.25 mの規模を測る006SD・008SDと平行して南北に走る溝である。縄文土器、弥生土器、中世の土師器内耳鍋などが出土している。006SDと一体のものと考えられることから中世Ⅲ期から近世まで機能していた溝と考えられる。

073SD・074SD（第26図） 073SDは幅0.96 m、深さ0.33 m、074SDは幅0.18 m、深さ0.14 mの規模を測る調査区東端を南北に走る溝である。中世の溝と考えられる006SDなどの黒褐色の埋土とは違い、灰黄褐色の埋土で近世と考えられ、006SDなどの廃絶後に掘削されたものと思われる。

433SD（第26図） 幅0.66 m、深さ0.12 mの規模を測る南北に走る溝である。遺物の出土はなく、明確な時期は不明であるが灰黄褐色の埋土が入ることから近世と考えられる。

（5）Db区（第162図）

Db区では弥生時代の土坑、中世の土坑・溝、近世の井戸などが確認されている。

a. 土坑

1105SK（第27図） 長径3.06 m、短径2.96 m、深さ0.19 mの規模を測る隅丸長方形の土坑である。古井式の甕片がまとまって出土していることから弥生時代中期の土坑と考えられる。

1137SK（第27図） 径1.25 m、深さ0.28 mの規模を測るほぼ円形の土坑で断面形状が箱状となる。周辺には同様の土坑が集まっており、土墳墓の可能性が考えられる。明確な時期は不明であるが同様の他の遺構の時期から中世Ⅲ期と考えられる。

1385SK（第27図） 径1.40 m、深さ0.21 mの規模を測るほぼ円形の土坑で断面形状が箱状となる。1137SKと同様に土墳墓の可能性が考えられる。明確な時期は不明であるが同様の他の遺構の時期から中世Ⅲ期と考えられる。

1683SK（第27図） 長径3.58 m、短径1.98 m、深さ0.23 mの規模を測る隅丸長方形と考えられる土坑である。常滑窯産甕、土師器内耳鍋などが出土していることから中世Ⅲ期と考えられる。

1910SK（第27図） 径1.10 m、深さ0.12 mの規模を測るほぼ円形の土坑で断面形状が箱状となる。1137SKなどと同様に土墳墓の可能性が考えられる。明確な時期は不明であるが同様の他の遺構の時期から中世Ⅲ期と考えられる。

b. 溝

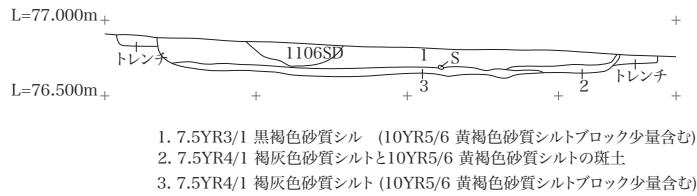
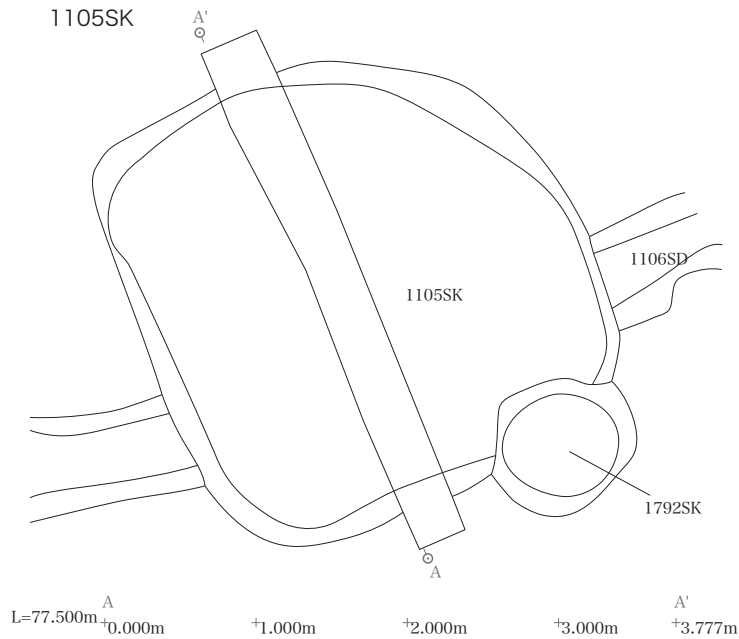
Db区では調査区西から東に走る多くの溝が確認されている。これらは区画溝などと考えられ、位置をずらしながら何度かの掘り直しが行われたと推定される。削平などにより遺構の残存状況の良好でないものもあるが、これらの状況について整理をしておきたい。中世Ⅱ期段階で1106SD・1260SDと1192SD・1485SDが溝として掘削され両者の間は道として機能してものと考えられる。その後、中世Ⅲ期に道の拡幅に伴い1106SD・1206SDにかわって1002SD・1116SDが、1192・1485SDにかわって1001SD掘削されたと思われる。

1001SD（第28図） 幅1.97 m、深さ0.43 mの規模を測る調査区西側を南北にのびた後、北東角へ向かい走る溝である。常滑窯産甕、中世の土師器などが出土している。中世Ⅲ期から近世の時期と考えられ区画・排水の機能を有するものであろう。

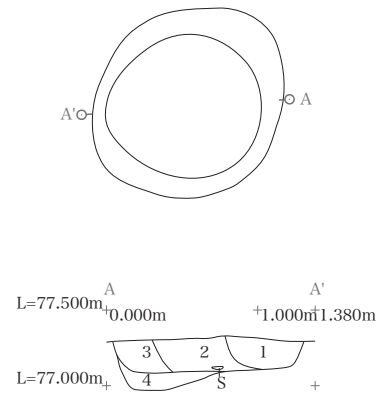
1116SD（第28図） 幅1.34 m、深さ0.2 mの規模を測る1001SDの約5 m北を平行して走る溝で、西壁際で1001SDとは逆に北西側に屈曲している。常滑窯産甕、中世の土師器などが出土している。中世Ⅲ期から近世の時期と考えられ区画・排水の機能を有するものであろう。

c. 井戸

1110SE（第29図） 長径2.71 m、短径2.22 m、深さ3.44 mの規模を測る楕円形の井戸である。井

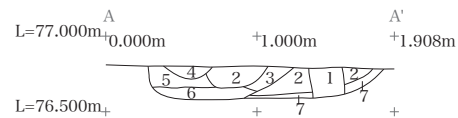
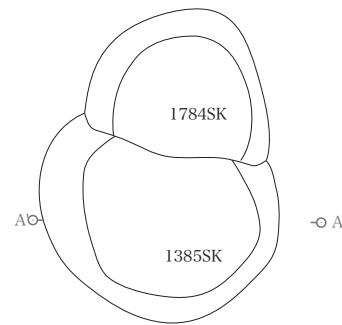


1137SK



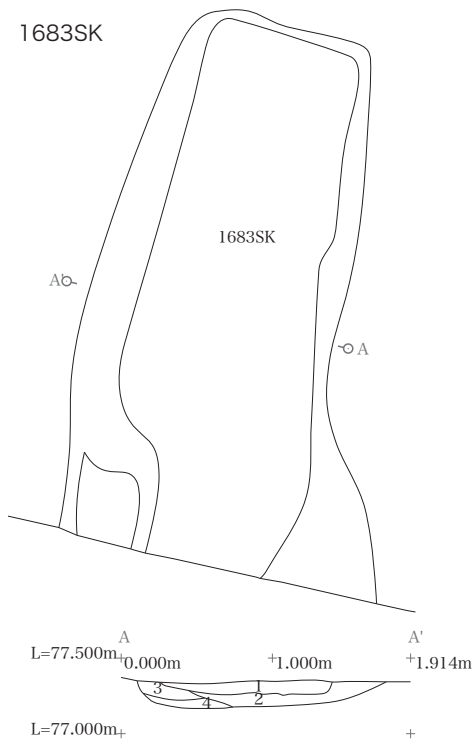
1. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト
2. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト (中礫少量含む)
3. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト (中礫多量含む)
4. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (中礫多量含む)

1385SK



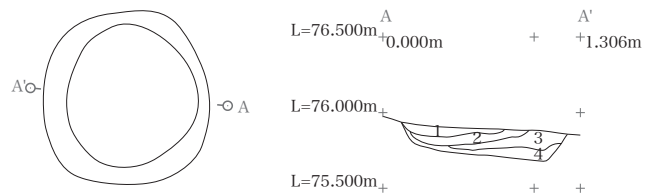
1. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト
2. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト (10YR6/8 明黄褐色砂質シルブロック少量含む)
3. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト (10YR6/8 明黄褐色砂質シルブロック多量含む)
4. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (10YR6/8 明黄褐色砂質シルブロック少量含む)
5. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト (10YR6/8 明黄褐色砂質シルブロック少量含む)
6. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (10YR6/8 明黄褐色砂質シルブロック多量含む)
7. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトと10YR6/8 明黄褐色砂質シルトの斑土

1683SK



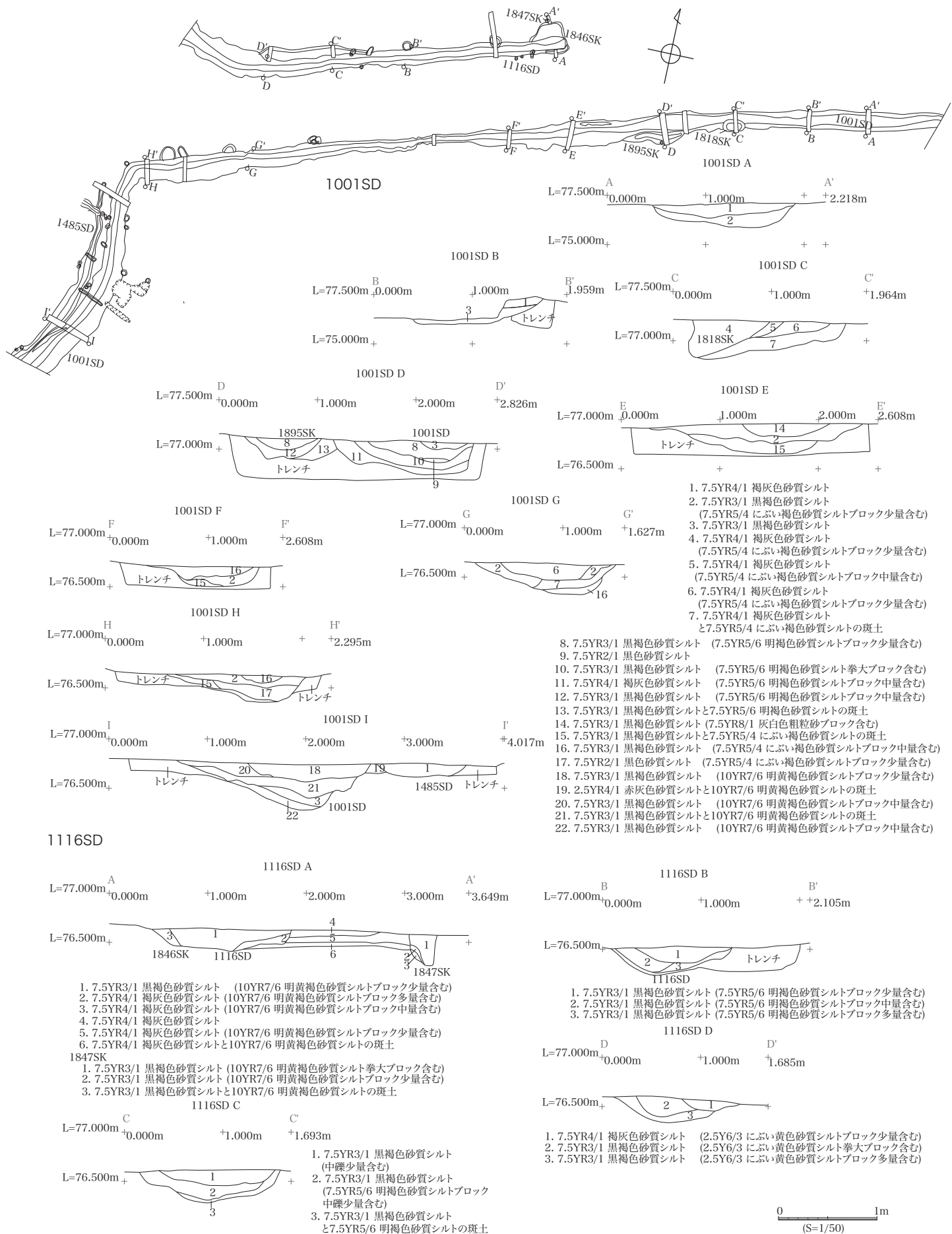
1. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (2.5Y6/8 明黄褐色砂質シルブロック少量含む)
2. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (2.5Y6/8 明黄褐色砂質シルブロック少量含む)
3. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
4. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトと2.5Y6/8 明黄褐色砂質シルトの斑土

1910SK

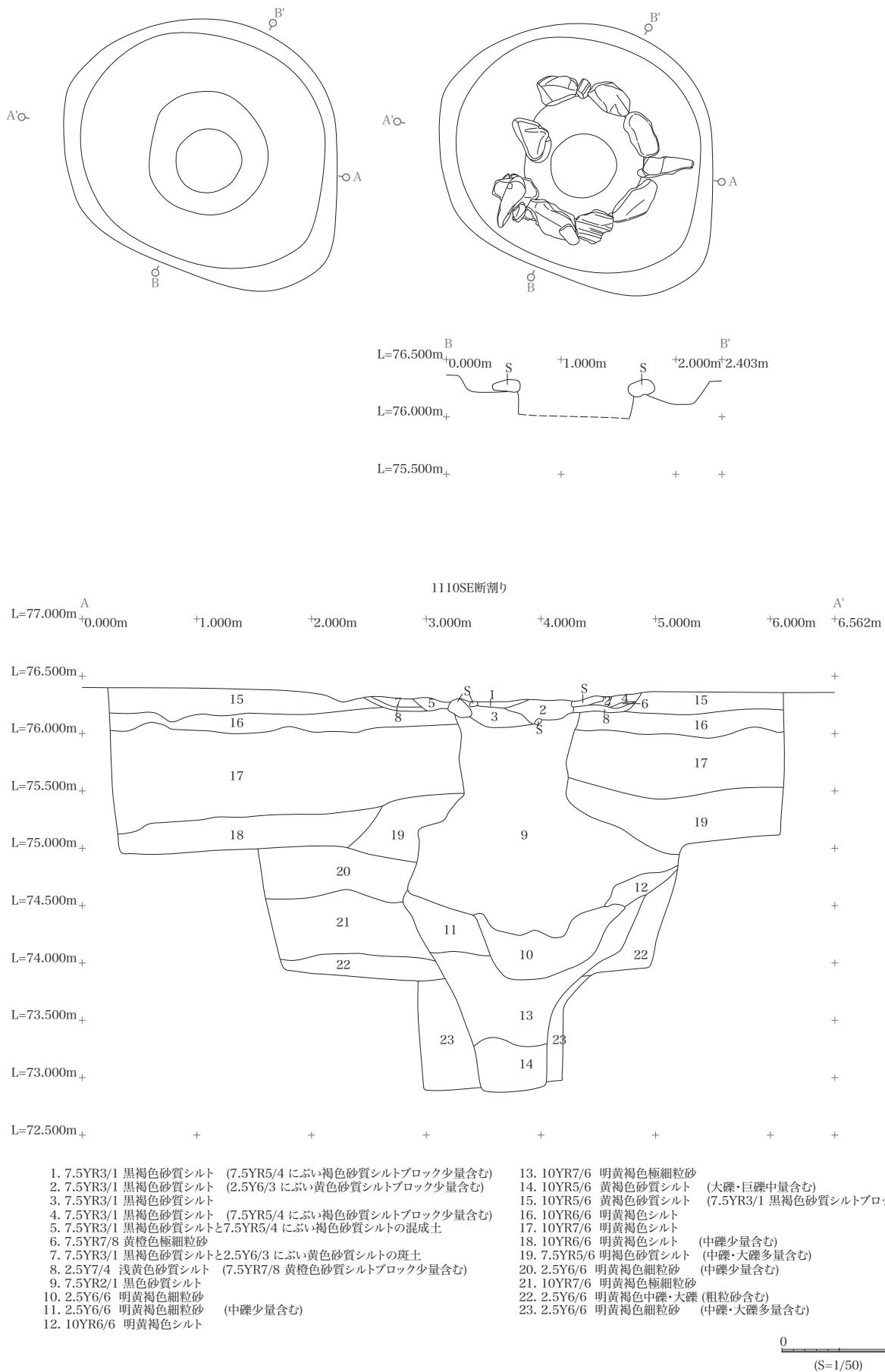


1. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (10YR5/6 黄褐色砂質シルブロック少量含む)
2. 5Y6/1 灰色砂質シルトと7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトの斑土
3. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト (10YR5/6 黄褐色砂質シルブロック中量含む)
4. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトと10YR5/6 黄褐色砂質シルトの斑土

0 1m
(S=1/50)



1110SE



第 29 図 Db 区 1110SE 平面図・断面図

戸そのものは径が約1m、円形の掘り形で素掘りとなっており構造物などは認められなかった。ただし、検出面では井戸の掘り形の周囲を一回り大きく掘りくぼめ石を巡らしていることが確認された。遺物は上層から土師皿が出土しているが、それ以外はなく時期は明確ではないが、南隣のE区では地表面から1m程石積みがされている井戸が地表面の雑草などを排除した段階で見つかっていることから、近世以降比較的最近まで使用されていたものではないかと考えられ、石積みは検出面よりも上層にあった黒褐色シルトなどが井戸内へ崩落するのを防止するためのものであったと考えられる。

(6) E区(第163図・第164図)

E区では縄文時代～弥生時代の流路、中世の竪穴状遺構・掘立柱建物・土坑・溝・井戸、近世の土坑・溝・道などが確認されている。

a. 竪穴状遺構

137SI(第30図) 長径3.06m、短径2.38m、深さ0.11mの規模を測る隅丸方形かと考えられる竪穴状遺構である。床面近くに多量の礫が含まれており、これを取り除くとその下には焼土の広がり確認できた。床面は叩き締めたように硬化していた。埋土からは片口鉢、土師器皿・羽付釜・常滑窯産甕などが出土しており、遺構の時期は中世Ⅱ期と考えられる。

326SI(第31図・32図) 長径5.17m、短径4.48m、深さ0.48mの規模を測る隅丸方形かと考えられる竪穴状遺構である。床面近くでは北東で焼土の広がり確認されており、南よりには礫が一行に並んだような状況で検出されている。床面は叩き締めたように硬化しており、西・南ははっきりとした床面から壁面への立ち上がりはなくは緩やかに傾斜している。建物内の1385SK、1445SK、1455SK、1459SK、1473SK、1474SK、1475SK、1477SKについては硬化した床面と同じ明黄褐色砂質シルトの埋土が充填されており南側の傾斜を挟んで4箇所ずつあることから対応関係は不明ながら一体のものとして機能していたものと思われ、床面を作った段階で同時に埋められたと思われ、一行に並んだ礫との関係を考えて元々南東側に開口部があったものを作り替える際に礫を並べて埋めることで壁をつくり、開口部を北西側に作り替えたものとも考えられる。埋土からは尾張型第7型式と第9型式の山茶碗、尾張型第8もしくは第9型式の山茶碗小皿、片口鉢、常滑窯産甕、土師器皿、伊勢型鍋などが出土しており、遺構の時期は中世Ⅱ期14世紀と考えられる。

b. 掘立柱建物

1478SB(第33図) 1間×3間の建物で、規模は8.04m×4.05mを測り、055SP、066SP、080SP、082SP、090SP、095SP、179SP、1329SPで構成されている。137SIと一体で機能していたと思われるため、中世Ⅱ期と考えられる。

1479SB(第33図) 1間×2軒の建物で、規模は5.12m×3.04mを測り、136SP、173SP、182SP、187SP、1010SP、1270SPで構成されている。182SPからは中世の土師器皿が出土している。1478SB同様137SIと一体で機能していたと思われるため、中世Ⅱ期と考えられる。

1480SB(第34図) 2間×3間の総柱の建物で、規模は8.42m×4.83mを測り、300SP、700SP、734SP、739SP、754SP、759SP、784SP、793SP、800SP、1022SP、1041SPで構成されている。800SPからは伊勢型鍋が出土している。326SIと一体で機能していたと思われるため、中世Ⅱ期と考えられる。

1481SB(第35図) 2間×3間の総柱の建物で南側に張り出した柱列が存在する。規模は7.43m×6.10mを測り、297SP、301SP、737SP、757SP、762SP、783SP、792SP、801SP、803SP、1036SP、1039SPで構成されている。301SP、737SP、757SPから中世の土師器皿が出土している。1480SB同様326SIと一体で機能していたと思われるため、中世Ⅱ期と考えられる。

1482SB(第36図) 1間×3間の建物で、規模は8.62m×5.03mを測り、393SP、398SP、399SP、400SP、414SP、419SP、421SP、424SPで構成されている。明確な時期は不明ながら周辺の建物の時期を考えると中世Ⅱ期と考えられる。

1483SB(第37図) 2間×2間の総柱建物で、規模は4.81m×4.60mを測り、446SP、448SP、874SP、884SP、890SP、895SP、897SP、899SP、1262SPで構成されている。446SPから土師器皿

が出土している。周辺の建物の時期を考えると中世Ⅱ期と考えられる。

1484SB（第39図） 1間×3間の建物で、規模は5.64 m×3.21 mを測り、500SP、502SP、504SP、506SP、513SP、514SP、561SP、1122SPで構成されている。周辺の建物の時期などから中世Ⅱ期と考えられる。

1485SB（第38図） 1間×3間の建物で、規模は7.83 m×4.23 mを測り、503SP、505SP、515SP、522SP、524SP、560SP、1099SPで構成されている。515SPから中世の土師器が出土している。周辺の建物の時期などから中世Ⅱ期と考えられる。

1486SB（第39図） 1間×3間の建物で、規模は6.61 m×4.02 mを測り、526SP、533SP、537SP、541SP、556SP、1058SP、1124SP、1126SPで構成されている。1124SPには根石が見られ、1126SP脇で検出された礫も根石であったものであろう。周辺の建物の時期などから中世Ⅱ期と考えられる。

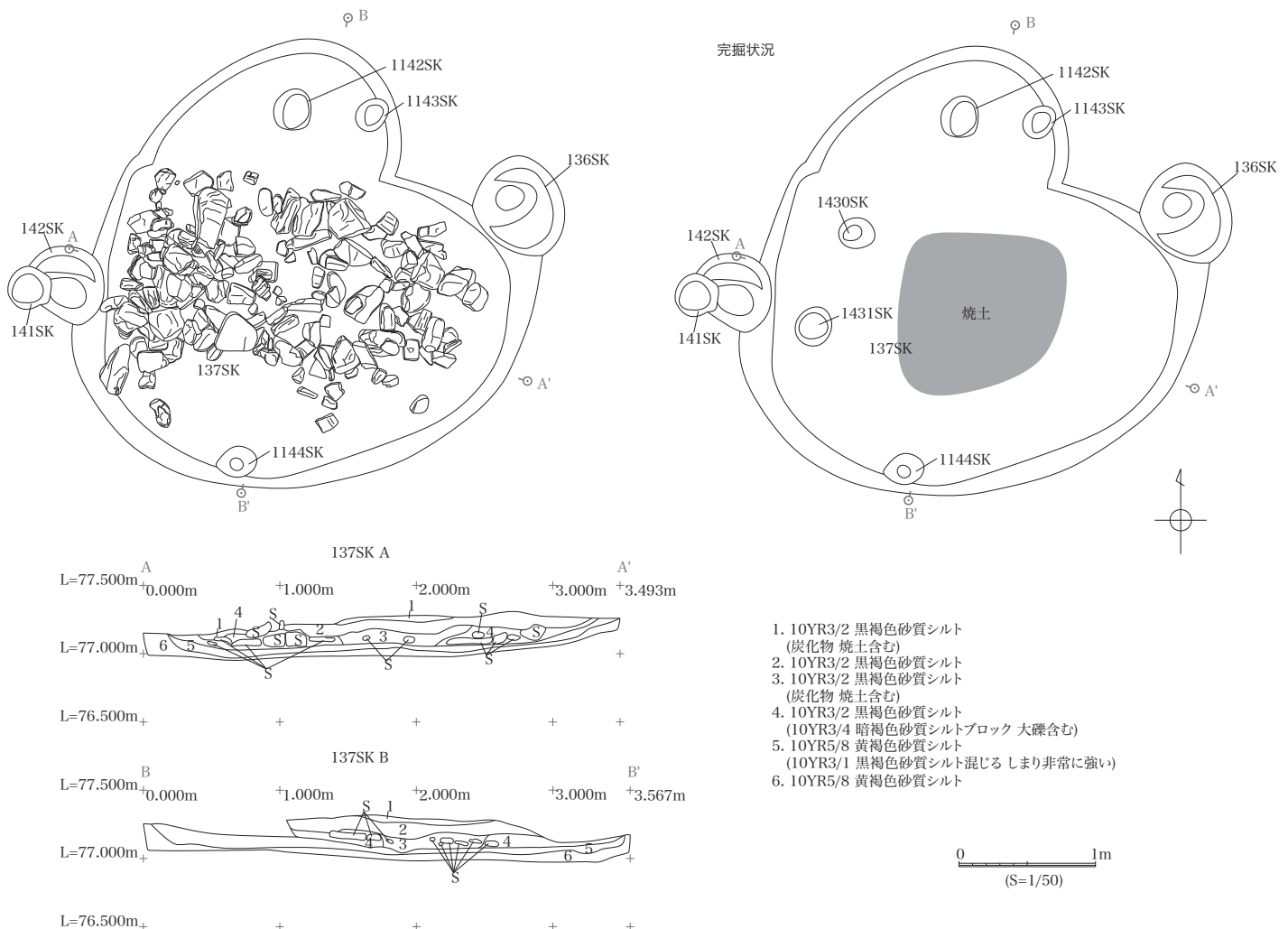
c. 土坑

006SK（第40図） 長径1.35 m、短径1.27 m、深さ0.48 mの規模を測る隅丸方形の土坑である。壁面は被熱により赤化して固くしまっており、床面に炭化材が確認されている。土師器が出土しているが明確な時期は不明で、近世後半と考えられる。

007SK（第40図） 長径1.76 m、短径1.70 m、深さ0.33 mの規模を測る隅丸方形の土坑である。壁面は被熱により赤化して固くしまっており、床面に炭化材と大型の礫が確認されている。埋土からは近世後半の尾呂茶碗底部を使った加工円盤や土師器が出土していることから、時期は炭化材の放射性炭素年代測定の結果などもふまえ、006SK同様近世後半と考えられる。

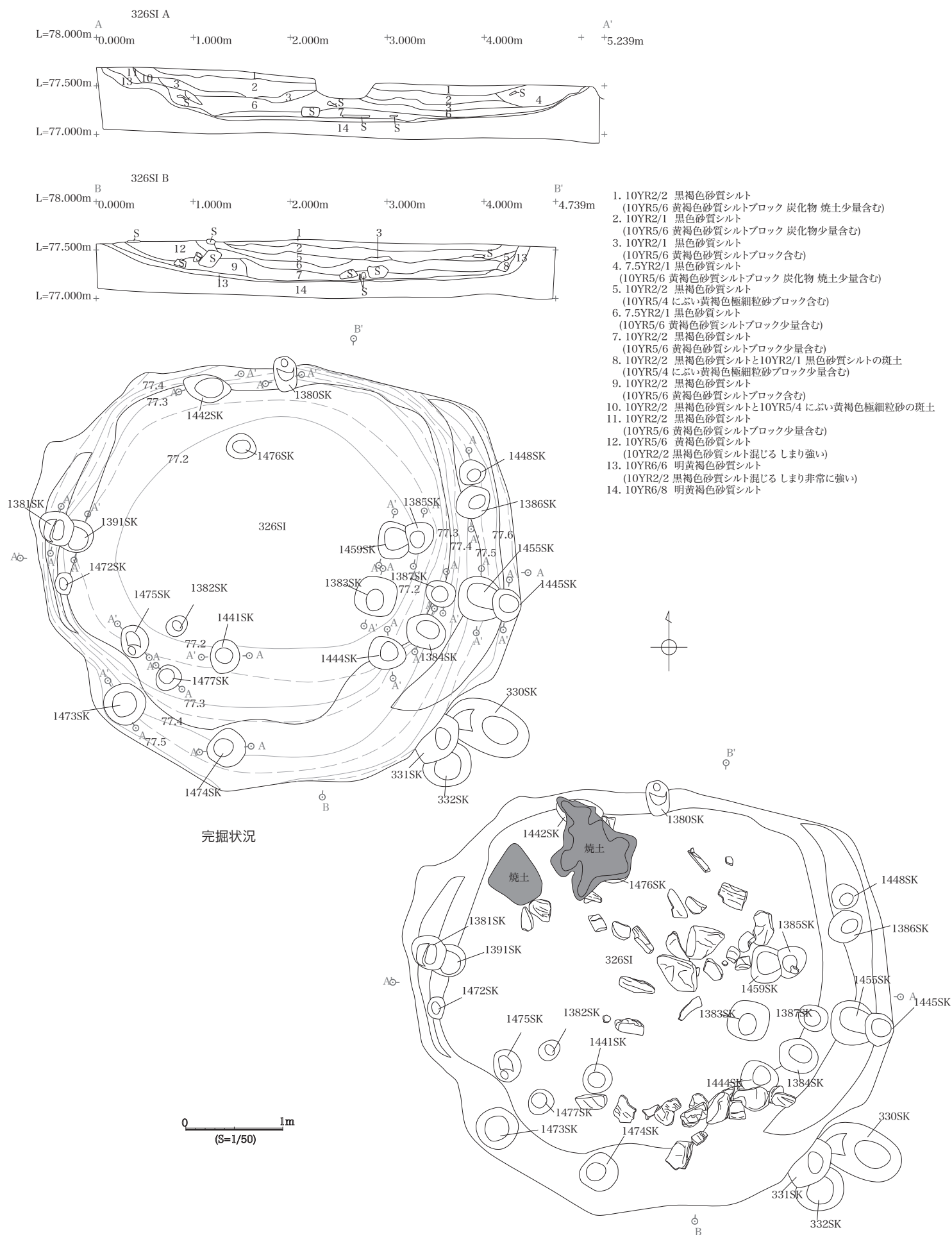
025SK（第40図） 長径1.27 m、短径1.16 m、深さ0.32 mの規模を測る隅丸方形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壌墓の可能性が考えられる。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

137SI



第30図 E区 137SI 平面図・断面図

326SI



第 31 図 E 区 326SI 断面図・平面図

1380SK
A A'
L=77.500m +0.000m +0.383m

L=77.000m + +

- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
と10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック
7.5YR1.7/1 黒色シルトブロック少量含む)
- 10YR2/1 黒色砂質シルト
と10YR2/2 黒褐色砂質シルトの斑土
(7.5YR1.7/1 黒色砂質シルトブロック
10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)

1384SK
A A'
L=77.500m +0.000m +0.489m

L=77.000m + +

- 10YR2/1 黒色砂質シルト
- 10YR5/6 黄褐色砂質シルト
と10YR2/2 黒褐色砂質シルトの斑土
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)
- 10YR5/6 黄褐色砂質シルト
と10YR2/2 黒褐色砂質シルトの斑土

1387SK
A A'
L=77.500m +0.000m +0.430m

L=77.000m + +

- 10YR2/1 黒色砂質シルト
(炭化物 焼土少量含む)
- 10YR5/6 黄褐色砂質シルト
と10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土
(炭化物 焼土少量含む)
- 10YR5/6 黄褐色砂質シルト
(10YR2/2 黒褐色砂質シルト混じる)

1442SK
A A'
L=77.500m +0.000m +0.669m

L=77.000m + +

- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
と10YR5/6 黄褐色砂質シルトの斑土
- 10YR2/1 黒色砂質シルト
(炭化物 焼土少量含む)
- 10YR5/6 黄褐色砂質シルト
と10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土
(炭化物 焼土少量含む)

1455SK
A A'
L=78.000m +0.000m +0.665m

L=77.500m + +

- 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
と10YR3/4 暗褐色砂質シルトの斑土
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
と10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土
- 10YR5/6 黄褐色砂質シルト
(10YR3/1 黒褐色砂質シルト混じる)

1474SK
A A'
L=77.500m +0.000m +0.535m

L=77.000m + +

- 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
と10YR3/1 黒褐色砂質シルトの斑土
- 10YR5/4 黄褐色砂質シルト
(10YR3/1 黒褐色砂質シルト混じる)

1381SK
A A'
L=77.500m +0.000m +0.496m

L=77.000m + +

- 10YR2/1 黒色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)
- 10YR2/1 黒色砂質シルト
と10YR5/6 黄褐色砂質シルトの斑土

1385SK
A A'
L=77.500m +0.000m +0.581m

L=77.000m + +

- 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
(10YR2/2 黒褐色砂質シルトブロック混じる)
- 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
(10YR2/1 黒色砂質シルトブロック混じる)

1391SK
A A'
L=77.500m +0.000m +0.497m

L=77.000m + +

- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック
7.5YR1.7/1 黒色シルトブロック含む)
- 10YR2/1 黒色砂質シルト
と10YR2/2 黒褐色砂質シルトの斑土
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック
7.5YR1.7/1 黒色シルトブロック含む)
- 10YR5/6 黄褐色砂質シルト
と10YR2/2 黒褐色砂質シルトの斑土

1444SK
A A'
L=77.500m +0.000m +0.510m

L=77.000m + +

- 10YR2/1 黒色砂質シルト
(10YR6/6 明黄褐色砂質シルトブロック含む)
- 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
(10YR3/1 黒褐色砂質シルト少量混じる)
- 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
と10YR2/2 黒褐色砂質シルトの斑土

1459SK
A A'
L=77.500m +0.000m +0.577m

L=77.000m + +

- 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
(10YR3/1 黒褐色砂質シルト混じる)
- 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
- 10YR5/4 黄褐色砂質シルト
(10YR3/1 黒褐色砂質シルト混じる)
- 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
と10YR5/4 黄褐色砂質シルトの斑土
- 10YR5/3 黄褐色砂質シルト
(10YR3/1 黒褐色砂質シルト混じる)

1475SK
A A'
L=77.500m +0.000m +0.478m

L=77.000m + +

- 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
(10YR2/2 黒褐色砂質シルトブロック含む)
- 10YR5/6 黄褐色砂質シルト
(10YR2/1 黒色砂質シルトブロック含む)
- 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
(10YR2/2 黒褐色砂質シルトブロック少量含む)

1383SK
A A'
L=77.500m +0.000m +0.624m

L=77.000m + +

- 10YR2/1 黒色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック 炭化物 焼土少量含む)
- 10YR2/1 黒色砂質シルトと10YR5/6 黄褐色砂質シルトの斑土
- 10YR2/1 黒色砂質シルトと10YR2/2 黒褐色砂質シルトの斑土
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)
- 10YR5/6 黄褐色砂質シルトと10YR2/2 黒褐色砂質シルトの斑土

1386SK
A A'
L=78.000m +0.000m +0.812m

L=77.500m + +

- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
と10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)

1441SK
A A'
L=77.500m +0.000m +0.495m

L=77.000m + +

- 10YR2/1 黒色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)
- 10YR2/1 黒色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)

1445SK
A A'
L=78.000m +0.000m +0.520m

L=77.500m + +

L=77.000m + +

- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
と10YR3/1 黒褐色砂質シルトの斑土
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR5/4 黄褐色砂質シルトブロック多量含む)
- 10YR5/6 黄褐色砂質シルト
と10YR2/2 黒褐色砂質シルトの斑土

1473SK
A A'
L=77.500m +0.000m +0.566m

L=77.000m + +

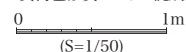
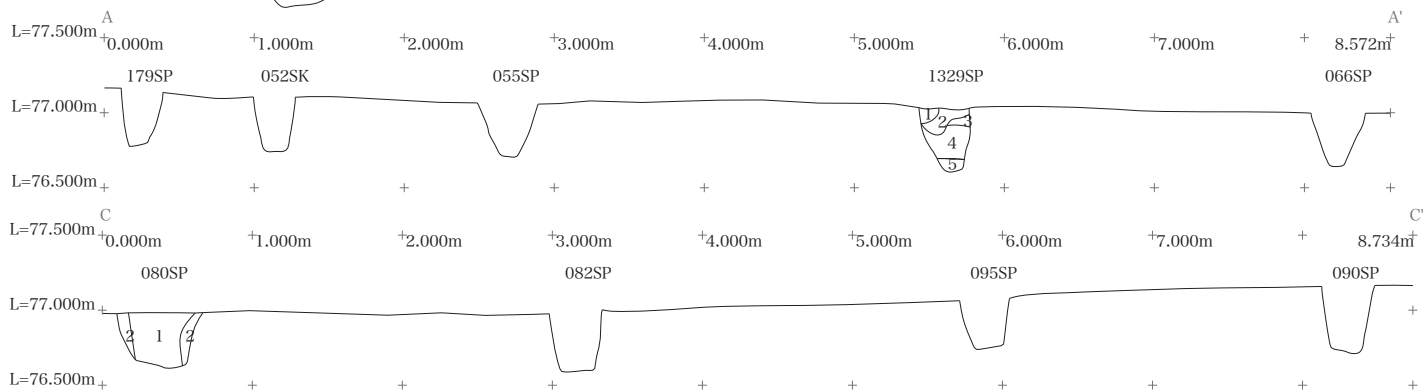
- 10YR6/6 明黄褐色砂質シルトと10YR5/4 黄褐色砂質シルト
と10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土
- 10YR5/6 黄褐色砂質シルト
(10YR3/1 黒褐色砂質シルト混じる)

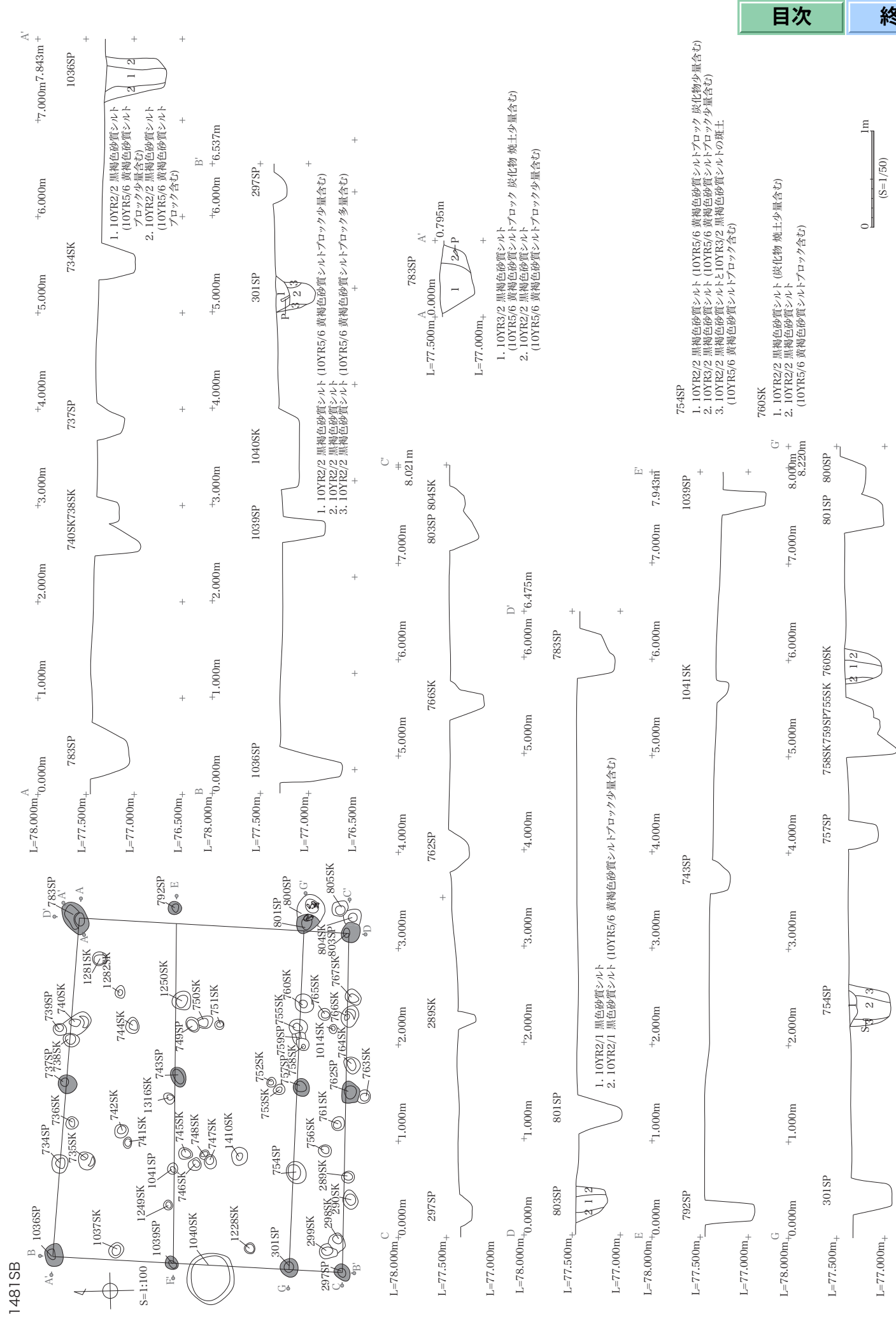
1477SK
A A'
L=77.500m +0.000m +0.364m

L=77.000m + +

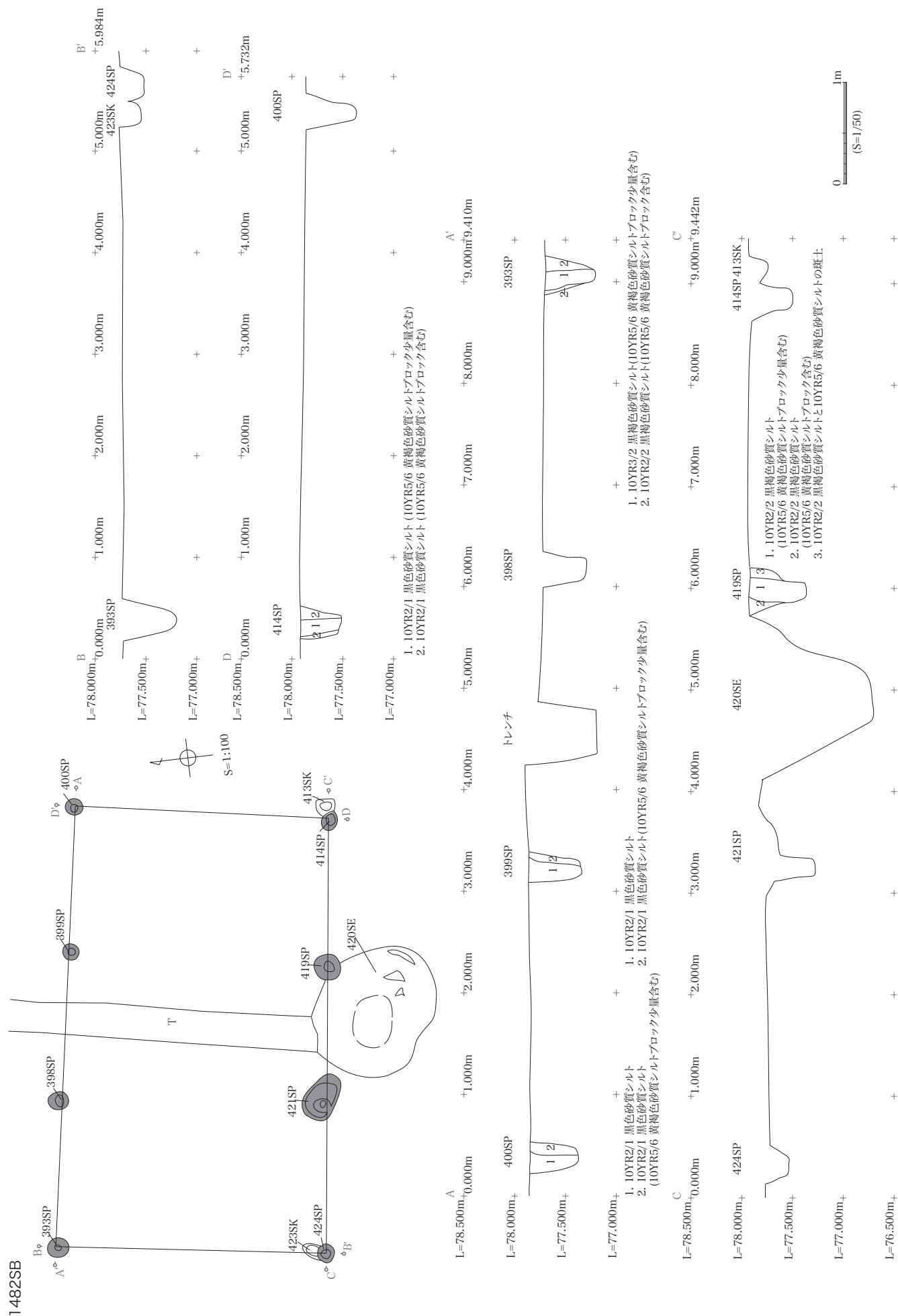
- 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
(10YR2/1 黒色砂質シルトブロック含む)
- 10YR5/6 黄褐色砂質シルト
(10YR3/1 黒褐色砂質シルトブロック含む)
- 10YR5/6 黄褐色砂質シルト
(10YR2/1 黒色砂質シルト混じる)
- 10YR5/4 黄褐色砂質シルト
(10YR3/1 黒褐色砂質シルト混じる)

0 1m
(S=1/50)

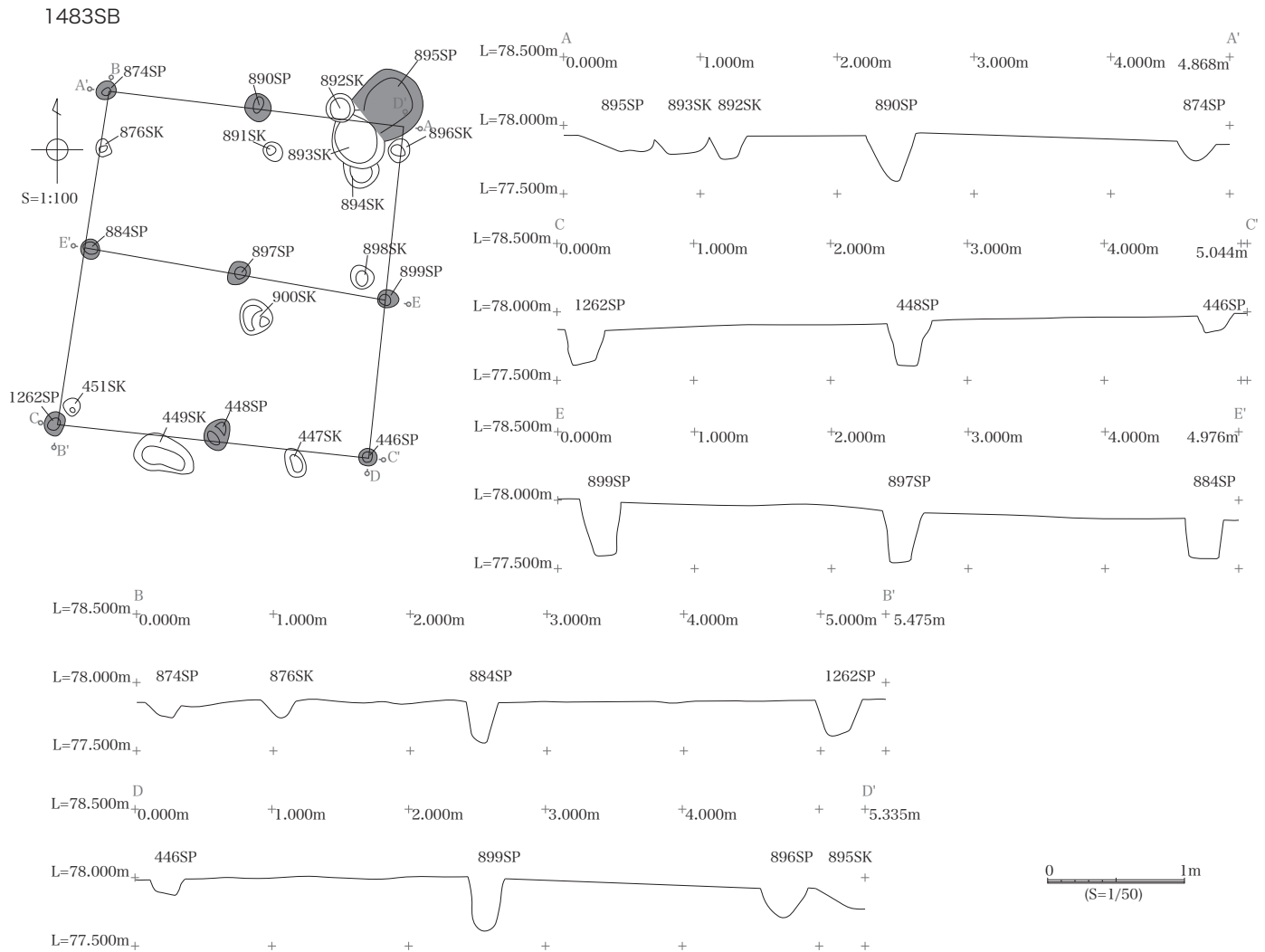




第35图 E区1481SB平面图·断面图



第36图 E区1482SB平面图·断面图



第 37 図 E 区 1483SB 平面図・断面図

097SK (第 40 図) 長径 1.06 m、短径 0.70 m、深さ 0.46 m の規模を測る隅丸長方形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壌墓の可能性が考えられる。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

159SK (第 40 図) 長径 1.46 m、短径 0.74 m、深さ 0.36 m の規模を測る楕円形の土坑である。縄文時代晩期五貫森式深鉢が出土していることから、遺構の時期もこの時期と考えられる。

160SK (第 40 図) 長径 1.13 m、短径 0.59 m、深さ 0.39 m も規模を測る楕円形の土坑である。遺物の出土はなく、明確な時期は不明ながら埋土や形状などから 159SK と同様の時期と考えられる。

275SK (第 40 図) 長径 3.35 m、短径 1.82 m、深さ 0.24 m の規模を測る楕円形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壌墓の可能性が考えられる。常滑窯産甕、土師器皿などが出土している。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

315SK (第 41 図) 長径 3.64 m、短径 2.85 m、深さ 0.15 m の規模を測る隅丸長方形に近い不定形の土坑である。中世Ⅲ期の遺構と思われる 314SK・317SK などに切られることからこれ以前の遺構と考えられる。

467SK (第 41 図) 長径 1.30 m、短径 0.82 m、深さ 0.07 m の規模を測る楕円形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壌墓の可能性が考えられる。山茶碗が出土しており、時期は中世Ⅲ期と考えられる。

519SK (第 41 図) 長径 0.96 m、短径 0.74 m、深さ 0.17 m の規模を測る楕円形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壌墓の可能性が考えられる。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

620SK (第 41 図) 長径 1.28 m、短径 1.20 m、深さ 0.30 m の規模を測るほぼ円形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壙墓の可能性が考えられる。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

622SK (第 41 図) 長径 1.27 m、短径 1.05 m、深さ 0.27 m の規模を測る楕円形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壙墓の可能性が考えられる。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

626SK (第 41 図) 長径 1.67 m、短径 1.60 m、深さ 0.41 m の規模を測るほぼ円形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壙墓の可能性が考えられる。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

628SK (第 41 図) 長径 1.27 m、短径 1.15 m、深さ 0.14 m の規模を測るほぼ円形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壙墓の可能性が考えられる。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

629SK (第 42 図) 長径 1.25 m、短径 1.15 m、深さ 0.32 m の規模を測るほぼ円形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壙墓の可能性が考えられる。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

630SK・632SK (第 42 図) 630SK は長径 1.95 m、短径 1.70 m、深さ 0.28 m の規模を測る隅丸方形の土坑、632SK は長径 1.26 m、短径 1.17 m、深さ 0.29 m の規模を測るほぼ円形の土坑である。埋土の状況からは 630SK が埋まった後に、632SK が作られ全体が沈んだのちに上層の土が堆積したと考えられるが一体であった可能性も考えられる。遺物として中世の土師器鍋が出土している。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壙墓の可能性が考えられる。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

791SK (第 42 図) 長径 1.87 m、短径 1.25 m、深さ 0.38 m の規模を測る隅丸長円形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壙墓の可能性が考えられる。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

798SK (第 42 図) 長径 2.28 m、短径 1.45 m、深さ 0.10 m の規模を測る不定形の土坑である。検出面でもやや高く残した部分で確認されており、床面に焼土が広がっていることなどから、竪穴状遺構の床面の一部が残存していたものとも考えられる。遺物は土師皿などが出土している。時期は他の竪穴状遺構の時期などから中世Ⅱ期と考えられる。

820SK (第 42 図) 長径 1.30 m、短径 1.07 m、深さ 0.19 m の規模を測る楕円形の土坑である。床面の一部に焼土が確認されている。底面部のみ残存している状況であるためはっきりとはしないが火葬墓の可能性も考えられる。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

842SK (第 42 図) 長径 2.70 m、短径 1.24 m、深さ 0.16 m の規模を測る隅丸長方形の土坑である。底面部のみ残存している状況であるためはっきりとはしないが焼土なども含んでおり、土壙墓の可能性も考えられる。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

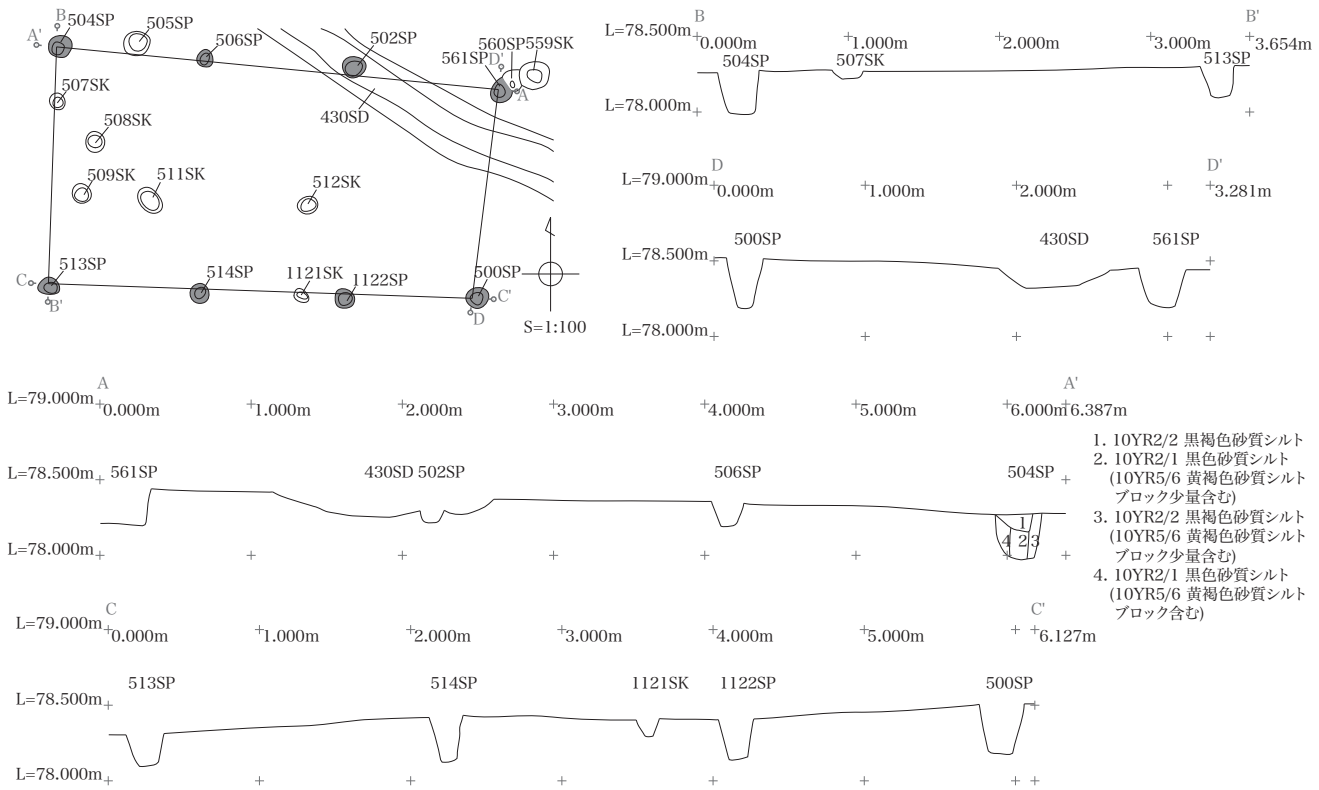
878SK (第 42 図) 長径 1.38 m、短径 0.77 m、深さ 0.50 m の規模を測る隅丸長方形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壙墓の可能性が考えられる。尾張型第 8 もしくは第 9 型式の山茶碗小皿、土師器鍋などが出土している。遺物の時期は 14 世紀に入るものではあるが、周辺の土坑と同時期のものと考えると中世Ⅲ期と考えられる。

938SK (第 42 図) 長径 1.22 m、短径 1.14 m、深さ 0.17 m の規模を測るほぼ円形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壙墓の可能性が考えられる。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

958SK (第 42 図) 長径 1.58 m、短径 0.94 m、深さ 0.12 m の規模を測るほぼ円形の土坑である。南側に溝状の張り出しがあり、その脇の床面で焼土が確認されている。埋土の中には炭化物に混じり焼けた骨片なども含まれていることから火葬墓と考えられる。山茶碗や土師器鍋などが出土しており、放射性炭素年代測定の結果とあわせると中世Ⅲ期 15 世紀初めと考えられる。

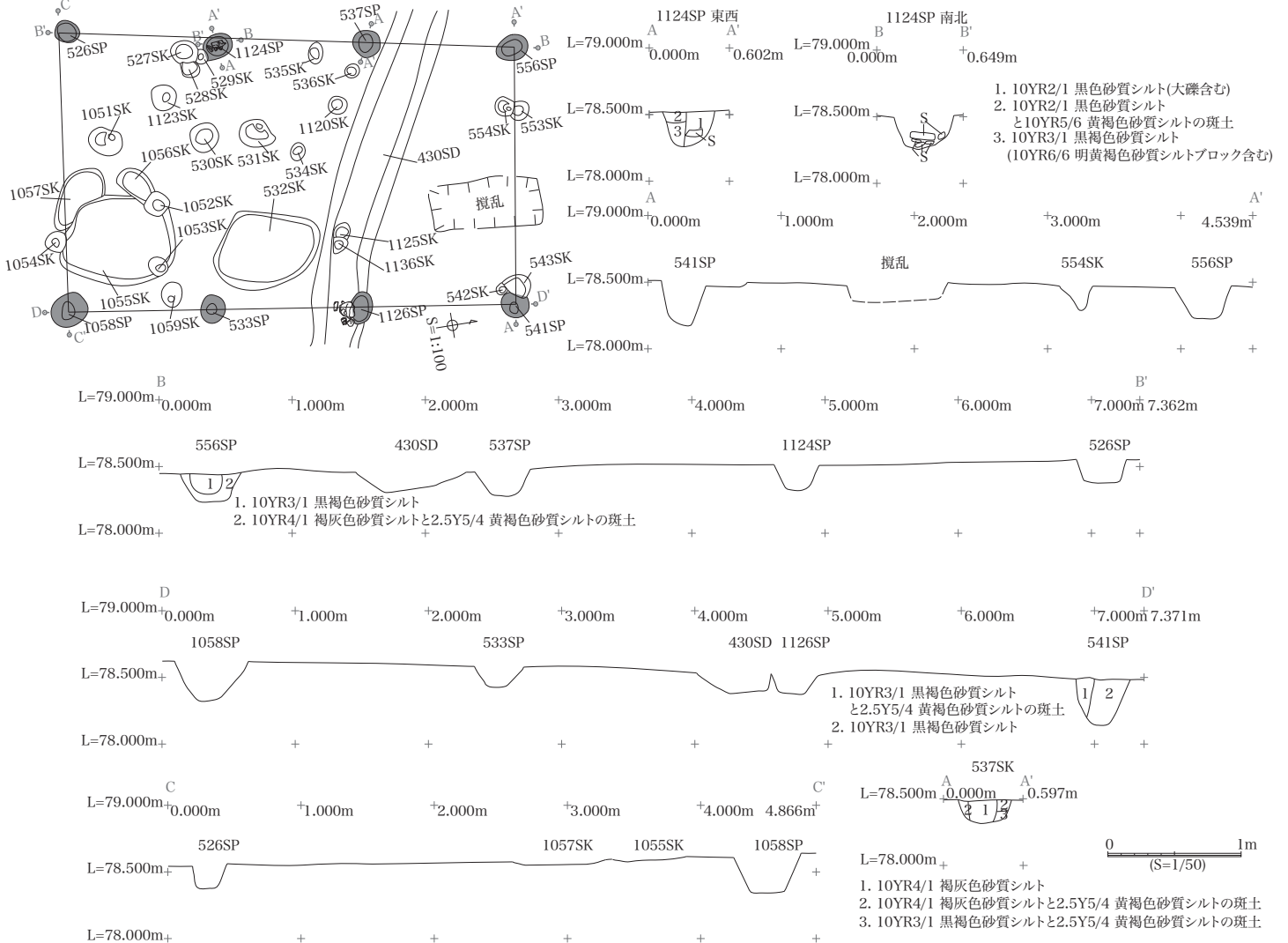
1025SK (第 43 図) 長径 0.83 m、短径 0.60 m、深さ 0.69 m の規模を測る楕円形の土坑である。尾張型第 9 型式の墨書山茶碗が出土している。建物などとの関連が考えられることから、中世Ⅱ期 14 世紀

1484SB

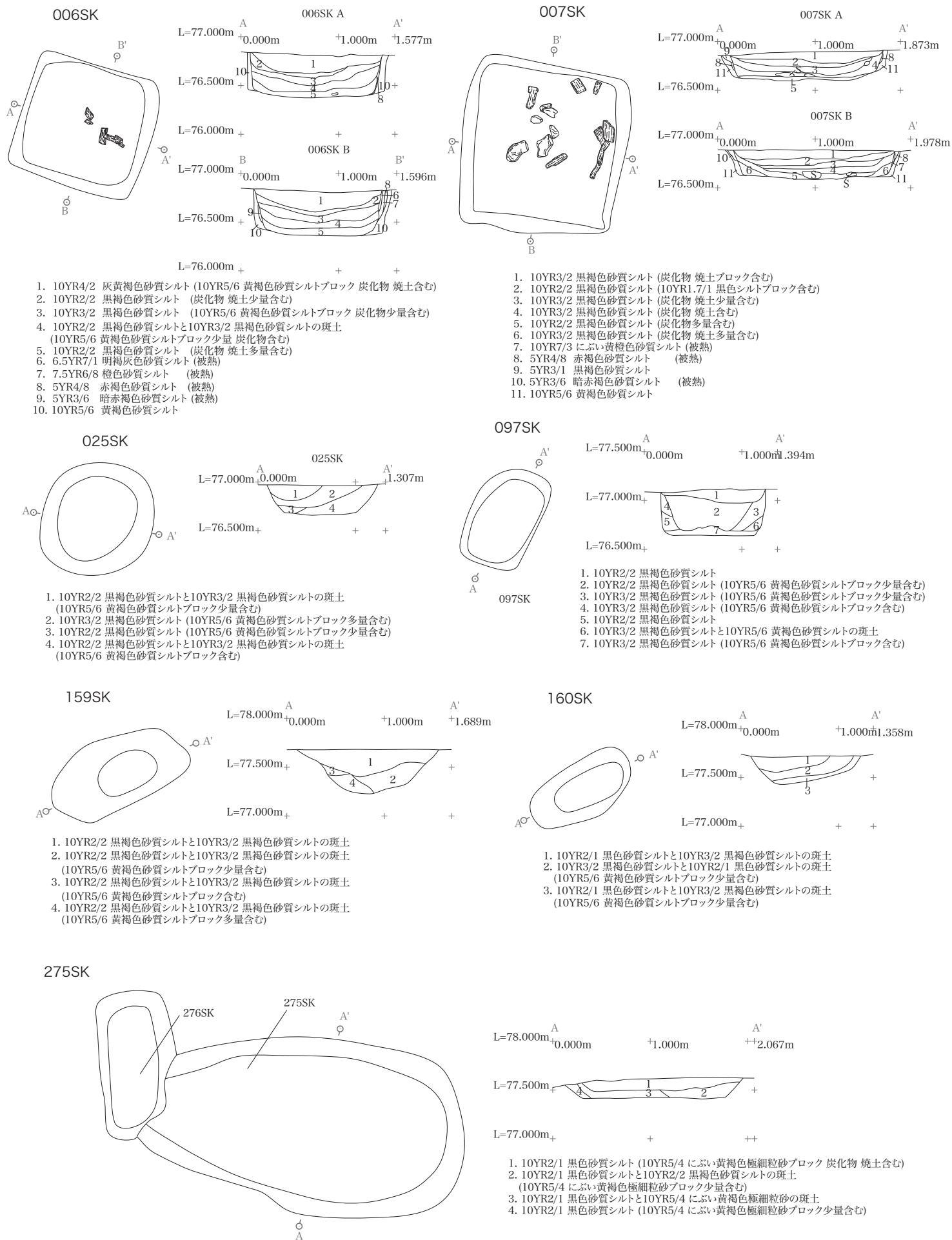


1. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
2. 10YR2/1 黒色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルト
ブロック少量含む)
3. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルト
ブロック少量含む)
4. 10YR2/1 黒色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルト
ブロック含む)

1486SB

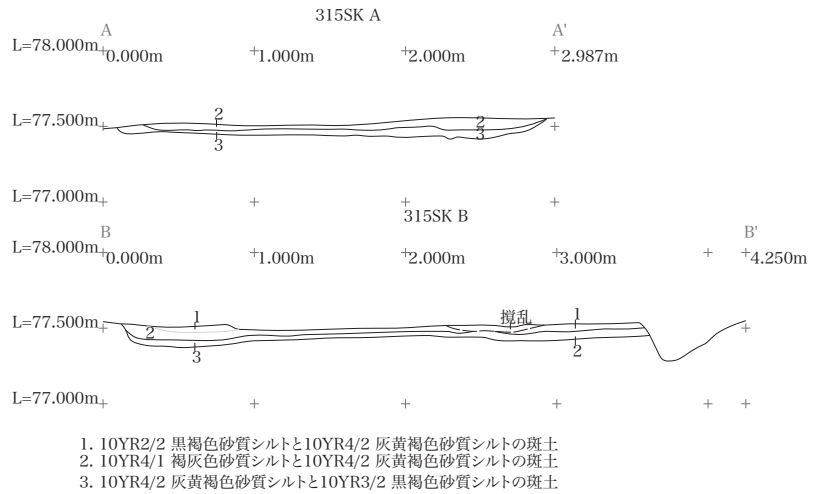
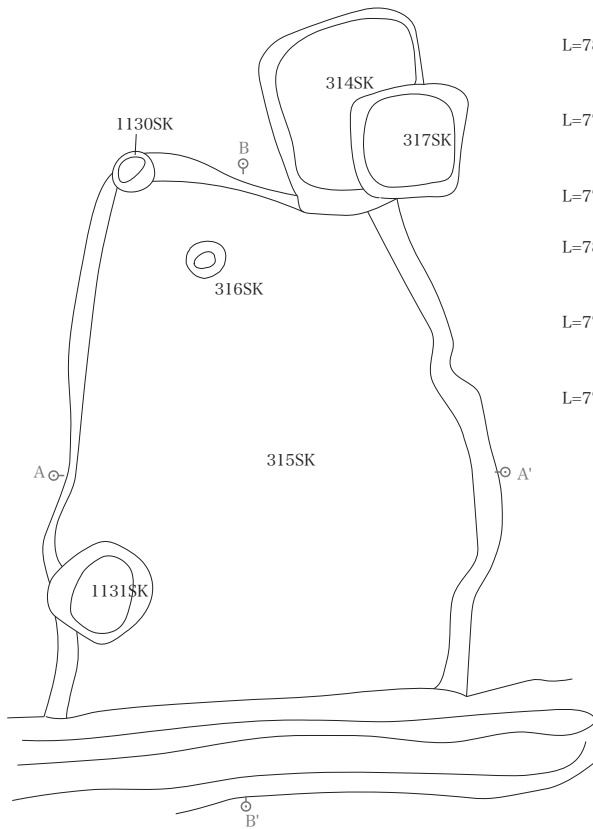


第 39 図 E 区 1484SB・1486SB 平面図・断面図

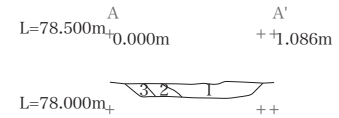
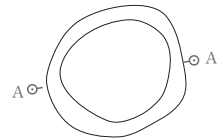


0 1m
(S=1/50)

315SK

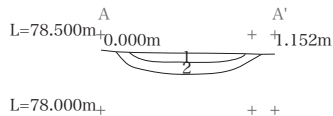
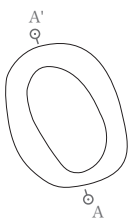


467SK



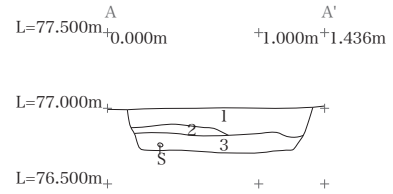
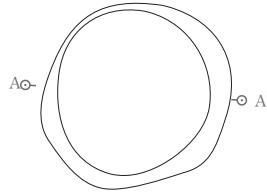
1. 10YR2/1 黒色砂質シルト
2. 10YR2/1 黒色砂質シルト (10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)
3. 10YR5/6 黄褐色砂質シルトと10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土

519SK



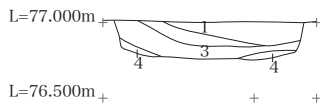
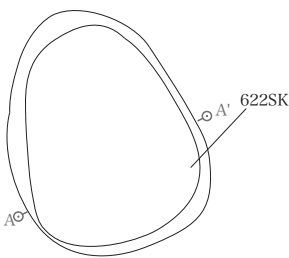
1. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト (10YR6/8 明黄褐色シルトブロック少量含む)
2. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト

620SK



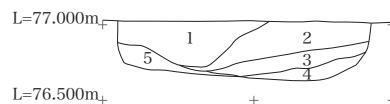
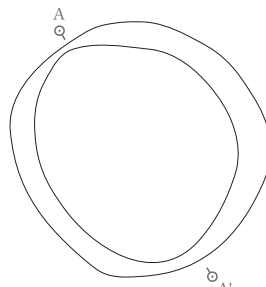
1. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト (10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)
2. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
3. 10YR2/2 黒褐色砂質シルトと10YR3/2 黒褐色砂質シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)

622SK



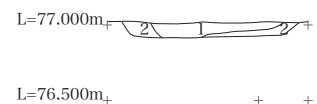
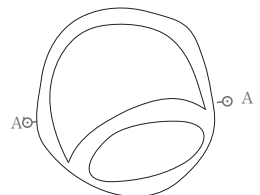
1. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト (10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)
2. 10YR2/2 黒褐色砂質シルトと10YR3/2 黒褐色砂質シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)
3. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト (10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)
4. 10YR2/2 黒褐色砂質シルトと10YR5/6 黄褐色砂質シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)

626SK



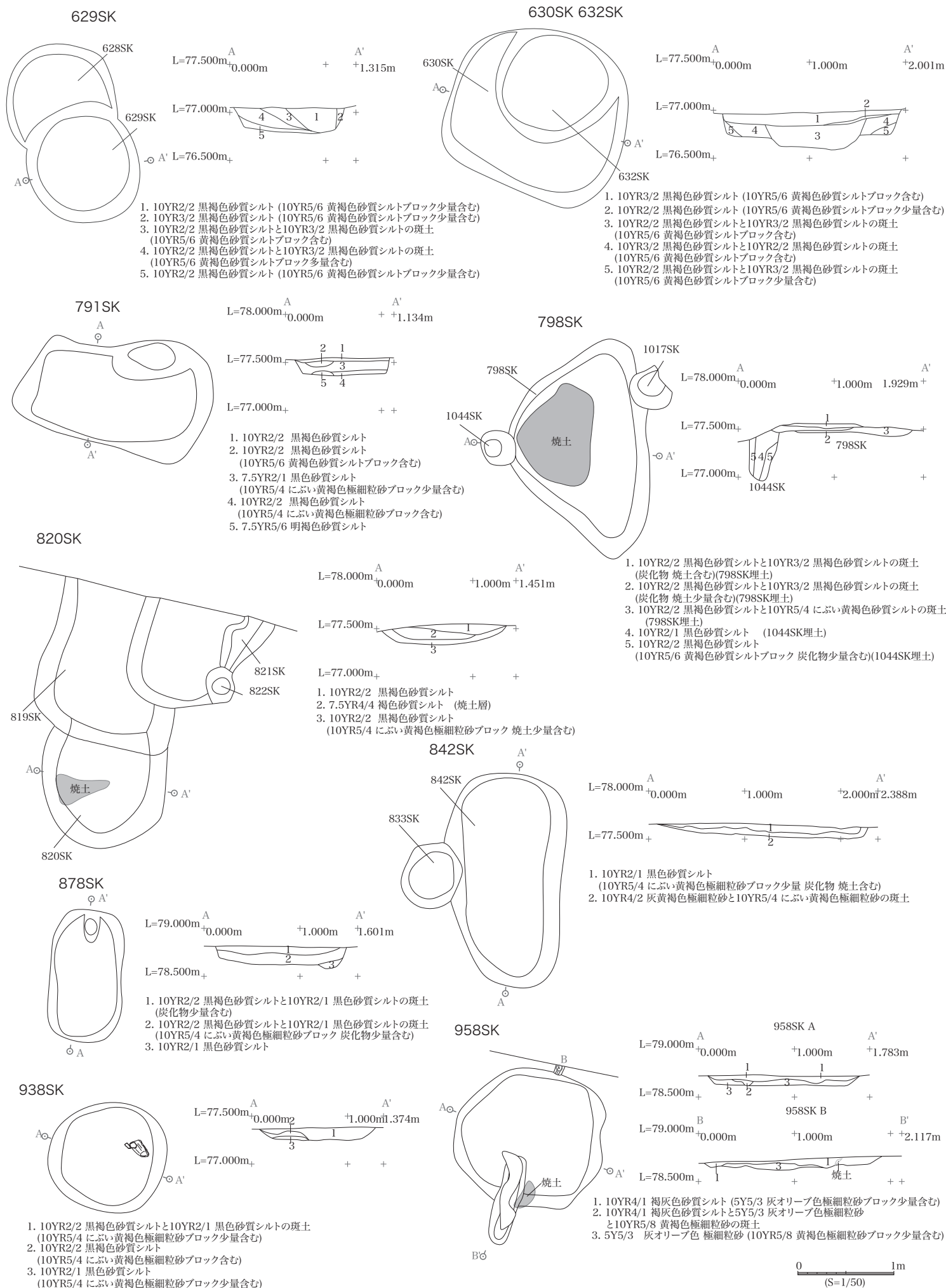
1. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト (10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)
2. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト (10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)
3. 10YR2/2 黒褐色砂質シルトと10YR3/2 黒褐色砂質シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)
4. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト (10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)
5. 10YR2/2 黒褐色砂質シルトと10YR3/2 黒褐色砂質シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)

628SK

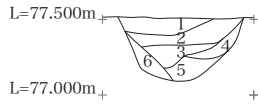
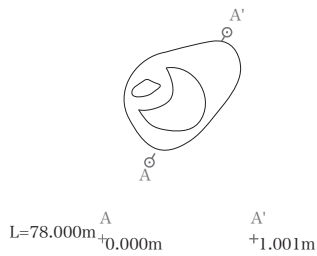


1. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト (10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)
2. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト (10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)

0 1m
(S=1/50)

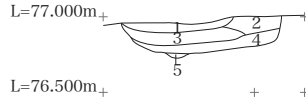
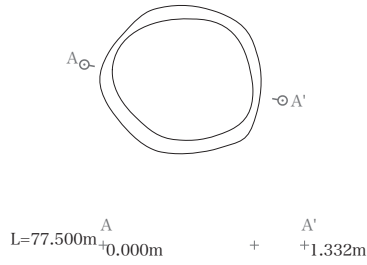


1025SK



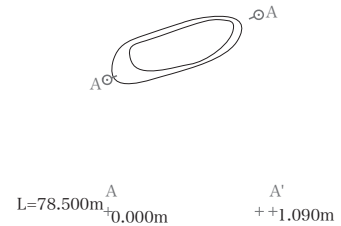
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)
- 10YR2/1 黒色砂質シルト
と10YR2/2 黒褐色砂質シルトの斑土
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
と10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
と10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)
- 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)

1040SK



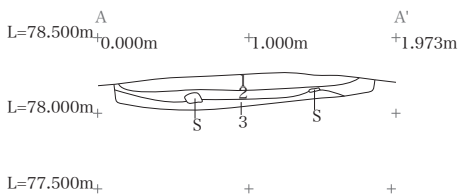
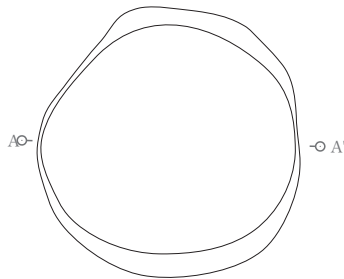
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルトと10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)
- 10YR2/1 黒色砂質シルトと10YR2/2 黒褐色砂質シルトの斑土
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルトと10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック含む)
- 10YR2/1 黒色砂質シルトと10YR5/6 黄褐色砂質シルトの斑土

1081SK



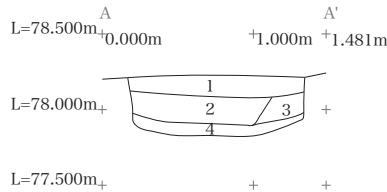
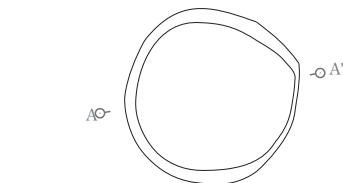
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
と10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂の混成土
(中礫少量含む)
- 10YR2/1 黒色砂質シルト
(10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルトブロック含む)

1105SK



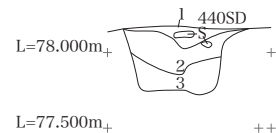
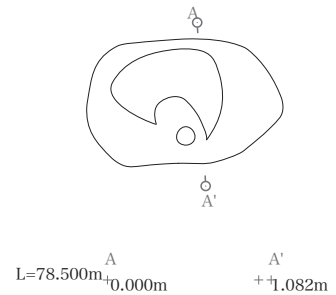
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂少量含む)
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルトと10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土
(10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂ブロック含む)
- 10YR2/1 黒色砂質シルト
(10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂少量含む)

1107SK



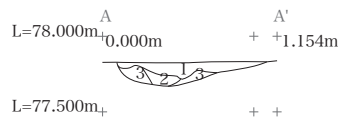
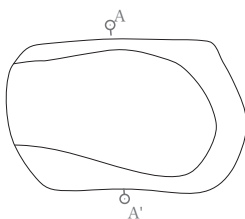
- 10YR2/2 黒褐色砂質シルトと10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土
(炭化物 焼土少量含む)
- 10YR2/1 黒色砂質シルト
(10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂ブロック含む
炭化物 焼土少量含む)
- 10YR2/1 黒色砂質シルトと10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土
(10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂ブロック少量含む)
- 10YR2/1 黒色砂質シルトと10YR2/2 黒褐色砂質シルトの斑土
(7.5YR1.7/1 黒色シルトブロック
10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂ブロック含む)

1154SK



- 10YR2/1 黒色砂質シルト (440SD埋土)
- 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)
- 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック多量含む)

1460SK



- 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)
- 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
(10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック少量含む)
- 10YR3/1 黒褐色砂質シルトと10YR5/6 黄褐色砂質シルトの斑土

0 1m
(S=1/50)

と考えられる。

1040SK (第 43 図) 長径 1.05 m、短径 0.97 m、深さ 0.26 m の規模を測るほぼ円形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壌墓の可能性が考えられる。遺物として土師器皿が出土している。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

1081SK (第 43 図) 長径 0.86 m、短径 0.29 m、深さ 0.25 m の規模を測る楕円形の土坑である。中世の溝と考えられる 440SD を切っていることから近世の可能性が高い。

1105SK (第 43 図) 長径 1.80 m、短径 1.55 m、深さ 0.15 m の規模を測るほぼ円形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壌墓の可能性が考えられる。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

1107SK (第 43 図) 長径 1.31 m、短径 1.25 m、深さ 0.42 m の規模を測るほぼ円形の土坑である。断面形状は箱形で、周辺に同規模の土坑が展開することから土壌墓の可能性が考えられる。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

1154SK (第 43 図) 長径 1.30 m、短径 0.82 m、深さ 0.67 m の規模を測る楕円形の土坑である。他の大型土坑とは離れており、山裾にあることや形状などから陥し穴の可能性も考えられる。埋土は縄文～弥生時代の流路の埋土に近いことから、この時期であろうか。

1460SK (第 43 図) 長径 1.60 m、短径 1.01 m、深さ 0.10 m の規模の隅丸長方形の土坑である。底面のみの残存のため、中世の遺構と考えるが明確な時期は不明である。

d. 溝

430SD (第 44 図) 幅 1.79 m、深さ 0.63 m の規模を測る南東から北西に走る自然流路と考える溝である。である。A 区の 031SD の続きと考えられ、埋土からは条痕文系土器、古井式土器が出土しており弥生中期以降に埋まったものと思われる。

440SD (第 44 図) 幅 1.01 m、深さ 0.34 m の規模を測る東西に走る溝である。遺物はほとんどなく、わずかに伊勢型鍋の破片が出土するのみである。近世の道に関連する溝とは方向がやや異なることなども考えると中世の区画溝と思われる。時期は中世Ⅱ期と考えられる。

520SD (第 44 図) 幅 0.78 m、深さ 0.23 m の規模を測る東西に走る溝である。1482SB との関連を考えると中世Ⅱ期と考えられる。

951SD (第 44 図) 幅 1.39 m、深さ 0.23 m の規模で東西に走る溝である。958SK に切られていることから中世Ⅲ期以前と考えられる。

988SD (第 44 図) 幅 0.85 m、深さ 0.17 m の規模を測る西壁近くから東へ延び、調査区中央付近で北へ L 字屈曲する溝である。土師器皿、常滑窯産甕が出土している。時期は中世の遺構を切っており、中世の区画とは方向を異にすることから近世の区画溝と考えられる。

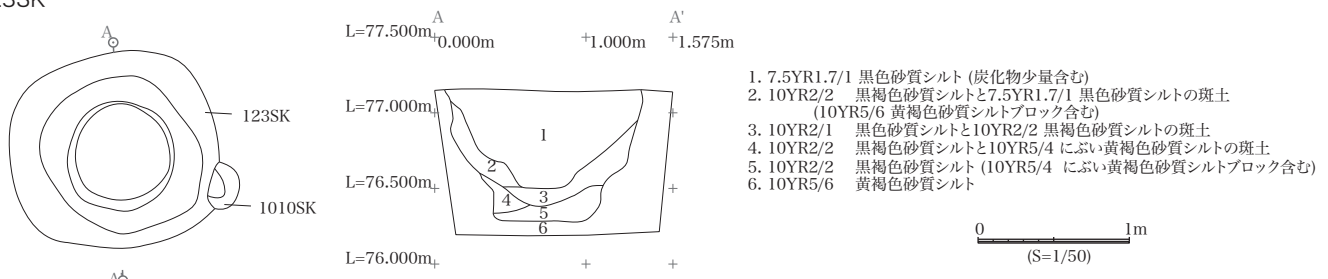
1047SD (第 44 図) 幅 1.15 m、深さ 0.28 m の規模を測る東西に走る溝である。条痕文系土器が出土しているが、近世後半の 001SR に沿ってあることから 001SR に先行する近世の溝であると考えられる。

e. 井戸

123SE (第 45 図) 径 1.45 m、深さ 0.94 m の規模を測る隅丸方形に近い形状の土坑である。構造物はなく、素掘りで積極的に井戸と考える根拠は希薄であるが、浅いながらも湧水層に達しているようで常にここだけが 0.3 m 程の水がたまる状況であることから井戸と考える。明確な時期は不明ながら建物などとの関連から中世Ⅱ期と考えられる。

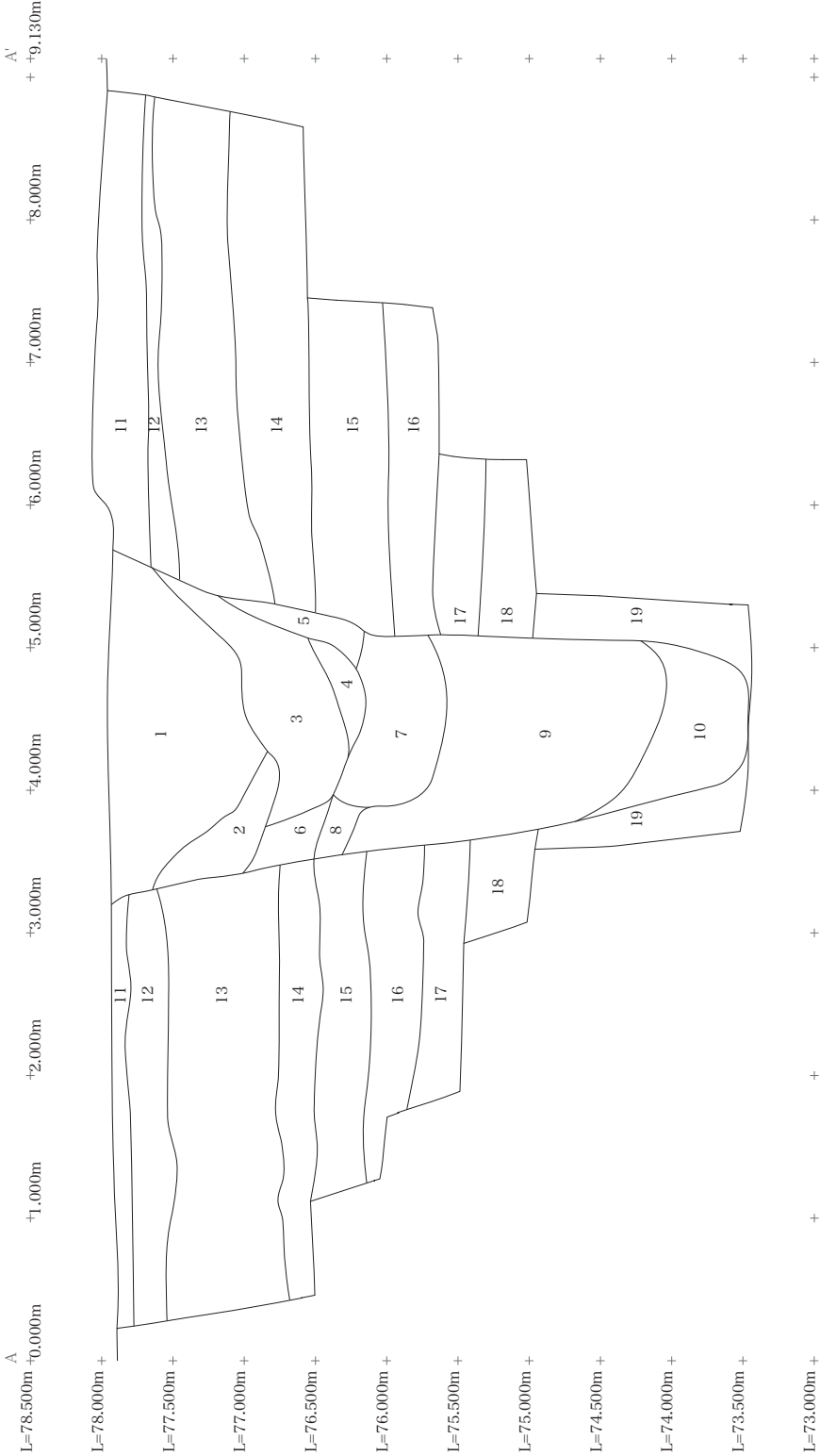
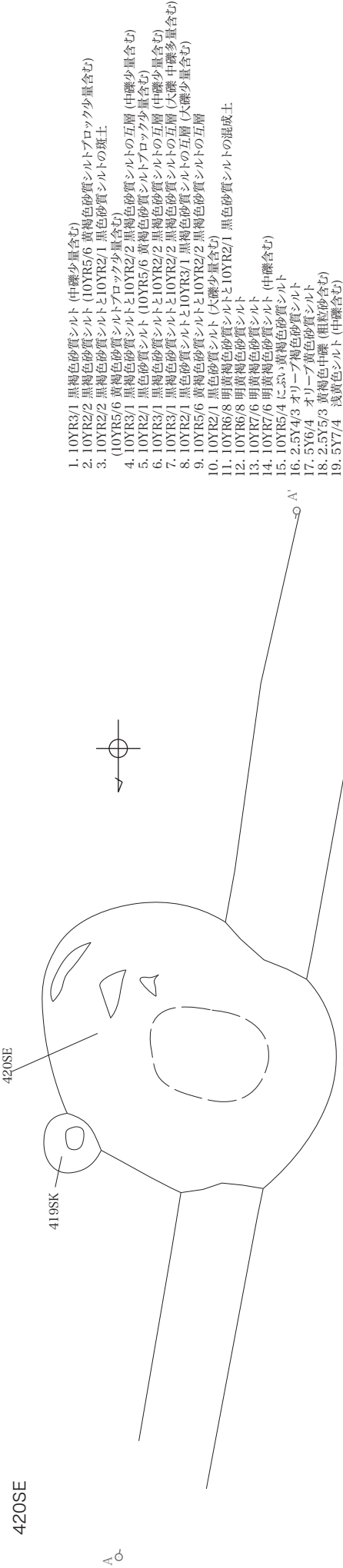
420SE (第 46 図) 長径 2.70 m、短径 2.13 m、深さ 4.40 m の規模を測る楕円形の井戸である。構造

123SK



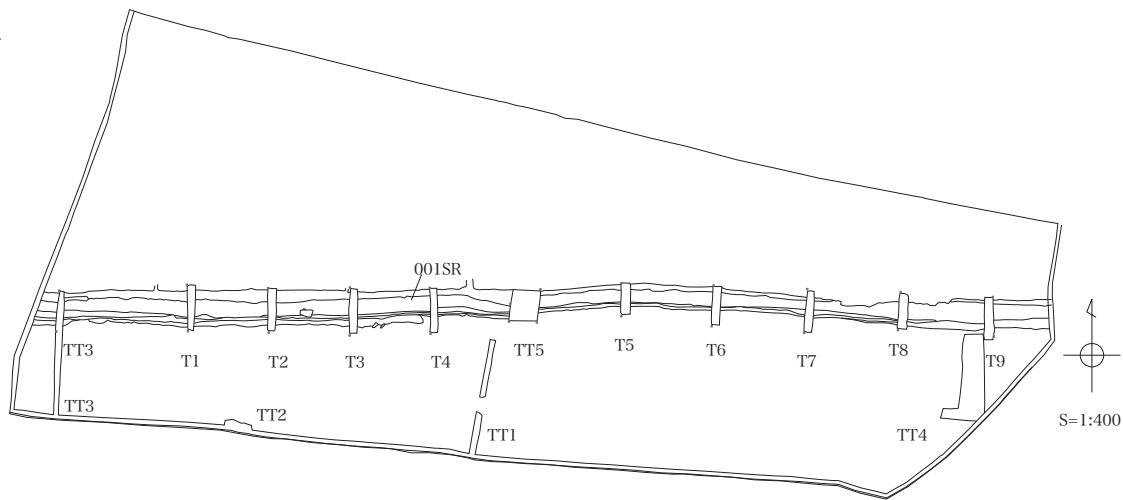
第 45 図 E 区 123SK (SE) 平面図・断面図

420SE



第 46 図 E 区 420SE 平面図・断面図

001SR



001SR T1

L=78.000m -0.000m +1.000m +2.000m +3.000m +4.000m + +5.739m

L=77.500m.

L=77.000m.

1. 版築 (10YR8/1 灰白色細粒砂と10YR5/2 灰黄褐色細粒砂と10YR6/8 明黄褐色粘質シルトの互層 中礫多量含む)
2. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト
3. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト
4. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
5. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
6. 10YR2/1 黒色砂質シルト
7. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト
8. 10YR7/6 明黄褐色粘質シルトと10YR2/1 黒色砂質シルトの混成土

001SR T2

L=78.000m -0.000m +1.000m +2.000m +3.000m +4.000m + +5.511m

L=77.500m.

L=77.000m.

1. 版築 (10YR8/1 灰白色細粒砂と10YR5/2 灰黄褐色細粒砂と5YR4/8 赤褐色砂質シルトの互層)
2. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト
3. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
4. 2.5Y5/1 黄灰色細粒砂 (10YR2/1 黒色砂質シルトブロック少量含む)
5. 10YR2/1 黒色砂質シルト
6. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
7. 10YR3/3 暗褐色砂質シルトと10YR7/6 明黄褐色粘質シルトの混成土
8. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト (10YR7/6 明黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
9. 10YR7/6 明黄褐色シルトと10YR2/1 黒色砂質シルトの混成土
10. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト
11. 10YR7/6 明黄褐色粘質シルト

001SR T3

L=78.000m -0.000m +1.000m +2.000m +3.000m +4.000m +5.000m +5.911m

L=77.500m.

L=77.000m.

1. 版築 (10YR8/1 灰白色細粒砂と10YR5/2 灰黄褐色細粒砂と10YR6/8 明黄褐色粘質シルトの互層 中礫多量含む)
2. 2.5Y5/1 黄灰色細粒砂 (10YR2/1 黒色砂質シルトブロック少量含む)
3. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト
4. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
5. 10YR2/1 黒色砂質シルト
6. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
7. 10YR3/2 黒褐色砂質シルトと10YR7/6 明黄褐色粘質シルトの混成土
8. 10YR7/6 明黄褐色粘質シルトと10YR2/1 黒色砂質シルトの混成土
9. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト
10. 10YR2/1 黒色砂質シルトと10YR7/8 黄褐色シルトの斑土
11. 10YR7/6 明黄褐色粘質シルト (10YR2/1 黒色砂質シルトブロック多量含む)

001SR T4

L=78.500m -0.000m +1.000m +2.000m +3.000m +4.000m +5.000m +5.721m

L=78.000m.

L=77.500m.

1. 版築 (10YR8/1 灰白色細粒砂と10YR5/2 灰黄褐色細粒砂と10YR6/8 明黄褐色粘質シルトの互層 中礫多量含む)
2. 7.5YR4/4 褐色砂質シルト
3. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
4. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
5. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルトと10YR7/6 明黄褐色シルトの斑土 (中礫多量含む)
6. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルトと10YR2/1 黒色砂質シルトと10YR7/6 明黄褐色粘質シルトの斑土
7. 10YR7/6 明黄褐色粘質シルトと10YR2/1 黒色砂質シルトの混成土
8. 10YR2/1 黒色砂質シルト
9. 10YR2/1 黒色砂質シルトと10YR7/6 明黄褐色粘質シルトの斑土
10. 10YR7/6 明黄褐色粘質シルト (10YR2/1 黒色砂質シルトブロック多量含む)
11. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
12. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト
13. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト (10YR7/6 明黄褐色粘質シルトブロック少量含む)

001SR T5西

L=80.500m -0.000m +1.000m +2.000m +3.000m +4.088m

L=80.000m.

L=79.500m.

1. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (中礫含む)
2. 10YR3/2 黒褐色砂質シルトと10YR2/2 黒褐色砂質シルトの斑土
3. 10YR3/2 黒褐色砂質シルトと10YR5/4にふい黄褐色砂質シルトの斑土
4. 10YR5/4 にふい黄褐色砂質シルト
5. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト (7.5YR1.7/1 黒色シルトブロック多量含む)
6. 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂
7. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
8. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト

001SR T6西

L=79.000m -0.000m +1.000m +2.000m +3.000m +4.000m +5.044m

L=78.500m.

L=78.000m.

1. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (中礫含む)
2. 10YR3/2 黒褐色砂質シルトと10YR5/4にふい黄褐色砂質シルトの斑土 (中礫少量含む)
3. 10YR5/4 にふい黄褐色砂質シルト (中礫含む)
4. 10YR6/4 にふい黄褐色砂質シルト
5. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト (7.5YR1.7/1 黒色シルトブロック少量含む)
6. 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂
7. 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト
8. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
9. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
10. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト (中礫多量含む)
11. 10YR2/2 黒褐色砂質シルトと10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトの斑土
12. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト

001SR T7西

L=79.000m -0.000m +1.000m +2.000m +3.000m +4.000m +5.422m

L=78.500m.

L=78.000m.

1. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (中礫含む)
2. 10YR5/3 にふい黄褐色極細粒砂 (中礫多量含む)
3. 2.5Y6/4 にふい黄褐色極細粒砂
4. 2.5Y5/4 黄褐色中礫 (極細粒砂 鉄分含む)
5. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト (7.5YR1.7/1 黒色シルトブロック少量含む)
6. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
7. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト (中礫含む)

001SR T8西

L=79.500m -0.000m +1.000m +2.000m +3.000m +4.678m

L=79.000m

L=78.500m.

1. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
2. 10YR5/3 黄褐色極細粒砂
3. 2.5Y6/4 にふい黄褐色中礫 (粗粒砂含む)
4. 10YR3/2 黒褐色砂質シルトと2.5Y5/3 黄褐色砂質シルトの斑土 (7.5YR1.7/1 黒色シルトブロック少量含む)
5. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
6. 10YR3/2 黒褐色砂質シルトと10YR2/2 黒褐色砂質シルトの斑土 (2.5Y5/4 黄褐色極細粒砂含む)

001SR T9東

L=80.000m -0.000m +1.000m +2.000m +3.000m +4.000m +4.863m

L=79.000m.

L=79.000m.

1. 10YR3/2 黒褐色砂質シルトと2.5Y5/4 黄褐色極細粒砂の斑土
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト
3. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
4. 10YR3/2 黒褐色砂質シルトと10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂の斑

0 2m
(S=1/100)

物はなく、素掘りである。南東壁には掘削時の足場であろうか高さ約 0.3 m 間隔で3カ所の段が確認されている。尾張型第9型式の墨書山茶碗、常滑窯産甕、伊勢型鍋が出土しており、遺構の時期は中世Ⅱ期14世紀と考えられる。

f. 道

001SR (第47図) 幅 4.23 m、厚さ 0.41 mの規模を測る東西に走る道である。調査前の現道の下に存在し、明治17年の地籍図で「宮崎道」と表記されている道である。礫まじりの土と砂などを数層に重ね作っていることが確認されている。道部分の盛り土下から山茶碗、土師器皿が出土しており、遺構の時期は近世以降と考えられる。

(7) F区(第165図・第166図)

F区では、中世の掘立柱建物・土坑・溝、近世の土坑・溝などが確認されている。

a. 掘立柱建物

972SB (第48図) 2間×3間の建物で、規模は 6.72 m×5.27 mを測り、506SP、508SP、510SP、514SP、518SP、621SP、624SP、627SP、629SP、889SP で構成されている。627SP からは古瀬戸緑釉皿の小片が出土している。他の掘立柱建物と同様に中世Ⅱ期と考えられる。

973SB (第49図) 2間×3間の建物で、規模は 5.15 m×3.60 mを測り、340SP、354SP、376SP、393SP、399SP、529SP、532SP、537SP、708SP、782SP で構成されている。他の掘立柱建物と同様に中世Ⅱ期と考えられる。

974SB (第49図) 1間×2間の建物で、規模は 3.62 m×2.72 mを測り、332SP、335SP、346SP、524SP、525SP、714SP で構成されている。他の掘立柱建物と同様に中世Ⅱ期と考えられる。

b. 土坑

土坑の多くは断面形状が箱形で土壇墓と考えられるもので、中世Ⅲ期に属すると考えられる。ただし、調査区中央南でⅡ期の建物に切られるⅠ期に属すると思われる土坑もある。

020SK (第50図) 径 0.90 m、深さ 0.32 mの規模を測るほぼ円形の土坑である。常滑窯産赤物甕が据えられており、近世以降の耕作に伴う土坑であると考えられる。

044SK (第50図) 長径 0.99 m、短径 0.87 m、深さ 0.88 mの規模を測る土坑である。底部中央に径 0.25 m程の柱穴と考えられる穴があることから、陥し穴としての機能を持つものである可能性も考えられる。

068SK (第50図) 長径 1.90 m、短径 1.67 m、深さ 0.14 mの規模を測る隅丸方形の土坑である。床面直上に扁平な礫が散在していた。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

109SK (第50図) 長径 0.95 m、短径 0.86 m、深さ 0.20 mの規模を測る楕円形の土坑である。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

117SK (第50図) 長径 1.98 m、短径 0.57 m、深さ 0.24 mの規模を測る溝状の土坑である。時期は中世Ⅲ期であろうか。

121SK (第50図) 長径 2.24 m、短径 0.81 m、深さ 0.23 mの規模を測る溝状の土坑である。中世Ⅲ期であろうか。

124SK (第50図) 長径 1.30 m、短径 0.47 m、深さ 0.31 mの規模を測る溝状の土坑である。埋土から刀子が出土している。中世Ⅲ期であろうか。

125SK (第50図) 長径 1.39 m、短径 0.78 m、深さ 0.38 mの規模を測る不定形の土坑である。中世Ⅲ期であろうか。

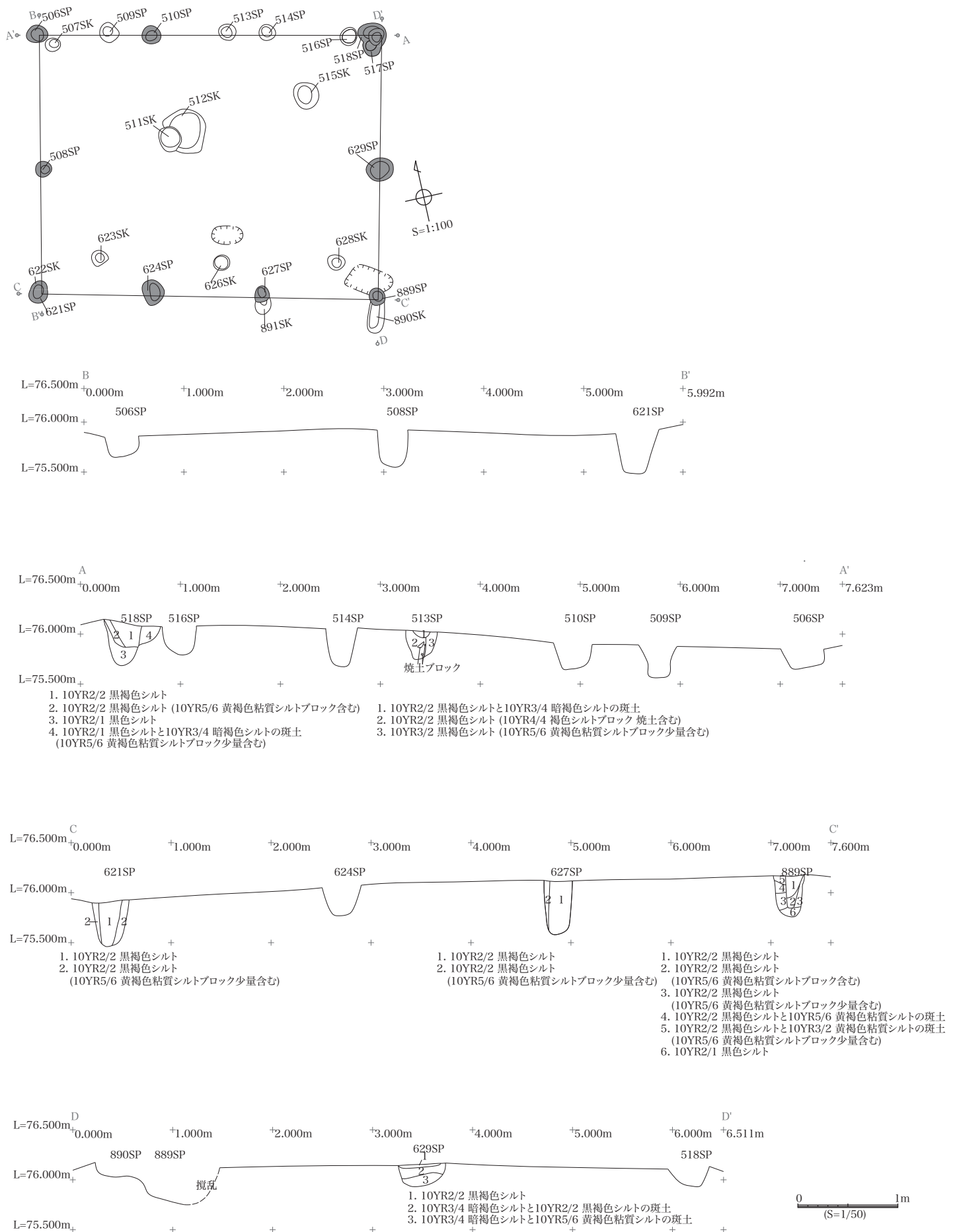
138SK (第50図) 長径 1.28 m、短径 1.22 m、深さ 0.18 mの規模を測るほぼ円形の土坑である。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

139SK (第51図) 径 1.05 m、深さ 0.19 mの規模を測る円形の土坑である。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

140SK (第51図) 長径 1.25 m、短径 0.92 m、深さ 0.19 mの規模を測る楕円形の土坑である。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

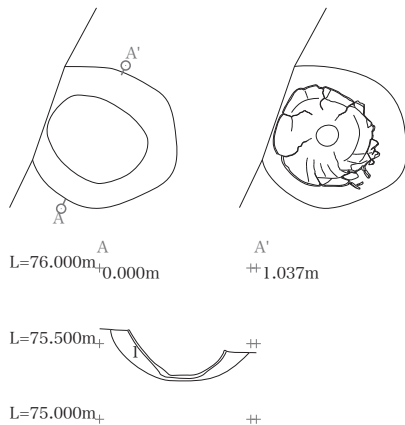
144SK (第51図) 長径 0.95 m、短径 0.86 m、深さ 0.20 mの規模を測るほぼ円形の土坑である。時

972SB



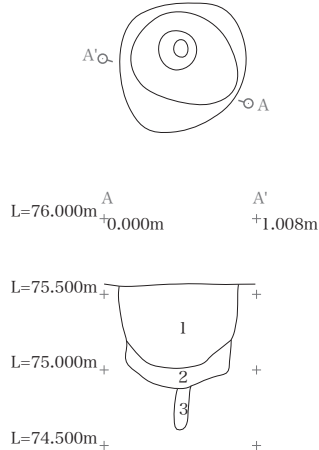
第 48 図 F 区 972SB 平面図・断面図

020SK



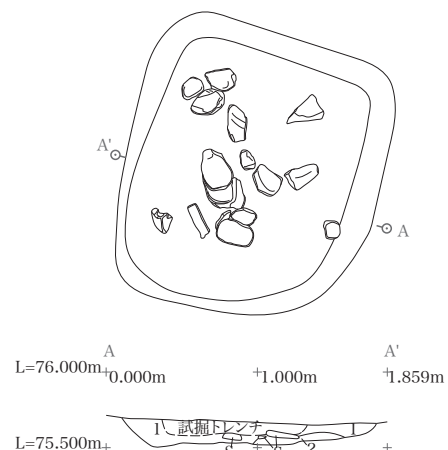
1. 10YR3/2 黒褐色シルト

044SK



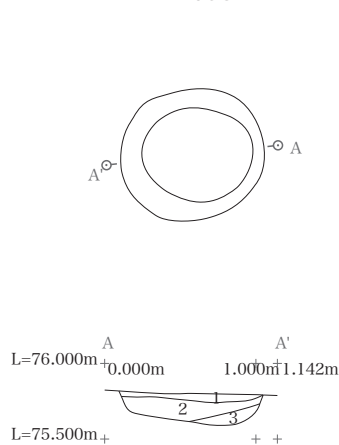
1. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土
2. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
3. 10YR3/4 暗褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)

068SK



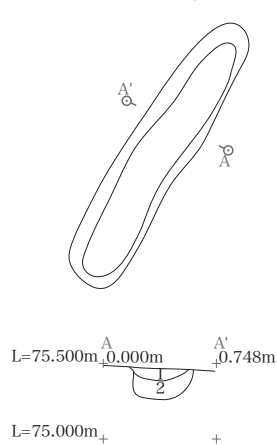
1. 10YR2/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
2. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)

109SK



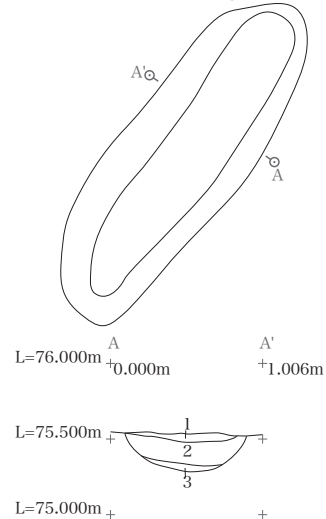
1. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの斑土
2. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
3. 10YR3/2 黒褐色シルト

117SK



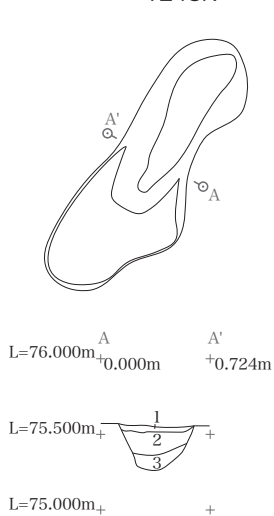
1. 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 沈鉄少量含む)
2. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)

121SK



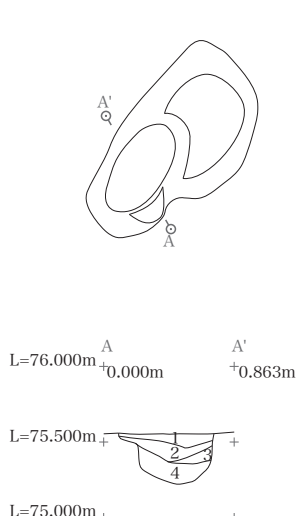
1. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの斑土
2. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
3. 10YR3/4 暗褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)

124SK



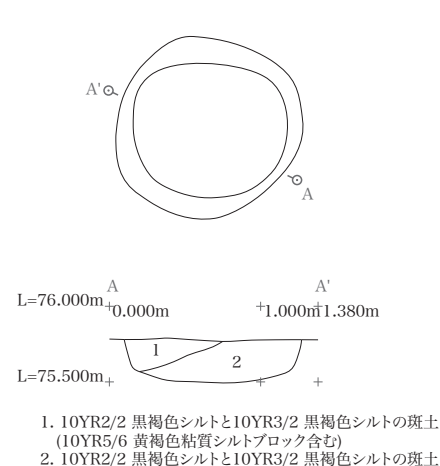
1. 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
2. 10YR2/2 黒褐色シルト
3. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)

125SK



1. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
2. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土
3. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトの斑土
4. 10YR2/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)

138SK



1. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)
2. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土

0 1m
(S=1/50)

期は中世Ⅲ期と考えられる。

145SK（第51図） 長径 1.23 m、短径 0.60 m、深さ 0.14 mの規模を測る楕円形の土坑である。埋土には炭化物、焼土、焼骨などが多く含まれており、床面近くで炭化材がコの字に組まれていた状況などから火葬墓の可能性が高い。炭化材の年代測定の結果から中世Ⅲ期 15 世紀前半と考えられる。

163SK（第51図） 長径 2.33 m、短径 1.05 m、深さ 0.28 mの規模を測る不定形の土坑である。石製の紡錘車が出土している。時期は中世Ⅲ期であろうか。

173SK（第51図） 長径 1.33 m、短径 0.98 m、深さ 0.28 mの規模を測る楕円形の土坑である。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

181SK（第51図） 長径 1.37 m、短径 1.27 m、深さ 0.14 mの規模を測るほぼ円形の土坑である。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

185SK（第51図） 長径 1.51 m、短径 1.25 m、深さ 0.31 mの規模を測る隅丸方形に近い土坑である。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

193SK（第51図） 長径 1.14 m、短径 1.10 m、深さ 0.14 mの規模を測る隅丸長方形の土坑である。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

199SK（第52図） 径 0.85 m、深さ 0.26 mの規模を測る円形の土坑である。地山との境界に中粒砂の層があり、埋土中にもブロック状に入っていた。広東茶碗が出土していることから、近世後期と考えられる。

207SK（第52図） 径 1.22 m、深さ 0.24 mの規模を測るほぼ円形の土坑である。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

214SK（第52図） 長径 1.62 m、短径 0.92 m、深さ 0.20 mの規模を測る楕円形の土坑である。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

222SK（第52図） 長径 0.94 m、短径 0.89 m、深さ 0.10 mの規模を測る隅丸方形の土坑である。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

249SK（第52図） 径 1.05 m、深さ 0.13 mの規模を測る円形の土坑である。時期は中世Ⅲ期と考えられる。

283SK（第52図） 長径 0.76 m、短径 0.57 m、深さ 0.36 mの規模を測る楕円形の土坑である。底部中央に小土坑があり、陥し穴の可能性も考えられる。時期は不明である。

333SK（第52図） 長径 1.28 m、短径 1.21 m、深さ 0.17 mの規模を測る隅丸方形の土坑である。常滑窯産甕が出土しており、時期は中世Ⅲ期と考えられる。

343SK（第52図） 長径 1.32 m、短径 0.95 m、深さ 0.15 mの規模を測る隅丸長方形の土坑である。常滑窯産甕が出土しており、時期は中世Ⅲ期と考えられる。

352SK（第52図） 長径 1.40 m、短径 1.25 m、深さ 0.33 mの規模を測る隅丸方形と思われる土坑である。山茶碗が出土しており、時期は中世Ⅲ期と考えられる。

357SK（第52図） 長径 1.02 m、短径 0.93 m、深さ 0.31 mの規模を測るほぼ円形の土坑である。尾張型第8もしくは第9型式の墨書山茶碗小皿、常滑窯産甕が出土しているが、中世Ⅱ期の遺構を切っていることからⅢ期と考えられる。

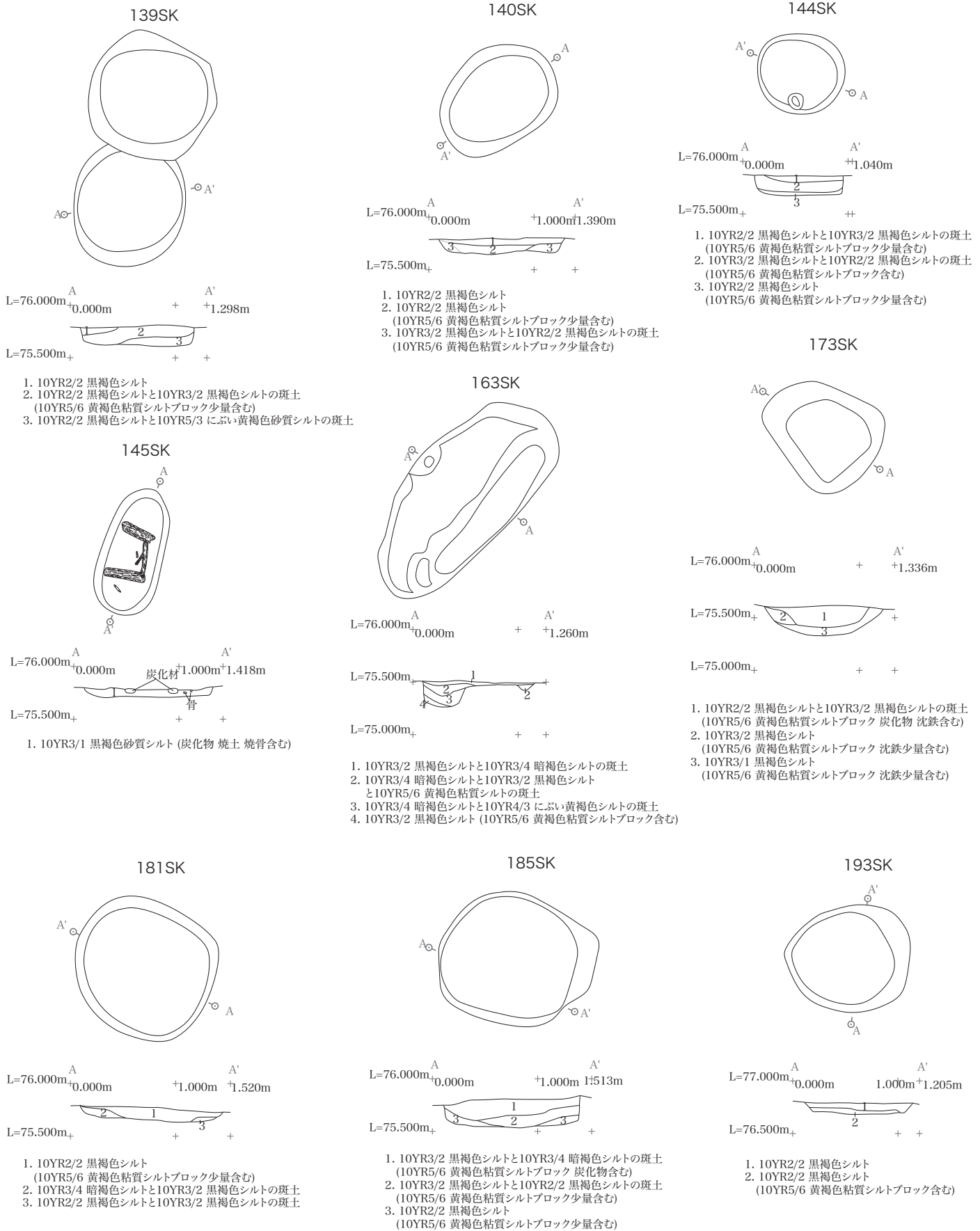
378SK（第53図） 長径 1.43 m、短径 1.30 m、深さ 0.59 mの規模を測るほぼ円形の土坑である。尾張型第7型式の墨書入りの山茶碗、青磁片が出土しており、中世Ⅰ期 13 世紀の可能性もあるが、周辺の同様の遺構の状況などからⅢ期であろうか。

439SK（第53図） 長径 1.00 m、短径 0.98 m、深さ 0.59 mの規模を測る楕円形の土坑である。他の土坑と断面形状が異なるため、遺構の性格は不明である。また時期も中世の遺構と考えるが詳細な時期は判断できない。

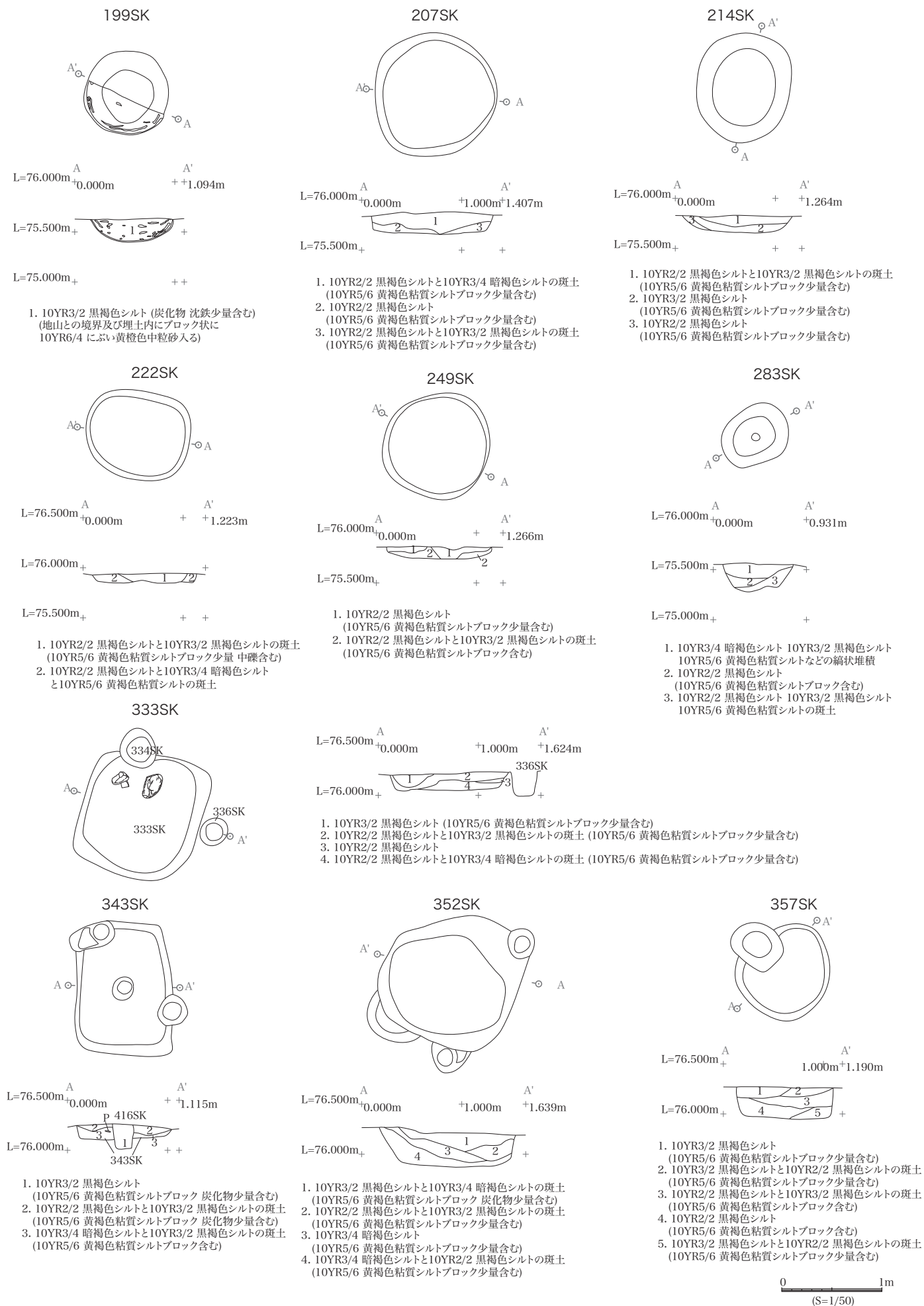
444SK（第53図） 長径 2.35 m、短径 0.74 m、深さ 0.41 mの規模を測る溝状の土坑である。中世Ⅲ期と考えられる。

448SK（第53図） 長径 1.42 m、短径 0.46 m、深さ 0.25 mの規模を測る溝状の土坑である。中世Ⅲ期と考えられる。

468SK（第53図） 長径 1.54 m、短径 1.21 m、深さ 0.19 mの規模を測る隅丸長方形の土坑である。



0 1m
(S=1/50)



中世Ⅲ期と考える。

471SK（第53図） 径 1.45 m、深さ 0.10 mの規模を測る円形の土坑である。中世の土師器皿が出土している。

472SK（第53図） 長径 1.14 m、短径 0.88 m、深さ 0.27 mの規模を測る楕円形と考えられる土坑である。中世Ⅲ期と考える。

534SK・535SK（第53図） 534SK は長径 0.86 m、短径 0.42 m、深さ 0.51 mの規模を測る楕円形と考えられる土坑、535SK は長径 1.46 m、短径 1.26 m、深さ 0.54 mの規模を測る楕円形の土坑である。534SK からは尾張型第7型式の山茶碗、常滑窯産甕、土師器皿が出土しており、535SK からは尾張型第7型式の墨書山茶碗、常滑窯産甕、土師器皿が出土していることから、どちらの土坑も時期は中世Ⅰ期 13 世紀と考えられる。

542SK（第54図） 径 1.28 m、深さ 0.44 mの規模を測る隅丸方形の土坑である。尾張型第7型式の山茶碗、常滑窯産甕、土師器皿などが出土しており、遺構の時期は中世Ⅰ期 13 世紀と考えられる。

582SK（第54図） 長径 1.04 m、短径 0.52 m、深さ 0.18 mの規模を測る楕円形と考えられる土坑である。中世Ⅲ期と考える。

704SK（第54図） 長径 1.42 m、短径 1.33 m、深さ 0.57 mの規模を測るほぼ円形の土坑である。尾張型第7型式の山茶碗、土師器皿などが出土しており、遺構の時期は中世Ⅰ期 13 世紀と考えられる。

707SK（第54図） 径 1.22 m、深さ 0.17 mの規模を測るほぼ円形と考えられる土坑である。床面直上に扁平な礫が散在していた。常滑窯産甕片が出土している。中世Ⅰ期と考えられる。

743SK（第54図） 長径 1.13 m、短径 0.96 m、深さ 0.27 mの規模を測る楕円形の土坑である。中世Ⅲ期と考えられる。

744SK（第54図） 長径 1.22 m、短径 1.15 m、深さ 0.24 mの規模を測る楕円形の土坑である。中世Ⅲ期と考えられる。

745SK（第54図） 長径 1.23 m、短径 1.15 m、深さ 0.25 mの規模を測る楕円形の土坑である。中世Ⅲ期と考えられる。

765SK（第54図） 長径 1.09 m、短径 0.99 m、深さ 0.15 mの規模を測る隅丸方形と考えられる土坑である。中世Ⅲ期と考えられる。

827SK（第54図） 長径 1.45 m、短径 1.35 m、深さ 0.65 mの規模を測る楕円形の土坑である。埋土の状況などから土壇墓の可能性も考えられる。尾張型第8もしくは第9型式の山茶碗小皿、土師器皿・鍋などが出土しているが、建物などとの関係性を考えると中世Ⅲ期と考えられる。

828SK（第55図） 長径 5.65 m、短径 2.16 m、深さ 0.18 mの規模を測る楕円形と考えられる土坑である。形状から竪穴状遺構の可能性もある。中世の土師器が出土しており、遺構の時期は掘立柱建物などとの関係性を考えると中世Ⅱ期と考えられる。

850SK（第55図） 長径 1.73 m、短径 1.60 m、深さ 0.70 mの規模を測るほぼ円形の土坑である。中世の土師器が出土しており、中世Ⅲ期と考えられる。

875SK（第55図） 長径 1.20 m、短径 0.76 m、深さ 0.22 mの規模を測る楕円形と考えられる土坑である。常滑窯産甕、土師器鍋が出土しており、遺構の時期は中世Ⅲ期と考えられる。

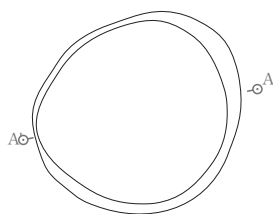
881SK（第55図） 長径 1.11 m、短径 1.04 m、深さ 0.30 mの規模を測るほぼ円形と考えられる土坑である。中世Ⅰ期と考えられる。

c. 溝

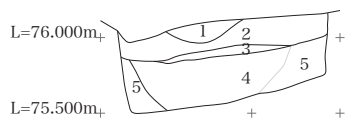
022SD（第56図） 幅 2.25 m、深さ 0.61 mの規模を測る調査区西側を南北に走る溝である。調査区西側中央付近で中世の区画溝と考えられる 036SD を切っており、036SD の西側部分の一部を利用しそれを北へ延長する形で作られた溝と考えられる。古瀬戸後期天目茶碗、土師器鍋などが出土している。他の近世遺構の埋土と近いことなどから考えて近世の溝と考える。明治 17 年の地籍図によると牧平地区と檜山地区の村境がこの部分になっていることから地境の溝として機能していたものと考えられる。

036SD（第56図） 幅 1.76 m、深さ 0.48 mの規模を測り、調査区中央を東西に走った後東側で南に L 字に折れて延びる溝である。遺物の出土はなく、明確な時期は不明ながら埋土の状況などから中世と考え

378SK

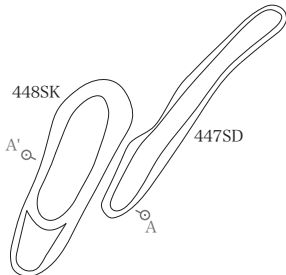


L=76.500m_A 0.000m +1.000m +1.584m A'

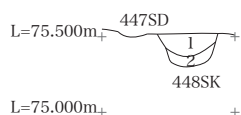


1. 10YR2/3 黒褐色シルト (炭化物少量含む)
2. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR2/3 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)
3. 10YR2/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
4. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)
5. 10YR2/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 炭化物少量含む)

448SK

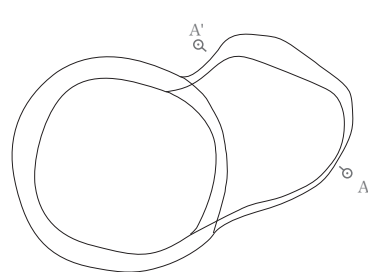


L=76.000m_A 0.000m +0.880m A'



1. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR3/4 暗褐色シルトの斑土
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR3/4 暗褐色シルト 10YR5/6 黄褐色粘質シルトなどの縞状堆積

472SK

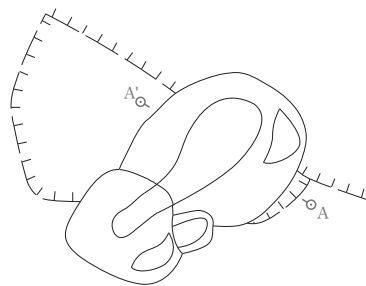


L=77.000m_A 0.000m +1.302m A'



1. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 炭化物 焼土少量含む)
2. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR2/1 黒色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
3. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)

439SK

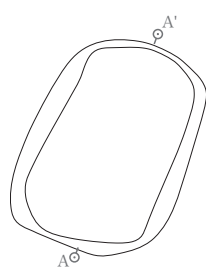


L=76.000m_A 0.000m +1.317m A'



1. 10YR2/2 黒褐色シルトと7.5Y2/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
2. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトの斑土
3. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR3/4 暗褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)

468SK

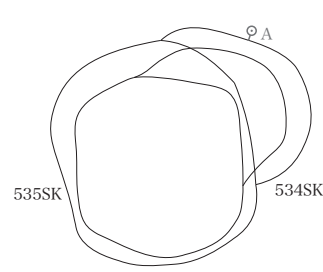


L=76.500m_A 0.000m +1.000m +1.597m A'



1. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
2. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR2/1 黒色シルトブロック 10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
3. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトブロック 炭化物少量含む)
4. 10YR3/4 暗褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)

534SK 535SK

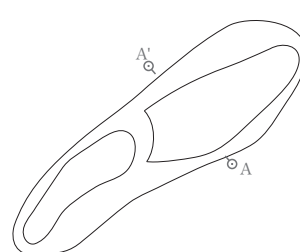


L=76.500m_A 0.000m +1.000m +1.777m A'



1. 10YR2/3 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
2. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR2/3 黒褐色シルトの斑土 (10YR2/1 黒色シルトブロック 10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
3. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/3 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)
4. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR2/3 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
5. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/3 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
6. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
7. 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR2/1 黒色シルトブロック 10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 炭化物含む)

444SK

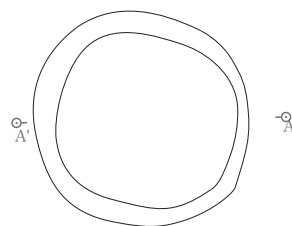


L=76.000m_A 0.000m +0.852m A'

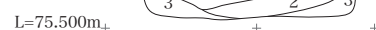


1. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR3/4 暗褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
2. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/4 暗褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)
3. 10YR3/4 暗褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
4. 2.5Y3/2 黒褐色シルト
5. 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
6. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)

471SK



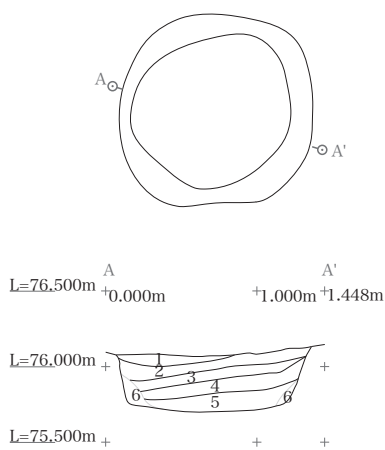
L=76.000m_A 0.000m +1.000m +1.780m A'



1. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトブロック 炭化物少量含む)
2. 10YR2/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトブロック 炭化物少量含む)
3. 10YR2/2 黒褐色シルト (炭化物少量含む)

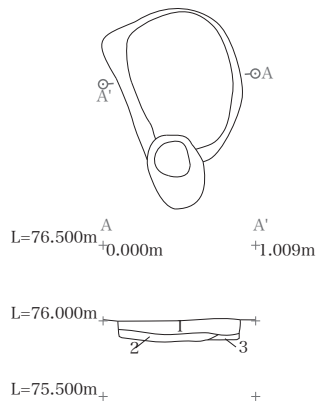
0 1m
(S=1/50)

542SK



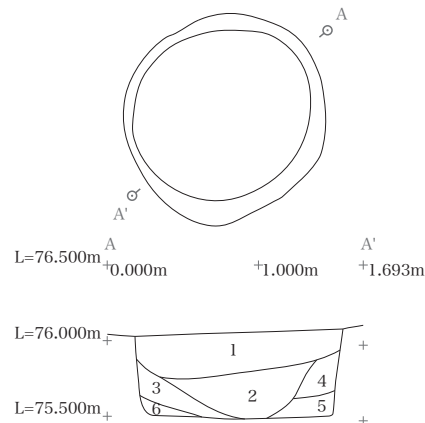
1. 2.5Y3/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 炭化物少量含む)
2. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 炭化物含む)
3. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 炭化物含む)
4. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 炭化物少量含む)
5. 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
6. 10YR3/4 暗褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)

582SK



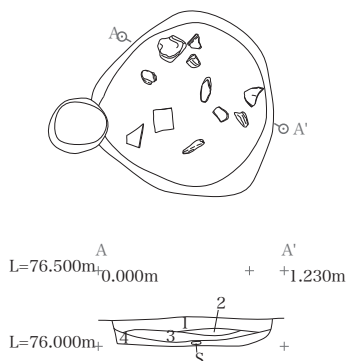
1. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
2. 10YR2/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
3. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)

704SK



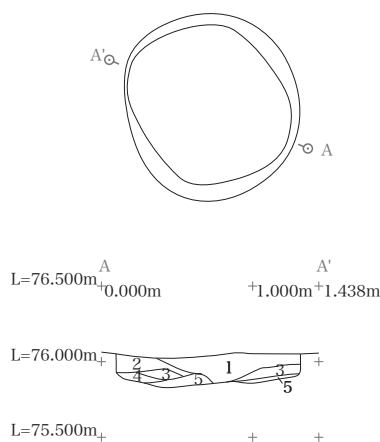
1. 10YR2/3 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 炭化物少量含む)
2. 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR2/1 黒色シルトブロック 10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
3. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土
4. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/3 黒褐色シルトの斑土
5. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR2/3 黒褐色シルトの斑土
6. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR2/3 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)

707SK



1. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR2/1 黒色シルトブロック 10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 炭化物少量含む)
2. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR4/3 にぶい黄褐色シルトの斑土 (10YR2/1 黒色シルトブロック少量含む)
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土
4. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土

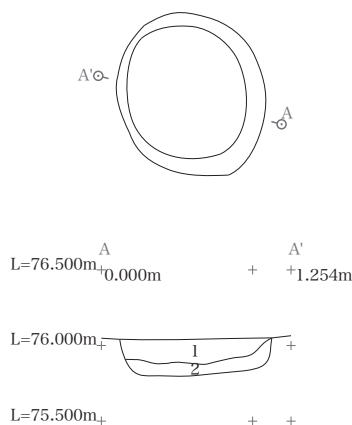
745SK



1. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)
2. 10YR2/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)
3. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR4/3 にぶい黄褐色シルトの斑土
4. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
5. 10YR2/2 黒褐色シルト

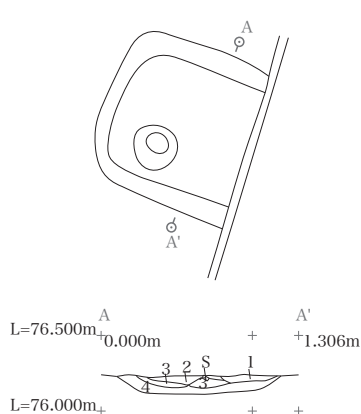
0 1m
(S=1/50)

743SK



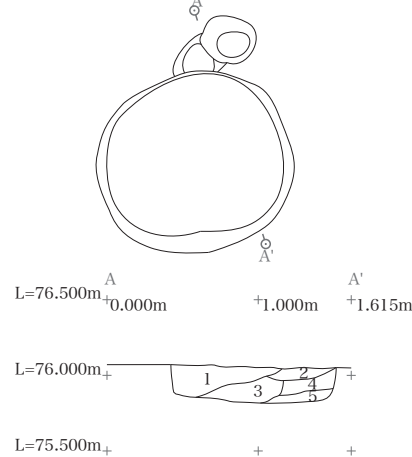
1. 10YR2/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
2. 10YR2/2 黒褐色シルト

765SK



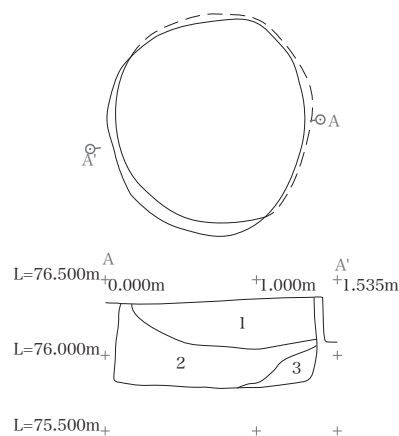
1. 10YR2/2 黒褐色シルト
2. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトの斑土 (焼土少量含む)
3. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土
4. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)

744SK

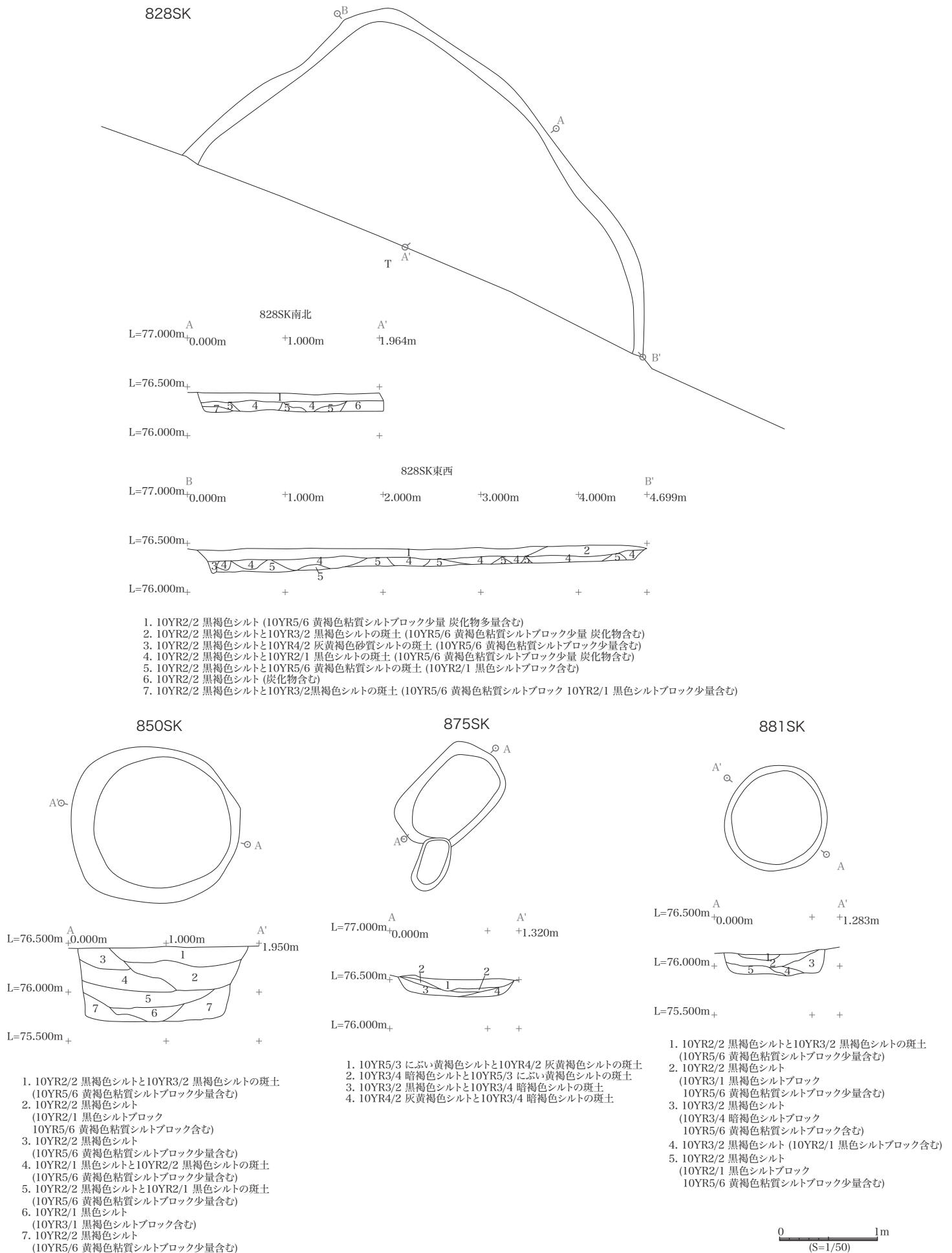


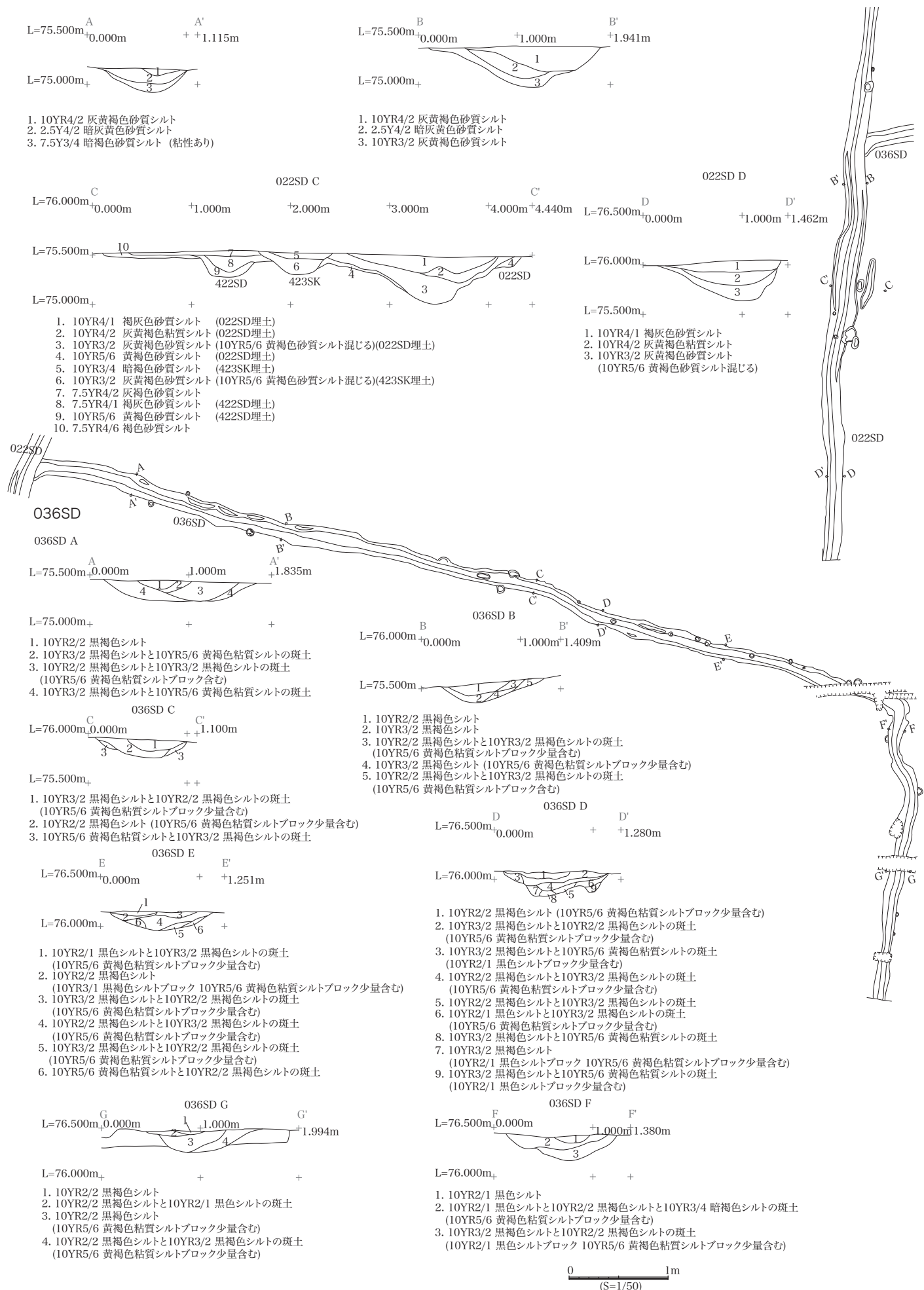
1. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)
2. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 10YR2/1 黒色シルト少量含む)
3. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
4. 10YR2/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 10YR2/1 黒色シルトブロック含む)
5. 10YR2/1 黒色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)

827SK



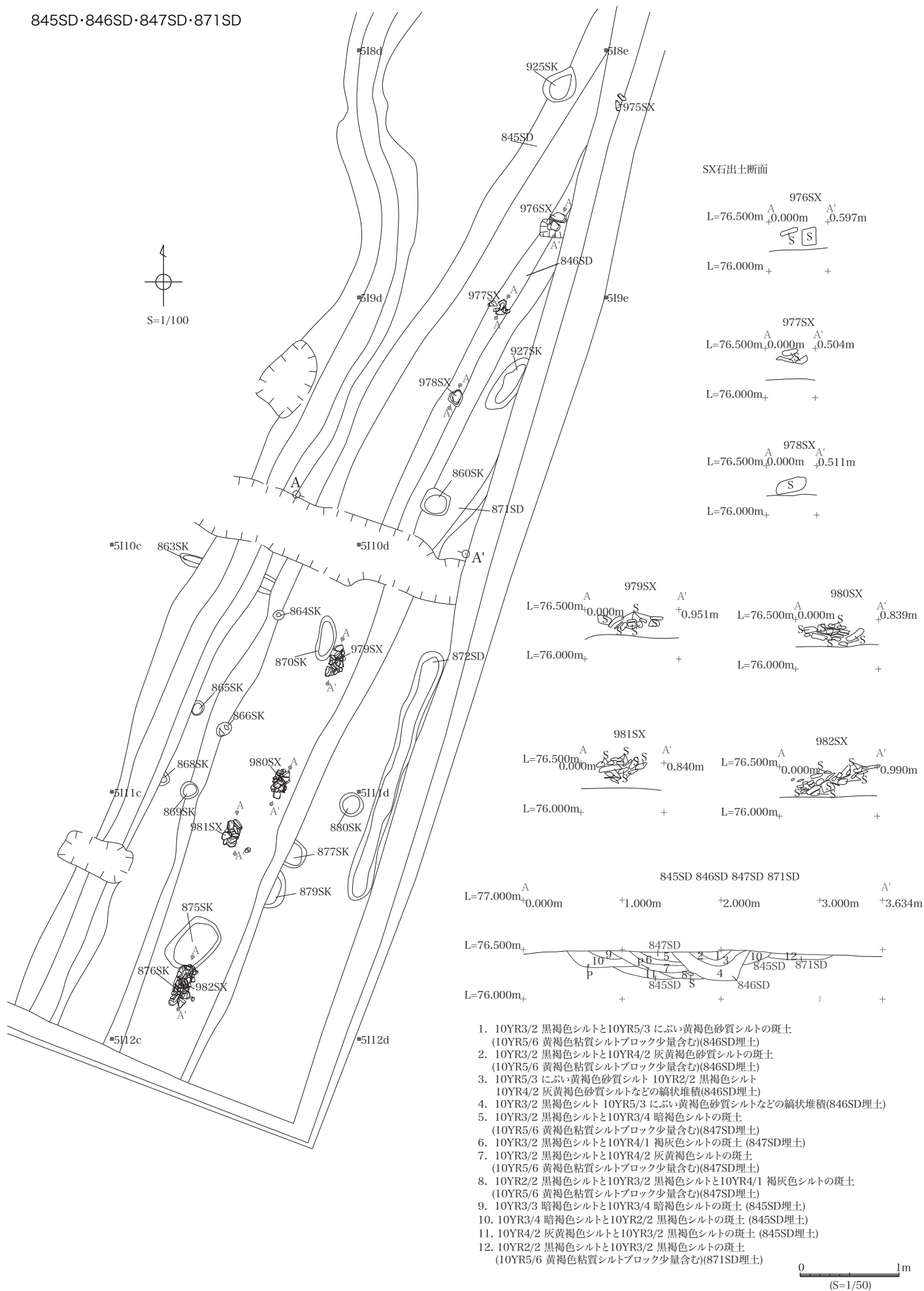
1. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量 炭化物多量含む)
2. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量 炭化物多量含む)
3. 10YR2/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)





第 56 図 F 区 SD 断面図

845SD・846SD・847SD・871SD



られる。区画溝としての機能を有していたものと考えられ、これによる区画の規模は1辺 75 m程の区画になると考えられる。

845SD・846SD・847SD・871SD（第 57 図） 845SD は幅 2.00 m、深さ 0.29 m、846SD は幅 0.90 m、深さ 0.29 m、847SD は幅 0.67 m、深さ 0.31 m、871SD は、幅 1.15 m、深さ 0.16 m の規模をそれぞれ測る調査区西側を南北に走る溝ある。Db 区の 1116SD の延長ではないかと考えられ、数度の掘り直しなどによりこのようになってと考えられる。845SD からは土師器鍋が、846SD からは古瀬戸後Ⅲもしくは後Ⅳ古段階の平碗底部を加工円盤としているもの、871SD からは土師器鍋が出土していることから中世から機能していたと考えられるが、最終段階の 846SD については近世まで利用されていた可能性も考えられる。

d. その他

976SX・977SX・978SX・979SX・980SX・981SX・982SX（第 57 図） いずれも 846SD 内の集石遺構である。拳大から 20 cm 程の径の礫が集中して廃棄されたような状況が見受けられた。溝の掘り直しなどにより出た礫を集めたものではないかと考えるが、980SX からは墨書の入った尾張型第 7 型式の山茶碗底部を加工円盤としているものが出土している。溝幅の中心に存在するものもあり、単純に礫廃棄の集中部と見なすことはできない。846SD との関係を考えて近世の可能性が高い。

（8）G 区

G 区では、中世の竪穴状遺構・掘立柱建物・土坑・溝・井戸、近世の溝などが確認されている。遺構は分布は主に調査区中央に集中しており、西側は後世の削平を受けているため判然としてはいないが、東側については溝を除くと非常に少なくなっている。

a. 竪穴状遺構

060SI（第 58 図・第 59 図） 長径 6.06 m、短径 5.48 m、深さ 0.40 m の規模を測る隅丸方形の竪穴状遺構である。他の竪穴状遺構同様に床面が叩き締めたように固くしまっており、特徴的なものとして南よりに柵列のような柱列が東西に確認され、床面の礫が北東部に集中していることが確認されている。また、この建物の柱穴として 290SK、291SK、725SK、760SK、1583SK、1590SK が考えられ 1 間×2 間の建物であると思われる。埋土からは、尾張型第 7 型式の山茶碗、尾張型第 8 もしくは第 9 型式の山茶碗小皿、常滑窯産甕、土師器皿、伊勢型鍋などが出土しており、遺構の時期は中世Ⅱ期 14 世紀と考えられる。

1323SI（第 60 図） 1324SI・1732SI 切られているため全体の形は不明ながら、長径 3.76 m、短径 2.56 m、深さ 0.21 m の規模を測る隅丸方形と考えられる竪穴状遺構である。北東床面で扁平な礫が並んで検出されている。埋土からは、尾張型第 7 もしくは第 8 型式の山茶碗小皿、尾張型第 10 型式の片口鉢、古瀬戸後Ⅰ段階の折縁深皿、常滑窯産甕、伊勢型鍋などが出土しており、遺構の時期は中世Ⅱ期 14 世紀後半と考えられる。

1324SI（第 60 図） 1732SI に切られているため全体の形は不明ながら長径 4.63 m、短径 2.08 m、深さ 0.28 m の規模を測る隅丸方形と考えられる竪穴状遺構である。1323SI のように並んではないものの床面北東部に礫がまとまって確認されている。1323SI を切っていることから中世Ⅱ期以降と考えられる。

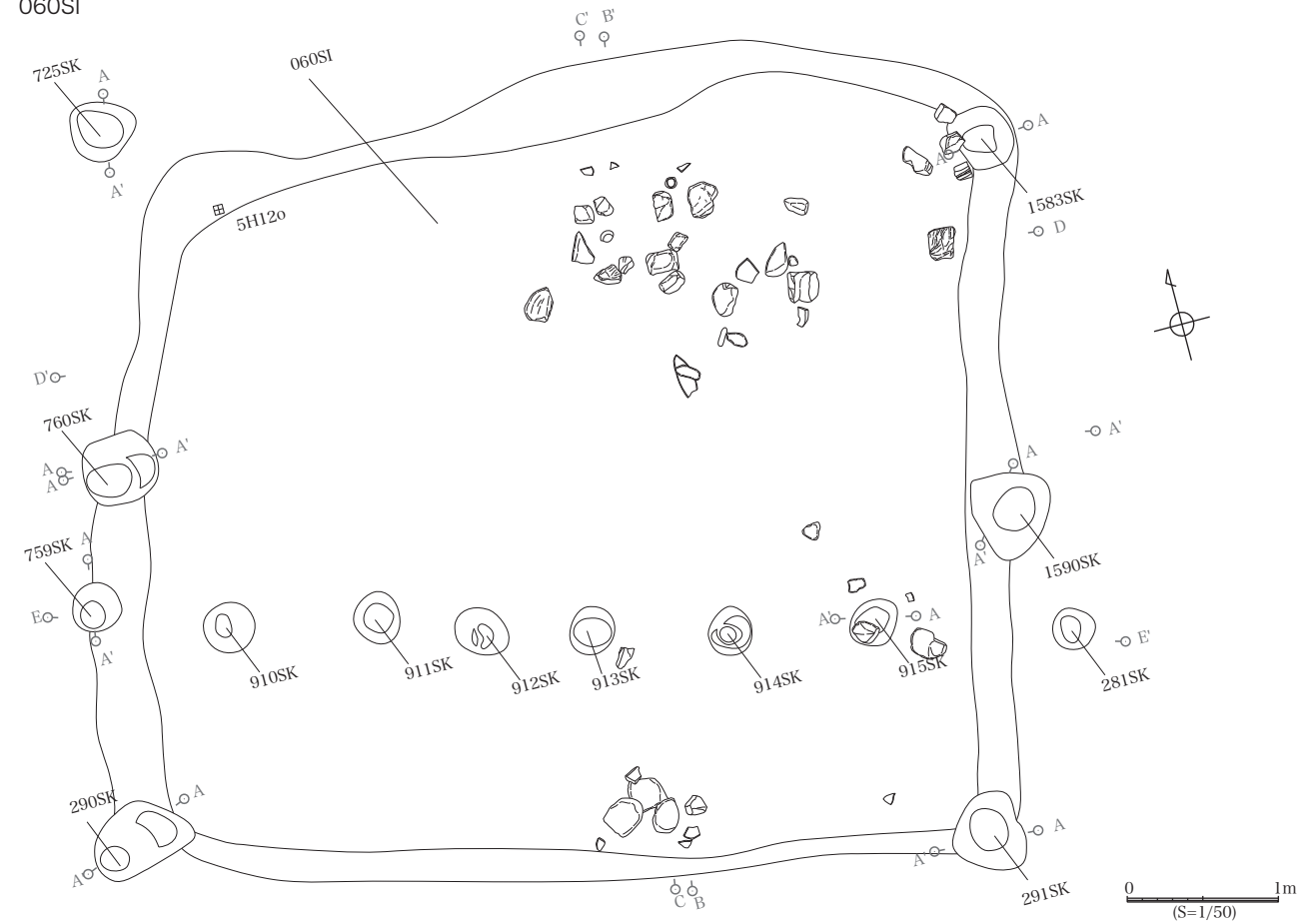
1732SI（第 60 図） 一部調査区外となるため全体の形は不明ながら、長径 4.21 m、短径 3.14 m、深さ 0.06 m の規模を測る隅丸方形と考えられる竪穴状遺構である。1323SI・1324SI を切っていることから中世Ⅱ期以降と考えられる。

b. 掘立柱建物

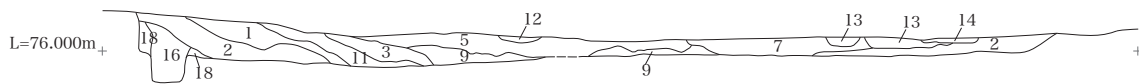
掘立柱建物は 060SI の北側・西側、1323SI の北側・西側に柱穴が集中する区域があり、この付近で数回の立て替えなどが行われたものとするが、遺構の切り合いなどが激しく明確に建物となると考えられたものだけを掲載した。

893SB（第 61 図） 1 間×3 間の建物で、規模は 6.60 m×2.58 m を測り、138SP、139SP、141SP、143SP、146SP、171SP、301SP、302SP と棟持柱と思われる 140SP、258SP で構成されている。明確な時期は不明ながら他の中世の遺構とは離れており、埋土も他の中世の遺構とは違うことから近世と考えられる。

060SI

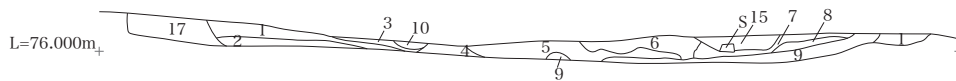


L=76.500m^A +0.000m +1.000m +2.000m +3.000m +4.000m +5.000m +6.000m +6.847m^{A'}



060SI 南北

L=76.500m^B +0.000m +1.000m +2.000m +3.000m +4.000m +5.000m +5.685m^{B'}



- | | |
|---|--|
| 1. 10YR3/3 暗褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土 | 10. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト |
| 2. 10YR7/6 明黄褐色砂質シルトと10YR3/3 暗褐色砂質シルトの斑土 | 11. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック少量含む) |
| 3. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト (炭化物微量含む) | 12. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト |
| 4. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト | 13. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト |
| 5. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト | 14. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト |
| 6. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト | 15. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト (中礫含む) |
| 7. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト | 16. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む) |
| 8. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック多量含む) | 17. 10YR3/2 黒褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土 |
| 9. 10YR2/1 黒色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック少量含む) | 18. 10YR7/6 明黄褐色砂質シルト (10YR3/3 暗褐色砂質シルトブロック含む) |

石出土断面

L=76.500m^C +0.000m +1.000m +2.000m +3.000m +4.000m +5.000m +5.682m^{C'}



L=75.500m⁺

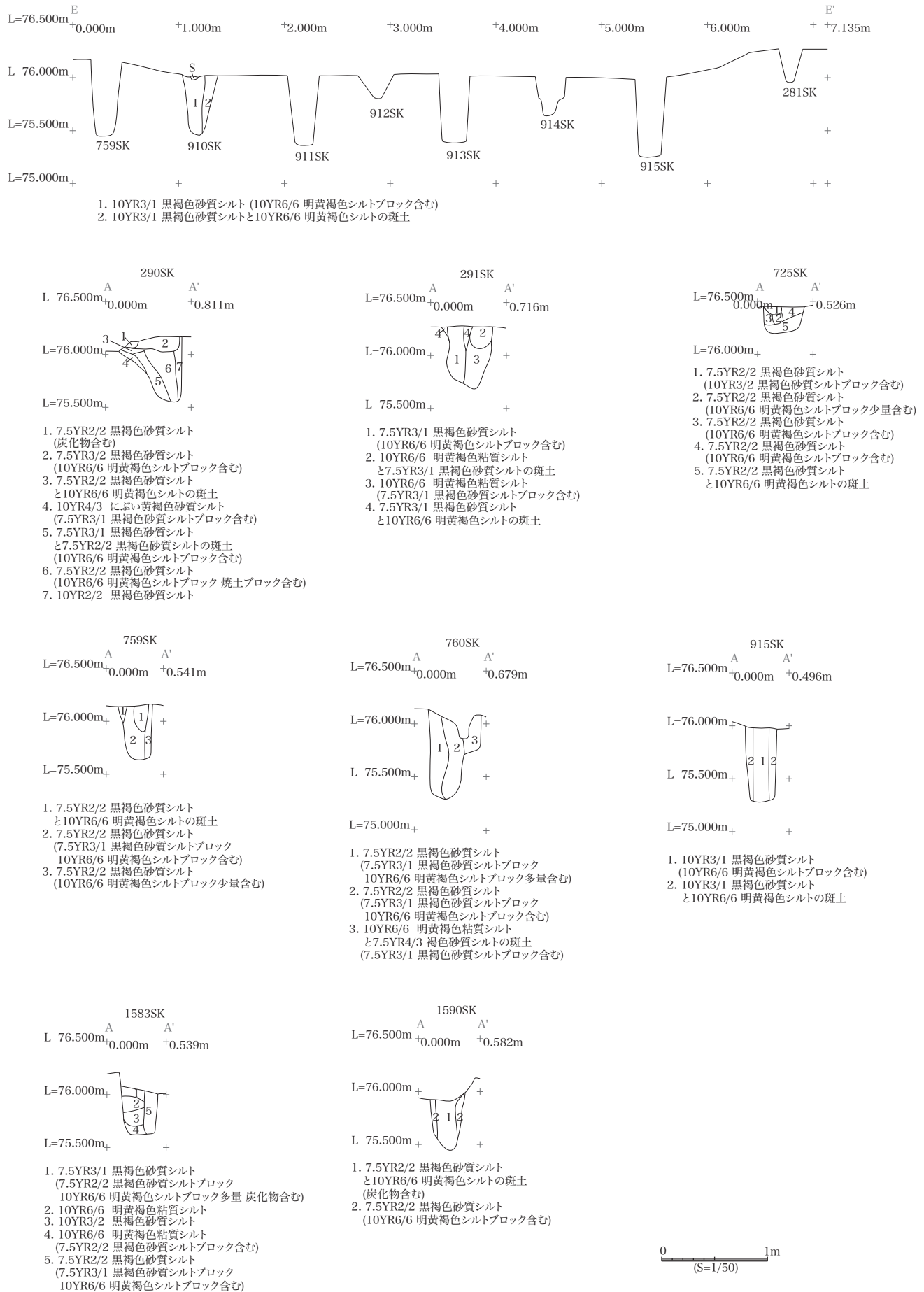
L=76.500m^D +0.000m +1.000m +2.000m +3.000m +4.000m +5.000m +6.000m +6.578m^{D'}



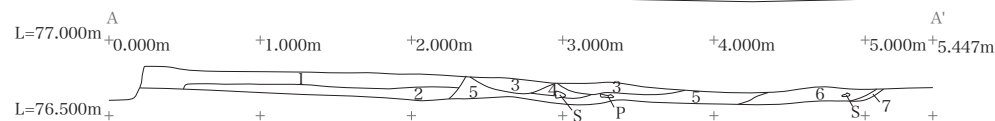
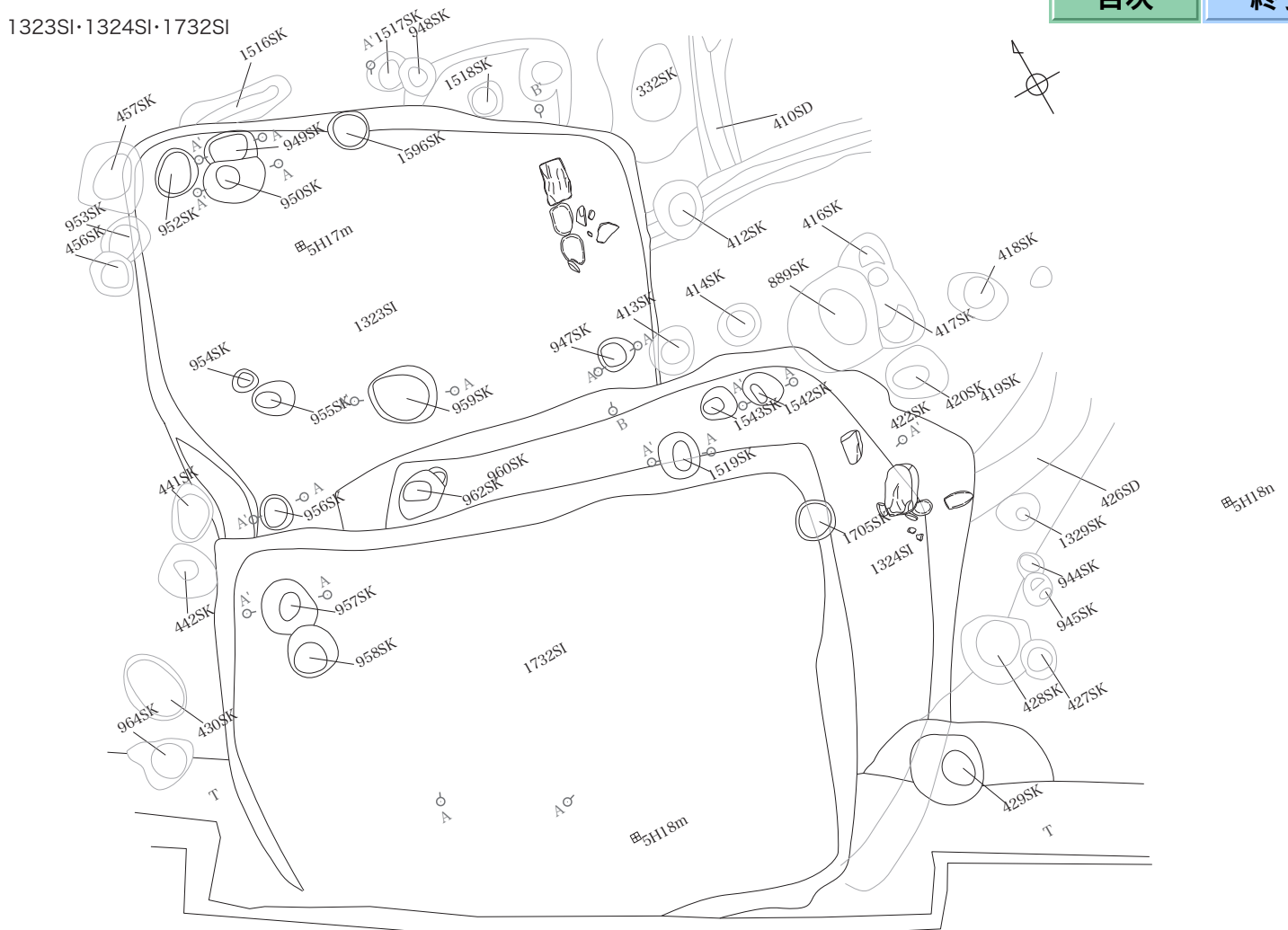
L=75.500m⁺

第 58 図 G 区 060SI 平面図・断面図

060SIエレベーション・柱穴



1323SI・1324SI・1732SI



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトと10YR3/4 暗褐色砂質シルトの斑土 (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 褐色鉄分沈着斑含む)
3. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト(10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
4. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
5. 10YR3/4 暗褐色砂質シルトと10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトの斑土 (褐色鉄分沈着斑含む)
6. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト

1323SI エレベーション
L=77.000m B A' +0.000m +1.000m +1.779m



947SK
L=77.000m A A' +0.000m +0.347m



1. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (炭化物含む)
2. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト
3. 10YR3/4 暗褐色砂質シルトの斑土 (炭化物含む)
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土
5. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト

949SK
L=77.000m A A' +0.000m +0.496m



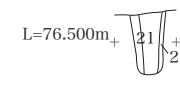
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト (5YR8/8 明赤褐色砂質シルトブロック含む)
2. 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む
3. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (炭化物含む)
4. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
5. 10YR3/4 暗褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土
6. 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト (10YR3/4 暗褐色砂質シルトブロック含む)

950SK
L=77.000m A A' +0.000m +0.632m



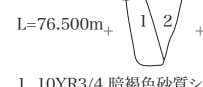
1. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土

956SK
L=77.000m A A' +0.000m +0.409m



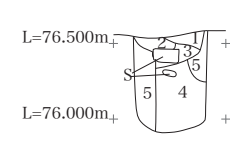
1. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト (炭化物微量含む)
2. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)

957SK
L=77.000m A A' +0.000m +0.608m



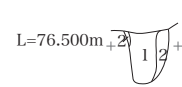
1. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 炭化物微量含む)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土

959SK
L=77.000m A A' +0.000m +0.743m



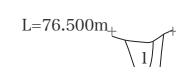
1. 10YR4/4 褐色砂質シルト (褐色鉄分沈着斑含む)
2. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (炭化物 褐色鉄分沈着斑含む)
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト (褐色鉄分沈着斑含む)
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
5. 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト (2.5Y3/2 黒褐色砂質シルトブロック含む)

1519SK
L=77.000m A A' +0.000m +0.444m



1. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 褐色鉄分沈着斑含む)
2. 10YR3/4 暗褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土

1542SK
L=77.000m A A' +0.000m +0.403m



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
2. 10YR6/6 明黄褐色粘質シルトと10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトの斑土

0 1m
(S=1/50)

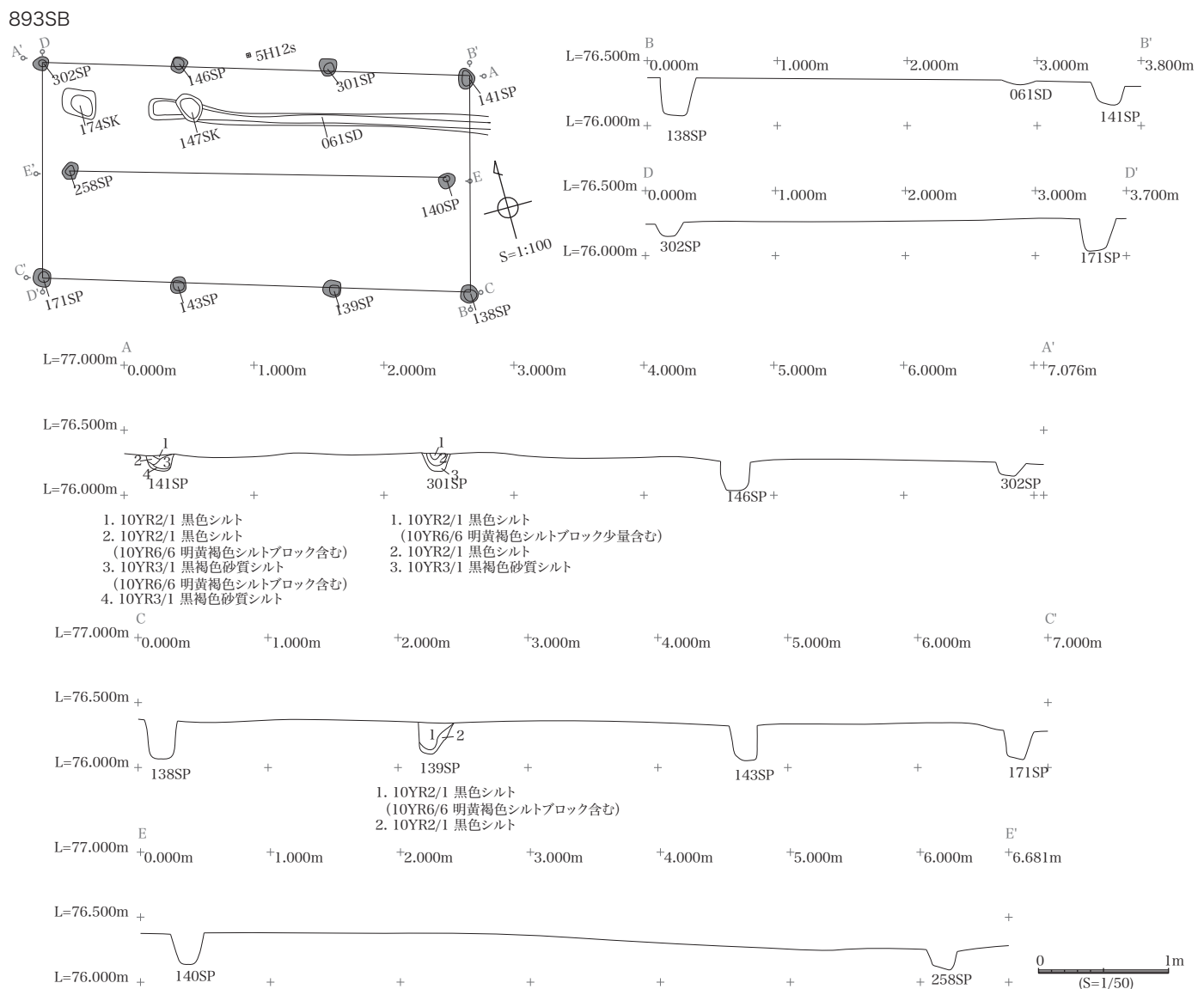
1727SB（第 62 図） 1 間×3 間の建物で、規模は 4.82 m×2.95 mを測り、226SP、245SP、308SP、654SP、683SP、685SP、706SP、723SP で構成されている。遺物は 245SP から中世の土器が出土しているのみで、明確な時期は不明ながら 060SI と関連すると考えられることから中世Ⅱ期と考えられる。

1728SB（第 63 図） 1 間×2 間の建物で、規模は 5.65 m×2.61 mを測り、157SP、523SP、644SP、674SP、678SP、679SP で構成されている。679SP からはスサ入りの粘土塊が出土しており、土壁を伴った建物である可能性が高い。遺物の出土はなく、明確な時期は不明ながら 060SI との関連が考えられることから中世Ⅱ期と考えられる。

1729SB（第 64 図） 2 間×2 間の総柱の建物で、規模は 5.45 m×3.95 mを測り、689SP、995SP、998SP、1009SP、1012SP、1015SP、1021SP、1022SP、1104SP で構成されている。遺物は 995SP から土師器皿が出土してはいる。明確な時期は不明ながら 060SI との関連が考えられることから中世Ⅱ期と考えられる。

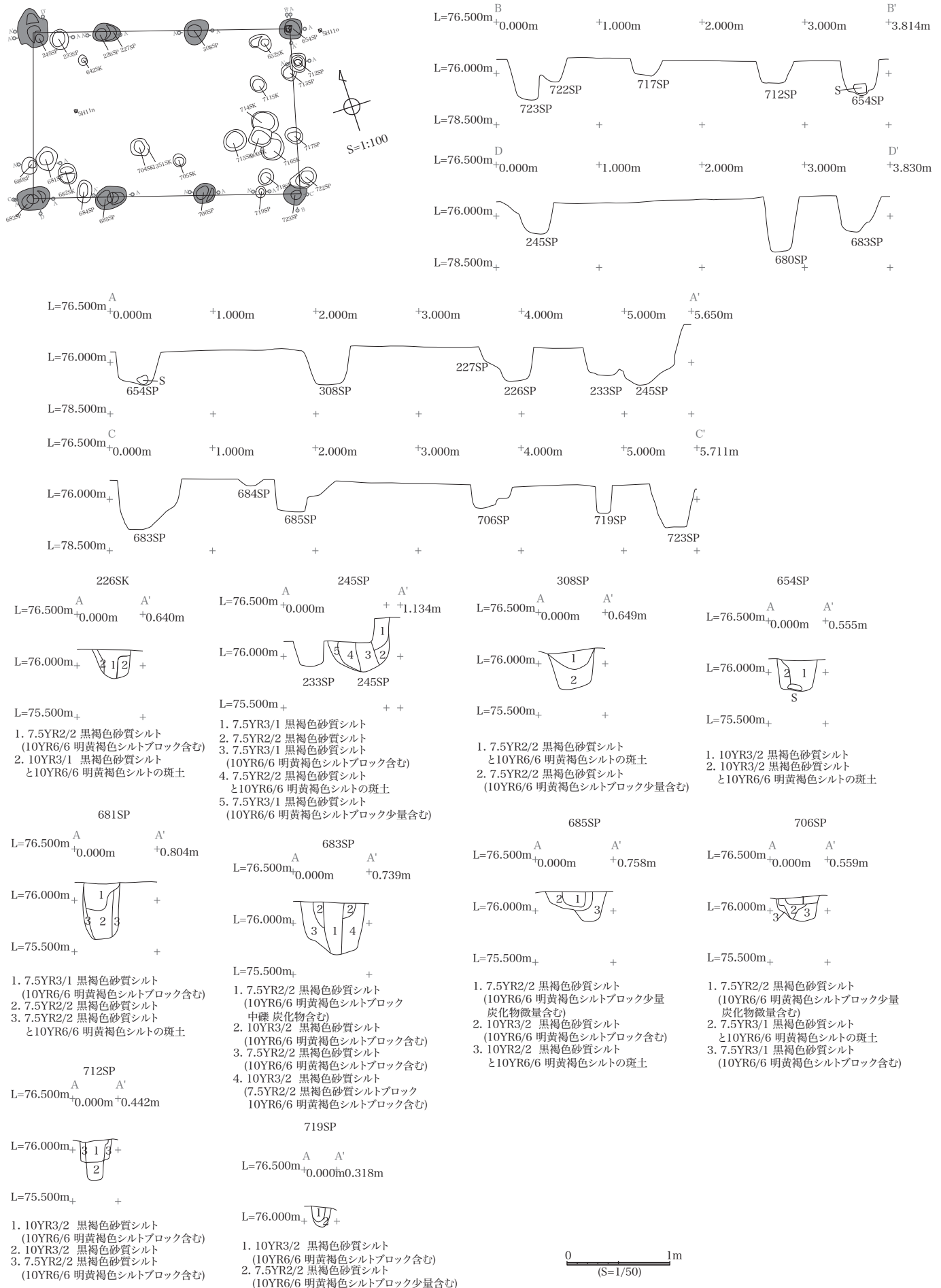
1730SB（第 65 図・第 66 図） 3 間×4 間の建物で、規模は 6.80 m×6.75 mを測り、607SP、698SP、746SP、761SP、764SP、767SP、768SK、772SP、905SK、1025SP、1033SP、1038SP、1058SP、1065SP、1493SP で構成されている。698SP からはスサ入り粘土塊が出土しており、土壁を伴った建物である可能性が高い。1033SP、1038SP、1493SP から中世の土器片が出土していることから、中世と考えられる。

1731SB（第 67 図・第 68 図） 2 間×3 間の総柱の建物で、規模は 7.30 m×5.15 mを測り、462SP、481SP、482SP、483SP、484SP、485SP、497SP、511SP、521SP、522SP、524SP、

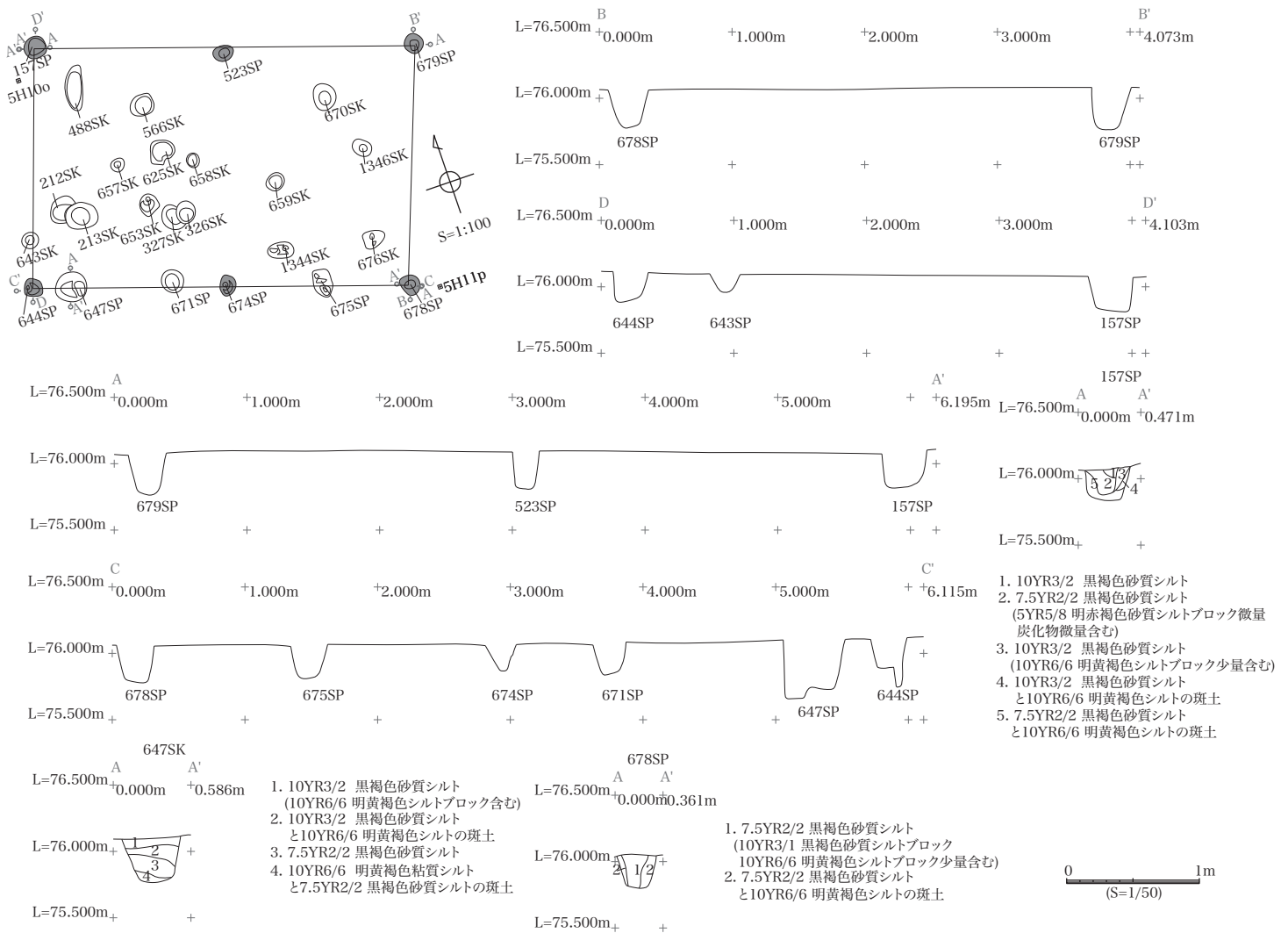


第 61 図 G 区 893SB 平面図・断面図

1727SB



1728SB



第 63 図 G 区 1728SB 平面図・断面図

539SP、552SP で構成されている。周辺の状況からは数回の立て直しが考えられる。481SP・482SP・483SP・484SP からは根石が確認されている。485SP からは常滑窯産甕、521SP、522SP からは中世の土器片が出土している。1323SI などとの関連が考えられることから中世Ⅱ期と考えられる。

c. 土坑

002SK (第 69 図) 長径 0.77 m、短径 0.57 m、深さ 0.34 m の規模を測る楕円形の土坑である。上層に拳大以下の礫が大量に含まれており、礫とともに中世の土器片が入っていた。形状から F 区の 976SX～982SX との関連も考えられる。明確な時期は不明ながら、近世の溝 100SD を切っていることなどから近世と考えられる。

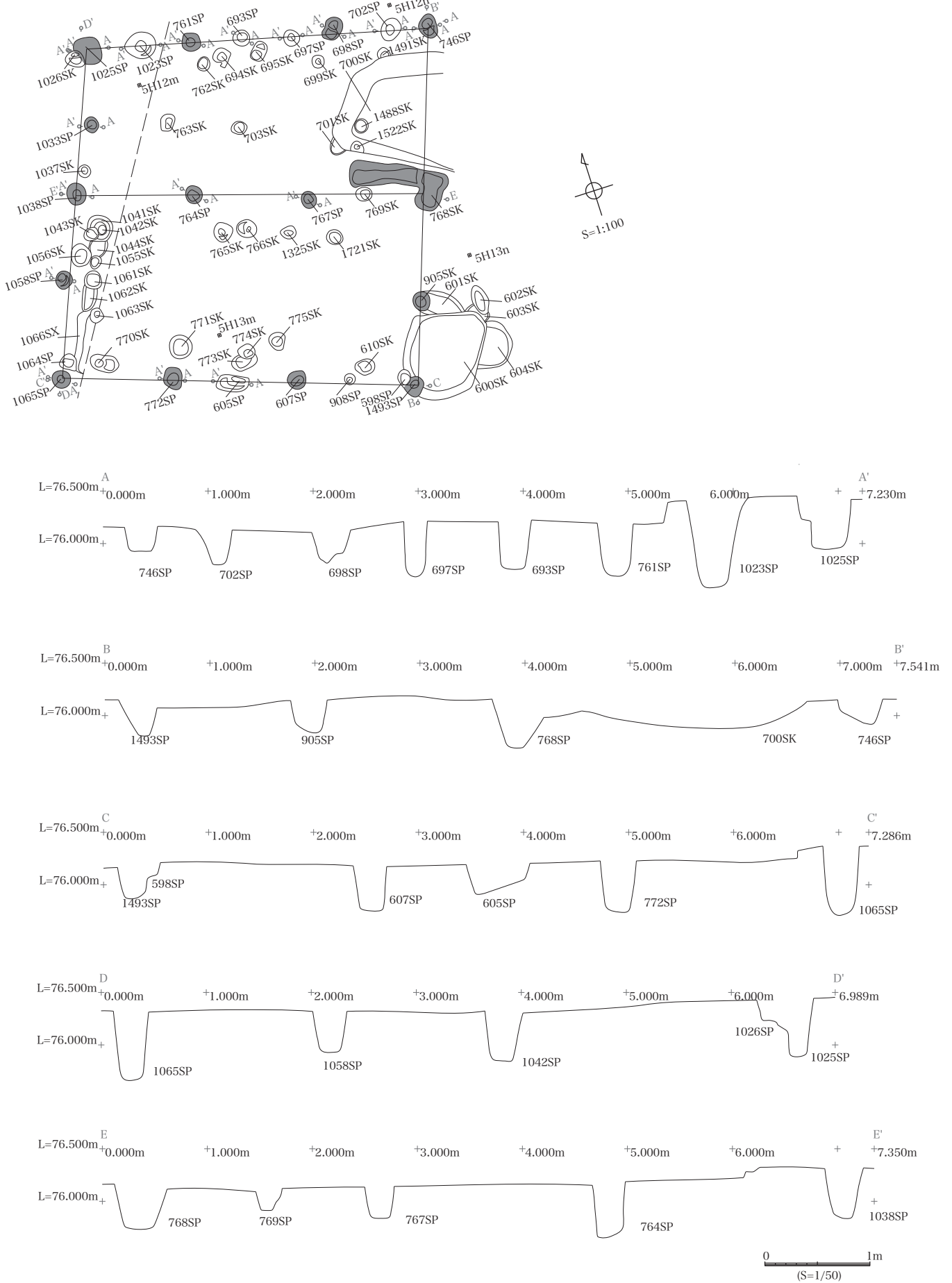
003SK (第 69 図) 長径 1.08 m、短径 0.84 m、深さ 0.29 m の規模を測る楕円形の土坑である。土坑全体に礫が充填した状態であった。形状から F 区の 976SX～982SX との関連も考えられる。明確な時期は不明ながら、近世の溝 100SD を切っていることなどから近世と考えられる。

034SK (第 69 図) 長径 1.25 m、短径 0.87 m、深さ 0.24 m の規模を測る隅丸長方形の土坑である。遺物の出土はなく、明確な時期は不明ながら近世と考えられる。

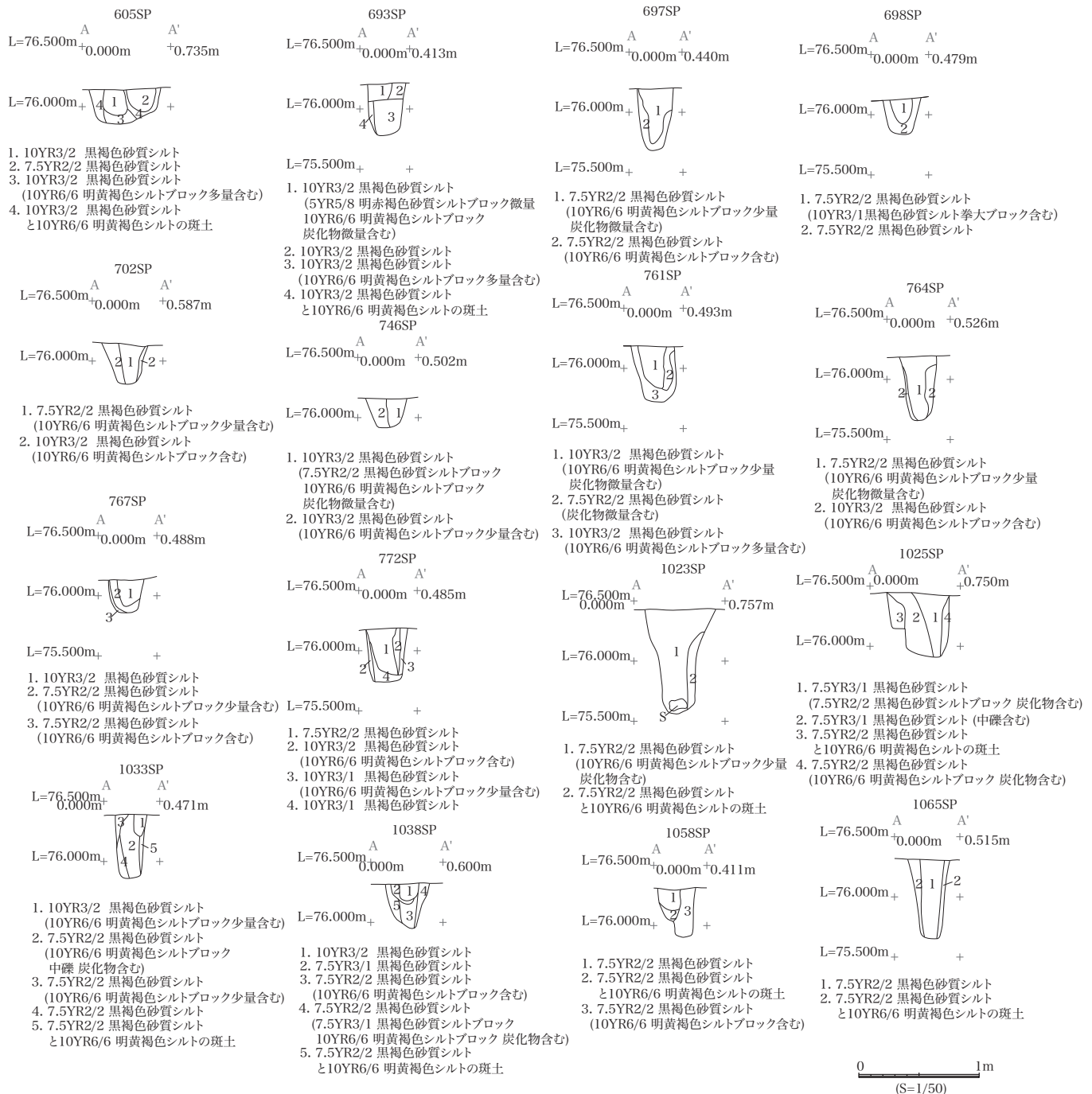
167SK (第 69 図) 長径 1.03 m、短径 0.97 m、深さ 0.33 m の規模を測る隅丸方形の土坑である。壁に扁平な礫が立った状態で確認されている。常滑窯産甕が出土しているが、中世と考えられる遺構とは埋土が違うことから消極的ながら近世と考えられる。

300SK (第 69 図) 長径 1.39 m、短径 0.91 m、深さ 0.37 m の規模を測る不定形の土坑である。複数の土坑が切りあっているものとも考えられる。明確な時期は不明ながら周囲の建物などとの関係から中世

1730SB



第 65 図 G 区 1730SB 平面図・断面図



第 66 図 G 区 1730SB 内 SK (SP) 断面図

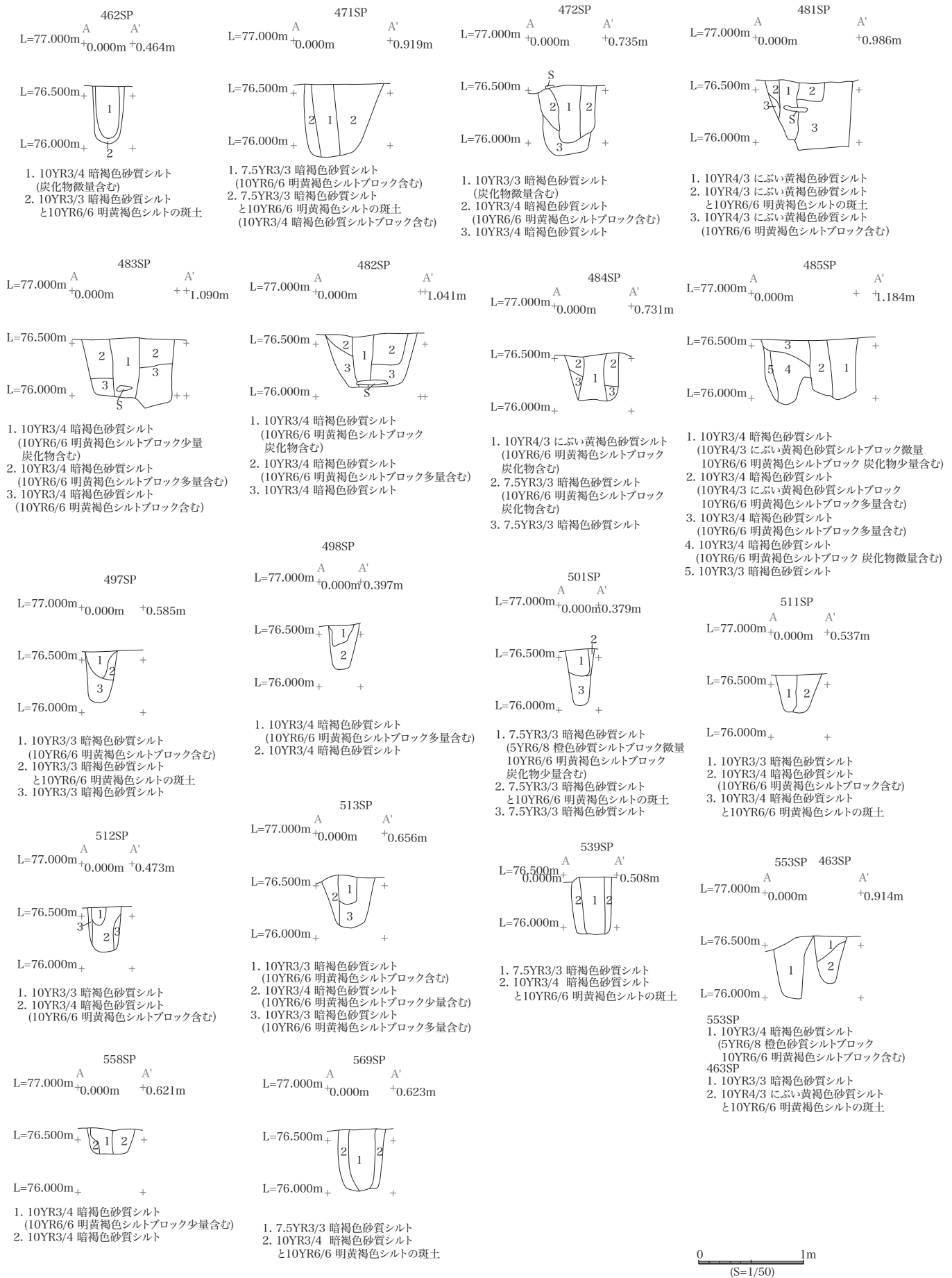
II期と考えられる。

700SK (第 69 図) 長径 4.37 m、短径 2.23 m、深さ 0.35 m の規模を測る不定形の土坑である。断面形状などから竪穴状遺構の一部が残存したものの可能性も考えられる。古瀬戸後 I 段階の縁釉小皿・折縁深皿が出土しており、遺構の時期は中世 II 期 14 世紀と考えられる。

727SK (第 70 図) 長径 0.83 m、短径 0.58 m、深さ 0.64 m の規模を測る不定形の土坑である。複数の土坑が切りあったものとも考えられる。遺物の出土はなく、明確な時期は不明ながら周囲の建物との関連から中世 II 期と考えられる。

970SK (第 70 図) 長径 1.34 m、短径 0.98 m、深さ 0.42 m の規模を測る楕円形の土坑である。形状などから他の調査区の土壇墓と考えられるものに類似しており、周辺にも同規模の土坑が点在することから土壇墓の可能性も考えられる。明確な時期は不明ながら建物などとの関係から中世 III 期であろうか。

1085SK (第 70 図) 長径 1.56 m、短径 1.54 m、深さ 0.32 m の規模を測る円形に近い隅丸方形の土坑である。形状などから他の調査区の土壇墓と考えられるものに類似しており、周辺にも同規模の土坑が



第 68 図 G 区 1731SB 内 SK (SP) 断面図

点在することから土墳墓の可能性も考えられる。明確な時期は不明ながら建物などとの関係から中世Ⅲ期であろうか。

1151SK (第 70 図) 長径 2.86 m、短径 2.71 m、深さ 0.20 m の規模を測る隅丸長方形の土坑である。この付近にやや小型ながら同様の方形の土坑が集まっている。明確な時期は不明ながら E 区の 006SK などの近世の遺構に形状が類似していることから近世と考えられる。長径 2.04 m、短径 1.69 m、深さ 0.26 m の規模を測る不定形の土坑である。遺物の出土はなく、明確な時期は不明ながら中世の遺構埋土とは異なることから消極的ではあるが近世と考えられる。

1156SK (第 70 図) 長径 2.04 m、短径 1.69 m、深さ 0.26 m の規模を測る不定形の土坑である。遺物の出土はなく、明確な時期は不明ながら中世の遺構埋土とは異なることから消極的ではあるが近世と考えられる。

1213SK (第 70 図) 調査区外にかかるため全体の形状は不明ながら、長径 3.61 m、短径 1.11 m、深さ 0.20 m の規模を測る隅丸長方形と考えられる土坑である。近世以降の耕作に伴う土坑と考えられる。

1305SK (第 71 図) 長径 1.60 m、短径 0.86 m、深さ 0.35 m の規模を測る楕円形の土坑である。周囲の建物などとの関係から中世Ⅱ期と考えられる。

1364SK (第 71 図) 長径 1.31 m、短径 0.96 m、深さ 0.26 m の規模を測る楕円形の土坑である。埋土から山茶碗が出土している。F 区中央南側からの土墳墓と考えられる土坑の分布がこの付近まで広がっていると考えられ、この土坑もその一つではないかと思われる。遺構の時期は中世Ⅲ期であろう。

1423SK (第 71 図) 長径 0.74 m、短径 0.62 m、深さ 0.13 m の規模を測る楕円形の土坑である。底部には粘土が充填され、その上に常滑窯産の赤物甕が据えてあった。遺構の時期は近世と考えられる。

1548SK (第 71 図) 長径 2.19 m、短径 1.20 m、深さ 0.83 m の規模を測る楕円形の土坑である。掘り形は V 字に近く底部に柱穴らしき穴があることから、陥し穴の可能性も考えられる。他の調査区の陥し穴とは断面形状などに違いがあることから時期差が考えられるが、明確な時期は不明である。

1549SK (第 71 図) 調査区外へ遺構が広がるため全体の形状は不明ながら、長径 3.15 m、短径 1.91 m、深さ 0.21 m の規模を測る隅丸長方形と考えられる土坑である。古瀬戸縁釉小皿、伊勢型鍋などが出土しており、近世の溝と考えられる 1299SD に切られていることから遺構の時期は中世Ⅲ期と考えられる。

1670SK (第 71 図) 径 1.16 m、深さ 0.35 m の規模を測る円形の土坑である。F 区中央南側からの土墳墓と考えられる土坑の分布がこの付近まで広がっていると考えられ、この土坑もその一つではないかと思われる。遺構の時期は中世Ⅲ期であろう。

1696SK (第 72 図) 一部削平を受けているため全体の形状は不明ながら、長径 3.38 m、短径 2.49 m、深さ 0.21 m の規模を測る隅丸方形と考えられる土坑である。形状から竪穴状遺構の可能性も考えられる。伊勢型鍋、土師器皿などが出土しており、周囲の建物などとの関係から中世Ⅱ期と考えられる。

d. 溝

086SD (第 73 図) 幅 1.62 m、深さ 0.29 m の規模を測る調査区東を南北に走る溝である。F 区 845SD と同一の溝と考えられる。明確な時期は不明ながら中世から近世に機能していたものと考えられる。

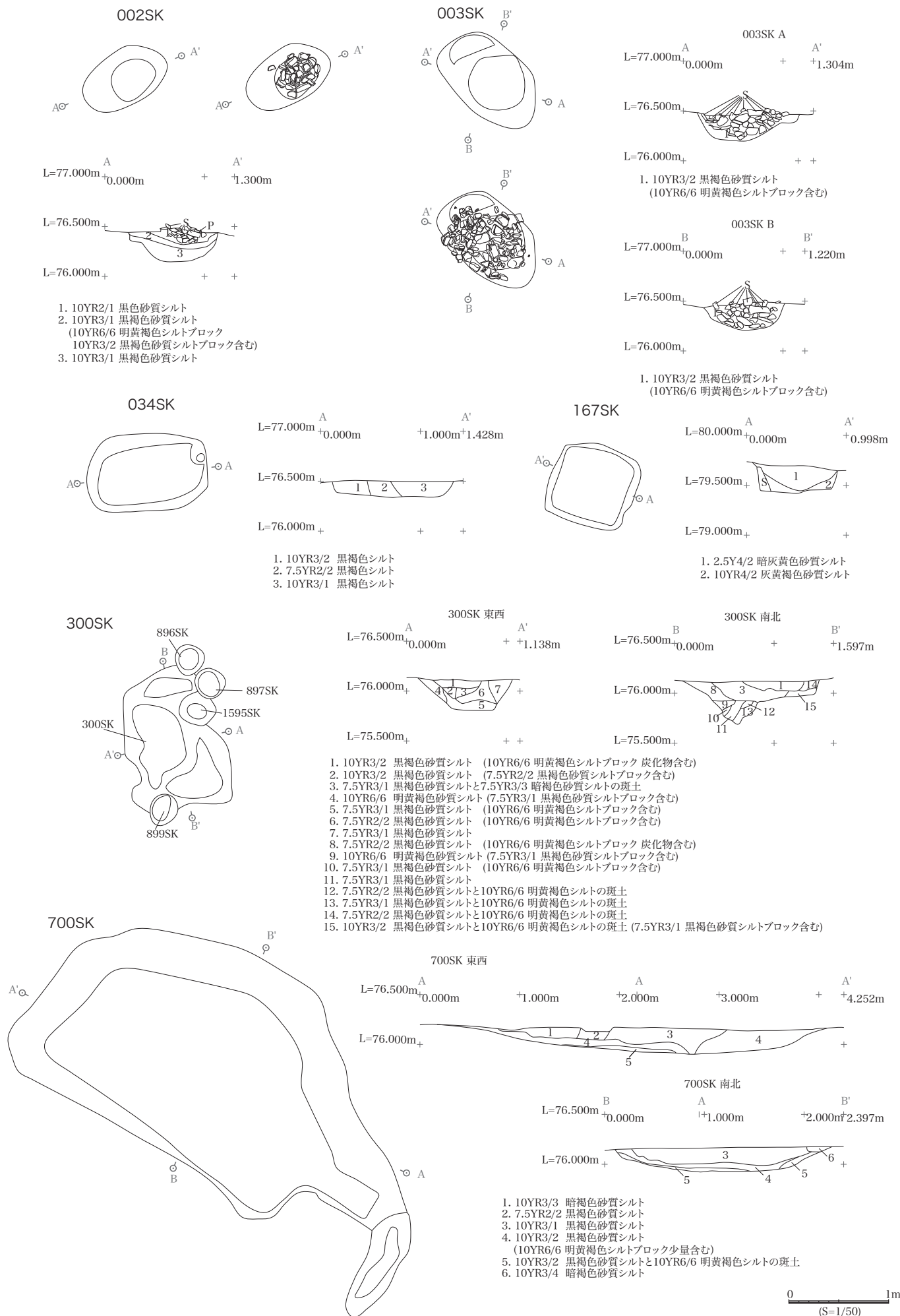
100SD (第 73 図) 幅 0.78 m、深さ 0.34 m の規模を測る調査区北東から南に延びた後、西に屈曲する溝である。F 区 846SD・847SD と同一の溝と考えられる。常滑窯産の赤物甕、17 世紀後半の瀬戸・美濃窯産天目茶碗などが出土しており、近世後半まで機能していた溝と考えられる。

151SD (第 73 図) 幅 1.42 m、深さ 0.52 m の規模を測る調査区南東角を東に延びた後、北方向に屈曲する溝で、E 区で 001SR とした道に沿って走っている。遺物の出土はなく、明確な時期は不明ながら E 区 001SR との関係を考えて近世と考えられる。

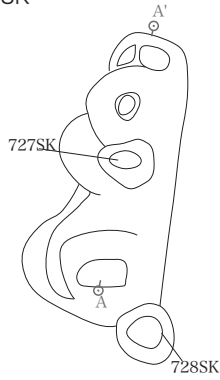
341SD (第 73 図) 幅 1.21 m、深さ 0.24 m の規模を測る調査区中央南よりで L 字に屈曲する溝である。数カ所にわたり多量の礫を含んでおり、その状況を見ると暗渠や石組みのようなものがあった可能性も考えられる。常滑窯産甕、土師器皿、陶丸などが出土しており、周囲の建物との関係から中世Ⅱ期と考えられる。

426SD (第 73 図) 幅 1.22 m、深さ 0.15 m の規模を測る 341SD を切って走る溝である。山茶碗片口鉢、土師器鍋などが出土しており、周囲の建物との関係から中世Ⅱ期と考えられる。

1299SD (第 74 図) 幅 1.62 m、深さ 0.65 m の規模を測る調査区西側を南北に走る溝である。F 区



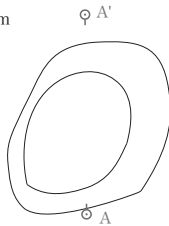
727SK



1. 10YR2/1 黒色シルトと7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトの斑土 (炭化物含む)
2. 10YR2/1 黒色シルト (中礫 炭化物含む)
3. 10YR2/1 黒色シルト (7.5YR2/2 黒褐色砂質シルトブロック含む)
4. 10YR2/1 黒色シルト (中礫 炭化物含む)
5. 10YR2/1 黒色シルト (細礫 炭化物含む)
6. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルトと10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土 (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
7. 10YR5/6 黄褐色砂質シルト
8. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルトと10YR3/1 黒褐色砂質シルトの斑土 (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック少量 炭化物含む)
9. 10YR2/1 黒色シルト (炭化物含む)
10. 10YR6/8 明黄褐色砂質シルトと10YR3/1 黒褐色砂質シルトの斑土
11. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
12. 10YR2/1 黒色シルト (中礫 炭化物含む)
13. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
14. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト (10YR3/1 黒褐色砂質シルトブロック 炭化物含む)
15. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
16. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト (7.5YR2/2 黒褐色砂質シルトブロック 炭化物含む)
17. 10YR3/2 黒褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土 (炭化物含む)
18. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
19. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルトと10YR3/2 黒褐色砂質シルトの斑土 (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 炭化物含む)

L=76.500m₊ A +0.000m +1.000m +1.783m A'

970SK

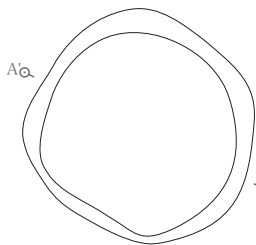


L=76.000m₊ + L=75.500m₊ +

L=76.500m₊ A +0.000m +1.324m A'

1. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 中礫 炭化物含む)
2. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト
3. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
4. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルトと10YR3/4 暗褐色砂質シルトの斑土
5. 10YR3/4 暗褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土

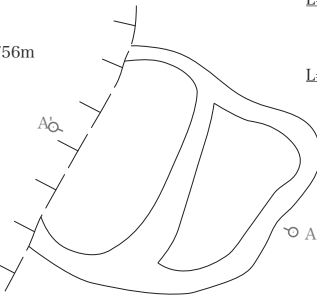
1085SK



L=77.000m₊ A +0.000m +1.000m +1.756m A'

1. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
2. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
3. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
4. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
5. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト

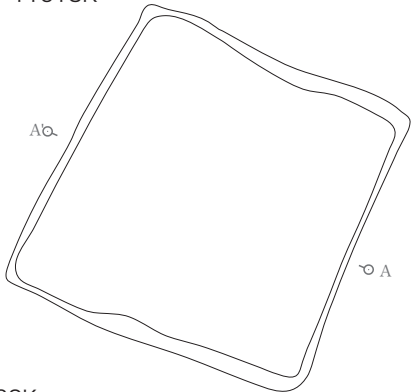
1156SK



L=76.500m₊ A +0.000m +1.000m +1.732m A'

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト (10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトブロック含む)
4. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
5. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土
6. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック少量含む)
7. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトブロック 炭化物含む)
8. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)

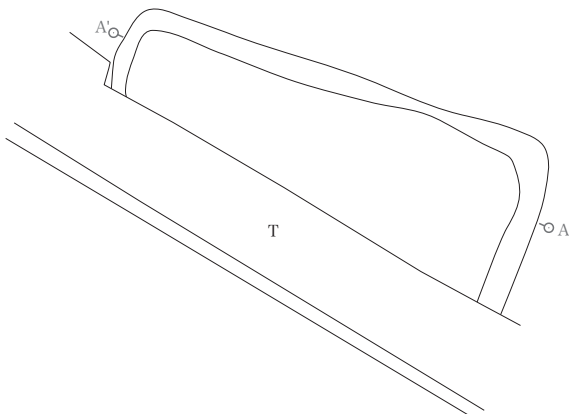
1151SK



L=76.500m₊ A +0.000m +1.000m +2.311m A'

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト (10YR3/4 暗褐色砂質シルトブロック 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
2. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土
3. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト (10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトブロック 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
4. 10YR3/4 暗褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土
5. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
6. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (褐色鉄分沈着斑含む)
7. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
8. 10YR3/4 暗褐色砂質シルトと10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトの斑土
9. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
10. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (褐色鉄分沈着斑含む)

1213SK



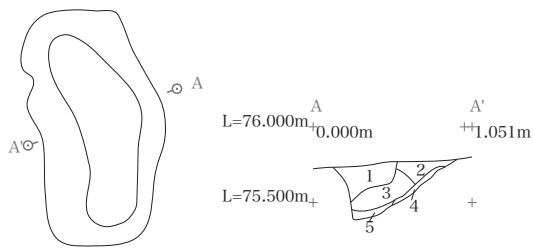
L=76.500m₊ A +0.000m +1.000m +2.000m +3.152m A'

L=76.000m₊ +

1. 2.5Y3/2 黒褐色細粒砂と7.5YR3/4 暗褐色シルトの斑土 (褐色鉄分沈着斑含む)
2. 7.5YR3/4 暗褐色シルト (2.5Y3/2 黒褐色砂質シルトブロック 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)

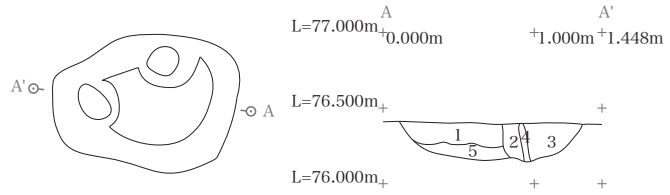
0 1m
(S=1/50)

1305SK



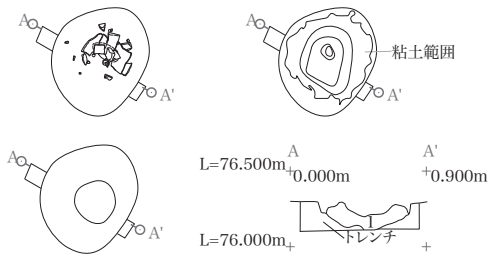
1. 7.5YR4/3 褐色砂質シルト (2.5Y3/2 黒褐色砂質シルトブロック含む)
2. 7.5YR4/3 褐色砂質シルト (2.5Y3/2 黒褐色砂質シルトブロック 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
3. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
4. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト (2.5Y3/2 黒褐色砂質シルトブロック 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
5. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト

1364SK



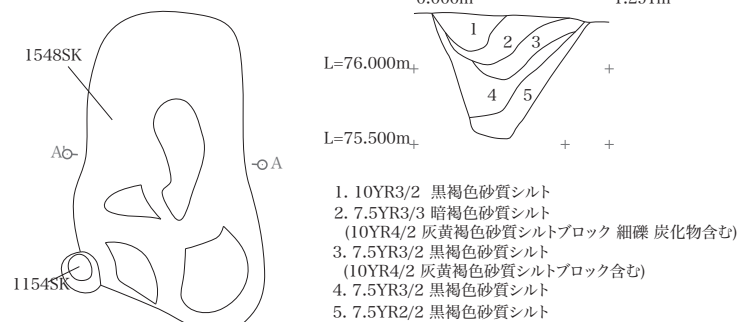
1. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
2. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルトと7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトの斑土
3. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトと7.5YR2/2 黒褐色砂質シルトの斑土 (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 炭化物含む)
4. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
5. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土

1423SK



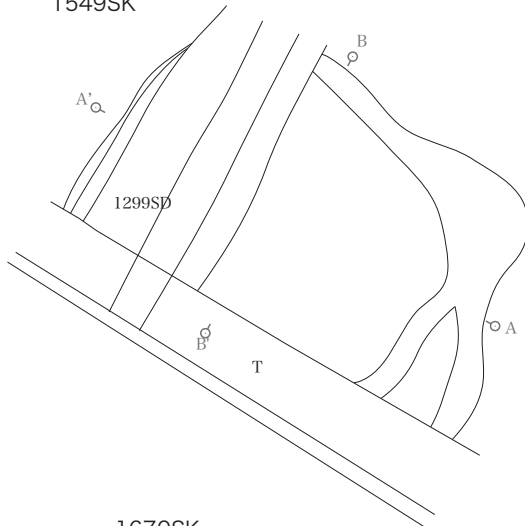
1. 10YR5/6 黄褐色粘土 (7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトブロック微量含む)

1548SK

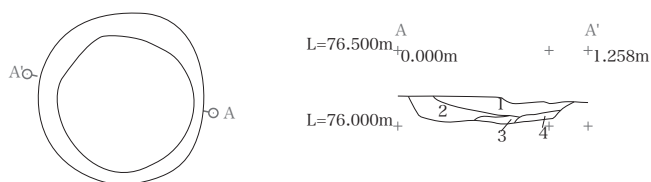


1. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
2. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト (10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトブロック 細礫 炭化物含む)
3. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトブロック含む)
4. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト
5. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト

1549SK



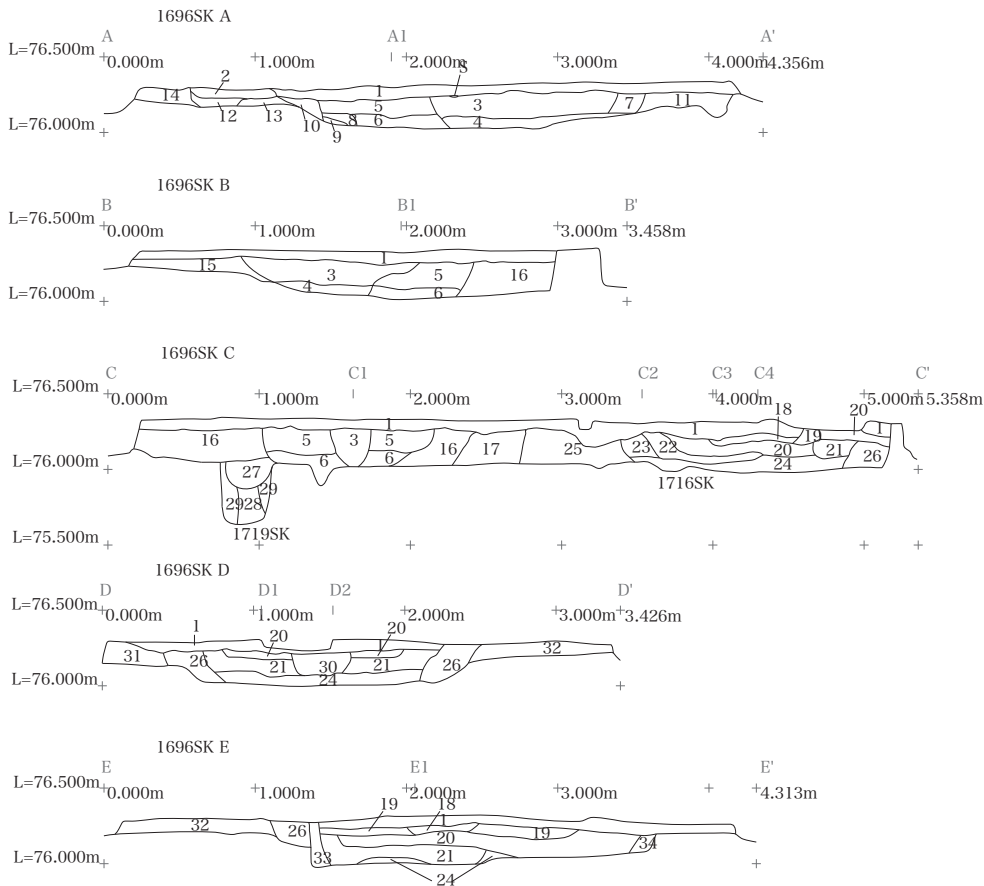
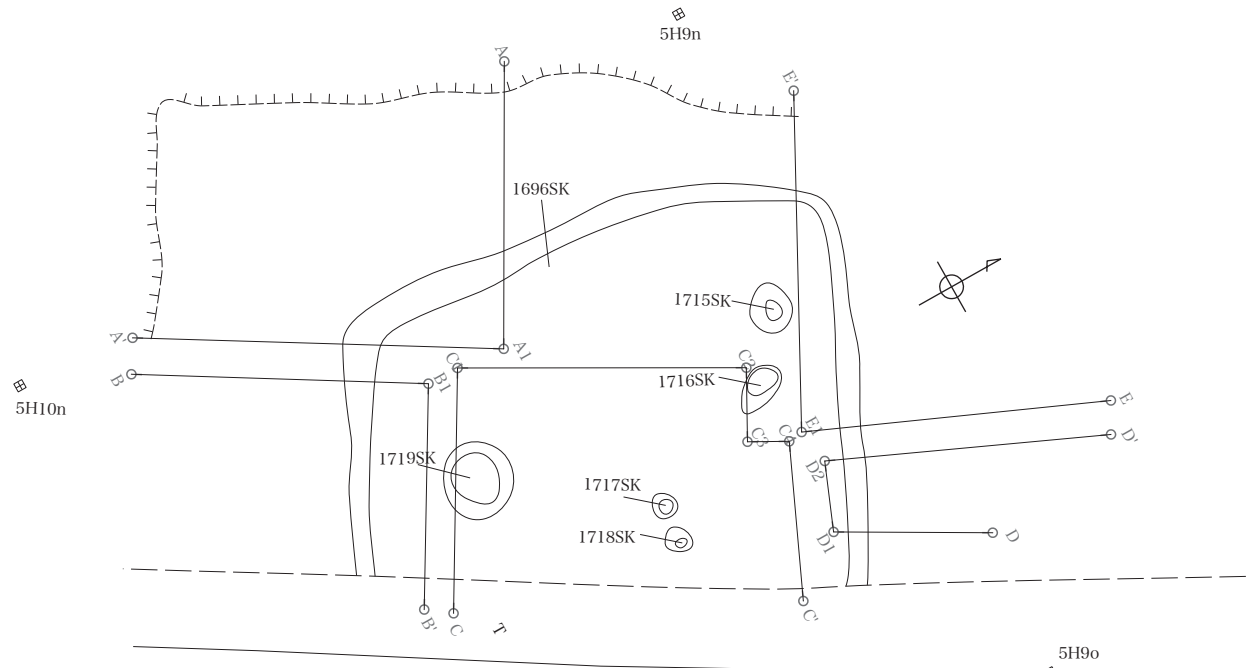
1670SK



1. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト (10YR2/2 黒褐色砂質シルトブロック 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
2. 10YR2/2 黒褐色シルト
3. 10YR6/6 明黄褐色粘質シルトと10YR2/1 黒色砂質シルトの斑土
4. 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト (7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトブロック含む)

0 1m
(S=1/50)

1696SK

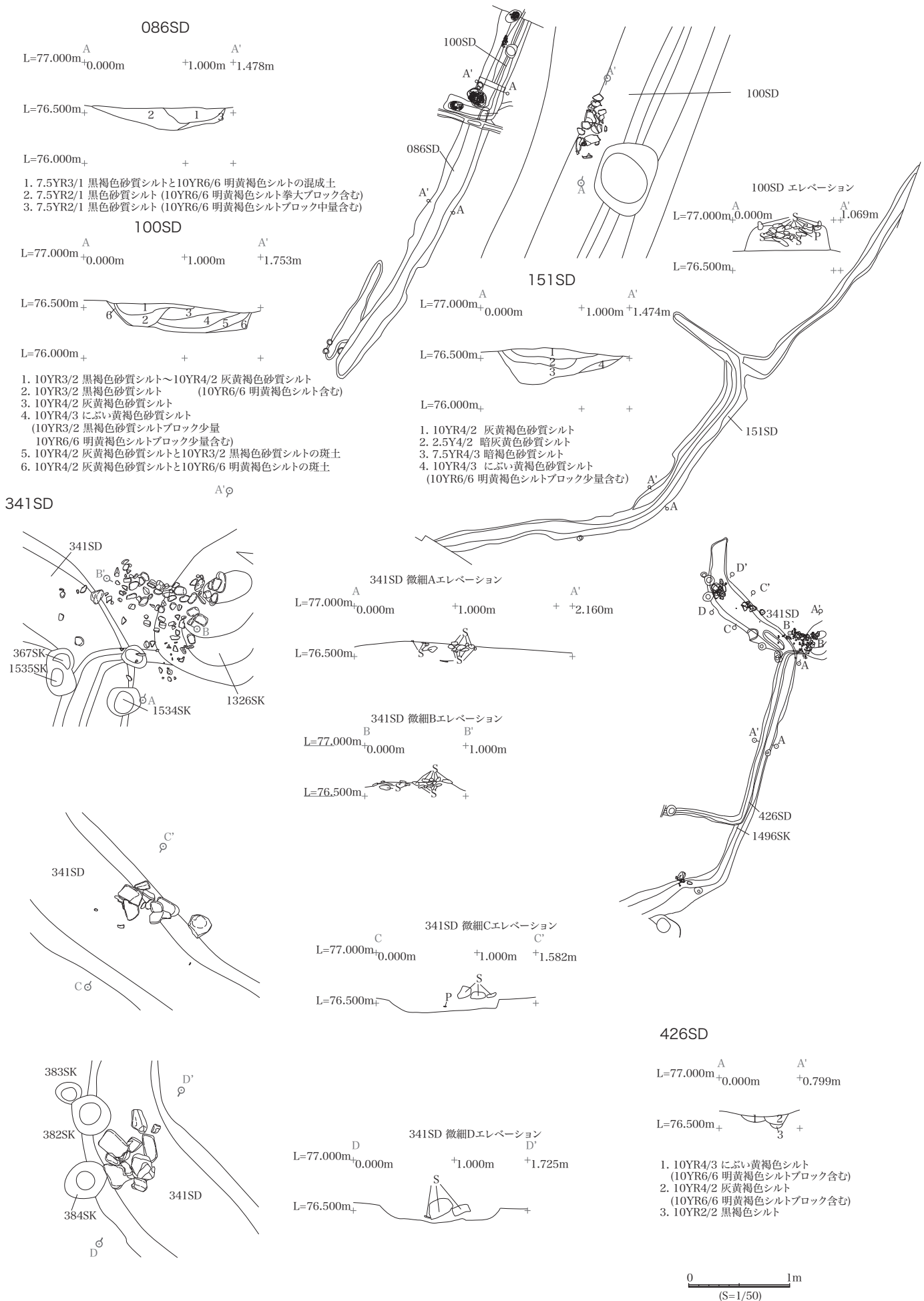


1. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (炭化物微量含む)
2. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト
3. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (炭化物含む)
4. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト
と7.5YR4/3 褐色砂質シルトの斑土
(10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
5. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
6. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト
(7.5YR2/1 黒色砂質シルトブロック
10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
7. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
(10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
8. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
9. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
10. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト
(10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
11. 7.5YR4/3 褐色砂質シルト
(10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
12. 7.5YR4/3 褐色砂質シルト
(7.5YR2/2 黒褐色砂質シルトブロック含む)
13. 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト
と10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルトの斑土
14. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト
15. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト
と10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土
16. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR6/6 明黄褐色シルトブロック
炭化物含む)
17. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
(10YR6/6 明黄褐色シルトブロック
炭化物含む)
18. 10YR2/1 黒色砂質シルト
19. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
(10YR6/6 明黄褐色シルトブロック
炭化物含む)
20. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
(10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
21. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR6/6 明黄褐色シルトブロック多量含む)
22. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト
(10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)

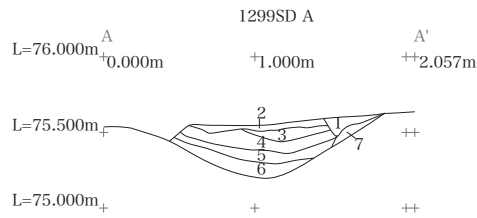
23. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
24. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルトと7.5YR4/2 灰褐色砂質シルトの斑土
(10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
25. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト
(7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトブロック 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック多量含む)
26. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土
(7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトブロック含む)
27. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
28. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)

29. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土
30. 10YR2/1 黒色砂質シルト
31. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト
32. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土
33. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト(10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
34. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土
(7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトブロック含む)

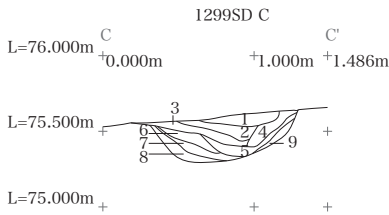
0 1m
(S=1/50)



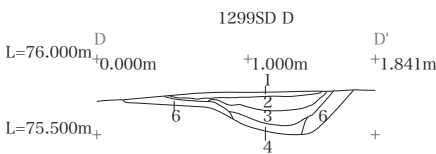
1299SD



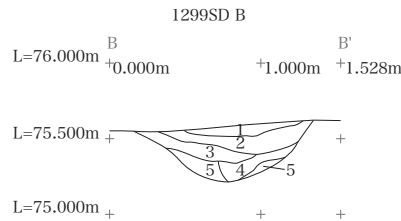
1. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト
2. 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト (7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトブロック含む)
3. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト
4. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック少量 細礫含む)
5. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト～7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック少量 褐色鉄分沈着斑含む)
6. 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック少量 細礫含む)
7. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土



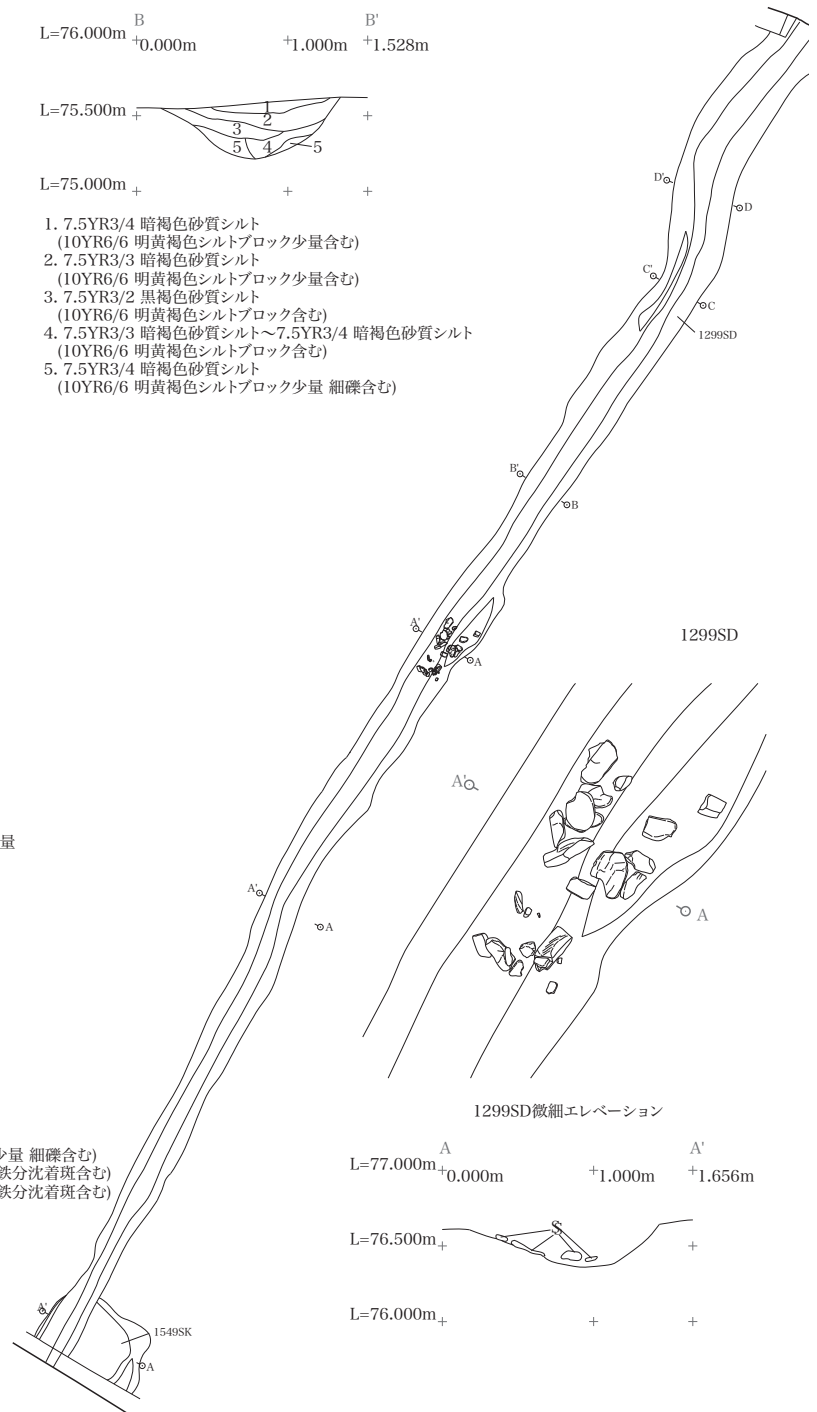
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト (7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトブロック少量 細礫含む)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト (細礫 炭化物 褐色鉄分沈着斑含む)
3. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 細礫 炭化物微量含む)
4. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック少量含む)
5. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト (7.5YR3/3 暗褐色砂質シルトブロック 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック少量 褐色鉄分沈着斑含む)
6. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 細礫含む)
7. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土
9. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土



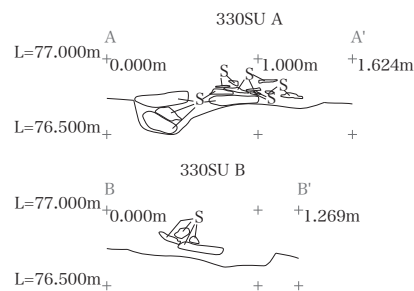
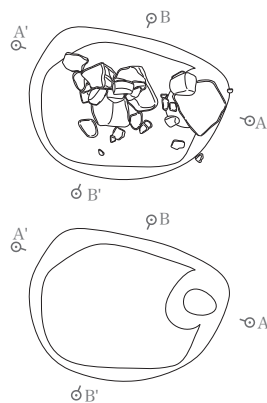
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト (7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトブロック少量 細礫含む)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 褐色鉄分沈着斑含む)
3. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 褐色鉄分沈着斑含む)
4. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト (褐色鉄分沈着斑含む)
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土
6. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト (褐色鉄分沈着斑含む)



1. 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック少量含む)
2. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック少量含む)
3. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
4. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト～7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
5. 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック少量 細礫含む)

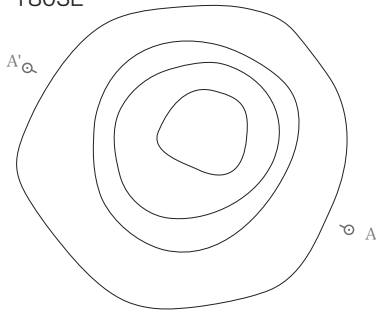


330SU

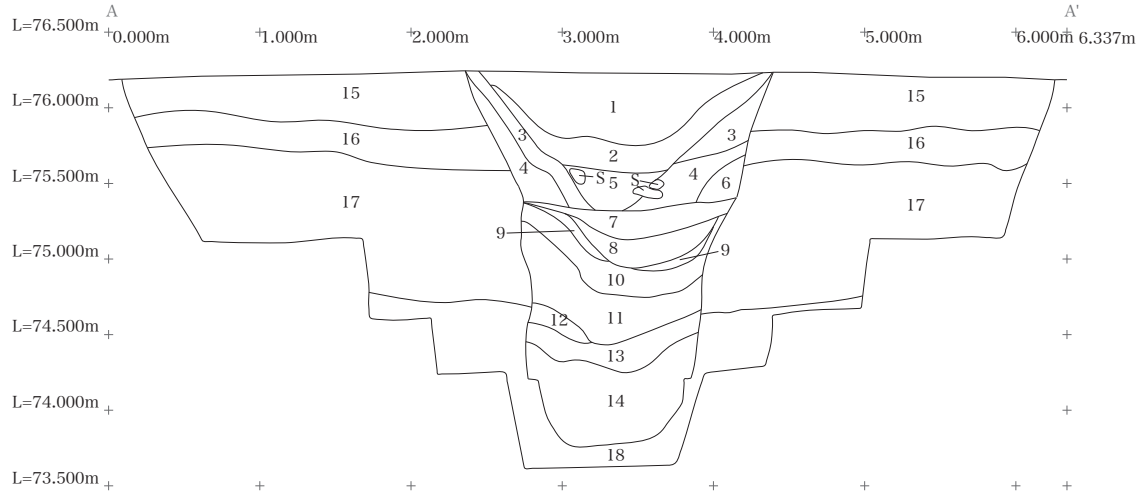


0 1m
(S=1/50)

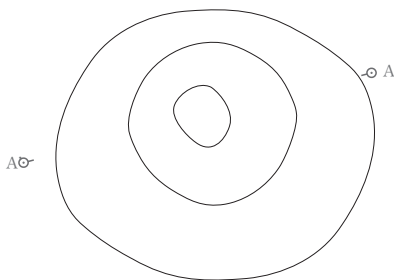
180SE



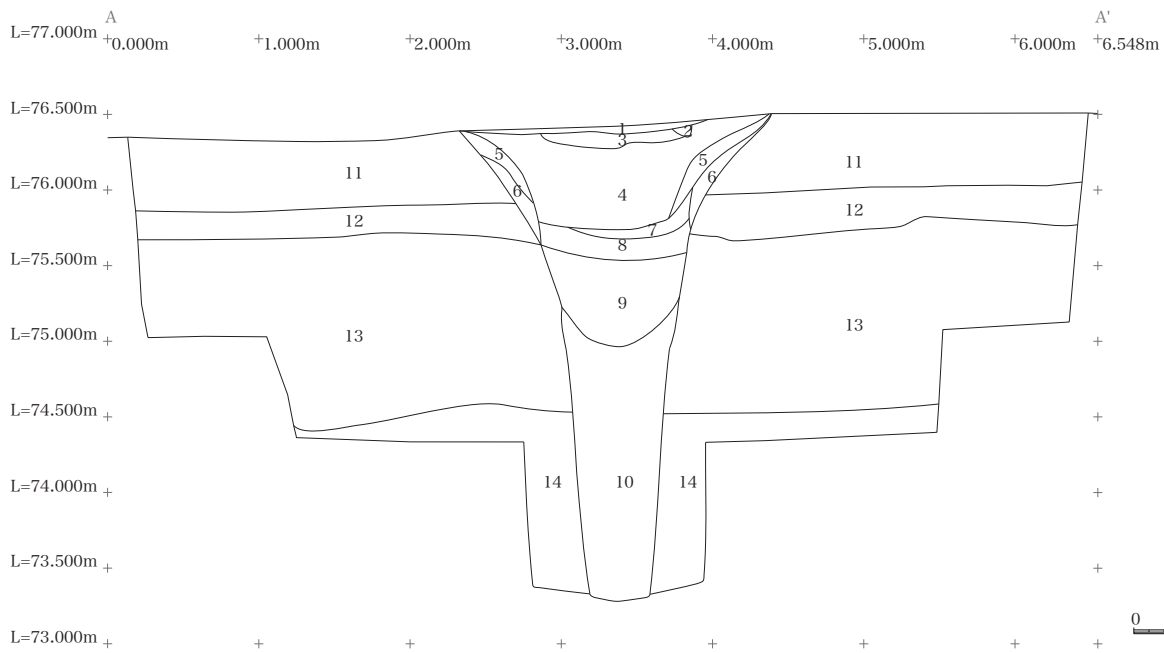
1. 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック微量 炭化物微量含む)
2. 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 5YR5/6 明赤褐色シルトブロック含む)
3. 10YR3/2 黒褐色シルト
4. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの斑土
5. 10YR3/2 黒褐色シルト (中礫・大礫含む)
6. 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック微量含む)
7. 10YR2/1 黒色粘質シルト (10YR5/8 黄褐色粘質シルトブロック含む)
8. 10YR2/1 黒色粘質シルト
9. 10YR2/2 黒褐色粘質シルトと10YR5/8 黄褐色粘質シルトの斑土
10. 10YR2/1 黒色粘質シルト (中礫 砂含む)
11. 10YR2/1 黒色粘質シルトと10YR3/1 黒褐色粘質シルトと10YR5/8 黄褐色粘質シルトの互層 (細礫 砂含む)
12. 10YR5/8 黄褐色粘質シルトと10YR3/1 黒褐色粘質シルトの斑土 (砂含む)
13. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (10YR5/2 灰黄褐色粘質シルトブロック 大礫 砂含む)
14. 10YR3/1 黒褐色粘質シルトと10YR5/8 黄褐色粘質シルトの斑土 (砂含む)
15. 10YR5/6 黄褐色シルト
16. 10YR6/6 明黄褐色シルト
17. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト
18. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト



340SE



1. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
3. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
4. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルトブロック少量含む)
5. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
6. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト (10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む)
7. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト (10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルトブロック微量含む)
8. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
9. 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルト (中粒砂 炭化物少量含む)
10. 10YR3/4 暗褐色粘質シルトと7.5YR5/8 明褐色粘質シルトと7.5YR5/3 にぶい褐色粘質シルトの互層 (細礫 中粒砂含む)
11. 10YR5/6 黄褐色シルト
12. 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
13. 10YR7/6 明黄褐色粘質シルト
14. 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルト



022SD と同一のものと考えられる。埋土からは常滑窯産甕、土師器などが出土している。区画溝として中世に掘削された後、近世以降も利用されたものであろう。

e. その他

330SU (第 74 図) 長径 1.34 m、短径 1.00 m、深さ 0.22 m の規模の楕円形の集石遺構である。1323SI に接しており、1323SI の並んだ礫と関連するものの可能性が考えられる。土師器鍋が出土しており、1323SI との関係から中世Ⅱ期と考えられる。

f. 井戸

180SE (第 75 図) 長径 2.20 m、短径 1.99 m、深さ 3.50 m の規模を測る円形の井戸である。尾張型第 7 型式の墨書山茶碗、常滑窯産甕などが出土しているが、周囲の建物などとの関係から中世Ⅱ期であろうか。

340SE (第 75 図) 長径 2.13 m、短径 1.83 m、深さ 4.14 m の規模を測る円形の井戸である。古瀬戸卸皿、常滑窯産甕、片口鉢、砥石、碗型鉄滓などが出土している。遺構の時期は中世Ⅱ期と考えられる。

(9) H 区 (第 169 図)

H 区では、近世の土坑・溝・井戸などが確認されている。

a. 土坑

029SK (第 76 図) 長径 1.14 m、短径 0.70 m、深さ 0.11 m の規模を測る楕円形の土坑である。明確な時期は不明ながら近世と考えられる。

076SK (第 76 図) 長径 2.90 m、短径 1.56 m、深さ 0.13 m の規模を測る溝状の土坑である。土師器鍋などが出土しているが、近世と考えられる。

b. 溝

H 区の溝は大別して南北方向の溝 (006SD・007SD など) と東西方向の溝 (003SD・009SD) となる。南北方向のものは G 区西側の溝との関係する溝と考えられ、近世以降と考えられる。東西方向のものは現況で確認された水田区画と方向などが一致することから近世後半以降の耕作に伴う溝と考えられる。

003SD (第 76 図) 幅 0.53 m、深さ 0.12 m の規模を測る調査区北東を東西に走る溝である。

013SD (第 76 図) 幅 0.74 m、深さ 0.09 m の規模を測る調査区北西を南北に走る溝である。弥生時代中期の土器が出土しているが流れ込みと考える。

020SD (第 76 図) 幅 0.38 m、深さ 0.14 m の規模を測る調査区中央北よりを東西に走る溝である。近世から近代の時期などが出土している。

033SD (第 76 図) 幅 0.44 m、深さ 0.16 m の規模を測る調査区中央を東西に走る溝である。

071SD (第 76 図) 幅 2.82 m、深さ 0.31 m の規模を測る調査区中央南よりを東西に走る溝である。

082SD (第 76 図) 幅 0.68 m、深さ 0.24 m の規模を測る調査区南を南西から北東に走る溝である。

084SD (第 76 図) 幅 0.36 m、深さ 0.05 m の規模を測る調査区南を南西から北東に走る溝である。縄文晩期と思われる土器が出土しているが流れ込みと考える。

c. 井戸

050SE (第 76 図) 長径 3.20 m、短径 3.06 m、深さ 2.64 m の規模を測る楕円形の井戸である。廃絶時に息抜きの竹をさして埋めていたことが確認されている。常滑窯産赤物甕、焙烙、砥石、などが出土しており、遺構の時期は近世と考えられる。この他の出土遺物として、木桶 2 点、木製の棒状製品 1 点が出土している。

(10) I 区 (第 169 図)

I 区では、中世の竪穴状遺構・掘立柱建物・土坑・溝・井戸などが確認されている。

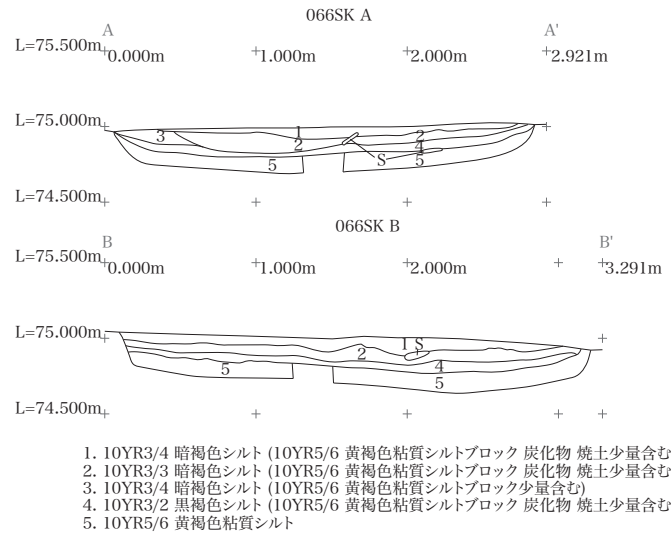
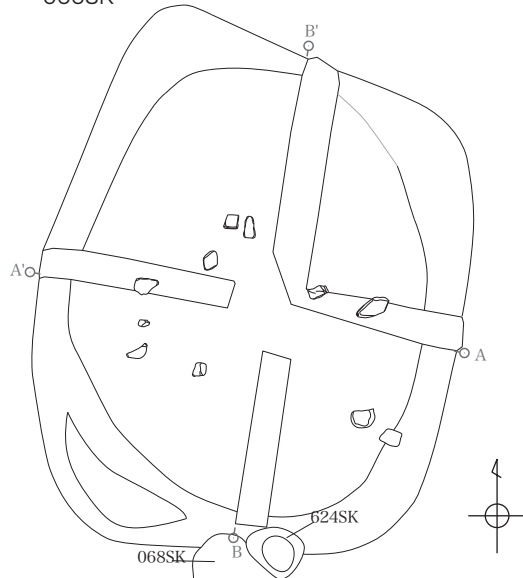
a. 竪穴状遺構

066SI (第 77 図) 長径 3.19 m、短径 2.78 m、深さ 0.21 m の規模を測る隅丸方形の竪穴状遺構である。床面で扁平な礫が検出されている。埋土からは、常滑窯産甕、砥石などが出土しており、他の竪穴状遺構との関係から中世Ⅱ期と考えられる。

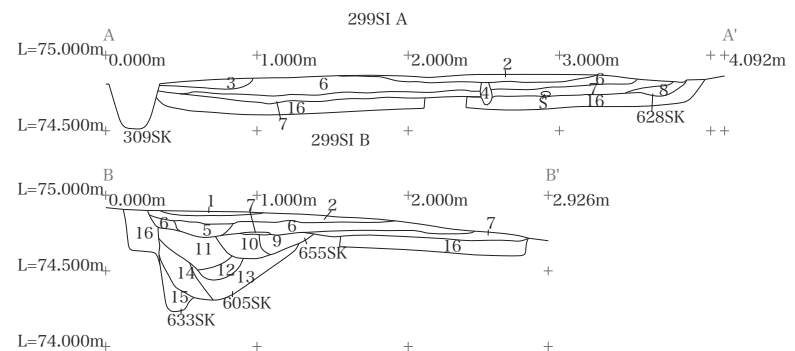
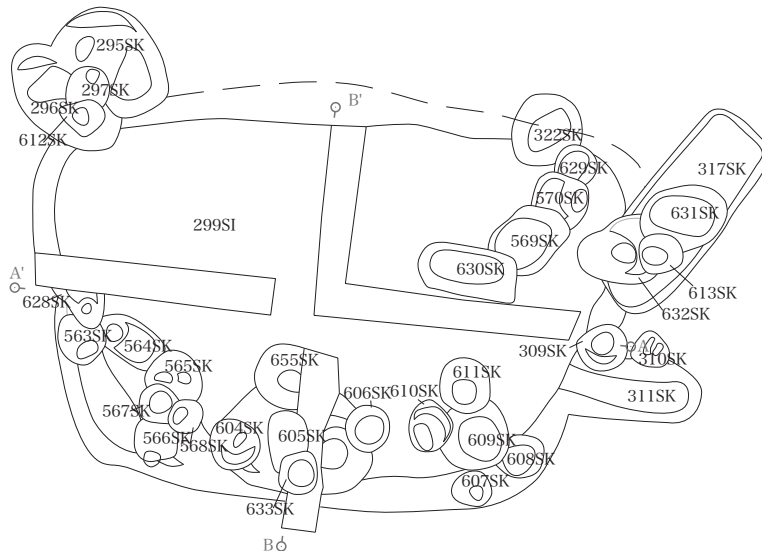
299SI (第 77 図) 長径 4.02 m、短径 2.78 m、深さ 0.18 m の規模を測る隅丸方形の竪穴状遺構である。



066SK



299SI

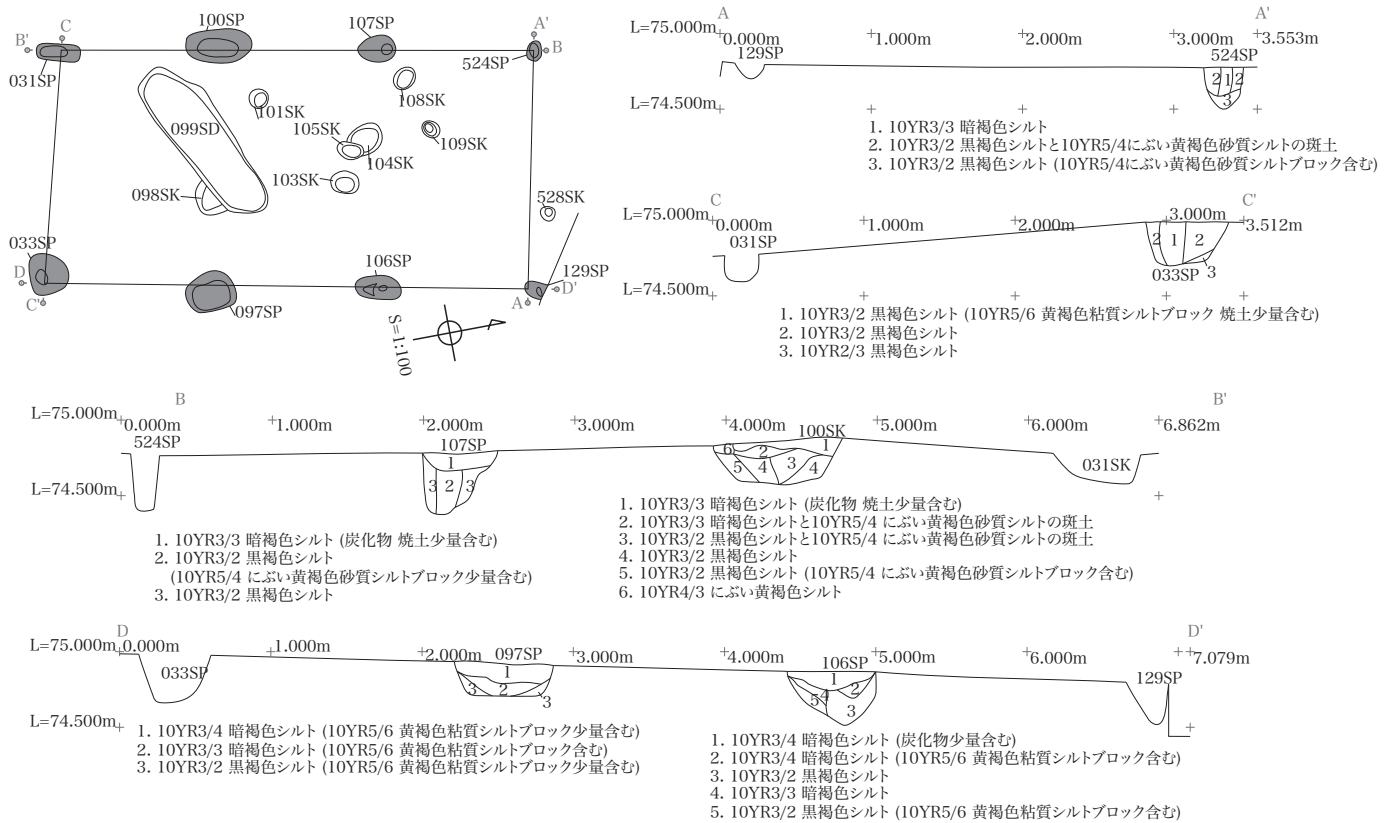


1. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR3/4 暗褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 炭化物含む)
2. 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 炭化物含む)
3. 10YR3/4 暗褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 炭化物少量含む)
4. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトの斑土
5. 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 炭化物少量含む)
6. 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロックが2層との境界に水平に堆積する 貼床か?)
7. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロックの斑土 (炭化物少量含む 貼床か?)
8. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR4/3 にぶい黄褐色シルトの斑土 (炭化物少量含む)
9. 10YR3/4 暗褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)
10. 10YR3/3 暗褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック多量含む)
11. 10YR3/3 暗褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック少量含む)
12. 10YR3/3 暗褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)
13. 10YR3/2 黒褐色シルト (炭化物少量含む)
14. 10YR3/4 暗褐色シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの斑土 (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)
15. 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む)
16. 10YR5/6 黄褐色粘質シルト

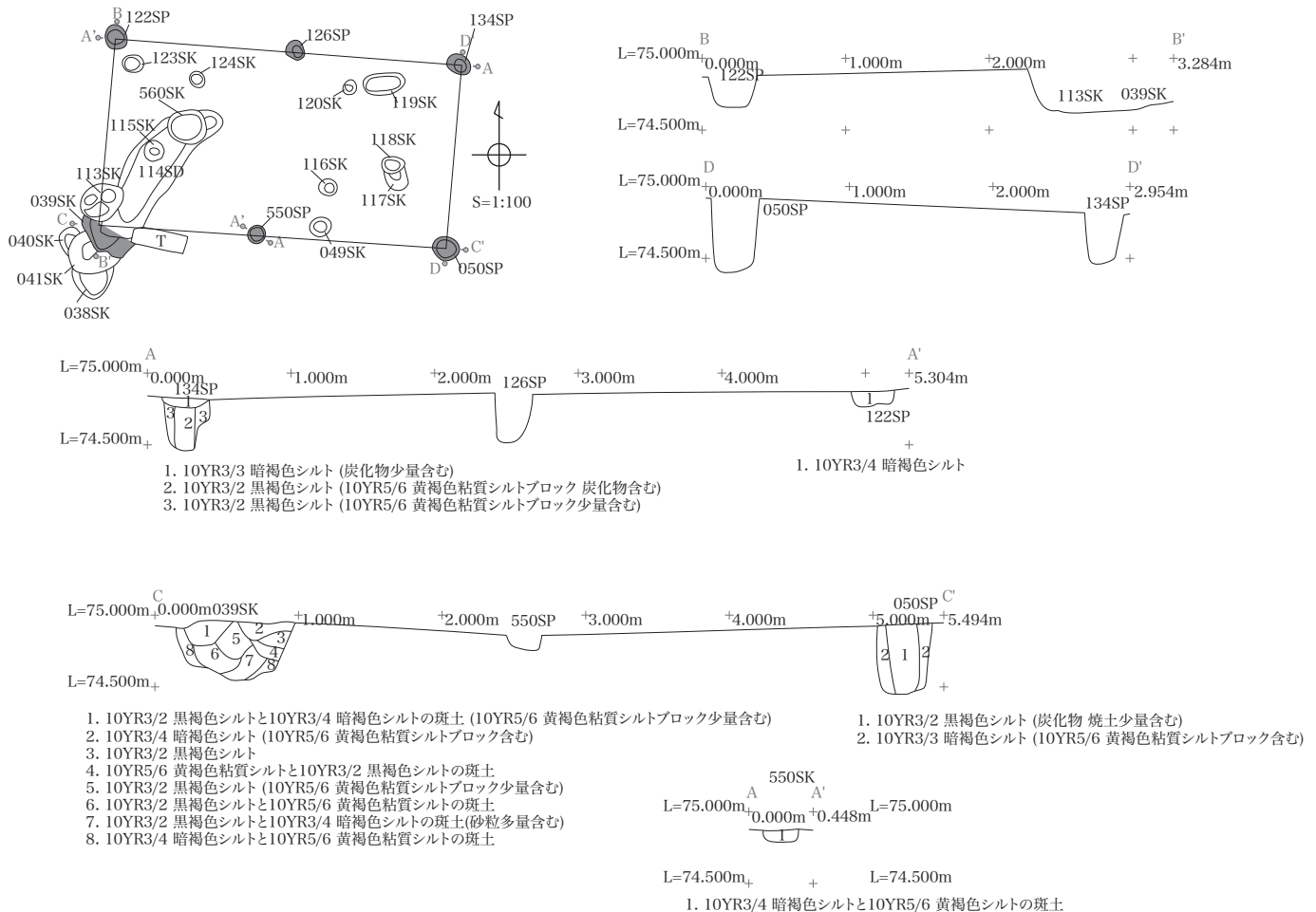
0 1m
(S=1/50)

第 77 図 I 区 SI 平面図・断面図

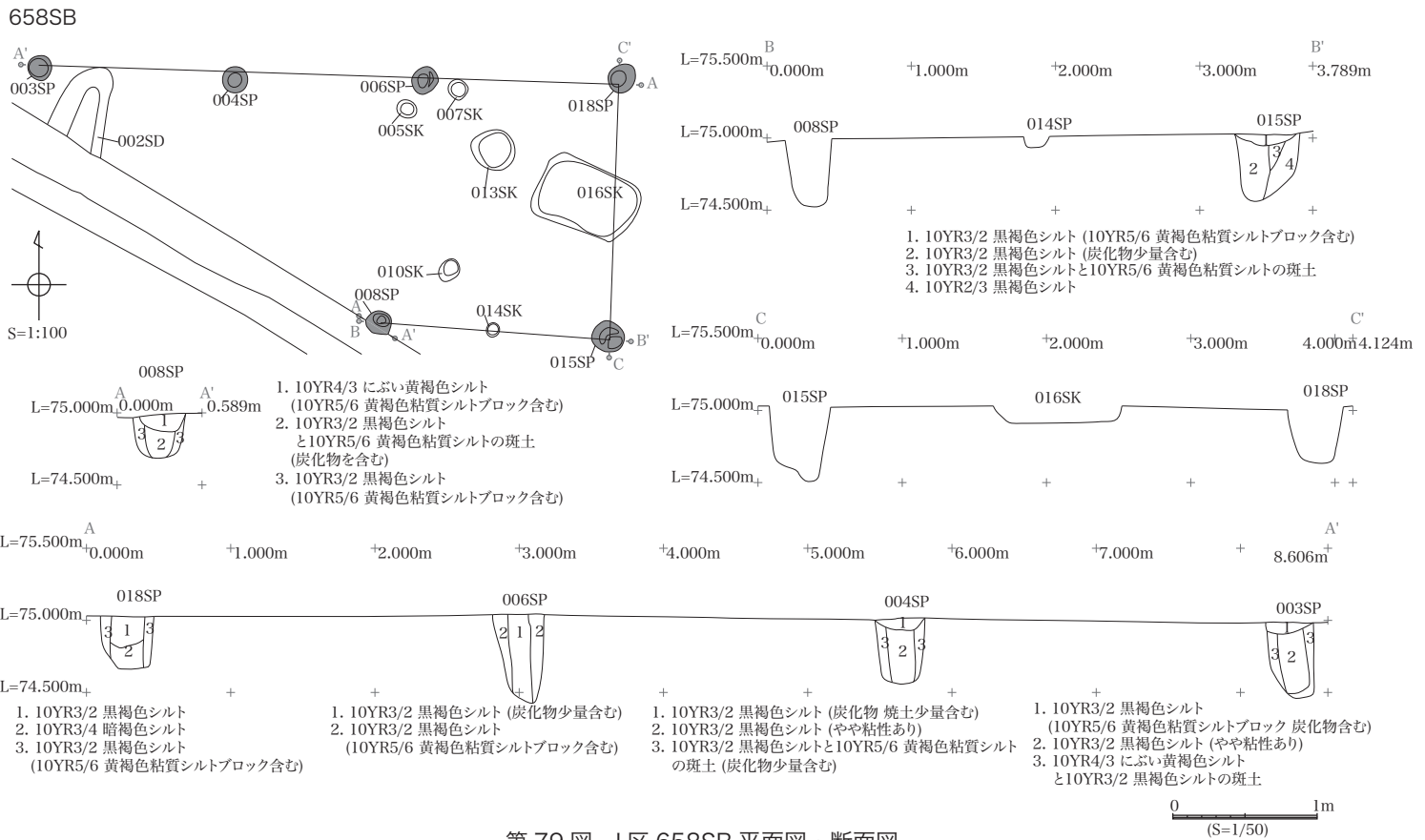
656SB



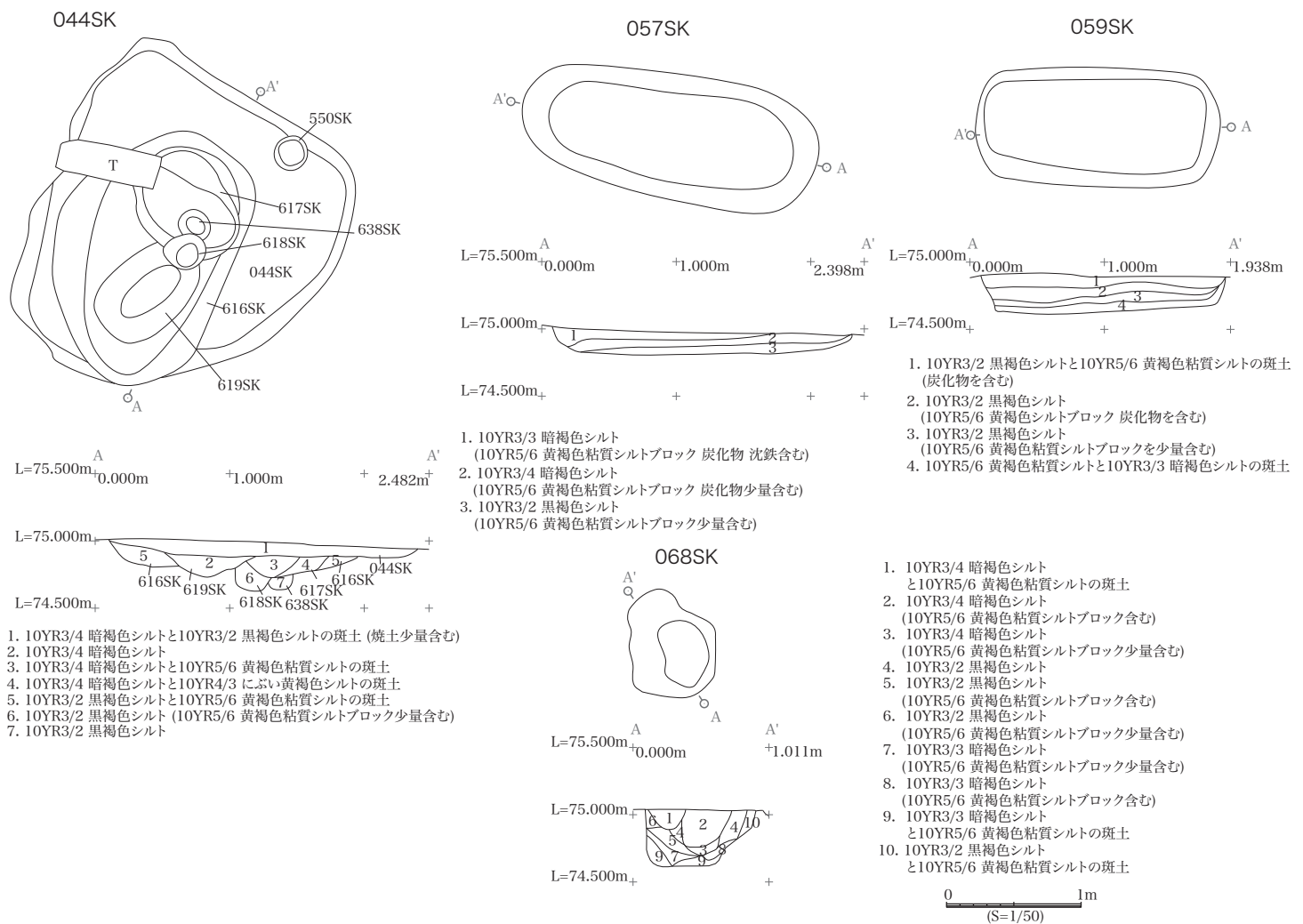
657SB



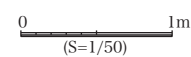
0 1m
(S=1/50)



第 79 図 I 区 658SB 平面図・断面図



第 80 図 I 区 SK 平面図・断面図



他の竪穴状遺構との関係から中世Ⅱ期と考えられる。

b. 掘立柱建物

656SB（第78図） 1間×3間の建物で、規模は6.39 m×2.65 mを測り、031SP、033SP、097SP、100SP、106SP、107SP、129SP、524SPで構成されている。033SPからは古瀬戸播鉢、土師器皿が、106SPからは古瀬戸播鉢が出土している。他の建物との関係から中世Ⅱ期と考えられる。

657SB（第78図） 1間×2間の建物で、規模は4.85 m×2.55 mを測り、039SP、050SP、122SP、126SP、134SP、550SPで構成されている。遺物は134SPから土師器鍋が出土している。他の建物との関係から中世Ⅱ期と考えられる。

658SB（第79図） 一部調査区外のため全体の規模は不明ながら1間×3間と思われる建物で、規模は7.75 m×3.55 mを測り、003SP、004SP、006SP、008SP、015SP、018SPで構成されている。遺物は004SP、006SP、015SPから中世の土器が、018SPから砥石が出土している。他の建物との関係から中世Ⅱ期と考えられる。

c. 土坑

044SK（第80図） 長径2.51 m、短径2.43 m、深さ0.27 mの規模を測る楕円形の土坑である。他の建物との関係から中世Ⅱ期と考えられる。

057SK（第80図） 長径2.24 m、短径0.95 m、深さ0.35 mの規模を測る楕円形の土坑である。常滑窯産甕が出土している。土墳墓の可能性も考えられる。他の遺構との関係を見ると中世Ⅲ期であろうか。

059SK（第80図） 長径1.82 m、短径0.89 m、深さ0.32 mの規模を測る楕円形の土坑である。土墳墓の可能性も考えられる。他の遺構との関係を見ると中世Ⅲ期と考えられる。

068SK（第80図） 長径0.85 m、短径0.69 m、深さ0.50 mの規模を測る不定形の土坑である。明確な時期は不明ながら建物などと同時期と考えることから中世Ⅱ期と思われる。

069SK（第81図） 長径0.86 m、短径0.84 m、深さ0.35 mの規模を測るほぼ円形の土坑である。規模などから土墳墓の可能性も考えられる。他の遺構との関係から中世Ⅲ期と考えられる。

082SK（第81図） 長径1.15 m、短径0.75 m、深さ0.34 mの規模を測る楕円形の土坑である。明確な時期は不明ながら建物などと同時期と考えることから中世Ⅱ期と思われる。

128SK（第81図） 長径1.05 m、短径0.50 m、深さ0.97 mの規模を測る楕円形の土坑である。底部中央に558SKが存在していることから、陥し穴として機能した可能性が考えられる。中世の遺構と考えるものとは埋土が違うためより古い遺構の可能性はあるが時期は不明である。

195SK（第81図） 長径1.58 m、短径1.12 m、深さ0.19 mの規模を測る隅丸方形の土坑である。土墳墓の可能性も考えられる。建物の柱穴と考える547SKを切っていることから、中世Ⅲ期と考えられる。

273SK（第81図） 長径0.91 m、短径0.82 m、深さ0.27 mの規模を測る楕円形の土坑である。明確な時期は不明ながら中世Ⅱ期であろうか。

302SK（第81図） 長径1.23 m、短径0.80 m、深さ0.41 mの規模を測る楕円形の土坑である。明確な時期は不明ながら中世Ⅱ期であろうか。

345SK（第81図） 長径1.41 m、短径0.92 m、深さ0.51 mの規模を測る楕円形の土坑である。明確な時期は不明ながら中世Ⅱ期であろうか。

347SK（第81図） 長径1.31 m、短径0.69 m、深さ0.63 mの規模を測る楕円形の土坑である。明確な時期は不明ながら中世Ⅱ期であろうか。

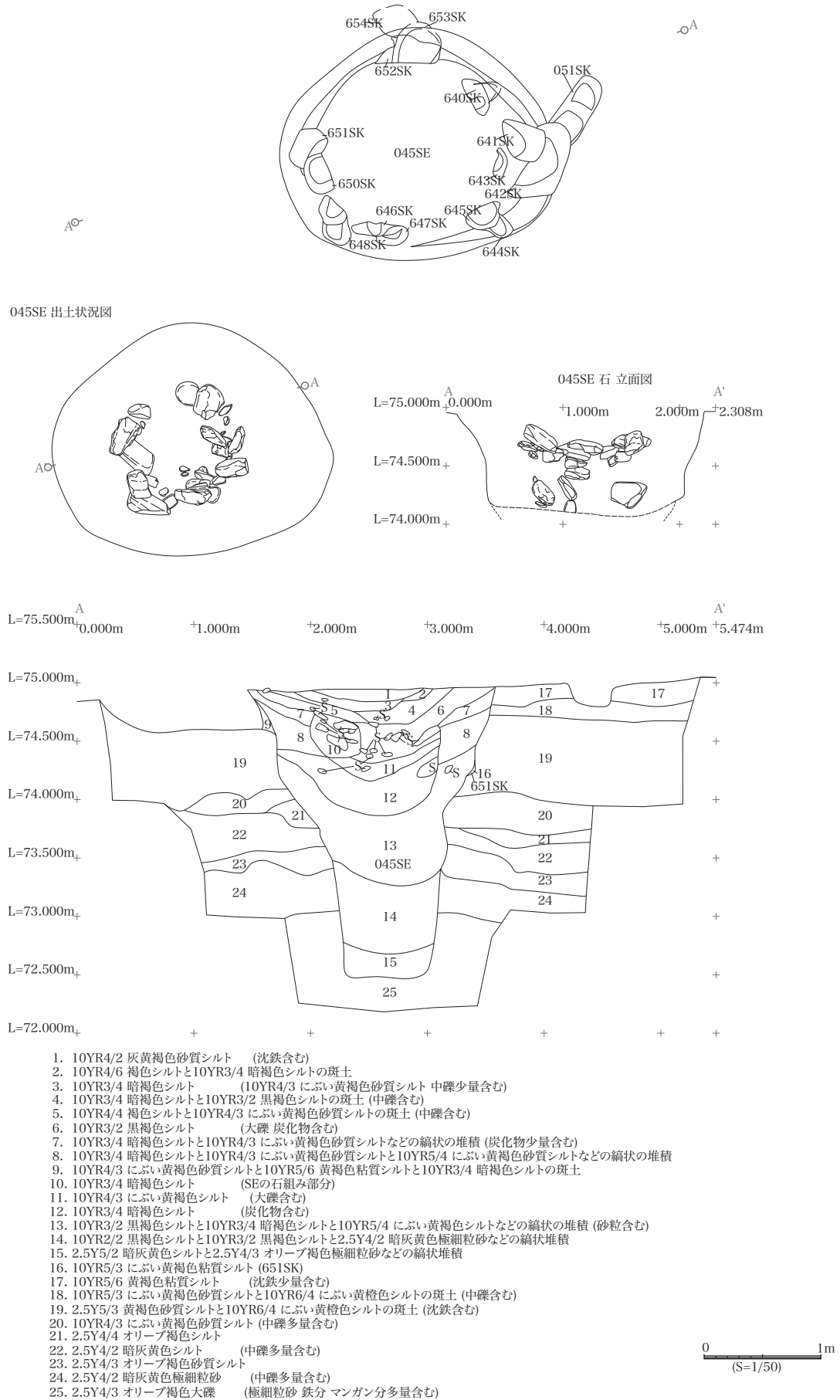
d. 溝

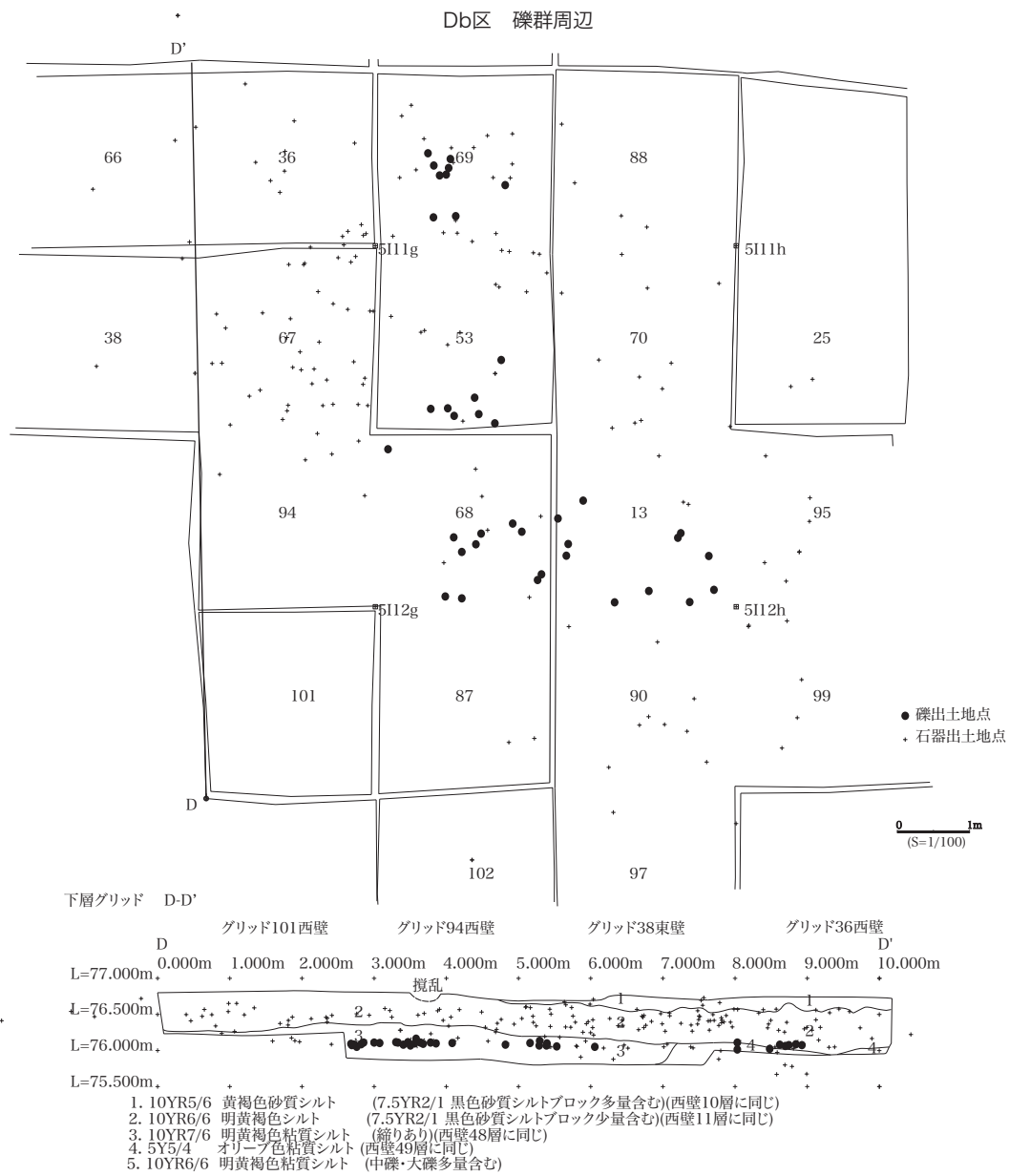
025SD（第81図） 幅0.40 m、深さ0.29 mの規模を測る調査区南東よりに位置する東西に走る溝である。炭化物を多量に含み、轆の羽口が出土していることから鍛冶に関連する遺構の可能性が考えられる。遺物は轆の羽口以外はなく、明確な時期は不明ながら中世Ⅱ期であろうか。

e. 井戸

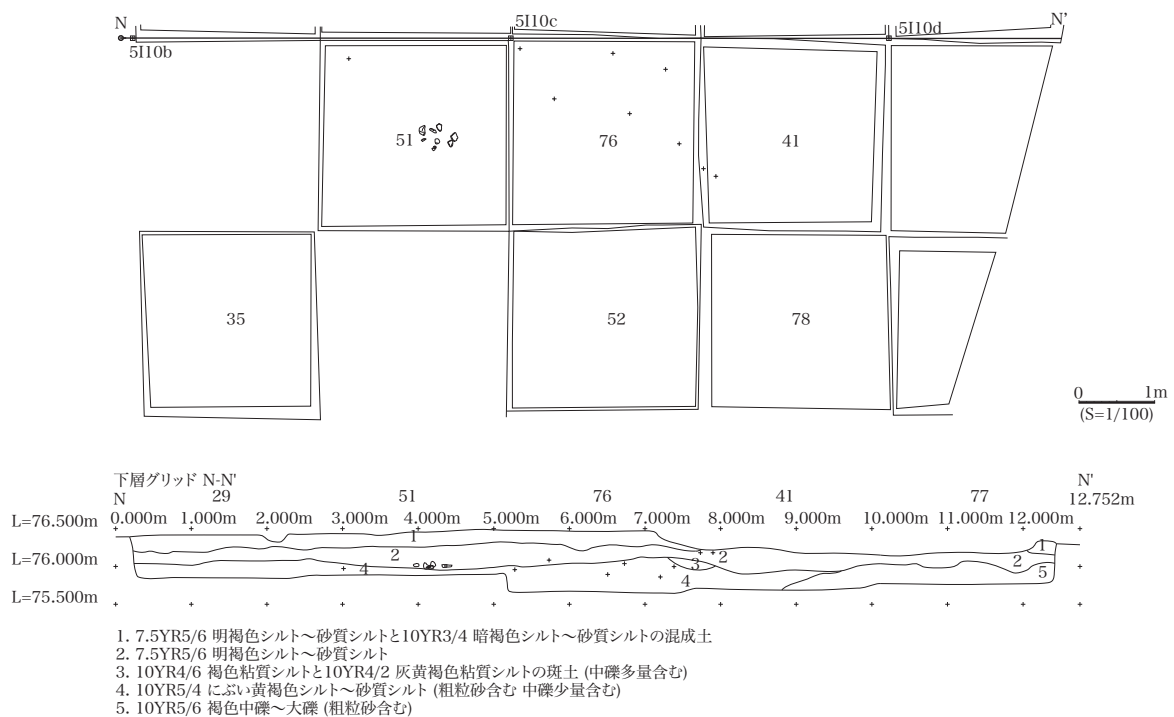
045SE（第82図） 長径2.42 m、短径2.00 m、深さ2.66 mの規模を測る楕円形の井戸である。井戸の上層には、礫が円形に近い形で検出されており、石組みがあった可能性が考えられる。またこれらを取り除いた跡の壁際には多数の柱穴が確認された。これらは水平に掘られたものなどがあることから石を組

045SE

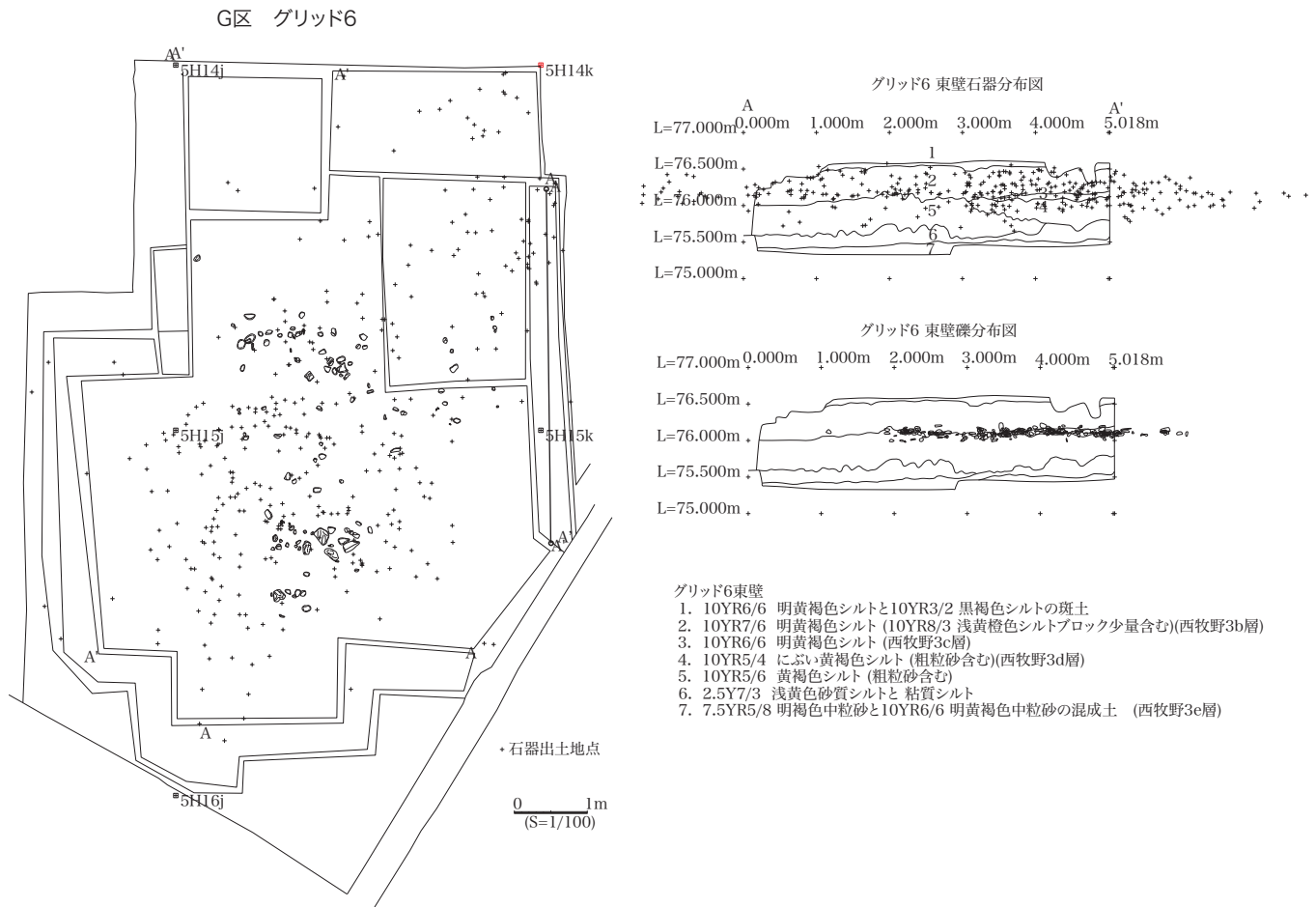




F区 グリッド51周辺



第 83 図 Db区・F区礫群平面図・断面図



第 84 図 G 区礫群平面図・断面図

むための横木を渡すためのものであろうか。古瀬戸卸皿、土師器鍋・羽付釜などが出土している。建物と同時期に機能していたと考えることから中世Ⅱ期であろうか。

(11) 旧石器時代の遺構

今調査では、旧石器時代の多くの石器・剥片類の出土とともに 3 カ所の礫群が確認されている。

Db 区礫群 (第 83 図) Db 区下層グリッド 13・53・68・69 にまたがる礫群で範囲は南北 6.3 m、東西 4.7 m の規模を測るもので標高 76 m 付近の 2 層最下層で集中して出土している。礫はほとんどが地元産の片麻岩で、大きさは拳大のものが中心となっており、被熱して赤化しているものが多く確認されている。

F 区礫群 (第 83 図) F 区下層グリッド 51 で確認された礫群で範囲は南北 0.4 m、東西 0.6 m の規模を測るもので標高 76 m 付近の 2 層最下層で集中して出土している。礫はほとんどが地元産の片麻岩で、大きさは拳大のものが中心となっており、被熱して赤化しているものが多く確認されている。F 区の礫群は非常に小規模で仮に火を焚いたとすればたき火程度の規模であろう。またこの F 区では礫群が確認されたグリッド 51 から北・北東側にのみ石器・剥片類が出土しているという特徴がある。

G 区礫群 (第 84 図) G 区下層グリッド 6 で、弧を描いて確認された礫群で範囲は南北 4.2 m、東西 2.3 m の規模を測るもので標高 76 m 付近の 2 層最下層で集中して出土している。礫はほとんどが地元産の片麻岩で、大きさは拳大のものが中心となっており、被熱して赤化しているものが多く確認されている。

第3章 遺物

第1節 出土遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、27 リットル入りコンテナ約 60 箱に上る（内旧石器は9箱）。その内訳は、土器・陶磁器類、金属製品、木製品、石器・石製品などに分けることができる。ここでは、遺物をこの材質別に大別して報告することとしたい。

遺物の採取方法は、通常の包含層や遺構掘削に置いて発見された遺物を採取する方法である。遺物の多くは遺構から出土しているが、実際の調査では厳密に遺構面を把握して掘削していないなどから、別遺構を起源とする遺物を含んでしまっている場合も想定される。また旧石器遺物に関しては各調査区で任意のグリッドを設定し、できる限り出土地点の記録を取り採取を行った。

第2節 土器・陶磁器類

（1）縄文土器（第85図）

縄文土器については、主に調査区東側の A 区～E 区までの範囲に出土が集中しており、主に調査区東の西野川の流れる谷方向からの自然流路と考えられる溝の埋土から出土している。

1～6 については中期後葉と考えられる土器である。1～3 は A 区 031SD 出土の深鉢、4 は B 区黒色土出土の台付鉢の台部、5 は E 区 159SK 出土の五貫森式深鉢の口縁部、6 は E 区 1032SK 出土のキャリパー型の口縁部と胴部で胴部には隆帯がある。

7～12 は晩期と考えられる土器で、7～10 は深鉢、11 は浅鉢、12 は鉢であるが明確な器種不明である。7～11 は C 区 016SD 出土の土器で 7 と 8 は巻貝条痕文の深鉢で内外面ともに条痕文を施している。9 は深鉢の口縁部で沈線が施されている。10 は二枚貝条痕文が外面に施されている。11 は内外面ともミガキが施されている。12 は H 区 084SD 出土の土器で、表面の摩滅などもあり調整は不明で器種も深鉢と思われるが底部のみであるため明確ではない。7～9・11 は晩期前葉、10・12 は晩期と考えられるが明確な時期は不明である。

（2）弥生土器（第86図）

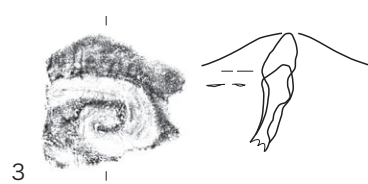
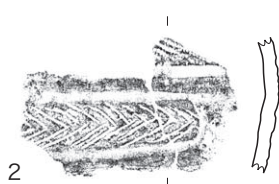
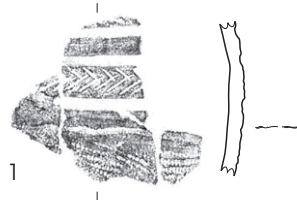
弥生土器については、縄文土器と同様に A 区～E 区の調査区を中心に出土している。

13～15 は条痕文系土器である。13 は A 区 049SK 出土のもので、底部には焼成後に穿孔を施しており、出土状況から土器棺として使用されたものであろうか。14・15 は 430SD 出土のもので口縁部に刻みを施し、外面は条痕を施しており、内面は条痕を施した後ナデが入っている。16 は Da 区 802SK 出土の貝田町式の壺で外面に沈線と竹管文が施されている。17・25・26・28～30 は Db 区 1105SK 出土の古井式土器、17 は外面に条痕を施し、内面は指頭圧痕の後ナデを施している甕。25 は甕、26 は壺の胴部、28～30 は甕の口縁部、30 については口縁に刻みを施している。18～24・27 は C 区 016SD 出土の土器である。18 は古井式の甕、19 は口縁部に刻みを施した甕、20 は外面に半裁竹管文などを施した古井式壺、21 は外面に櫛描沈線を施した壺、22～24 は古井式壺、27 は台付甕の脚部である。31 は F 区の東側表土掘削中に出土した土器で、胎土などから弥生以前の土器と思われるが時期などは不明で、外面はナデ、内面は貝殻条痕を施していると思われるが摩滅により詳細は不明である。

（3）中世以降の土器・陶磁器類

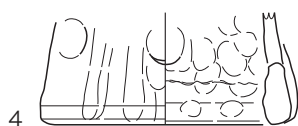
この時期の遺物は瀬戸・美濃窯産陶器と土師器が大半を占め、この他に常滑窯産陶器、中国産磁器などが存在する。瀬戸・美濃窯産陶器については藤澤良祐の分類と編年を参考にした（藤澤 2007）。土師器については、伊勢型鍋と内耳鍋のうちいわゆるくの字形内耳鍋が存在する。内耳鍋については鈴木正貴の分類と編年を参考にした（鈴木 1996）。内耳鍋については鈴木分類の東三河の A 類に該当するものと考えられるが、内面体部の調整などからこれをさらに分類し、ハケメ調整のものを A1 類、板ナデを施すものを A2 類、指オサエ後板ナデを施すものを A3 類、指オサエ後ナデを施すものを A4 類とした。土師器皿については、便宜上ロクロ調整のものを A 類、非ロクロ調整のものを B 類とし、A 類のうち、底部から口縁部に向かいまっすぐに開くものを A1 類、体部から口縁部で外反するものを A2 類、体部と口縁部の間に横ナデによるくぼみができ口縁が内傾するものを A3 類、山茶碗の小皿と同様な形状で小型のものを

A区 031SD

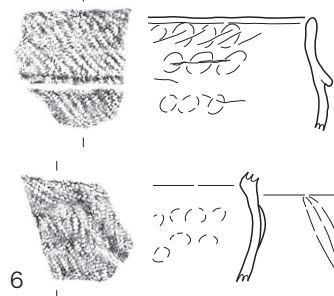


E区 1032SK

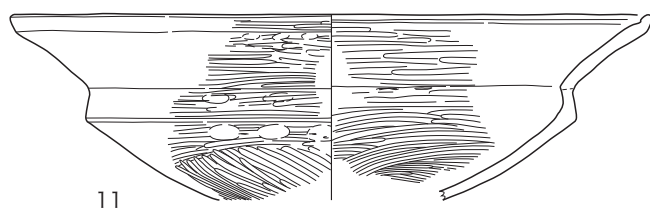
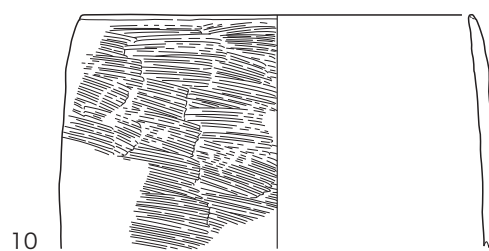
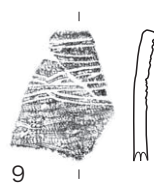
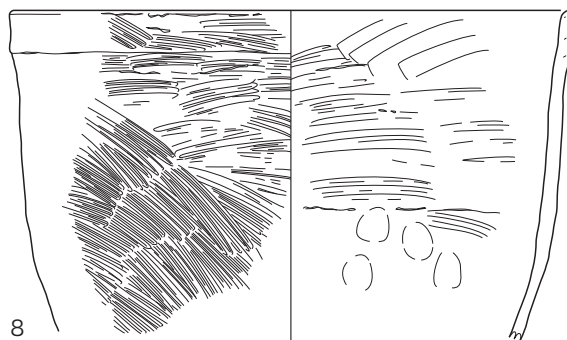
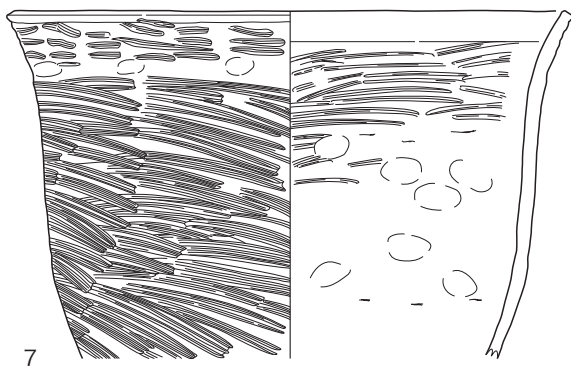
B区 黒色土



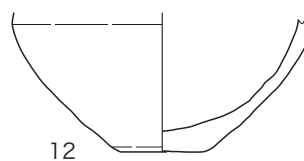
E区 159SK



C区 016SK



H区 084SD

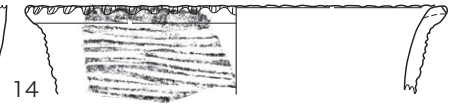


第 85 図 縄文時代の遺物 (S=1/4)

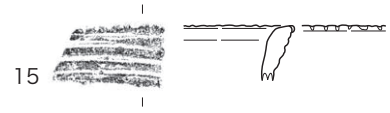
A区 049SK



E区 430SD



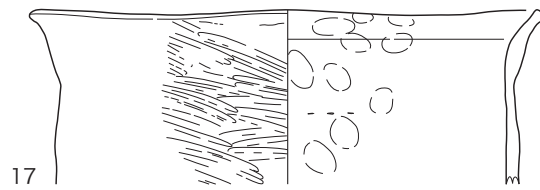
15



Da区 802SK

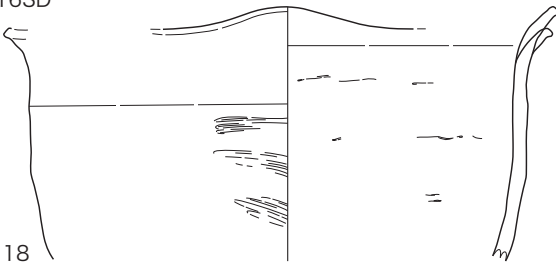


Db区 1105SK



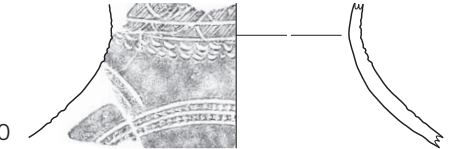
17

C区 016SD

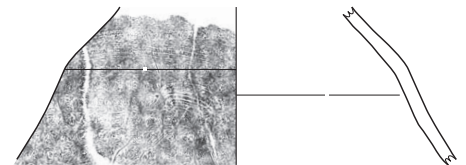


18

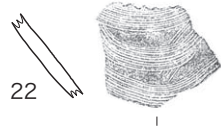
20



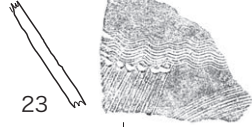
21



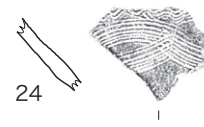
22



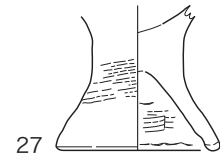
23



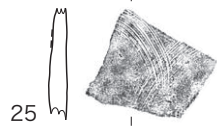
24



27

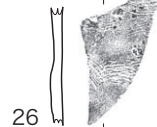


Db区 1105SK



25

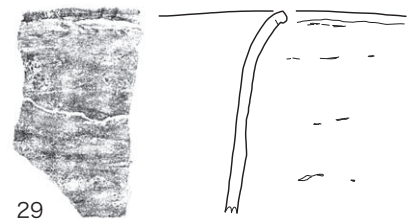
26



28

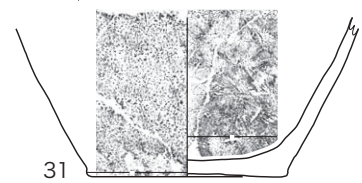


29

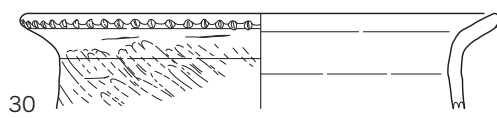


F区東側表土

31

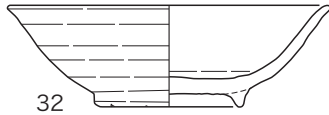


30

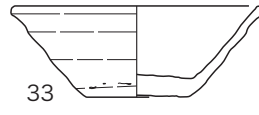


第 86 図 弥生時代の遺物 (S=1/4)

B区 059SK



32



33

C区 1404SK



34

第 87 図 B区・C区出土遺物 (S=1/4)

A4 類とし、B 類のうち、体部から口縁部に外反していくものを B1 類、底部から体部がほぼ直立した後口縁部に向かい開いていくものを B2 類、丸みを帯びた底部を持ち体部との間で横ナデによるくぼみを持ち体部から口縁部にかけて開きながら緩やかに内傾していくものを B3 類とし、小型で浅いものを B4 類とした。

B区・C区出土遺物(第 87 図) 32・33 は尾張型の山茶碗で 32 は B 区 059SK 出土したもので第 3 型式、33 は B 区検出で出土したもので第 9 型式である。34 は C 区 140SK 出土の瀬戸・美濃窯産鉄釉魚波文壺で古瀬戸中 I もしくは II 段階のものである。

Da 区 008SD 出土遺物(第 88 図) 35 は尾張型の山茶碗小皿で第 7 もしくは第 8 型式、36・37 は土師器皿で B3 類、38 は常滑窯産真焼片口鉢で 8 型式、39 は瀬戸・美濃窯産桶で古瀬戸後 IV 古段階、40・41 は同一個体と考えられる瀬戸・美濃窯産尊式花瓶で古瀬戸後 III もしくは後 IV 古段階、42 は常滑窯産真焼甕 6b 型式、43・44 は土師器の伊勢型鍋で 15 世紀初頭、45～53 は土師器内耳鍋で 45・49・50・52・53 は A1 類、48 は A2 類、47・51 は A3 類、46 は A4 類となる。

Da 区 008SD・058SD 出土遺物(第 88 図 54～56) 54 は瀬戸・美濃窯産灰釉平碗で古瀬戸後 IV 古段階、55・56 は内耳鍋で 55 は A2 類、56 は A4 類である。

Da 区 058SD 出土遺物(第 88 図 57～61) 57 は土師器皿で B3 類、58 は瀬戸・美濃窯産卸皿で古瀬戸後 II 段階、59 は土師器内耳鍋で A2 類、60 は瀬戸・美濃窯産搦鉢で古瀬戸後 IV 古段階、61 は尾張型片口鉢で第 10 型式である。

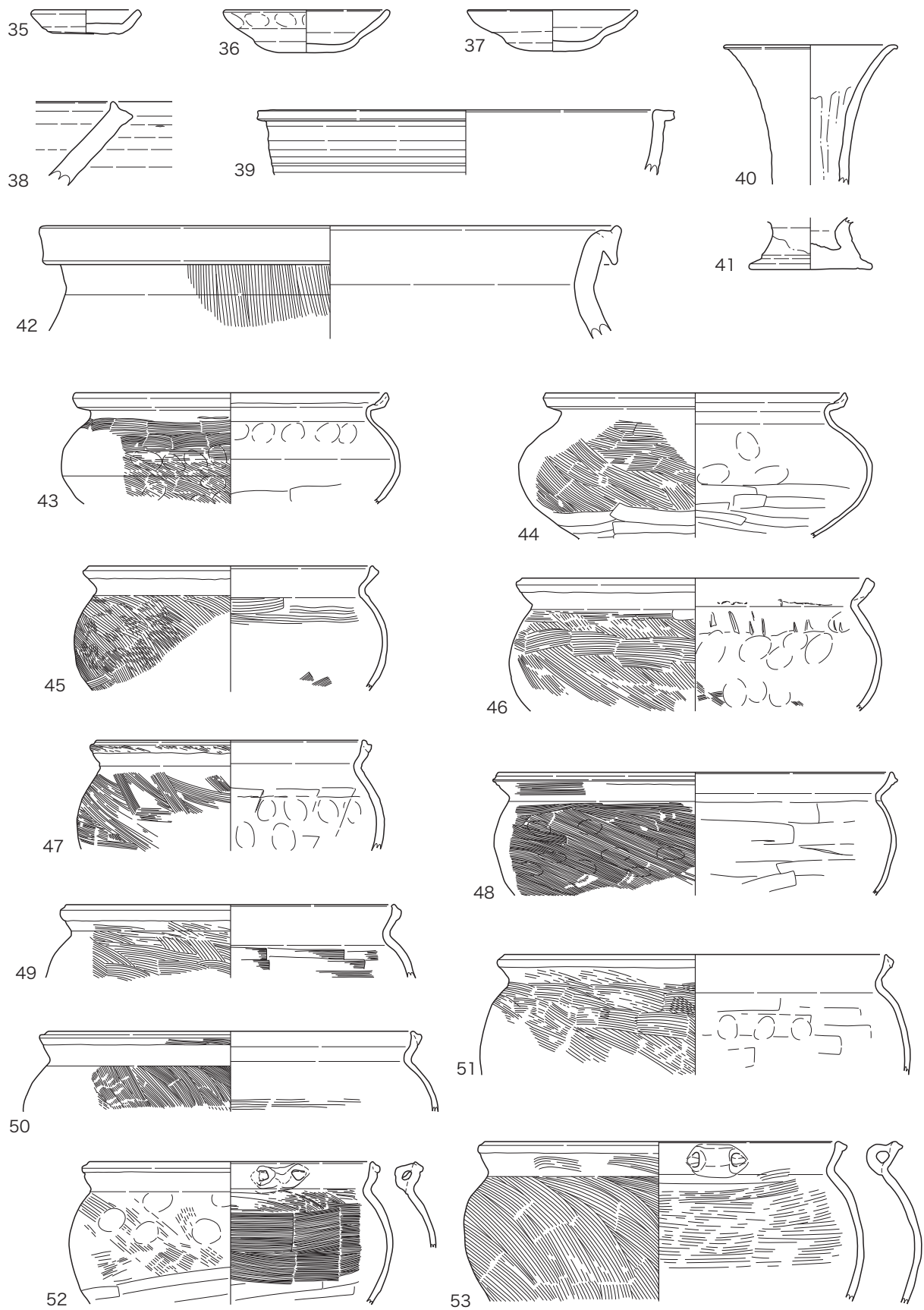
Da 区土坑出土遺物(第 88 図 62～67) 62 は 368SK 出土の土師器皿で B4 類、63・67 は 241SK 出土遺物で 63 は瀬戸・美濃窯産灰釉平碗で古瀬戸後 III 段階、67 は土師器内耳鍋で A3 類、64 は 293SK 出土の瀬戸・美濃窯産搦鉢で古瀬戸後 IV 古段階、65 は 106SK 出土の瀬戸・美濃窯産練り鉢で 19 世紀前半、66 は 435SK 出土の土師器伊勢型鍋で 15 世紀初頭である。

Da 区その他出土遺物(第 88 図 68・69) 68・69 は表土などを掘削時に出土した遺物で、68 は尾張型山茶碗小皿で第 8 もしくは第 9 型式、69 は瀬戸・美濃窯産甕で 19 世紀である。

Db 区出土遺物(第 90 図) 70～72 は尾張型山茶碗小皿で、70 は表土掘削中に出土したもので第 7～第 9 型式、71 は 1682SK 出土のもので第 8 もしくは第 9 型式、72 は 1827SK 出土のもので第 9 もしくは第 10 型式である。73 は 2004SK 出土の尾張型山茶碗で第 10 型式、74 は 1116SD 出土の尾張型片口鉢で第 8 もしくは第 9 型式である。

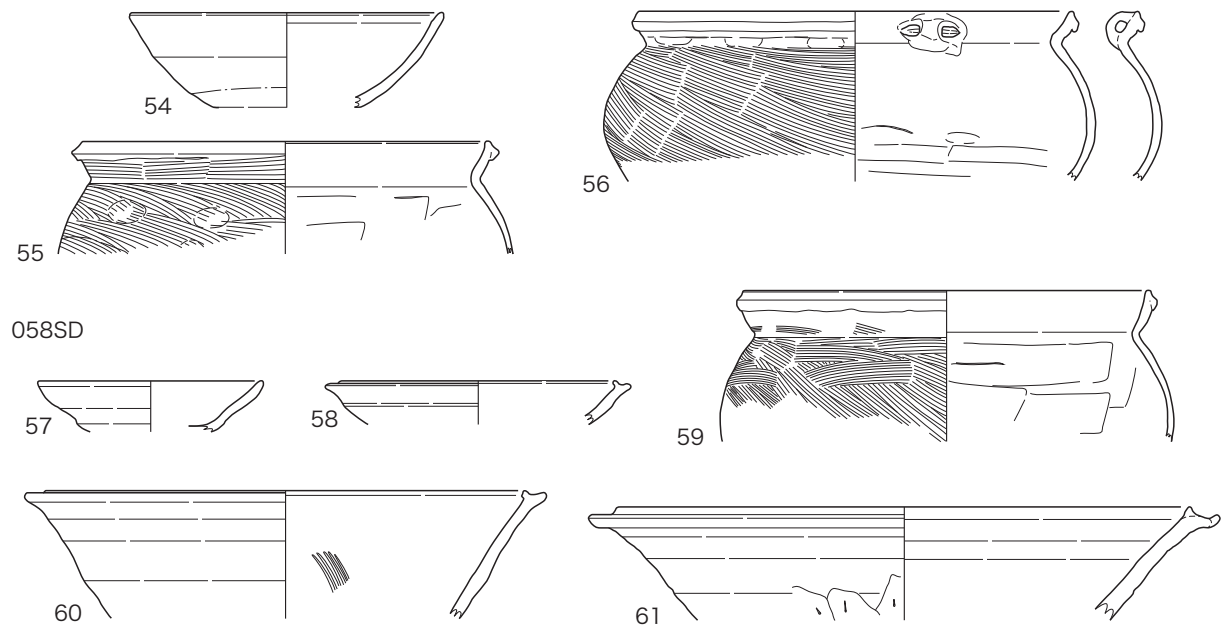
E 区竪穴状遺構出土遺物(第 91 図 75～81) 75 は 137SI 出土の土師器羽付釜で 15 世紀初頭、76～81 は 326SI 出土遺物で、76～79 は尾張型山茶碗小皿で 76・77 は第 8 もしくは第 9 型式、78 は第 9 もしくは第 10 型式、79 は第 7～第 9 型式のもので外底部に墨書が施されている。80・81 は尾張型山茶碗で 80 は第 9 型式、81 は第 7 型式で底部に墨書が施されている。

E 区土坑出土遺物(第 91 図 82～96) 82 は 995SK 出土の土師器皿で B2 類、83～88 は尾張型山茶碗小皿で、83 は 275SK 出土、84・87 は 856SK 出土、85 は 878SK 出土、86 は 702SK 出土、88 は 1130SK 出土のもので、83・85 は第 8 もしくは第 9 型式、84・86 は第 9 もしくは第 10 型式、87・88 は第 7 もしくは第 8 型式でともに外底部に墨書が施されている。89～95 は尾張型山茶碗で、89 は 278SK 出土、90 は 726SK 出土、91 は 1389SK 出土、92 は 284SK 出土、93 は 1025SK 出土、94・95 は 1244SK 出土のもので、89 は第 8 型式、90～92 は第 7 型式で 92 は外底部に墨書が施された痕跡が残る、93～95 は第 9 型式でいずれも外底部に墨書が施されている。96 は 800SK 出土の土師器伊

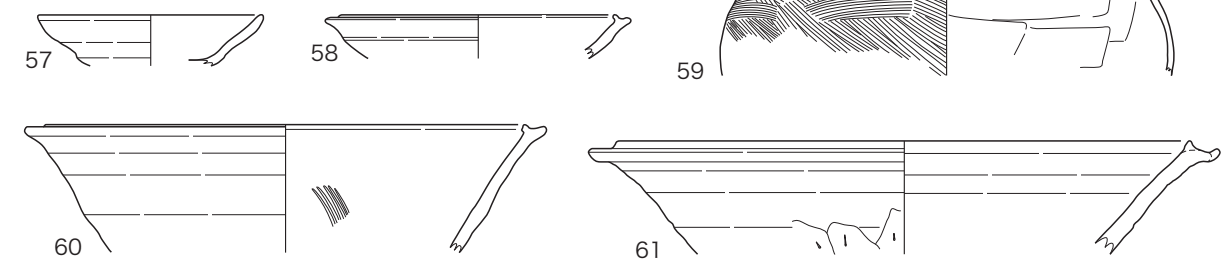


第 88 図 Da 区 008SD 出土遺物 (S=1/4)

008SD・058SD



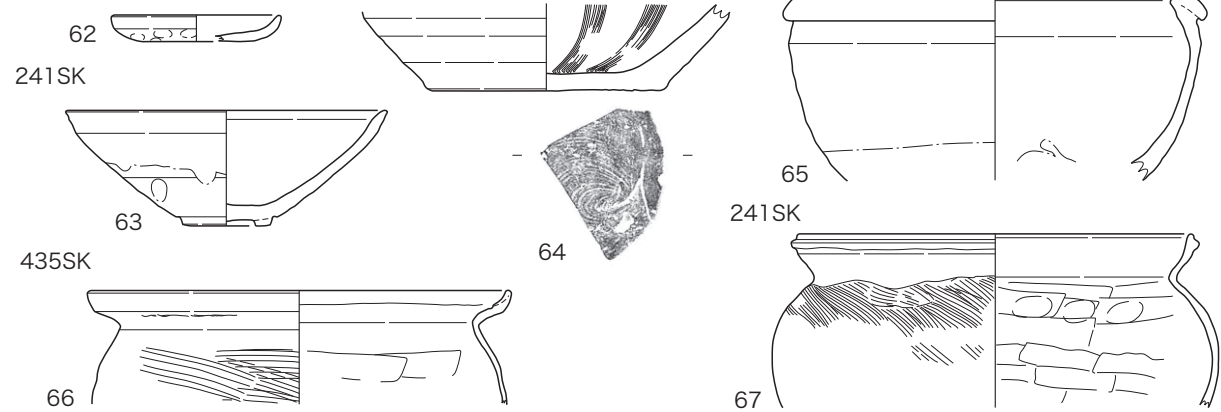
058SD



368SK

293SK

106SK



その他

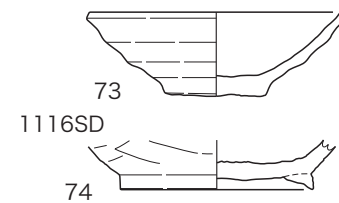
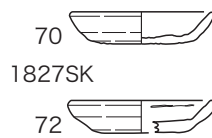


第 89 図 Da 区 SD・SK その他出土遺物 (S=1/4)

表土中

1682SK

2004SK



第 90 図 Db 区出土遺物 (S=1/4)

勢型鍋で15世紀初頭である。

E区井戸出土遺物(第91図97～99) いずれも420SE出土遺物である。97は尾張型山茶碗小皿で第7もしくは第8型式、98は尾張型片口鉢で第8もしくは第9型式、99は尾張型山茶碗で第9型式のもので外底部に墨書が施されている。

E区道路遺構・その他出土遺物(第91図100・101) いずれも尾張型山茶碗小皿で、100は001SR出土のもので第8もしくは第9型式、101は表土掘削中に出土したもので第9もしくは第10型式である。

F区土坑出土遺物(第92図102～115) 102～104は土師器皿で、102は553SK出土、103は591SK出土、104は654SK出土のもので、102・103はB1類、104はA2類で内面及び外面の一部にススが付着していることから灯明皿として使用されたものと考えられる。105～108は尾張型山茶碗小皿で、105・108は827SK出土、106は850SK出土、107は357SK出土のもので、105・106・108は第8もしくは第9型式、107は第10型式で、106～108については外底部に墨書が施されている。109・110・112～115は尾張型山茶碗で、109は534SK出土、110・115は704SK出土、112は535SK出土、113は378SK出土、114は542SK出土のもので、すべて第7型式のもので112～115については外底部に墨書が施されている。111は199SK出土の瀬戸・美濃窯産広東茶碗で19世紀、116は113と同じく378SK出土のもので蓮弁の中国青磁で13世紀である。

F区溝・SX出土遺物(第92図117～119) 117は022SD出土の瀬戸・美濃窯産天目茶碗で、古瀬戸後Ⅲ段階である。118・119は980SX出土の尾張型山茶碗の底部でどちらも第7型式のもので、外底部に墨書が施されおり、欠損部の状況などから加工円盤として利用されたものである可能性も考えられる。

G区竪穴状遺構出土遺物(第93図120～125) 120～121・123は060SI出土、122・124・125は1323SI出土遺物である。120～122は尾張型山茶碗小皿で、120・121は第8もしくは第9型式、122は第7もしくは第8型式で、121・122は外底部に墨書が施されている。123は尾張型山茶碗で第7型式、124は尾張型片口鉢で第10型式、125は瀬戸・美濃窯産折縁深皿で古瀬戸後Ⅰ段階である。

G区土坑出土遺物(第93図126～143) 126～128は土師器皿である。126は354SK出土でA3類のもので内面の口縁部近くに赤色顔料と思われる付着物が確認されている。127は790SK出土、128は1714SK出土のもので、いずれもA4類である。129～136は尾張型山茶碗小皿で、129は339SK出土、130は379SK出土、131は749SK出土、132は127と同じく790SK出土、133は128と同じく1714SK出土、134は312SK出土、135は647SK出土、136は1158SK出土のもので、129・130・133・136は第8もしくは第9型式、131は第10型式、132・134は第7もしくは第8型式、135は第7～第9型式のもので、134～136については外底部に墨書が施されている。137・138は瀬戸・美濃窯産緑釉小皿で、137は700SK出土のもので古瀬戸後Ⅰ段階、138は996SK出土のもので古瀬戸後Ⅳ古段階である。139・140は尾張型山茶碗で、139は459SK出土のもので第9型式、140は1364SK・1365SK出土のもので第7型式である。141は137と同じく700SK出土の瀬戸・美濃窯産折縁深皿で古瀬戸後Ⅰ段階、142は965SK出土の尾張型片口鉢で第10型式、143は314SK出土の常滑窯産真焼片口鉢で6b型式である。

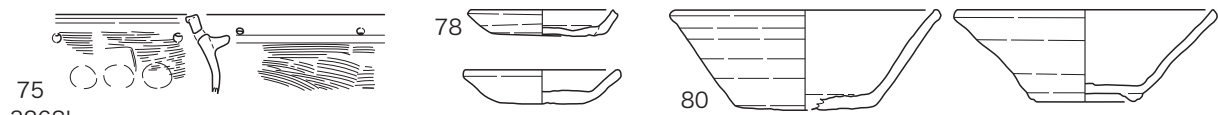
G区溝出土遺物(第93図144～146) 144・145はいずれも004SD出土の尾張型山茶碗小皿で第9型式である。146は100SD出土の瀬戸・美濃窯産天目茶碗で17世紀後半である。

G区井戸出土遺物(第93図147～149) すべて180SE出土遺物である。147・148は尾張型山茶碗で第7型式、いずれも外底部に墨書が施されており、147については底部よりの体部外面にも墨書が確認された。149は常滑窯産真焼甕で6a型式である。

G区その他出土遺物(第93図150～155) すべて検出段階で出土した遺物である。150・151は土師器皿で、150はA1類、151はA4類、152は尾張型山茶碗小皿で第8もしくは第9型式、153は尾張型山茶碗で第9型式、154は蓮弁の中国青磁で13世紀、155は瀬戸・美濃窯産卸皿で古瀬戸後Ⅰ段階である。

I区出土遺物(第94図) 156は045SE出土の土師器茶釜、157は057SK出土の常滑窯産広口壺で

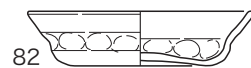
137SI



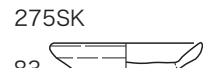
326SI



995SK



275SK



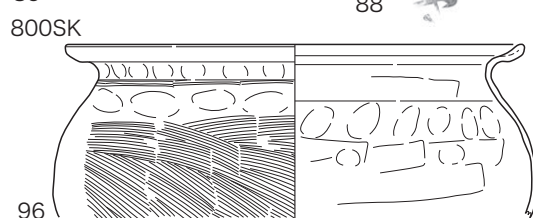
856SK



878SK



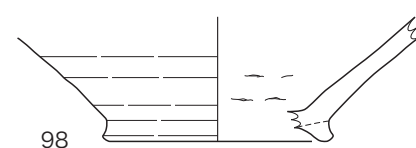
800SK



420SE



98



702SK



856SK



1130SK



88



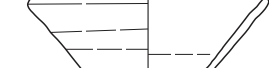
278SK



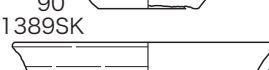
726SK



1389SK



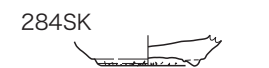
284SK



92



91



92



92

001SR



100



100

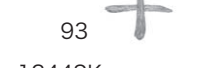


100

1025SK



93



1244SK



94



94



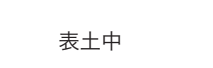
94



94



94



94



94



94



94



94



94



94



94



94



94



94



94



94



94



94



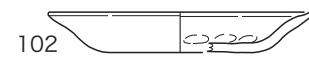
94



94

第 91 図 E 区出土遺物 (S=1/4)

553SK



102



591SK



654SK



827SK



1357SK



107



107



107



107



107



107



107

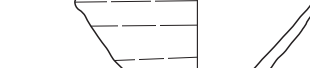
534SK



109



704SK



110



1995SK



022SD



111



117



116



117



117



117



117

535SK



112



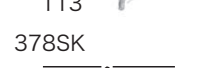
378SK



113



378SK



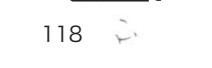
116



980SX



118



119



119



119

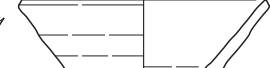


119



119

542SK



114



704SK



115



115



115



115



115



115



115



115

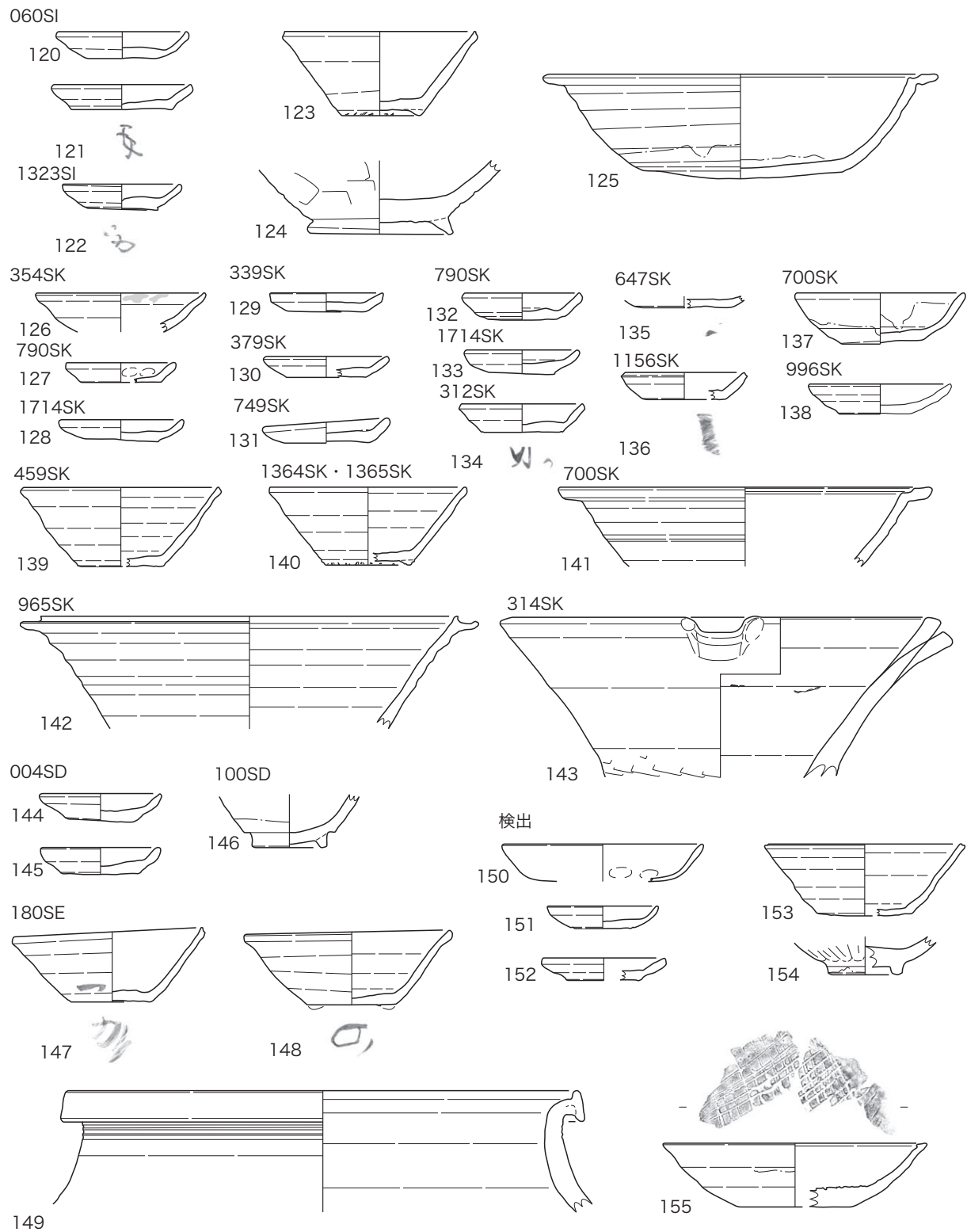


115

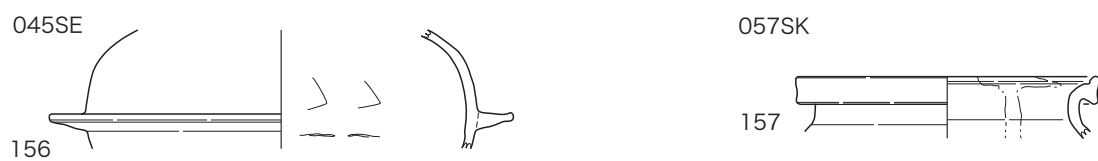


115

第 92 図 F 区出土遺物 (S=1/4)



第 93 図 G区出土遺物 (S=1/4)



第 94 図 I区出土遺物 (S=1/4)

6a 型式である。

(4) 加工円盤・陶丸

加工円盤 (第 95 図 158 ～ 160) 158 は E 区 007SK 出土のもので瀬戸・美濃窯産尾呂茶碗の底部を加工したもので 18 世紀前半、159 は F 区 846SD 出土のもので瀬戸・美濃窯産灰釉平碗の底部を加工したもので古瀬戸後Ⅲもしくは後Ⅳ古段階、160 は G 区 150SD 出土のもので瀬戸・美濃窯産天目茶碗の底部を加工したもので 17 世紀後半である。

陶丸 (第 95 図 161 ～ 167) 161 は E 区 137SKSI 出土のもので 2.4×1.8 cm である。162 ～ 164 は E 区 746SK 出土のもので 162 は 2.2×2.0 cm、163 は 2.3×2.1 cm、164 は 2.3×2.2 cm である。165 ～ 167 は G 区 060SI 出土のもので、165 は 2.2×2.0 cm、166 は 2.3×2.1 cm、167 は 2.2×2.0 cm である。168 は G 区 472SK 出土のもので 2.5×2.4 cm である。169 は G 区 1324SI 出土のもので 2.1×2.0 cm である。

第 3 節 金属製品

本遺跡から出土した金属関連遺物としては、鍛冶関連遺物・鉄製品・銅製品・銭貨などがある。

(1) 鍛冶関連遺物 (第 96 図)

鍛冶関連遺物は本調査で 5 点出土している。170・171 は Da 区出土の鉄滓で、170 は 821SK 出土、171 は 008SD 出土である。172・173 は G 区出土の鉄滓で、172 は 399SK 出土、173 は 340SE 出土である。174 は I 区 025SD 出土の鞆の羽口で厚さ 2.8 cm、内径 3.5 cm である。

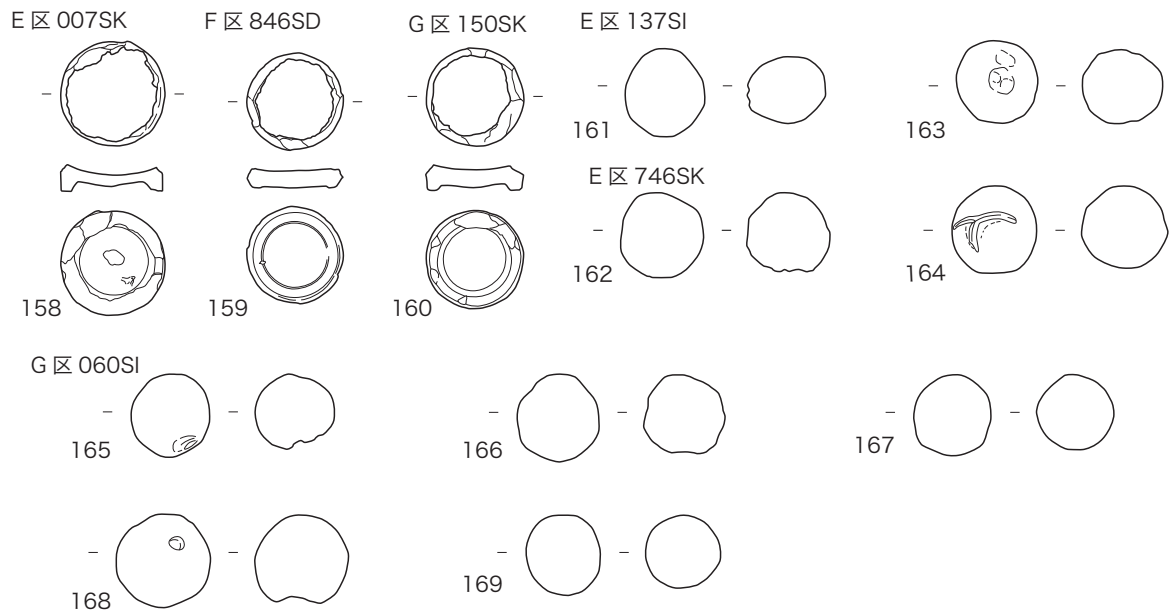
(2) 金属製品 (第 97 図)

175 は C 区 047SK 出土の銅製品、筒状のものであるが用途は不明である。176 は Da 区 171SK 出土の鉄銭で、径は 2.9 cm、鍔により銭名は不詳である。177 は Da 区 008SD 出土の鉄製品で、袋状になり内部に木質が残ることから槍のような機能を持ったものの可能性も考えられる。178 は Da 区検出時に出土した銅製品でクリップ状のもので用途は不明である。179 は F 区 124SK 出土の刀子である。180 は H 区 050SE の最上層で出土した機銃弾で、第 2 次大戦中の 12.7 mm 機銃の弾丸と考えられる。大戦中に本遺跡北方のおおだの森の監視哨が米軍機の機銃掃射を受けた記録があることから、その際のものであろうか。

第 4 節 木製品

本遺跡の木製品は H 区の 050SE でのみ出土している。

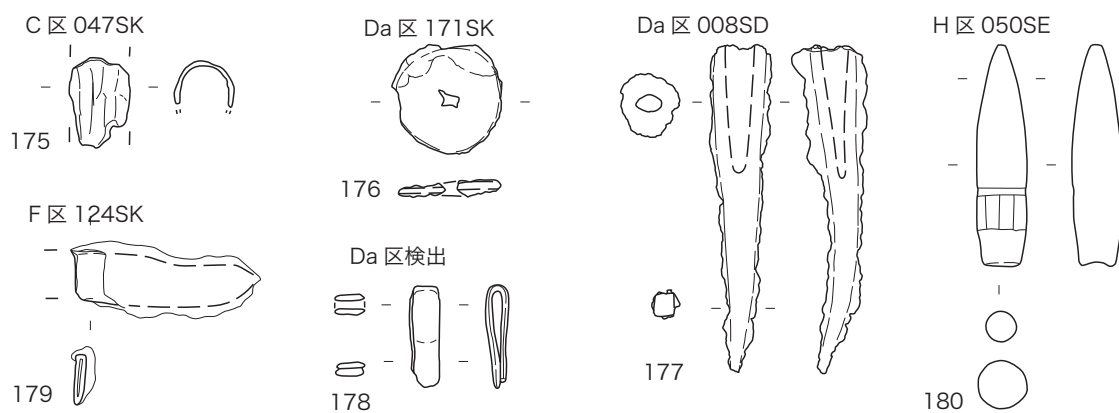
050SE 出土遺物 (第 98 図) 181 は棍棒状のもので、長さ 49.2 cm、最大径 4.45 cm、最小径 3.0 cm となっている。182・183 はいずれも桶である。182 は口径 31.4 cm、底径 30.0 cm、高さ 38.1 cm で穴の周囲にはひもずれの痕跡が残存する。形状からするといわゆる「肥桶」と考えられる。183 は口径 32.6 cm、底径 29.4 cm、高さ 47.2 cm で、穴の上部にくぎを打ったような痕跡が確認されており、出土段階での残存状況の悪さから図化できなかったが、竹製の箍によって組まれていた。



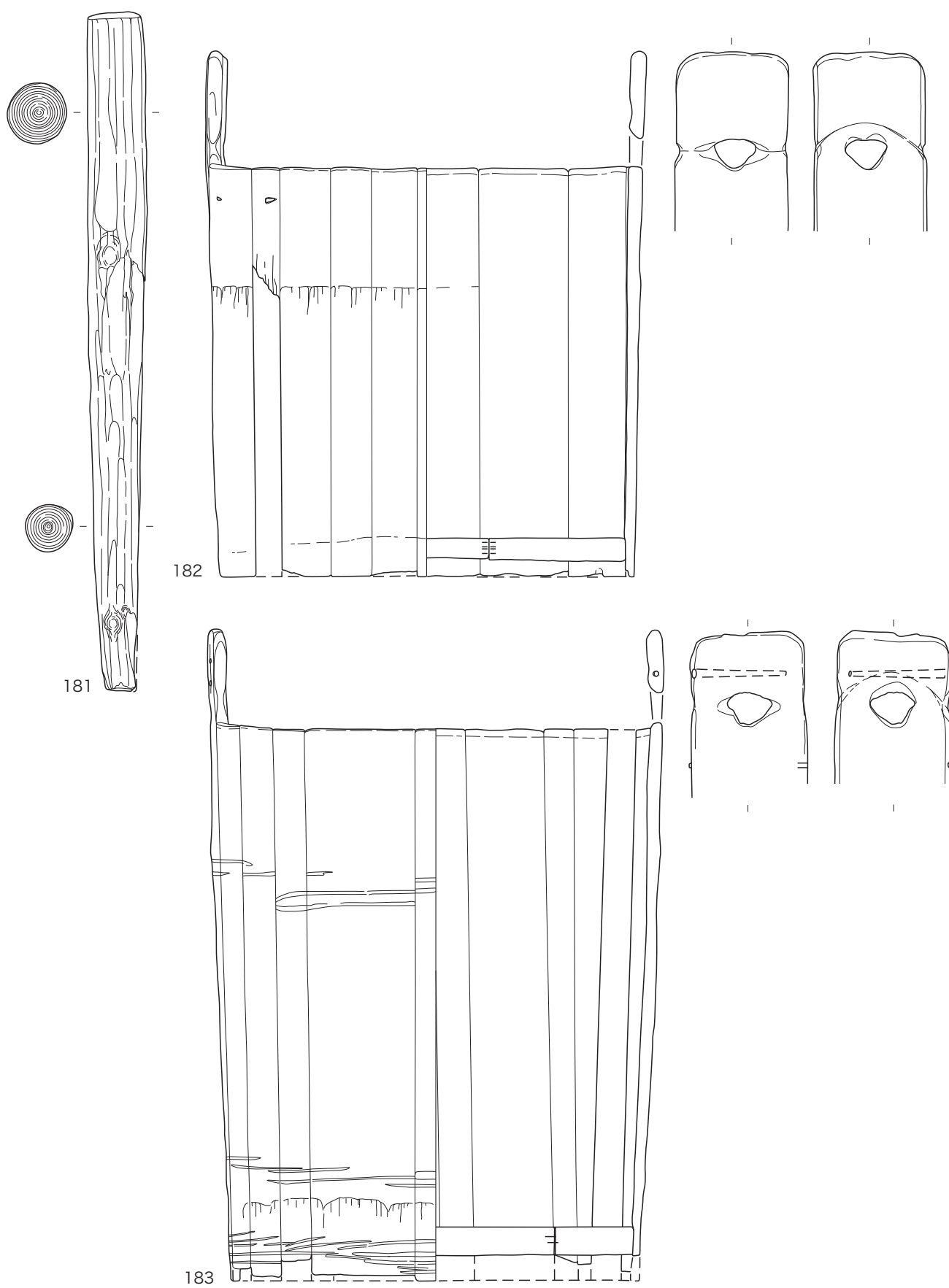
第 95 図 加工円盤 (S=1/4)・陶丸 (S=1/2)



第 96 図 鍛冶関連遺物 (S=1/4)



第 97 図 金属製品 (S=1/2、177 のみ 1/4)



第 98 図 木製品 (S=1/4)

第5節 石器・石製品

今回の調査において、石器及び石製品は総計で3,387点出土した。石器は3,352点で、それぞれの器種に分類できたのは2,967点であり、残りの385点は、取り上げたものの微細片であり、器種分類及び計測が不可能であった。石製品は35点である。(第109図第1表) これらは各調査区において設定されたグリッドの単位で取り上げられ、遺構埋土から出土したものについては、5mグリッドに加えて遺構ごとに取り上げている。調査期間終盤に実施した旧石器時代遺物を対象とした調査では、グリッドをさらに分割して設定された任意の2.5mGRで精査し、可能な限り個別に出土位置情報を取得している。各調査区ごとのグリッド配置と出土情報を第99図～107図に掲載した。ここでは、石器は出土調査区ごとに報告し、出土数量の少ない敲石・石皿等の礫石器と石製品については一括して報告する。

出土石器の石材は、個別に言及しない限り流紋岩質凝灰岩であり、石器石材のほぼ全てを占める。他の石材としては、黒曜石、チャートがあり、下呂石が1点ではあるが出土している。礫石器では、敲石に花崗岩、凝灰岩が、砥石は凝灰岩が用いられている。石皿は砂岩である。石製品については凝灰岩製で、五輪塔片は花崗岩製である。なお、A区においても石器は剥片が2点出土しているが、今報告では図示していない。

(1) B区出土石器(第109図184・第2表)

B区では46点の石器が出土し、そのうち1点を図示した。184は緑色のチャート製の石核で、背面全体が自然面の素材に対し、周縁を打点をずらしながら剥片剥離を行う。最終剥離面の打点直下から縦割れが生じている。

(2) C区出土石器(第109図185・第2表)

C区では6点の石器が出土し、そのうち1点を図示した。185は黒曜石製で剥片素材の石核である。素材の平坦打面を石核打面とし、もう一方は素材末端に取り込む自然面を打面とした、対向する両設打面をもつ。

(3) Da区出土石器(第109図186・第2表)

Da区では9点の石器が出土し、そのうち1点を図示した。186は磨製石斧の刃部片である。細かく研磨しており平滑であるが、残存する側面には敲打痕を留める。側面に対し刃部を成す角度が鋭角で復元形状が推定しにくい。使用による刃部破損から再研磨という痕跡はみられないため、当初の形状と思われる。

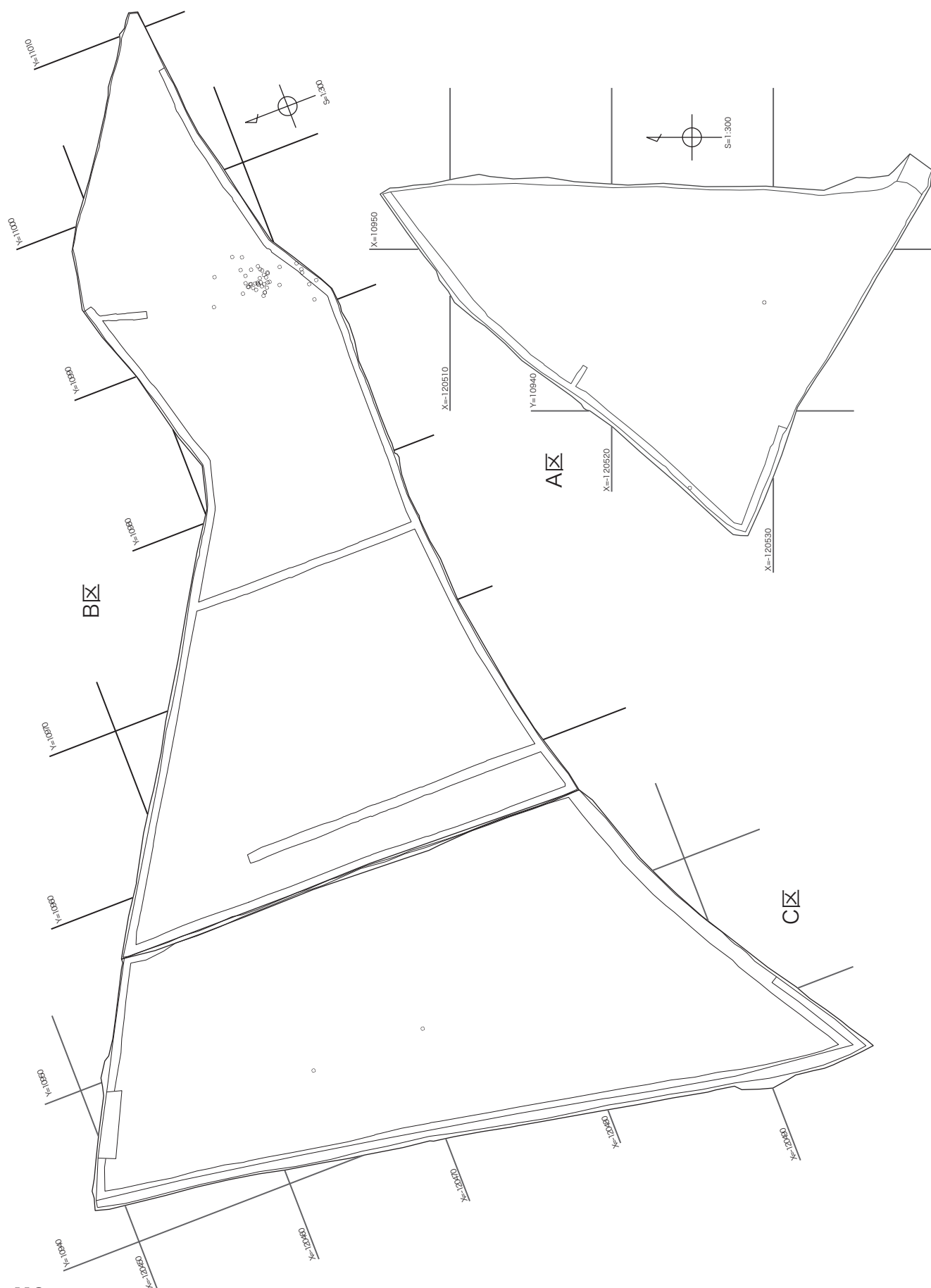
(4) Db区出土石器(第110～113図・第3表)

Db区では537点の石器が出土し、そのうち45点を図示した。

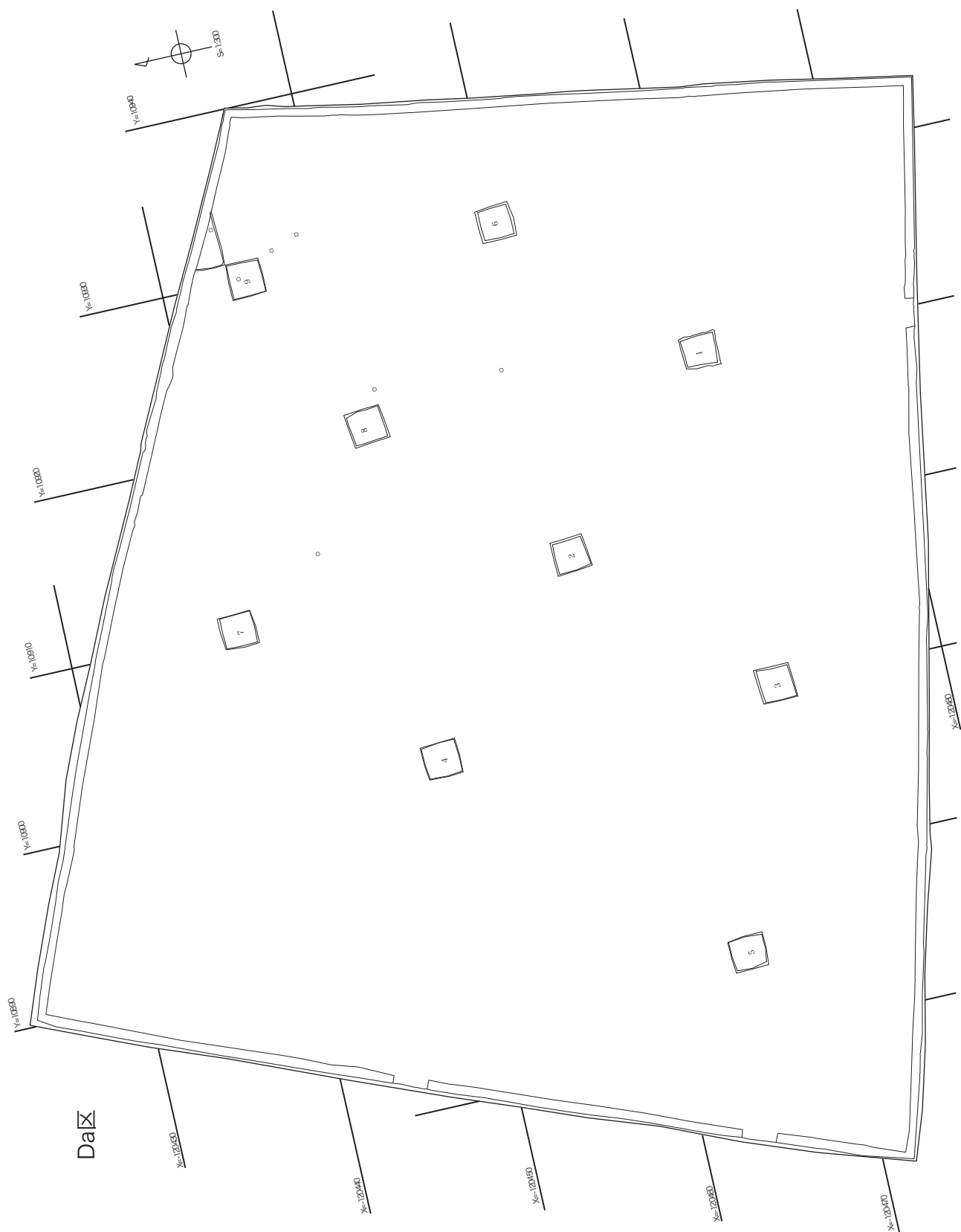
187から194はナイフ形石器である。187、188は折損で残存する先端部片である。いずれも素材末端をナイフ形石器の先端に据え、一側縁加工を施す。189は縦長剥片素材の打点を先端に据えて一側縁を残し、斜めにブランディングを施した切出型ナイフである。190、191は縦長剥片素材の打点を基部に据えた二側縁加工を施す。193は縦長剥片の打点を先端に据えて二側縁加工を施す。素材背面には主剥離方向と逆方向の剥離面が先行しており、同一作業面を180°打面転移してまもなく生じた剥片を素材としていることがわかる。192は素材の打点を基部に据え、基部周辺に腹面からブランディングを施すが、素材打点は残存する。ブランディングの際に先端を折損する。194は素材末端に自然面を取り込む横長剥片を素材とする。素材を横位に用いて基部方向から粗く調整するが石理面で折損する。

195、196は削器である。195は黒曜石製の剥片の一側縁に、腹面から二次加工を施す。196は同一方向に連続剥離して生じた横長剥片を素材とする。素材末端に腹面から粗い二次加工を施す。

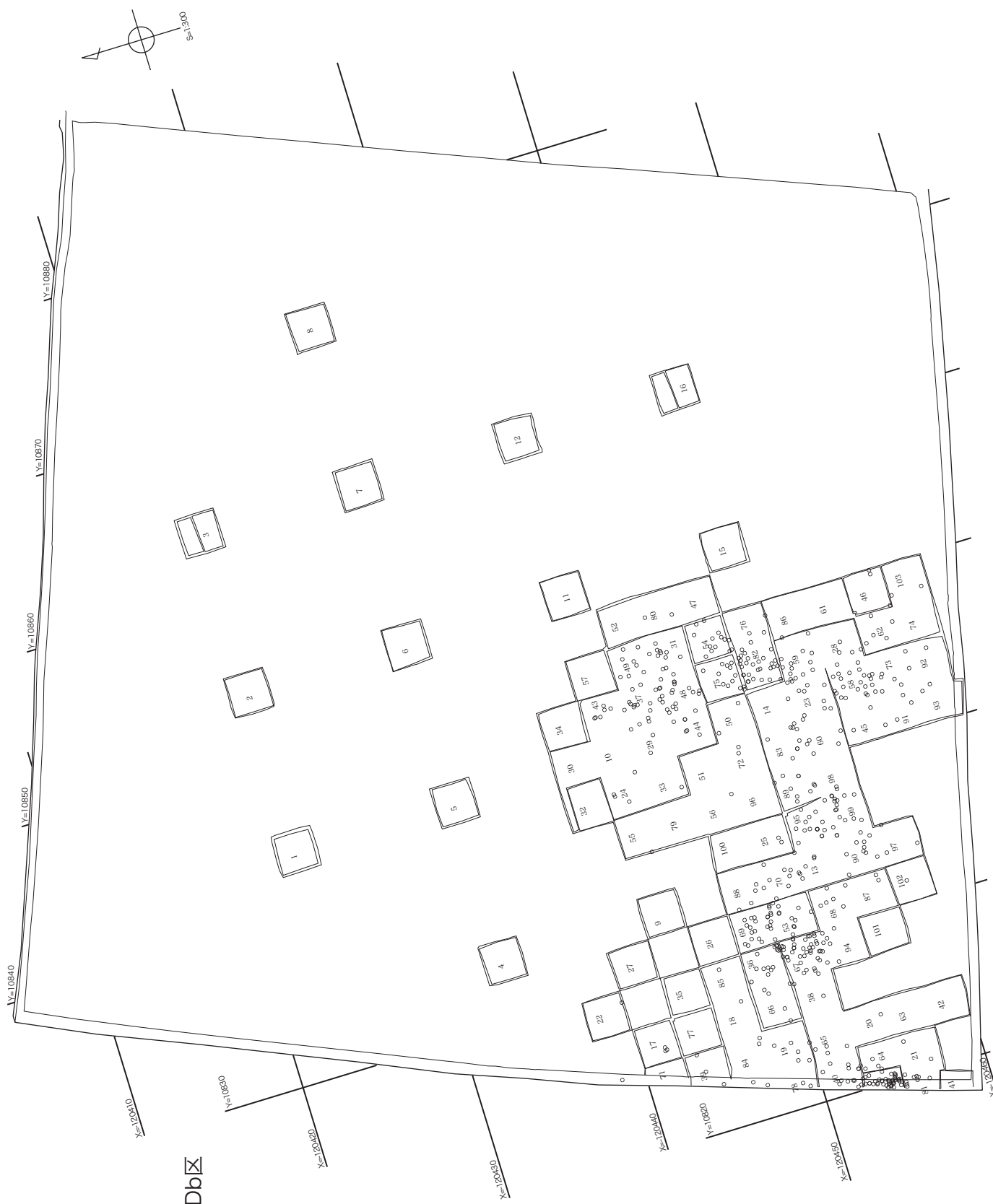
196から204は搔器である。素材は同一打面上から連続して剥離した剥片の末端に、腹面から急斜度の二次加工を施すことを基本としている。200、203は黒曜石製で、末端のほかに素材周縁に二次加工を



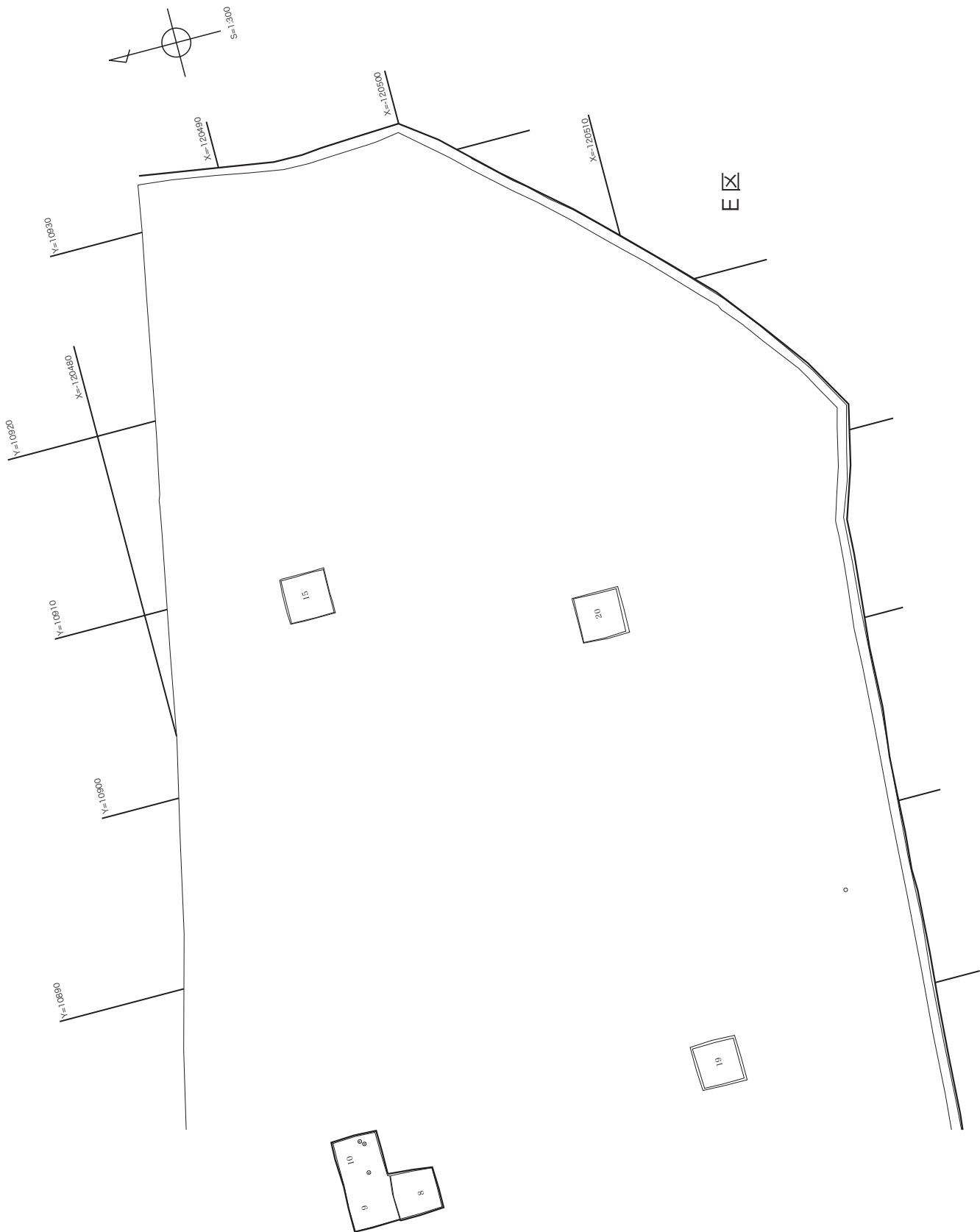
第99圖 石器群出土分布圖1 (A・B・C区)



第 100 図 石器群出土分布図 2 (Da 区)



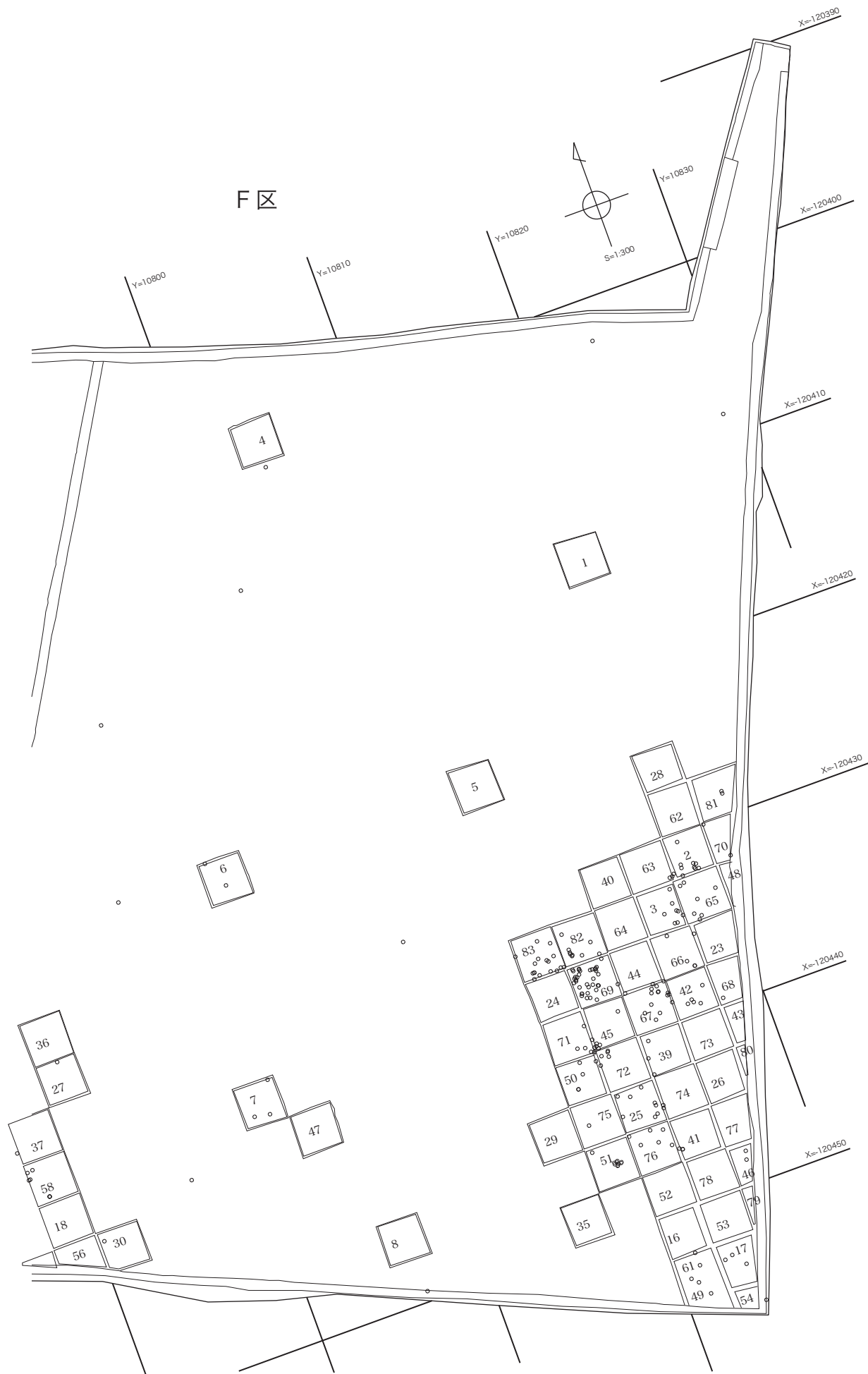
第 101 図 石器群出土分布図 3 (Db 区)



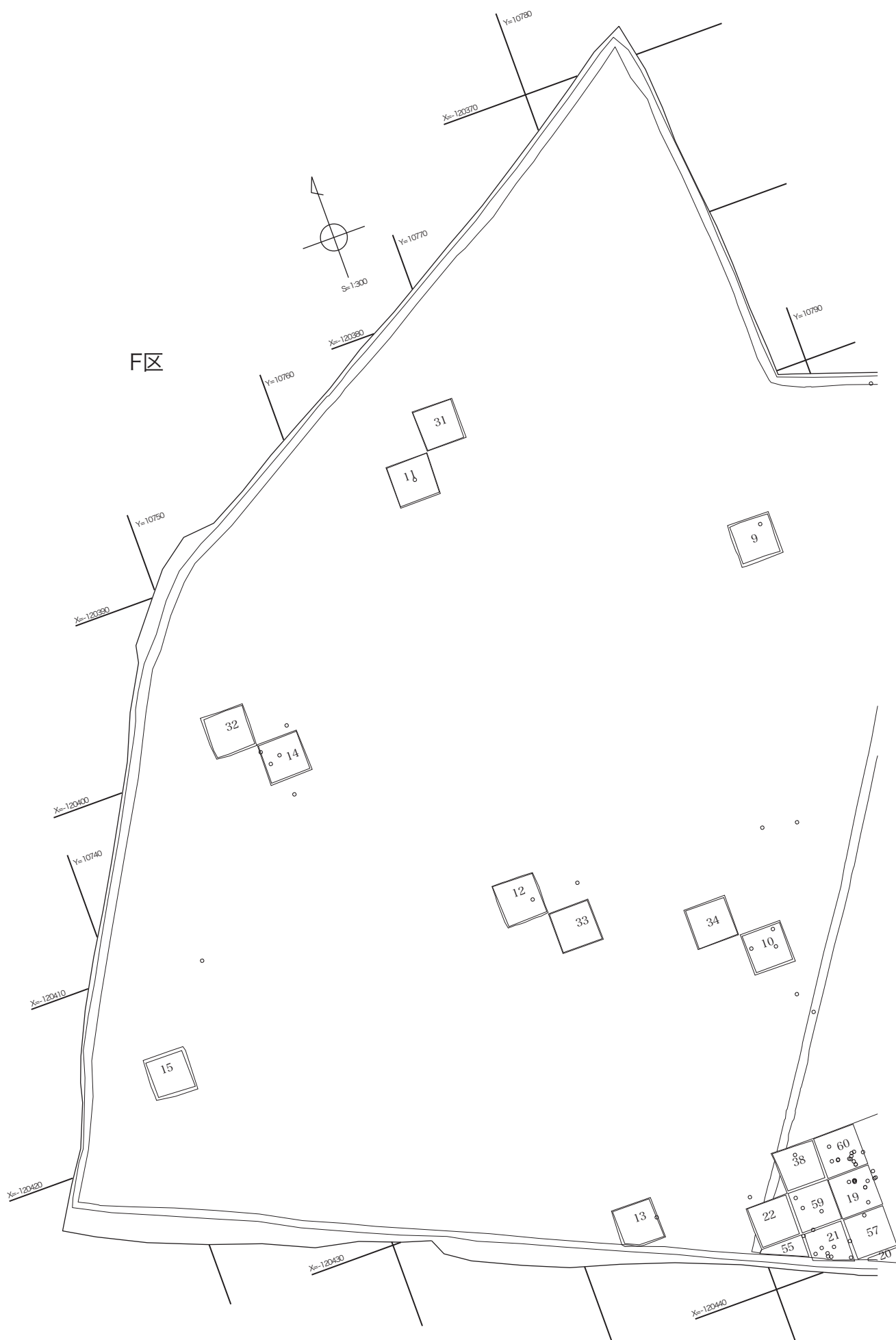
第 102 図 石器群出土分布図 4 (E 区東)



第 103 図 石器群出土分布図 5 (E 区西)

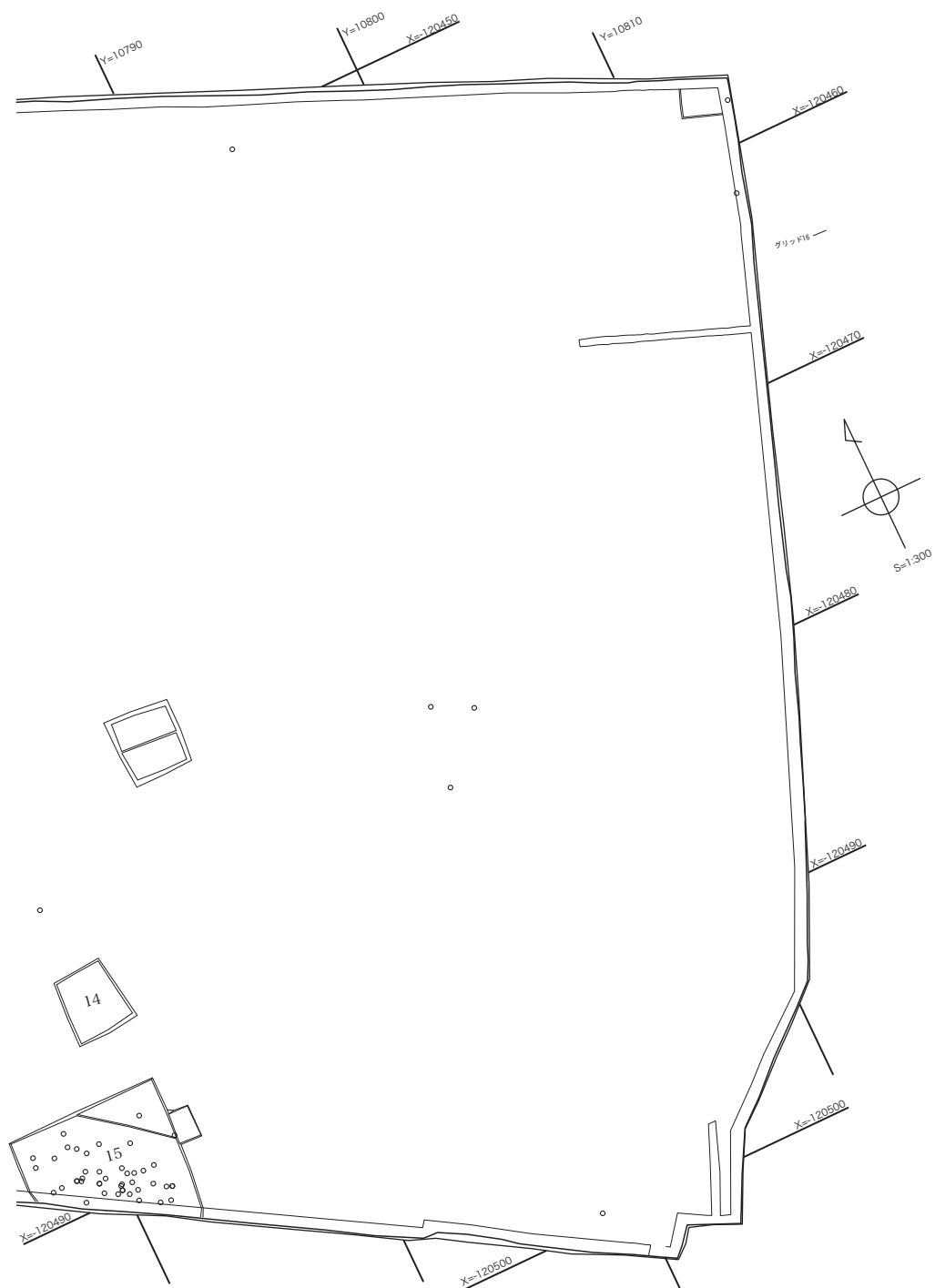


第 104 図 石器群出土分布図 6 (F 区東)



第 105 图 石器群出土分布图 7 (F 区西)

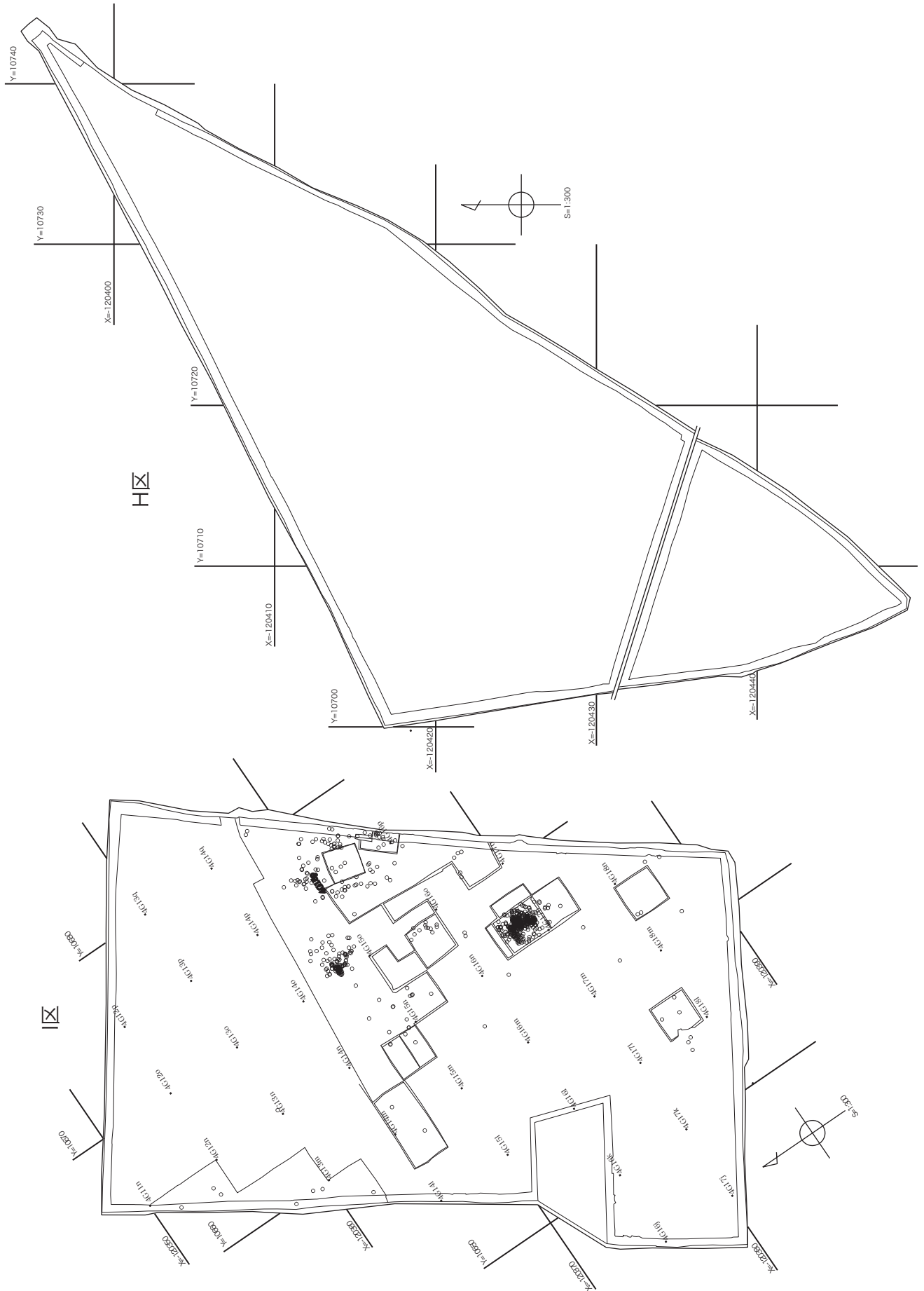
G 区



第 106 図 石器群出土分布図 8 (G 区東)



第 107 図 石器群出土分布図 9 (G 区西)



第 108 図 石器群出土分布図 10 (H・I 区)

第1表 出土石器組成表

		A	B	C	Da	Db	E	F	G	H	I	合計	%
石器	ナイフ形石器					9		2	18		5	34	1.01
	搔器					4		4	31			39	1.16
	削器					6	2	4	17			29	0.87
	尖頭器								1		1	2	0.06
	彫器					1			3			4	0.12
	楔形石器					1			13		3	17	0.51
	石鏃							1				1	0.03
	打製石斧						1					1	0.03
	磨製石斧				1							1	0.03
	二次加工剥片		1	2	2	38		10	68		19	140	4.18
	剥片	2	41	3	6	461	4	199	1381		516	2613	77.95
	石核		1	1		15		12	48		3	80	2.39
	原石					2			1			3	0.09
	自然石						1	1	1			3	0.09
	計測不能		3			6	2	28	147		199	385	11.49
	小計	2	46	6	9	543	10	261	1729	0	746	3352	100.00
石製品	敲石						1	4	11	1	2	19	54.29
	石皿			1					2			3	8.57
	石錘							2				2	5.71
	砥石						1	1	3		2	7	20.00
	紡錘車							1				1	2.86
	石製品								1			1	2.86
	不明石製品								2			2	5.71
	小計	0	0	1	0	0	2	8	19	1	4	35	100.00
	合計	2	46	7	9	543	12	269	1748	1	750	3387	

第2表 B・C・Da区出土石器

図版 番号	調査区	出土位置		遺構	器種	石材	法量 (mm・g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
184	B	5J17s			石核	チャート	48.5	40.5	24.0	38.3	
185	C	5J16j			石核	黒曜石	21.0	27.0	9.6	4.7	
186	Da	5J11e		008SD	磨製石斧	硬質砂岩	44.0	45.0	29.0	56.0	

第3表 Db区出土石器

図版 番号	調査区	出土位置		遺構	器種	石材	法量 (mm・g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
187	Db	5I12i	GR23		ナイフ形石器	凝灰岩	13.0	7.5	4.1	0.2	切先プランティングあり
189	Db	5I12j	GR28		ナイフ形石器	凝灰岩	22.0	12.5	2.9	0.4	
194	Db	5I11g	GR53		ナイフ形石器	凝灰岩	34.0	19.0	7.2	2.3	二次加工あり
188	Db	5I12i	GR58		ナイフ形石器	凝灰岩	13.0	8.5	4.0	0.2	急斜度調整あり 上半折損
192	Db	5I12i	GR58		ナイフ形石器	凝灰岩	20.5	20.0	3.6	0.7	
191	Db	5I11h	GR89		ナイフ形石器	凝灰岩	30.0	10.5	4.6	1.5	全縁に二次加工
190	Db	5I12h	GR99		ナイフ形石器	凝灰岩	29.0	10.0	5.0	0.8	
193	Db	5I9h			ナイフ形石器	凝灰岩	36.0	12.0	7.0	1.5	
195	Db	5I11g	GR53		削器	黒曜石	26.0	23.0	7.8	4.6	一側縁に二次加工 水磨
196	Db	5I13i	GR93		削器	凝灰岩	25.0	44.0	7.4	5.9	横長剥片素材
201	Db	5I10e	GR19		搔器	凝灰岩	30.0	23.0	6.8	3.9	一側縁へ末端に二次加工
199	Db	5I12i	GR60		搔器	凝灰岩	29.0	32.5	8.2	4.0	末端に微細剥離
197	Db	5I11j	GR82		搔器	凝灰岩	20.5	14.0	5.0	0.9	
202	Db	5I11h	GR95		搔器	凝灰岩	33.0	26.0	6.0	3.7	
198	Db	5I11h	GR89		搔器	凝灰岩	25.5	24.5	4.9	2.1	
203	Db	5I11f	GR67		搔器	黒曜石	33.0	26.5	6.7	6.3	全周に二次加工 円形搔器か
200	Db	5I10g	GR69		搔器	黒曜石	27.5	22.5	7.6	4.8	全周に二次加工 円形搔器か
204	Db	5I12h	GR99		搔器	凝灰岩	34.5	35.5	12.0	8.3	
205	Db	5I11e	GR64		彫器	凝灰岩	34.0	19.5	10.5	3.6	
206	Db	5I10j	GR49		楔形石器	凝灰岩	38.0	33.0	17.0	17.8	
208	Db	5I11e	GR64		二次加工剥片	凝灰岩	21.0	10.0	5.0	0.7	
207	Db	5I13i	GR73		二次加工剥片	凝灰岩	9.5	16.0	4.5	0.4	
209	Db	5I11g	GR70		二次加工剥片	凝灰岩	29.0	15.5	4.3	1.3	
213	Db	5I10j	GR37		二次加工剥片	凝灰岩	30.0	20.5	6.0	2.0	石刃素材
210	Db	5I12i	GR45		二次加工剥片	凝灰岩	38.0	23.0	5.8	2.7	
212	Db	5I11g	GR53		二次加工剥片	下呂石	21.5	19.0	9.0	4.6	
211	Db	5I11g	GR70		二次加工剥片	凝灰岩	26.5	36.5	15.7	3.7	横長剥片素材
214	Db	5I11g	GR68		二次加工剥片	凝灰岩	30.5	31.0	11.7	8.5	
215	Db	5I10j	GR31		微細剥離痕を有する剥片	凝灰岩	26.5	17.0	4.0	0.9	
217	Db	5I11j	GR82		微細剥離痕を有する剥片	凝灰岩	39.0	19.0	7.0	3.2	一側縁に微細剥離
216	Db	5I12d	GR81		微細剥離痕を有する剥片	凝灰岩	25.0	22.5	6.1	1.0	垂直割 一側縁に微細剥離
220	Db	5I10e	GR84		剥片	凝灰岩	27.0	23.0	13.0	6.9	
218	Db	5I10j	GR48		剥片	凝灰岩	29.5	21.5	12.8	4.5	
219	Db	5I11e	GR64		剥片	凝灰岩	35.5	36.5	18.5	20.0	
223	Db	5I11j	GR54		剥片	チャート	32.5	18.0	6.9	5.6	
224	Db	5I10j	GR31		剥片	凝灰岩	37.0	30.0	10.0	6.3	
221	Db	5I12h	GR98		剥片	凝灰岩	31.0	17.0	10.0	2.9	稜付石刃
222	Db	5I12i	GR23		剥片	凝灰岩	43.0	18.0	7.3	2.8	稜付石刃
225	Db	5I12i	GR23		剥片	凝灰岩	39.0	65.0	17.0	28.0	
232	Db	5I10j	GR49		石核	凝灰岩	80.0	91.5	46.5	260.4	
227	Db	5I11f	GR67		石核	凝灰岩	25.0	37.0	15.0	10.0	
226	Db	5I10i	GR33		石核	チャート	18.5	27.0	19.0	7.1	
230	Db	5I10j	GR44		石核	凝灰岩	54.0	37.0	29.5	66.1	
231	Db	5I10j	GR49		石核	凝灰岩	42.0	52.5	44.6	94.6	
228	Db	5I10j	GR48		石核	凝灰岩	31.5	33.0	28.4	24.5	
229	Db	5I11g	GR70		石核	凝灰岩	42.0	33.5	19.0	21.2	

第4表 E区出土石器

図版 番号	調査区	出土位置		遺構	器種	石材	法量 (mm・g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
233	E	6J3c		430SD	削器	凝灰岩	31.0	26.5	13.2	8.1	
234	E	6I3r			微細剥離痕を有する剥片	凝灰岩	60.0	24.0	9.0	11.8	二側縁に二次加工
235	E	5I17m		1380SK	打製石斧	不明	122.0	50.8	21.8	243.2	

第5表 F区出土石器

図版 番号	調査区	出土位置		遺構	器種	石材	法量 (mm・g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
236	F	5H3n		189SK	石鏃	凝灰岩	25.0	14.0	47.0	0.5	
237	F	5I8c	GR67		ナイフ形石器	凝灰岩	13.0	18.0	3.4	0.3	二側縁に急斜度剥離
238	F	5I8d	GR66		ナイフ形石器	凝灰岩	29.0	11.5	7.0	1.9	
239	F	5H8o			削器	凝灰岩	33.0	37.0	9.7	7.4	一側縁に二次加工
240	F	5I8c	GR45		削器	凝灰岩	50.5	35.5	14.0	20.6	
241	F	4H19s			削器	凝灰岩	63.0	40.5	13.7	21.7	一側縁に二次加工
242	F	5I8c	GR69		搔器	凝灰岩	53.0	45.0	19.1	32.3	
243	F	5H8s	GR7		搔器	凝灰岩	74.0	59.0	27.6	91.3	ほぼ全周に二次加工
244	F	5H7p	GR60		搔器	凝灰岩	33.5	30.5	9.8	6.4	
245	F	5H9q	GR30		搔器	凝灰岩	41.0	28.0	9.3	6.6	
246	F	5H6p			石核	凝灰岩	26.0	43.0	15.0	9.9	
247	F	5I8d	GR68		石核	凝灰岩	36.5	29.0	17.2	13.4	縦長剥片石核
248	F	5I11c	GR16		石核	凝灰岩	40.5	38.0	14.0	34.1	
249	F	5H1k			石核	凝灰岩	47.0	32.5	19.8	22.1	
250	F	5I10c	GR76		石核	凝灰岩	45.0	36.0	30.5	44.4	
251	F	5I9b			石核	凝灰岩	46.0	45.0	33.4	59.5	
252	F	5I9c	GR25		石核	凝灰岩	44.0	50.0	35.5	77.9	
253	F	5H7m			石核	凝灰岩	36.0	55.0	27.0	40.5	

施す。203 は素材打面部に対し、背面から二次加工を施す。202 は素材をやや斜位に用いている。204 の背面には、素材の主剥離面と同一方向の縦長剥離痕はあり、素材剥片はそれらを大きく取り込むように剥離しているため、断面形は半円状を呈している。

205 は彫器である。両面末端に自然面を残し、両側縁から二次加工を加えた後に、頂部からの剥離で彫刀面を作出する。

206 は楔形石器である。右面全面と左面一部に自然面が残存し、礫素材と考えられる。上下端の自然面から両極打撃を行い、ツブレ痕と階段状剥離が確認できる。

207 から 214 は二次加工剥片である。素材となる剥片に散発的な二次加工を施す。207 は、素材一側縁に腹面から比較的まとまった二次加工を施すが、縦半分を折損しており全体が不明瞭であったため二次加工剥片とした。二次加工がやや斜度をもつため、素材を横位に用いた搔器である可能性も考えられる。208 は縦長剥片を素材として、一側縁に腹面から二次加工を施すが、素材上半を折損する。素材打点部を先端に据えるナイフ形石器の可能性も考えられる。209、210 と 213 は縦長剥片の一側縁に二次加工を施す。211 は横長剥片の末端に二次加工を施す。212 は下呂石製で、横長剥片を素材とする。素材打面から腹面に、末端一部に背面から二次加工を施す。

215 から 217 は微細剥離痕を有する剥片である。215 は縦長剥片の両側縁に微細剥離痕が確認できる。216 は素材打点直下から縦割れが生じているが、その折損面と一側縁に微細剥離痕が確認できる。217 は縦長剥片の末端から一側縁にかけて微細剥離がある。

218 から 225 は剥片である。218 は同一方向の連続した剥離面を背面に有し、それらを大きく取り込むように剥離する。219 は背面の下半に自然面を大きく取り込む剥離を行う。220 の背面は、主剥離面と逆方向の剥離面と自然面で構成し、それらを大きく取り込む剥離を行う。218 から 220 はいずれも肉厚な剥片で、背面の剥離面や自然面を大きく取り込み、断面形は半円形や台形状を呈する。一方の主剥離面は

平坦であることが特徴である。

221、222 は縦長剥片である。特に 221 の背面には主剥離面と直交する一方向の剥離面が多く確認でき、それらの剥離面が縦方向の稜を形成している。主剥離面はその稜に沿って剥離しており、縦長剥片を生産するための作業面を作出するためのものと考えられる。また 222 は、主剥離面の剥離に先行する背面の剥離はみられないが、自然面がなす縦方向の稜に沿って剥離しているため、221 と同様の効果を期待して剥離されたものと考えられる。

223、224 は縦長剥片で、末端と打点をそれぞれ折損する。223 は緑色のチャート製で、背面に先行する複数の縦長剥離がみられる。225 は自然面打面の横長剥片である。打点背面には細かな剥離面が連続してみられ、その剥離単位から二次加工とも考えられるが、欠損面により切り合い関係が不明である。

226 から 232 は石核である。226、228 は作業面及び最終剥離面にみられる剥離面の大きさが小さいものの、入念な石核調整がみられる。226 は赤色のチャート製で、両面から石核調整を行って縦方向の稜に沿って平坦打面から小型縦長の剥片を剥離する。228 も打面及び作業面を転移しながら角錐状に石核調整を行い、単剥離面によって平坦打面を作出した後に縦方向の稜に沿って縦長剥片を剥離する。227 は背面が自然面で占められる素材の周縁に対して背面から打点をずらしながら剥片剥離を行う。最終剥離で打点から縦割れが生じている。229 は背面に自然面を残している。作業面をほぼ固定し、打面を上下端及び一側縁に転移しながら剥片剥離を行う。切り合いによる新旧関係から、先行する剥離面が背面の自然面に及んでいるが、剥片剥離に伴う石核調整とも考えられる。230 は周縁に自然面を留めており、亜円礫素材と考えられる石核である。表裏がそれぞれポジティブ面とネガティブ面の剥離面で、その側面を作業面に、上下端からやや縦長の剥片を剥離する。231 も自然面が多く残存した亜角礫素材の石核である。自然面の平坦部位を打面に打面転移を行い、形成された剥離面打面で剥片剥離を行う。232 は大型の石核で、やや摩滅した礫素材と考えられる。上端は石理面で割れたようで平坦であり、そこを打面に剥片剥離を行うものの末端がヒンジ状となり、作業面上で寸詰まる。その後打面を転移し作業を継続しており敲打痕が顕著にみられる。

(5) E 区出土石器 (第 114 図・第 4 表)

E 区では 8 点の石器が出土し、そのうち 3 点を図示した。

233 は削器である。素材剥片の一側縁に腹面から二次加工を施す。素材背面には主剥離と同一方向の小剥離面がみられ、それらを取り込むように、かつやや肉厚に剥離している。

234 は微細剥離痕を有する剥片である。打点を折損する縦長剥片を素材として、両側縁の腹背に細かな剥離がみられる。二次加工ほど規則性はなく、不連続的であるため、使用痕の可能性もある。

235 は今回の調査で 1 点のみ出土した打製石斧である。粗割りした素材面の周縁に、細かい剥離を施して器形を調整する。残存する端部に刃部が形成されないため、下半を折損したとわかる。全体に扁平で厚さも均一である。

(6) F 区出土石器 (第 115 ～ 117 図・第 5 表)

F 区では 233 点の石器が出土し、そのうち 18 点を図示した。

236 は、唯一出土した石鏃である。表裏に細かな二次加工を入念に施す。平面形は左右対称で、先端から基部に向けて側縁は僅かに内湾し、やや浅い基部を作り出す凹基式石鏃である。上層遺構である 189SK から出土した。

237、238 はナイフ形石器である。237 は縦長剥片を素材として、素材の打点方向を基部に据える。基部は折損して不明だが、一側縁に腹面から急斜度のブランティングを施す。238 は、背面に稜上調整痕と思われる直交する先行剥離面をもつ縦長剥片を素材としている。素材の打面方向を先端に据え、一側縁に腹面からブランティングを行い、基部は円形に施す。

239 から 241 は削器である。剥片素材のものが 2 点で、いずれも素材の腹面から二次加工を施す。239 は素材末端と一側縁に施す。素材打点部直下から縦割れが生じているが二次加工を切っているため、

潜在的な割れが二次加工を施している際に顕在したと考えられる。241 は素材打点部の肥大した部位に集中しており、一部一側縁にも二次加工を施す・背面には自然面と、方向が 180°異なる剥離面で構成しており、素材剥離前に多面転移したものと考えられる。240 は背面自然面の素材に対し自然面側から二次加工を施す。先行する剥離面に二次加工よりも大きめなネガティブ面が数枚確認でき、剥片素材石核を転用したものとも考えられる。

242 から 245 は搔器である。242、244、245 は剥片を素材として、末端に腹面から急斜度の二次加工を施す。242 の末端の一部は二次加工が大きく剥離してしまい、加工を終えているのがわかる。245 は縦長剥片の末端一部に施す。243 は背面に自然面が大きく残存する大型肉厚の剥片を素材とする。末端から一側縁にかけて表裏に二次加工を施し、加えて素材打面に、背面側へ急斜度の二次加工を施す。この剥離が急斜度かつ比較的まとまって施されているため、搔器としたが今回の調査で出土した他の搔器に対して異質な作成方法と言える。

246 から 253 は石核である。剥片素材、礫素材がある。246 は剥片の一側縁に表裏から剥離を加えた後に、直交方向の剥片剥離を側縁に行う。剥片の側縁を縦方向の稜とみなしていると考えられるが、剥離自体は寸詰まりで終わっている。247 は背面に自然面が残存する素材の周縁に対して、表裏から剥片剥離を行う。248、250 から 252 は自然面の残存から礫素材の石核と考えられるが、自然面に対し大きめの単剥離面を作出した後、その剥離面を打面に打点をずらしながら剥片剥離を行う点で共通する。また、248、250、251 などは横方向の剥離をまじえており、石核調整を行っていることがわかる。252 は作業面に剥離面が非常に整っており、規格性の高い縦長剥片が連続して剥離されていることがわかる。249 は背面が自然面の剥片素材の腹面に、自然面打面で周縁から剥片剥離を行う。253 はやや肉厚な剥片に対して、打面と作業面を頻繁に入れ替えながら、特に背面に向けて急斜度の剥片剥離を行う。

(7) G 区出土石器 (第 118 ～ 129 図・第 6 表)

G 区では 1,582 点の石器が出土しており、各調査区を通して出土量が格段に多い。そのうち 132 点を図示した。

254 は黒曜石製の両面加工状の石器で、両端が折損して詳細は不明であるが、断面形状がレンズ状であり、残存する両側縁が先頭状に推定できることから尖頭器である可能性がある。

255 から 271 はナイフ形石器である。255 及び 256 はそれぞれ先端部と基部が残存するだけだが、ともに素材の腹面から急斜度のブランディングを施していることが確認できる。257 は素材剥片の打面方向を基部に据え、一側縁及び基部付近に両側縁加工を施す。先端を折損する。ブランディングは対向して行うが打点部が肥大しているためか、その付近は腹面からに集中して施している。258 から 261 は切出型ナイフ形石器と考えられる。258 は黒曜石製で、素材末端を基部に据える。素材末端がやや肥大しているためであろうか。素材の打点付近は折損しており不明だが、剥離軸に対しやや斜位に用いて一側縁を刃部と成す状況がみてとれる。259 及び 260 は技術形態的に典型的な切出型と言える。素材末端を基部に据える。素材を斜位に用いて一側縁で刃部を成し、素材を分断するように両側縁加工を施す。259 は黒曜石製で腹面からのみのブランディングで、260 は、長側縁のみ対向調整剥離を行っている。261 は素材打点部を基部に据える。素材の末端を截断状にブランディングし、一側縁を刃部とするほかは、打点部に僅かに施すのみで両側縁とも無調整である。262、264 及び 265 は、素材の打点方向を基部に据えるもので、腹面からの一側縁加工を施す。263 は素材の打点方向をやや先端に向けたもので、横長剥片素材であろうか。素材打点付近を腹面から一側縁加工を施すが、他側縁は素材末端のヒンジが残存している。先端部を折損しているため詳細不明。265 は素材打点方向を基部に据え、残存する側縁に腹面から両側縁加工を施す。基部付近は折損しているため、ブランディングの範囲は不明である。266 から 268 は縦長剥片を素材にしている。ともに素材面と同方向の剥離面を背面に持つ。266 は素材末端を基部に据え、腹面から一側縁加工及び基部二側縁加工を施す。267 は打点方向を基部に据え、一側縁加工及び基部二側縁加工を施す。また打点付近は背面からも行っているのは、基部の厚みを除去するためであろうか。268 も素材打点を基部に据え、両側縁加工によって基部周辺を加工する。ブランディングは背面から施している。

第6表 G区出土石器1

図版 番号	調査区	出土位置		遺構	器種	石材	法量 (mm・g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
254	G	5H12d	GR2		槍先形尖頭器	黒曜石	22.0	15.0	6.8	2.1	折損により不明
256	G	5H8o			ナイフ形石器	凝灰岩	8.0	11.0	3.0	0.2	
260	G	5H9n	TR04		ナイフ形石器	凝灰岩	21.0	20.5	3.4	6.3	切出型
259	G	5H9p	GR12		ナイフ形石器	黒曜石	16.0	12.5	4.0	0.7	切出型
258	G	5H13k	GR7		ナイフ形石器	黒曜石	16.5	11.0	4.0	0.5	一側縁に急斜度剥離
255	G	5H11l	GR8		ナイフ形石器	凝灰岩	10.0	6.5	3.5	—	切先部
257	G	5H12k	GR7		ナイフ形石器	凝灰岩	19.0	9.5	4.7	0.6	基部二側縁加工
261	G	5H14j	GR6		ナイフ形石器	チャート	18.0	18.0	3.0	0.8	縦長剥片 端部裁断し微調整
268	G	5H11 d			ナイフ形石器	凝灰岩	35.0	15.5	6.4	1.8	基部二側縁加工
263	G	5H13k	GR7		ナイフ形石器	凝灰岩	26.0	18.0	5.0	1.7	先端部折損か
265	G	5H14h	GR5		ナイフ形石器	凝灰岩	28.5	14.5	5.0	1.1	
271	G	5H13k	GR7		ナイフ形石器	凝灰岩	49.0	26.5	15.0	14.9	
269	G	5H11m	GR8		ナイフ形石器	凝灰岩	25.0	19.5	12.5	3.0	
264	G	5H11l	GR8		ナイフ形石器	凝灰岩	23.5	14.0	6.4	1.1	
267	G	5H11k	GR8		ナイフ形石器	凝灰岩	32.5	11.5	5.8	1.1	基部二側縁加工
266	G	5H9m	GR10		ナイフ形石器	凝灰岩	25.0	9.5	3.9	0.4	基部二側縁加工
262	G	5H14h	GR5		ナイフ形石器	凝灰岩	22.0	14.0	5.3	0.9	一側縁加工
270	G	5H10m	GR20		ナイフ形石器	凝灰岩	36.0	24.0	6.6	3.1	末端に二次加工
272	G	5H9l	GR10		彫器	凝灰岩	35.0	26.0	13.0	5.7	
274	G	5H8n	GR9		彫器	凝灰岩	33.0	15.5	6.0	2.0	末端から槌状剥離
273	G	5H9n	GR20		彫器	凝灰岩	39.0	29.0	7.4	4.3	左側縁に槌状剥離 右側縁に調整
275	G	5H20r		269SD	削器	凝灰岩	37.5	26.5	8.2	7.5	二側縁に二次加工
276	G	5H13k	GR7		削器	凝灰岩	43.5	30.0	11.4	6.2	
277	G	5H15j	GR6		削器	凝灰岩	30.0	21.0	7.5	2.5	
282	G	5H11l	GR8		削器	凝灰岩	46.0	30.0	13.9	10.0	
281	G	5H14h	GR5		削器	凝灰岩	27.0	30.0	5.6	2.7	
279	G	5h13k	GR7		削器	凝灰岩	26.5	27.5	7.0	2.6	
278	G	5H10l			削器	凝灰岩	30.0	21.5	7.6	2.9	
280	G	5H11l	GR8		削器	凝灰岩	30.0	27.0	7.8	4.4	
283	G	5H12e	GR30		削器	凝灰岩	52.0	46.0	15.0	19.0	
284	G	5H11l	GR8		搔器	凝灰岩	14.0	16.0	9.0	0.8	垂直割
285	G	5H9m	GR26		搔器	黒曜石	13.0	19.0	4.0	1.0	
287	G	5H13k	GR7		搔器	凝灰岩	22.5	15.5	5.0	1.2	
289	G	5H13k	GR7		搔器	黒曜石	24.5	17.0	5.4	1.8	二側縁に二次加工
290	G	5H19o	GR15		搔器	黒曜石	28.5	20.5	8.0	3.3	全周に二次加工 円形搔器か
288	G	5H13h			搔器	黒曜石	20.0	22.0	6.0	1.7	
291	G	5H9o	GR11		搔器	黒曜石	28.0	18.0	5.2	2.0	
286	G	5H12e	GR2		搔器	黒曜石	13.0	24.5	4.8	1.1	
292	G	5H11l	GR8		搔器	凝灰岩	33.0	28.0	8.8	2.6	
299	G	5H11l	GR8		搔器	チャート	35.0	33.0	11.3	13.7	
296	G	5H14h	GR5		搔器	凝灰岩	31.5	28.0	8.0	3.4	
298	G	5H10m	GR9		搔器	凝灰岩	33.0	30.0	12.6	8.4	
293	G	5H8n			搔器	凝灰岩	33.0	25.5	8.6	5.3	
297	G	5H11l	GR8		搔器	チャート	40.0	27.0	11.5	11.1	
295	G	5H12m	GR19		搔器	凝灰岩	43.0	24.5	13.0	9.7	
294	G	5H9m	GR26		搔器	凝灰岩	34.0	19.0	12.5	4.6	
306	G	5H9m			搔器	凝灰岩	46.5	25.0	10.8	7.3	
308	G	5H14 k			搔器	凝灰岩	85.0	48.0	16.6	60.9	
302	G	5H13k		1080SK	搔器	凝灰岩	24.0	37.0	12.0	5.9	
307	G	5H11l	GR8		搔器	凝灰岩	64.0	60.0	10.5	25.3	
304	G	5H15j	GR6		搔器	凝灰岩	37.0	27.0	15.8	10.5	
301	G	5H11l	GR8		搔器	凝灰岩	31.0	38.0	12.8	8.1	

第6表 G区出土石器2

図版 番号	調査区	出土位置		遺構	器種	石材	法量 (mm・g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
303	G	5H13k	GR7		搔器	凝灰岩	48.0	38.0	18.0	23.4	
300	G	5H13k	GR7		搔器	凝灰岩	38.0	34.0	10.0	9.5	
305	G	5H13k	GR7		搔器	凝灰岩	46.0	35.0	22.0	18.1	
313	G	5H13k			楔形石器	凝灰岩	23.0	25.5	8.0	2.1	
312	G	5H12e	GR2		楔形石器	黒曜石	22.0	13.0	7.3	1.8	
310	G	5H14i	GR5		楔形石器	黒曜石	26.5	21.0	6.4	3.8	
318	G	5H15j	GR6		楔形石器	凝灰岩	32.0	46.5	17.5	9.2	
314	G	5H14k	GR7		楔形石器	凝灰岩	29.0	12.5	10.1	2.2	
315	G	5H15j	GR6		楔形石器	凝灰岩	25.5	36.0	10.0	6.2	
311	G	5H14j	GR6		楔形石器	凝灰岩	30.0	16.5	11.0	2.8	
309	G	5H14j	GR6		楔形石器	凝灰岩	21.0	13.0	9.0	1.3	
317	G	5H11l	GR8		楔形石器	凝灰岩	51.0	44.0	18.5	29.0	
319	G	5H11l	GR8		楔形石器	凝灰岩	42.5	39.0	12.3	13.7	
316	G	5H14j	GR6		楔形石器	凝灰岩	36.0	25.0	13.0	6.8	
320	G	5H14h	GR5		二次加工剥片	凝灰岩	18.0	6.0	2.7	0.2	ナイフ形石器か
321	G	5H15j	GR6		二次加工剥片	チャート	12.1	12.8	2.5	0.3	
322	G	5H18n	GR15		二次加工剥片	凝灰岩	19.5	14.0	4.4	0.5	ナイフ形石器か
323	G	5H14k	TR04		二次加工剥片	凝灰岩	13.5	12.0	4.0	0.3	剥片末端に二次加工 上半折損
324	G	5H14h	GR5		二次加工剥片	凝灰岩	21.0	10.0	5.0	0.5	
325	G	5H11l	GR8		二次加工剥片	凝灰岩	27.5	8.0	4.4	0.3	一側縁に二次加工
326	G	5H14j	GR6		二次加工剥片	黒曜石	23.0	19.0	3.3	1.2	二側縁に二次加工
327	G	5H18n	GR15		二次加工剥片	凝灰岩	32.0	13.5	4.0	1.1	二側縁に二次加工
328	G	5H11m	GR8		二次加工剥片	凝灰岩	26.0	23.0	4.3	0.9	両側縁に二次加工
329	G	5H8n			二次加工剥片	チャート	34.0	25.0	10.0	8.3	
330	G	5H11s			二次加工剥片	黒曜石	36.0	32.0	13.0	7.7	末端の一部に二次加工
331	G	5H17l			二次加工剥片	頁岩	40.0	29.0	14.4	14.1	ナイフ形石器か
332	G	5H9n	GR20		二次加工剥片	凝灰岩	30.0	18.5	10.0	3.7	
333	G	5H12l	GR8		二次加工剥片	凝灰岩	40.0	38.0	7.8	7.2	一側縁に二次加工
334	G	5H10l	GR26		二次加工剥片	凝灰岩	71.0	28.5	16.4	21.2	一側縁一部に二次加工
335	G				微細剥離痕を有する剥片	黒曜石	58.0	32.0	9.0	15.4	一側縁に微細剥離
336	G	5H15j	GR6		微細剥離痕を有する剥片	凝灰岩	39.5	27.0	10.9	4.8	
337	G	5H14k	GR7		微細剥離痕を有する剥片	黒曜石	23.0	17.0	6.3	2.4	打点部に微細剥離
338	G	5H14j	GR6		微細剥離痕を有する剥片	凝灰岩	24.5	16.2	6.6	1.2	一側縁に微細剥離
339	G	5H15j	GR6		微細剥離痕を有する剥片	凝灰岩	30.5	13.5	6.0	1.3	一側縁に微細剥離
340	G	5H11m	GR8		微細剥離痕を有する剥片	凝灰岩	38.0	22.0	8.4	3.8	末端に微細剥離
341	G	5H11m	GR8		微細剥離痕を有する剥片	凝灰岩	55.0	22.5	4.4	3.5	
342	G	5H10m	GR26		微細剥離痕を有する剥片	凝灰岩	65.5	26.0	10.5	12.3	縦長剥片
343	G	5H11l	GR8		微細剥離痕を有する剥片	凝灰岩	35.0	57.0	25.5	28.4	
344	G	5H15j	GR6		剥片	凝灰岩	12.0	9.0	4.3	0.2	ブランディングチップ
345	G	5H11l	GR8		剥片	凝灰岩	22.0	8.0	4.2	0.4	ブランディングチップ
346	G	5H18p			剥片	チャート	26.0	10.0	4.7	0.9	稜上調整剥片
347	G	5H14h	GR5		剥片	凝灰岩	25.5	15.5	12.0	2.3	稜上調整剥片
348	G	5H13k	GR7		剥片	凝灰岩	36.5	17.8	13.9	2.8	稜付石刃
349	G	5H11l	GR8		剥片	凝灰岩	30.0	17.0	10.0	2.6	稜上調整剥片 下半折損
350	G	5H14h	GR5		剥片	凝灰岩	23.0	13.0	2.5	0.4	
351	G	5H13k	GR7		剥片	凝灰岩	36.0	16.0	5.4	1.7	
352	G	5H11m	GR8		剥片	凝灰岩	51.0	23.0	9.0	4.5	
353	G	5H15i	GR6		剥片	凝灰岩	34.0	23.0	11.0	4.0	両極打撃 リング反転
354	G	5H18n	GR15		剥片	黒曜石	24.5	34.0	9.8	2.5	稜付石刃
355	G	5H15j	GR6		剥片	凝灰岩	11.0	33.0	9.7	2.8	横長剥片素材
356	G	5H11l	GR8		剥片	凝灰岩	27.6	19.5	5.0	1.3	
357	G	5H15j	GR6		剥片	チャート	34.0	20.5	12.0	5.3	

第6表 G区出土石器3

図版 番号	調査区	出土位置		遺構	器種	石材	法量 (mm・g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
358	G	5H8n			剥片	凝灰岩	24.0	24.5	9.8	3.6	
359	G	5H11l	GR8		剥片	凝灰岩	34.5	28.0	9.0	5.1	
360	G	5H10m		1622SK	剥片	凝灰岩	47.0	36.5	15.9	21.9	
362	G	5H14j	GR6		石核	凝灰岩	18.0	22.5	10.0	2.1	
363	G	5H14k	GR7		石核	凝灰岩	24.0	30.0	13.0	5.0	
361	G	5H9n	GR9		石核	黒曜石	18.0	11.0	8.4	1.5	
364	G	5H13e	GR2		石核	黒曜石	22.0	25.5	8.9	4.4	
365	G	5H9n	GR20		石核	凝灰岩	23.0	25.5	11.5	3.2	
366	G	5H10m	GR26		石核	凝灰岩	20.0	25.0	8.5	3.2	
367	G	5H13k	GR7		石核	凝灰岩	42.0	27.5	11.0	9.5	縦長剥片石核
368	G	5H11m	GR8		石核	凝灰岩	36.0	42.0	17.0	10.0	
369	G	5H12d	GR2		石核	凝灰岩	32.5	34.0	12.8	9.9	
370	G	5H11l	GR8		石核	凝灰岩	33.0	31.5	11.0	11.2	
371	G	5H11l	GR8		石核	凝灰岩	36.0	42.5	18.4	24.1	
372	G	5H9h			石核	凝灰岩	41.5	42.5	23.0	26.9	
373	G	5H9i	GR4		石核	凝灰岩	52.0	52.5	16.4	30.3	
374	G	5H9p	GR12		石核	凝灰岩	40.5	42.0	21.0	20.8	
375	G	5H14k	GR7		石核	チャート	35.0	40.0	25.5	40.5	
376	G	5H11l	GR8		石核	凝灰岩	40.0	41.0	36.5	61.5	
377	G	5H14j	GR6		石核	凝灰岩	43.0	48.0	36.0	79.2	打面作業面転移多
378	G	5H13k	GR7		石核	凝灰岩	31.0	33.0	12.0	9.0	剥片を横位に使用
379	G	5H14h	GR5		石核	凝灰岩	51.0	64.0	35.0	77.2	
380	G	5H10l	GR26		石核	凝灰岩	51.5	38.5	21.0	29.9	
381	G	5H11l	GR8		石核	凝灰岩	29.0	54.0	37.5	36.3	
382	G	5H9n	GR20		石核	凝灰岩	49.0	61.5	22.6	44.5	剥片端部 背面側に剥片作出
383	G	5H10m	GR26		石核	凝灰岩	38.0	62.0	43.0	93.9	
384	G	5H14k	GR7		石核	凝灰岩	81.0	49.0	24.5	95.6	礫素材
385	G	5H14h			石核	凝灰岩	62.0	43.5	39.0	76.5	

269は横長剥片素材で、素材を横位に用いて打点部を腹面から一側縁加工する。270も同様に横長剥片素材だが、ブランディングは散発的である。271はやや大型のナイフ形石器と思われるが、被熱かあるいは風化によるものかによって器表面が薄く剥落し、剥離方向が不明瞭である。おおよそ、肉厚の素材の腹面から一側縁及び基部周辺は二側縁の、急斜度のブランディングを施していると思われる。しかし素材をどの軸で用いているかは不明である。

272から274は彫器である。272は左面下にかろうじて素材面が残っている。それによると、素材の側縁から末端にかけて両面加工を施し、末端の縁辺を利用して複数の彫刀面を作出している。273も素材末端を加工して、その縁辺に彫刀面を作る。それに対し274は素材の打点付近から彫刀面を作り出しているが、素材剥片が生じた際の縦割れを、彫刀面作出に用いた可能性もある。

275から283は削器である。275、276は素材剥片の一側縁に腹面から二次加工を施す。277は背面構成から、同一打面から連続して剥離された剥片を素材としていることがわかる。両側縁及び末端に、背面から二次加工を施す。278は素材背面から急斜度だが浅い二次加工を、周縁にわたり施すが折損する。279及び281も同様に、腹面から一側縁に二次加工を施すが、作業中に末端を折損する。282は側縁に自然面を取り込むやや縦長の剥片の側縁と末端に腹面から簡単な二次加工を施す。283はやや微細な二次加工を、素材側縁に施す。

284から308は搔器である。基本的にやや肉厚な素材剥片の末端に、腹面から急斜度の二次加工を施すものが主である。284は折損により小片化しており、全体は不明であるが、末端の急斜度な二次加工から搔器とわかる。285は黒曜石製で背面に自然面が残存する。二次加工の密度はやや低い。286も黒曜石製で、薄い素材でも急斜度な二次加工を施している。287は素材となる剥片を横位に用い、下方とな

第7表 I区出土石器

図版 番号	調査区	出土位置		遺構	器種	石材	法量 (mm・g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
386	I	4G14l			尖頭器	流紋岩	63.4	20.3	8.3	8.4	
387	I	4G16n			ナイフ形石器	凝灰岩	21.0	10.5	4.6	0.9	
388	I	4G16n			ナイフ形石器	凝灰岩	29.0	12.5	5.8	1.0	切出型
389	I	4G13o			ナイフ形石器	凝灰岩	30.0	15.0	5.3	1.4	一側縁に急斜度剥離
390	I	4G16n			ナイフ形石器	凝灰岩	31.0	13.0	9.2	2.6	一側縁に対向調整剥離
391	I	4G14n			ナイフ形石器	凝灰岩	32.5	17.5	7.7	3.2	一側縁に急斜度剥離
392	I	4G13l			ナイフ形石器	凝灰岩	31.0	24.5	8.2	4.3	
393	I	4G12l			楔形石器	凝灰岩	41.0	36.0	18.0	19.0	
394	I	4G16n			楔形石器	凝灰岩	40.5	37.0	20.6	15.6	
395	I	4G15o			二次加工剥片	凝灰岩	34.0	20.0	4.4	2.0	打点部に二次加工
396	I	4G16n			石核	凝灰岩	42.0	54.0	18.5	25.9	

る一側縁に腹面から急斜度の二次加工を施す。今回の調査において素材を完全に横位にして用いるのは極端に少ない。288の左面に残る素材面はポジティブ面であるが摩滅しており、右面のネガティブ面はそれを切る新旧関係であることから、同一打面上で縦長の剥片を連続して剥離した剥片素材石核の残核をもちいていると考えられる。二次加工は素材打点部を背面に向けて施している。289は末端への二次加工に加えて素材打点部付近にも施す。290は肥大した末端は両面から二次加工を施し、両側縁には腹面から施す。末端の加工は急斜度であるため搔器としている。291は背面に自然面を残す薄手の剥片を素材としている。292は縦長剥片素材で、素材打面後背にも二次加工を施している。293は素材剥片の一側縁及び末端に二次加工を施す。末端からの加工は急斜度であるが、その際に折損が生じている。294も同様に折損して詳細は不明である。295は肉厚の縦長剥片を素材に、素材打面部を腹面から細かく二次加工を施す。296から299は背面に素材腹面と同一方向の剥離面で構成するものでいずれも素材腹面は平坦で、背面を大きく取り込む剥離である。300は素材をやや横位に用いて一側縁に腹面から二次加工を施す。被熱のためか、器面は著しく風化している。301は素材の末端に腹面から二次加工を施す。末端には、素材剥片の剥離前の石核背面が一部残存しており、ウートラパッセ状に剥離したと考えられ、それによりやや肥大している。それを除去するためか、腹面からの二次加工に先行して、背面から複数回の剥離を加えている。302は素材剥片の打面部に腹面から急斜度の二次加工を施す。上半を折損しているので不明だが、残存する側縁にわたって二次加工を加えている。303の左面はやや風化あるいは摩滅した面を持ち、右面は比較的大きなネガティブ面で構成されている。これらが石核素材であるかは定かではないが、右面のネガティブ面を形成する打点部を打面にして急斜度の二次加工を施している。他の資料と同様な剥片素材の搔器とは、素材の用い方が若干異なる。304は二次加工の際に大きく折損しているため、全体像が不明瞭であるが、残存する厚さは非常に肉厚である。また素材面の剥離も大きいことから、大型剥片を素材としている可能性がある。305も肉厚な素材を用いる。素材の打点付近から縦割れが生じているが、二次加工を切っており、二次加工時の折損事故と考えられる。306は背面に自然面を大きく取り込む素材で、腹面から二次加工を施すものの石理面で折損している。307、308は今回出土した搔器の中で最大の大きさである。307は背面が自然面で占められる剥片を素材とし、ほぼ全周にわたり腹面から二次加工を施す。特に末端の二次加工は急斜度である。308は大型の縦長剥片を素材にする。素材背面は、腹面と打面が同じ大振りな剥離面が複数存在している。末端の二次加工は入念に細かく施している。先述の304も、折損部位が残存している場合、同様程度の剥片であったと推定する。

309から319は楔形石器である。309、312は小型のもので、309は上下端に顕著なツブレ痕と階段状剥離がみられる。一側縁にも同様にみられるが、対向する側縁は上下方向の折損で不明である。312は黒曜石製。縦長剥片を素材としている。器面には素材の打点部が残存しており、上下端に微細なツブレ痕がみられる。310も黒曜石製で、右面に素材のバルブが発達している。上下端に顕著なツブレ痕と階段状剥離がみられる。311、313も上端あるいは下端に顕著な階段状隔離がみられるが、縦方向ないし斜めに截断する折損により、対辺が不明である。314はそのようにして折損したのと考えられ、両側縁に截

第8表 出土石製品

図版 番号	調査区	出土位置		遺構	器種	石材	法量 (mm・g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
397	E	5I19g		182SK	敲石	凝灰岩	39.0	33.0	29.7	52.2	縄文
398	F	5I1e		510SK	敲石	花崗岩	43.5	43.0	38.0	91.3	縄文
399	G	5H12n		700SK	敲石	—	46.4	42.8	36.0	92.4	縄文
400	F	5I8o	GR21		敲石	不明	60.0	53.5	45.0	178.9	
401	G	5H9n	GR20		敲石	花崗岩	45.0	44.0	45.4	136.4	
402	G	5H13i	GR5		敲石	不明	50.0	44.0	37.2	119.4	
403	G	5H12e	GR2		敲石	花崗岩	80.0	78.0	54.5	416.0	
404	G	5H10m	GR26		敲石	凝灰岩	66.0	49.0	48.2	103.3	
405	F	5H2a		591SK	敲石	花崗岩	106.0	95.5	65.5	864.0	縄文
406	H	5H1f		013SD	敲石	花崗岩	67.0	56.0	30.0	169.1	縄文
407	G	5H13k	GR7		敲石	チャート	62.0	48.0	39.5	157.8	
408	I	4G14p			敲石	—	94.0	39.0	38.5	196.6	縄文
409	I	4G17n		092SK	敲石	花崗岩	68.0	6.0	32.2	190.3	縄文
410	C	5J10h~19h		016SD	石皿	砂岩	120.0	62.0	38.5	371.2	縄文
411	G	5H15j	GR6		石皿	砂岩	135.0	105.0	45.0	996.0	
412	G	5H11l	GR8		石皿	砂岩	160.0	140.0	65.0	2000.0	
413	G	5H11l	GR8		石皿	砂岩	249.0	239.0	60.0	4000.0	
414	E	5I19g		1432SK	砥石	凝灰岩	42.0	34.0	12.0	22.8	中世
415	I	4G18m		018SK	砥石	凝灰岩	46.0	38.0	10.5	22.1	中世
416	F	5I2f		893SK	砥石	凝灰岩	101.0	40.5	23.1	134.2	中世
417	G			034SE	砥石	凝灰岩	64.0	58.5	37.8	183.6	中世
418	I	4g17m		066SI	砥石	凝灰岩	91.0	53.5	34.6	235.4	被熱、中世
419	F				石錘	砂岩	48.0	36.8	36.8	88.1	縄文
420	F	5I10c		980SK	石錘	花崗岩	69.0	64.0	29.4	171.9	縄文
421	F	5H8p		827SK	石錘	不明	146.5	49.0	35.5	387.4	被熱、縄文
422	G	5H9l			不明	凝灰岩	34.5	48.2	25.2	43.3	半折、中世
423	F	5H3j		163SK	紡錘車	凝灰岩	41.0	40.0	30.7	67.4	未成品、中世
424	G	5H14k	GR7		不明石製品	砂岩	46.0	25.5	12.4	15.7	
425	G	5H12c		823SD	五輪塔	花崗岩	160.4	140.8	60.9	2000.0	水輪片、中世

断面が残る。315 は剥片素材で、縦方向に用いる。上下端にツブレ痕がみられる。316 は上下端にツブレ痕及び階段状剥離がみられ、それに先行する階段状剥離が側面にもみられる。対辺は折損しているが、90°回転しながら打撃を加えていることがわかる。317 は比較的大型の楔形石器で、自然面が残存する。上端に階段状剥離みられるものの、下端は斜めに折損しており詳細は不明。剥片素材の石核という可能性もある。318 も背面に自然面が残存するが、こちらは上下端に顕著なツブレ痕がみられる。319 は剥片素材で、周囲に階段状剥離が顕著にみられる。

320 から 334 は二次加工剥片である。320 から 327 までのものは、折損により小形化し、全体が不明瞭になってしまうものが多い。特に、ナイフ形石器の作成に伴うブランティングの最中に折損・破損してしまう可能性が高い。薄手の剥片で、側縁に急斜度の二次加工があるものについては、注意が必要である。同じく、324 のようなやや肉厚な剥片の一部であると、搔器などの可能性も出てくる。328 から 334 にかけては、二次加工の多寡はあるものの、側縁ないし末端に散発的な加工がみられる程度である。332 は、素材の腹面から両側縁に急斜度の二次加工を施しており、その一部は上端の折損面を切っている。また素材末端に背面から加工を施すなど、いずれか器種の未製品とも考えられる。

335 から 343 は微細剥離痕を有する剥片である。335 は黒曜石製の大型剥片で、背面に自然面が残存するものの、同一打面上を連続剥離して生じた剥片である。その一側縁に、背面からの微細な剥離痕がみられる。336 は、一側縁に腹面からやや大きい単位の剥離痕が、また末端には細かな微細剥離痕がみられた。337 は素材の一側縁及び打面に背面へ微細剥離をもつ。338 から 342 は縦長剥片を素材とする。いずれも背面には先行する同一方向の剥離面で構成され、連続した剥片剥離の中で生じた剥片であ

ることがわかる。それらの一側縁ないし二側縁の一部に微細剥離痕が確認できる。343 はやや肉厚な剥片の一側縁に微細剥離がみられる。

344 から 360 は剥片である。剥離された状況により、特殊な剥片に位置づけられるものもある。344、345 は剥片であるが、打面の後背に先行する同一方向の剥離痕がみられ、344 においては末端に石核下端部を取り込み、底面状を呈する。打面形状、背面構成、剥離角度から、ブランティング等の急斜度調整の際に生じたと考えられる。345 は左面の平坦面を打面にして、側縁に細かな調整痕がみられる。それを切るように打面を右面に移し、主剥離面が形成されている。剥離は急斜度で裏面に抜けず内側に深く入り込んだ結果、背面を大きく取り込む剥離となった。344 と同様にブランティングに係わるものであり、いわゆるブランティング・チップであると考えられる。346 から 349 は、背面に稜上調整剥離の痕跡がみられる剥片である。346 は赤色のチャート製で、349 は左右方向から稜上調整を行う。347 の背面は主剥離面と 180°異なる方向の剥離面が先行しており、打面転移時に合わせて稜上調整を行っていることがわかる。348 は剥離末端が内側に入り石核下端部を取り込んでいる。350 から 352 は縦長剥片である。いずれも同一方向の連続した剥離で生じている。353 は、主剥離面のリングが剥離面中央で下端からのリングと合わさり、結果として同一剥離面上でリングが反転している。これは両極打撃を行った際に剥離される特徴的な剥片である。剥離面は平坦で、上下端の打点は点状ないしツブれている。楔形石器の出土とともに、本遺跡で両極打撃を含む剥片剥離作業が行われていたことを示す証左となる。354 は黒曜石製の剥片。同一打面上を同一方向に剥離作業を行った後、打点を大きく後退して、あるいは打面を取り込むように剥離するが、先行する打面端部に沿って剥離方向がねじれたものである。355 は横長剥片。背面からの剥離面で生じた複剥離面打面の頂部を打撃する。剥離は石核の背面を抜けて、石核下端部を底面のように取り込んでいる。357 から 360 は、背面に細かな先行剥離面があり、それらを大きく取り込んだ剥片である。357 や 360 の打点背面は先行剥離面が形成する寸詰まりの剥離痕で器面中央が肥大する。主要剥離面はそれらを大きく取り込み、結果として作業面を平坦にしているものと考えられる。359 の背面は複数方向の剥離面で構成しており、頻繁に打面転移を繰り返していることがわかる。

361 から 385 は石核である。361 は黒曜石製で、単剥離面打面から連続剥離を行うが、横方向の折損が生じている。362 から 367、369、370 から 372、376、378、385 は、形状は異なるが基本的に同様の剥片剥離技術を用いている。すなわち、単剥離面ないし副剥離面打面あるいは自然面でも平坦な打面から、石核の側縁に沿った縦長剥片を剥離することを目的としていると考えられる。その過程では、362 と 372 の横方向剥離痕や、366 のような打面再生も行い、385 のように打点をずらしながら剥片剥離を行っている点である。その他では、368、380、382 などのように、剥片素材の石核は背面の自然面から求心状に剥片剥離を行うこともある。その他では、373 から 375、379 のように石核側縁を用いない剥離方法がなされている。また 377 は打面および作業面転移を頻繁に繰り返している。384 は打面と作業面を入れ替える交互剥離を行っている。

(8) I 区出土石器 (第 130 図・第 7 表)

I 区では 547 点の石器が出土した。ここでは 11 点を図示した。

386 は小型尖頭器である。表裏に素材面を残し、両側縁に二次加工を施している。先端を折損しているが、基部に加工の痕跡は少ないため、やや柳葉状の器形である。

387 から 392 はナイフ形石器である。縦長剥片素材とわかるものは、387、391 くらいである。387 は素材打点を基部に据え、刃部となる側縁以外に腹面からのブランティングを施す。391 も同様で、先端を折損しているが、折損面以外は背面からブランティングを行う。388 の背面は自然面だが、一部に先行剥離面と主剥離面が成す縁辺を刃部とし、一側縁加工を施す。389 の背面は、主剥離面と直交する剥離面が先行しているのがわかる。392 は素材をやや横位に用いており、打面部を一側縁加工している。

393、394 は楔形石器である。393 は周縁に顕著な階段状剥離がみられる。394 は背面が自然面であり、上下端にツブレ痕がみられるほか、器面中央に階段状剥離を切るネガティブ面が形成されている。

395 は二次加工剥片である。打点が折損した縦長剥片の末端に、数回の二次加工がみられる。

396 は石核である。ポジティブな素材面が残存し、背面が自然面のため、剥片素材石核であるとわかる。上下端から求心状に剥片を剥離する。

(9) 出土石製品 (第 131 ～ 138 図・第 8 表)

ここでは出土石製品を一括して報告する。特に石製品は、調査開始当初から断続的に出土しており、それは表採や上層遺構埋土中にも含まれる。そのため、石製品個別の帰属時期は不明な点が多々ある。

敲石 (第 131 ～ 133 図) 石製品のうち最も出土したものは敲石で、19 点出土している。図示したのは 13 点である。石材は凝灰岩、花崗岩、チャートである。いずれも器面の一部に顕著な敲打痕が残存し、一部は欠損する。397、399、402 は強く受熱しており、器表面が黒色化している。

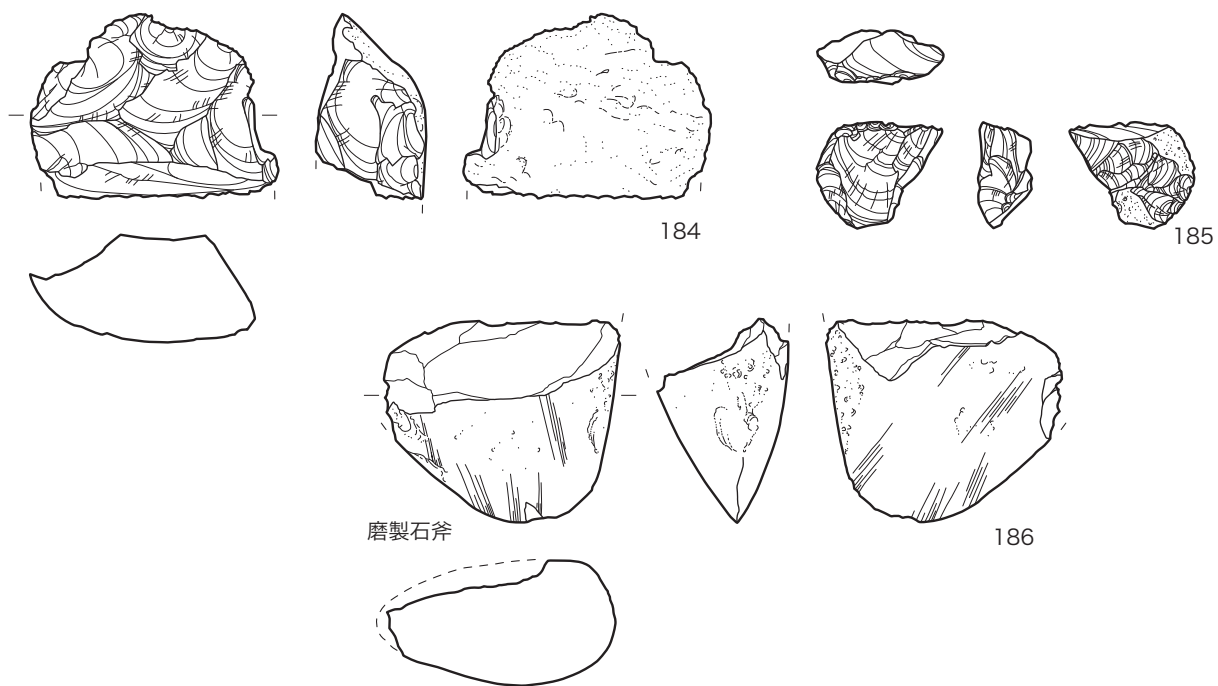
石皿 (第 134・135 図) 石皿は 4 点出土し、すべて図示した。硬質な砂岩製で扁平円礫を用いる。410 は縄文土器群と一緒に出土したもので、表裏に僅かに擦痕は観察できる。411 は周縁にやや敲打状のツブレ痕がみられ、器表に擦痕がある。また受熱しており、表面に亀裂がうすく貫入している。412 は断面が隅丸菱形を呈している。使用に伴う形状ではないが、器面に擦痕が僅かに観察できる。413 は大型の石皿と思われる。旧石器に伴って出土している。扁平板状の砂岩を用いている。石理にそって剥離しており、表面も風化により粉状化しているため、擦痕等は観察出来なかった。

砥石 (第 136 図) 砥石は 7 点出土しており、そのうち 5 点を図示した。いずれも凝灰岩製である。414、415 は凝灰岩でもキメが細かい。414 は一部折損している。器面には細かな擦痕が明瞭に観察でき、すべての面を用いている。415 もよく使用痕が観察できる。使用に伴い一度折損するが、折損面も再使用して砥面としている。416 は短冊状のやや粗い砥石で、周縁にキザミ目状の凹凸があり、器面には断面 U 字の溝状擦痕がみられる。おそらく細い棒状のものを研いだものと考えられる。417 はやや細かい砥石で、表裏のみ使用していて、上下端が折損する。418 もやや細かい砥石で、四面を使用している。右面に煤が付着している。

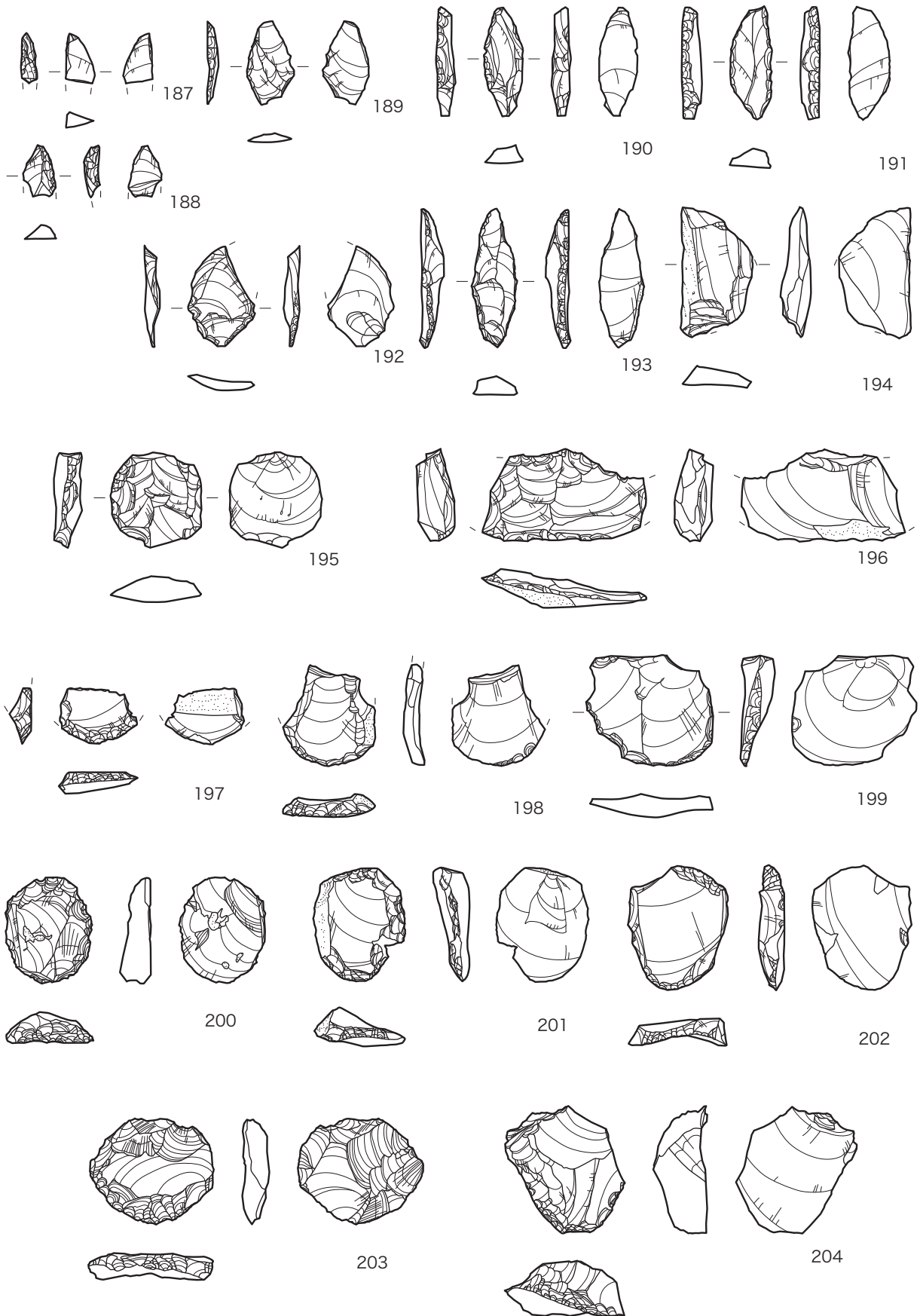
石錘 (第 137 図) 石錘は 2 点、及び石錘と考えられるものが 1 点出土し、すべて図化した。419 は表採した石錘である。凝灰岩と思われる石材を錘状に研磨し、上下端から穿孔する。420 は花崗岩製の打欠石錘である。扁平礫の上下端がツブレており、僅かに凹面をもつ。421 は性格不明な石製品であったが、錘の一種であると考えられる。鰹節状の全体に煤が付着しているが、部分的に付着がない。おそらく煤が付着する環境下で、紐状のもので 1～2 回巻きつけて使用していたと思われるが、具体的な環境は不明である。

その他の石製品 (第 138 図) その他の石製品としては、423 の紡錘車と思われるものがある。凝灰岩製で、研磨によって器面を仕上げている。形状は紡錘車であるものの、頂部に凹みがあるだけで貫通していない。未製品であろうか。422 は性格が不明な石製品である。凝灰岩製で、半裁状態であるが、底面が平坦な球形を呈していると思われる。頂部は穿孔しているが途中までである。その頂部から底面にかけて、残存で 2 条の凹線が作出されている。この 2 条が成す角度で球形に復元すれば、6 条の凹線が巡っていたと推定できる。一部に煤が付着するものの、用途は不明である。頂部に何かを差し入れる使用方法も考えられる。

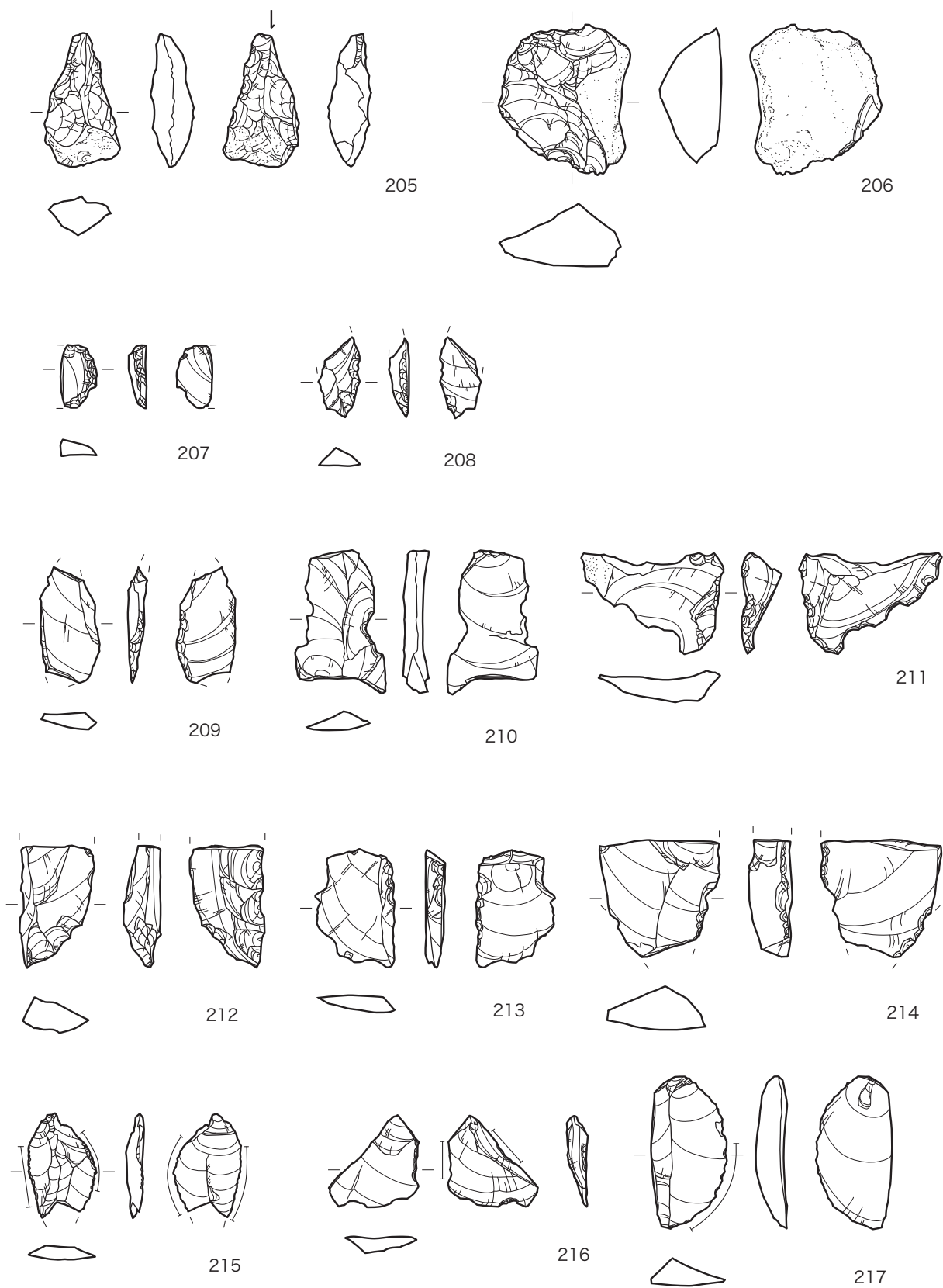
424 は、旧石器に伴って出土した不明石製品である。器表面に擦痕がやや観察できるが、一端が折損し、形状の復元が困難である。垂飾状のものを想定するが、垂下するための穿孔や紐ズレ等はない。425 は五輪塔の水輪片と思われる。水輪の下半で、裏面には工具によるハツリ痕が観察できる。梵字等の表現はみられない。花崗岩製。



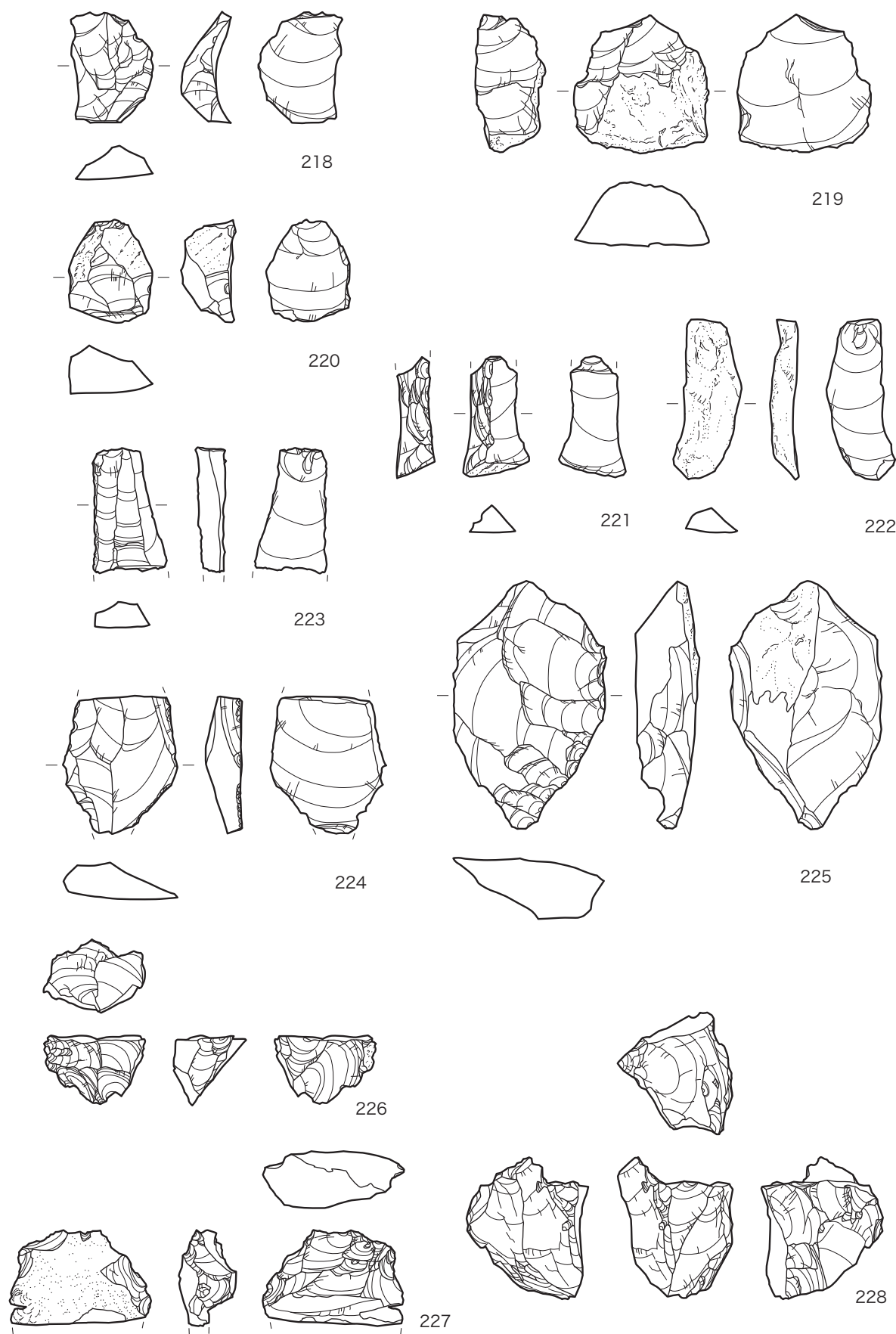
第 109 図 B・C・Da 区出土石器 (S=2/3)



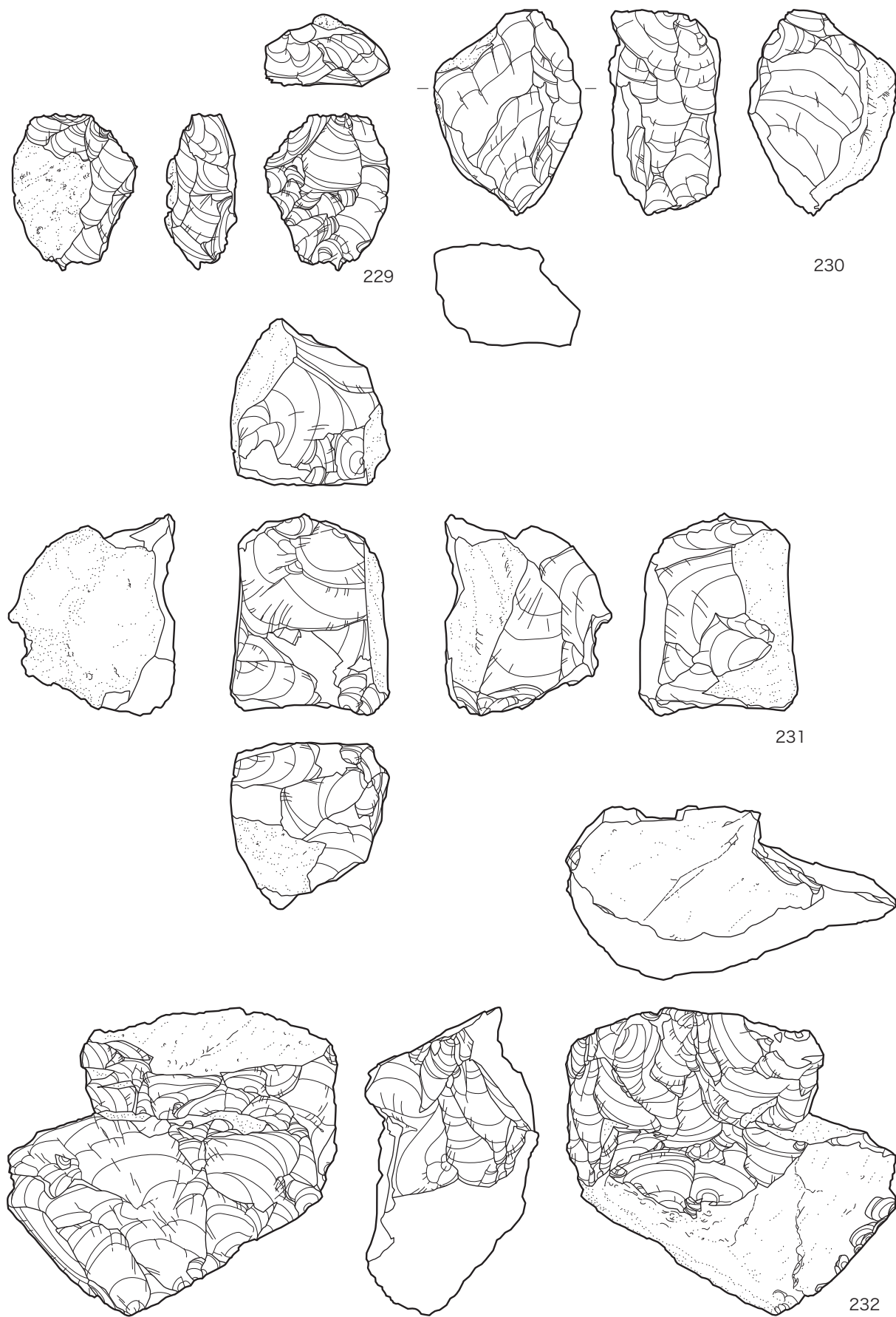
第110図 Db区出土石器1 (S=2/3)



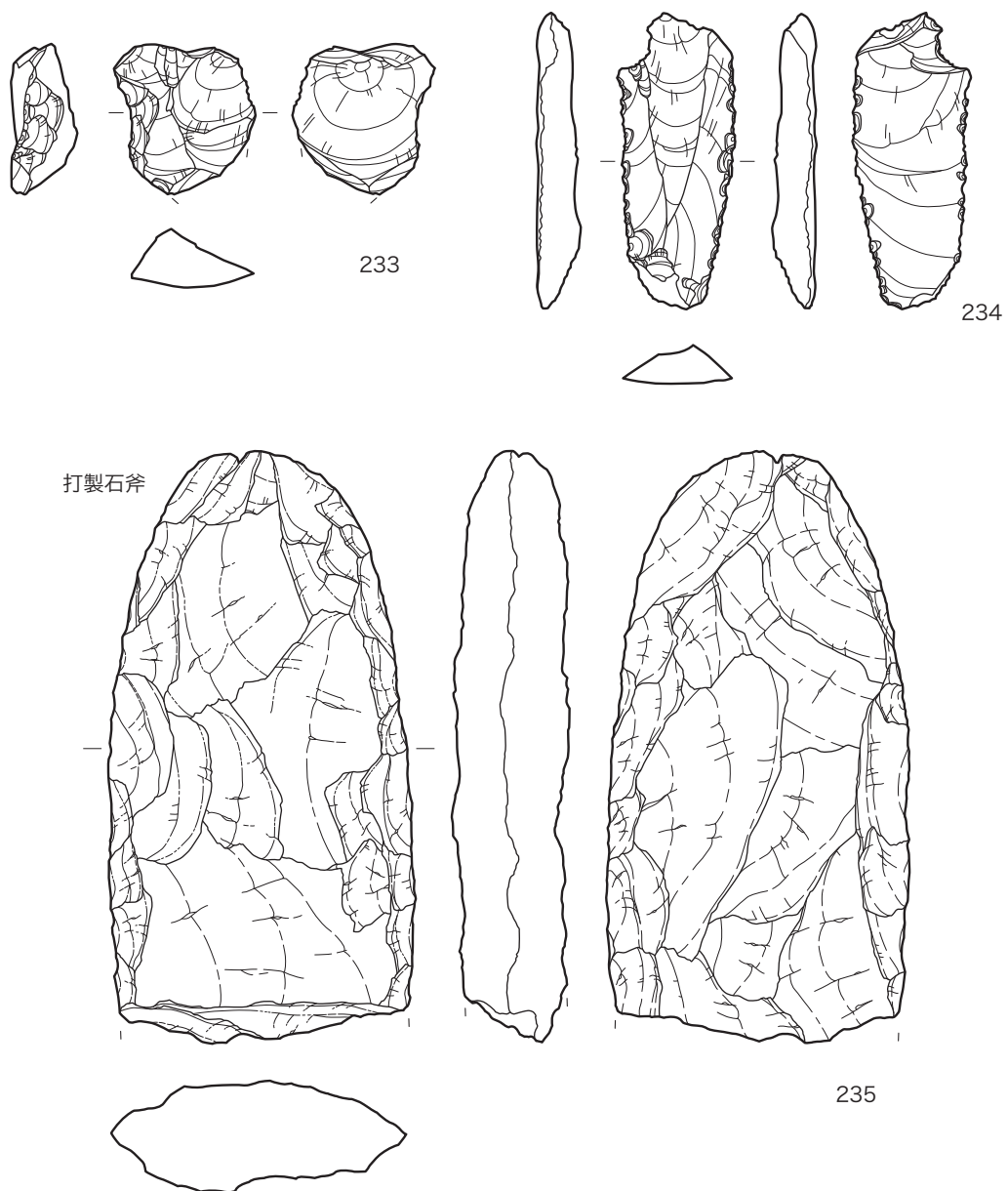
第 111 図 Db 区出土石器 2 (S=2/3)



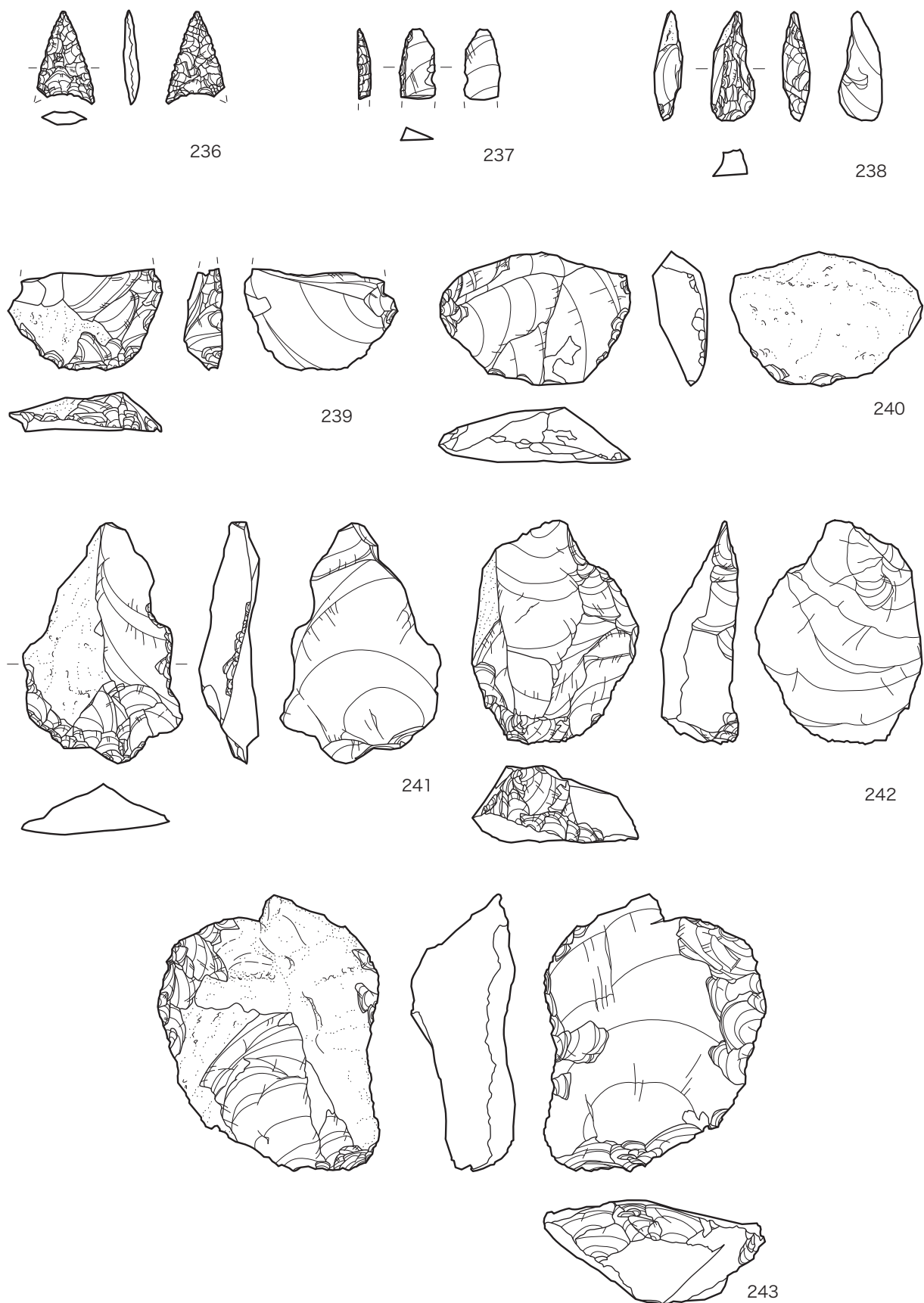
第 112 図 Db 区出土石器 3 (S=2/3)



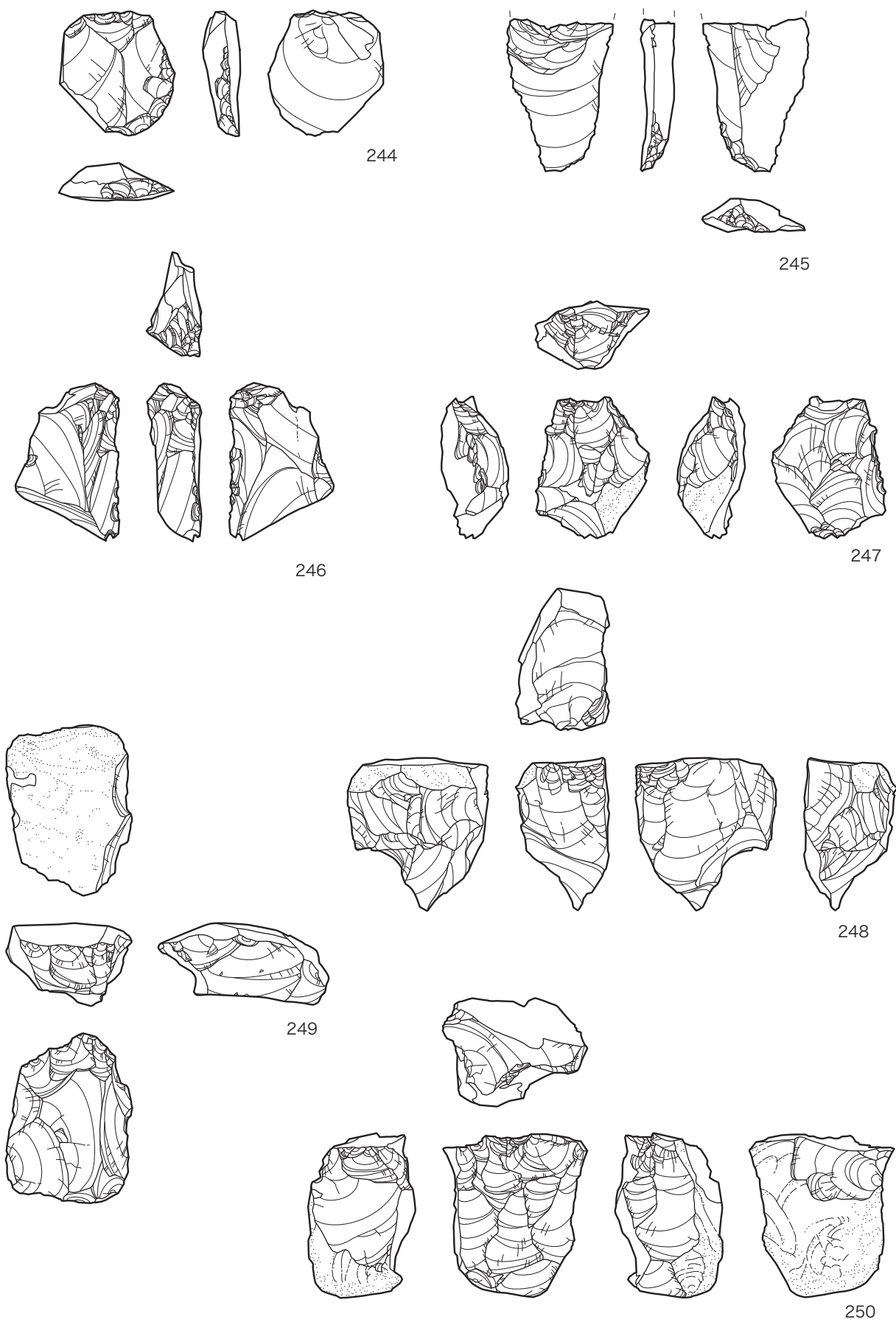
第 113 図 Db 区出土石器 4 (S=2/3)



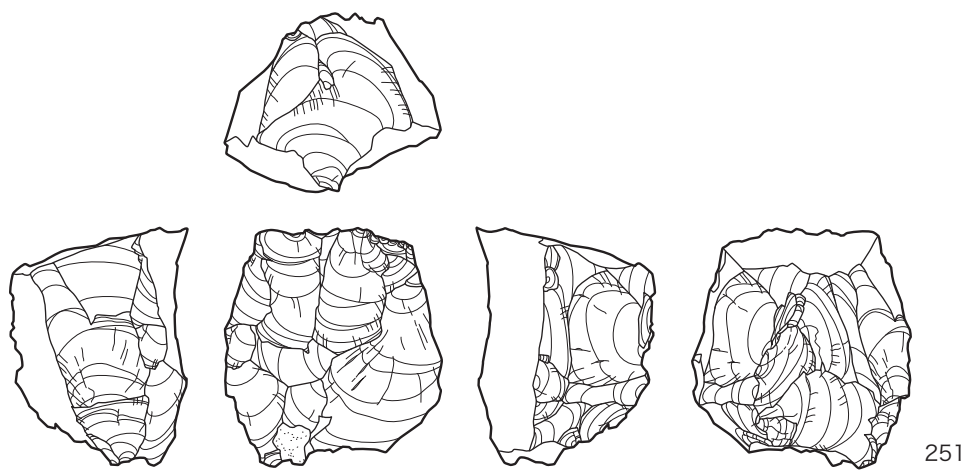
第 114 図 E 区出土石器 (S=2/3)



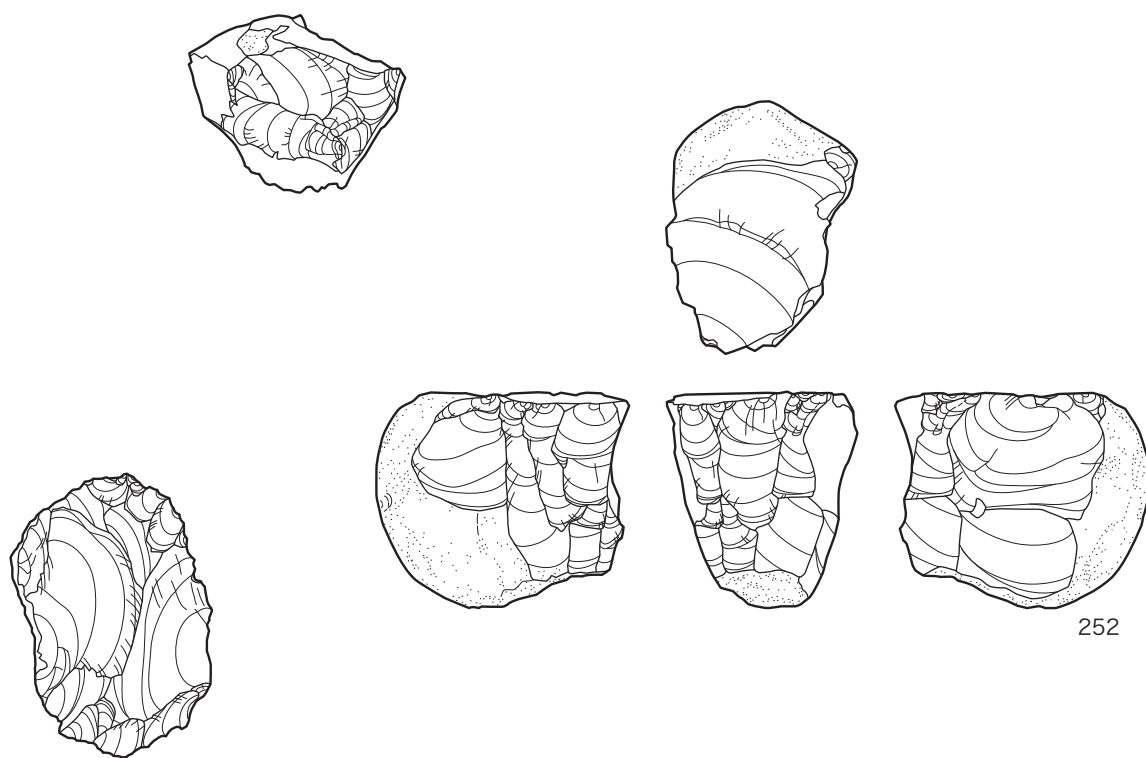
第 115 図 F 区出土石器 1 (S=2/3)



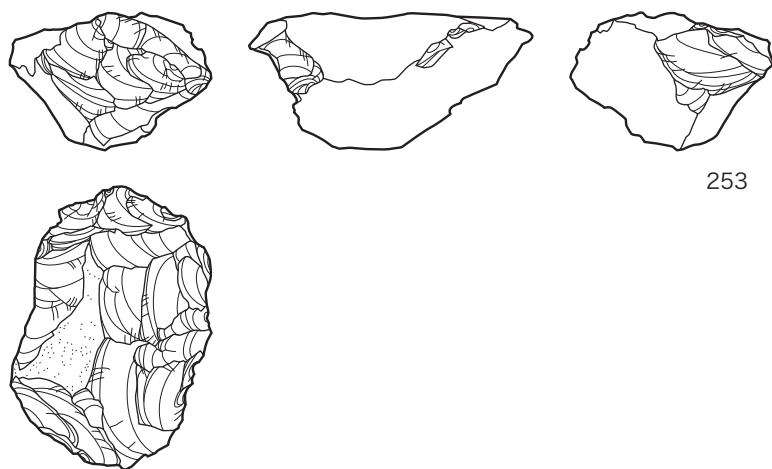
第 116 図 F 区出土石器 2 (S=2/3)



251

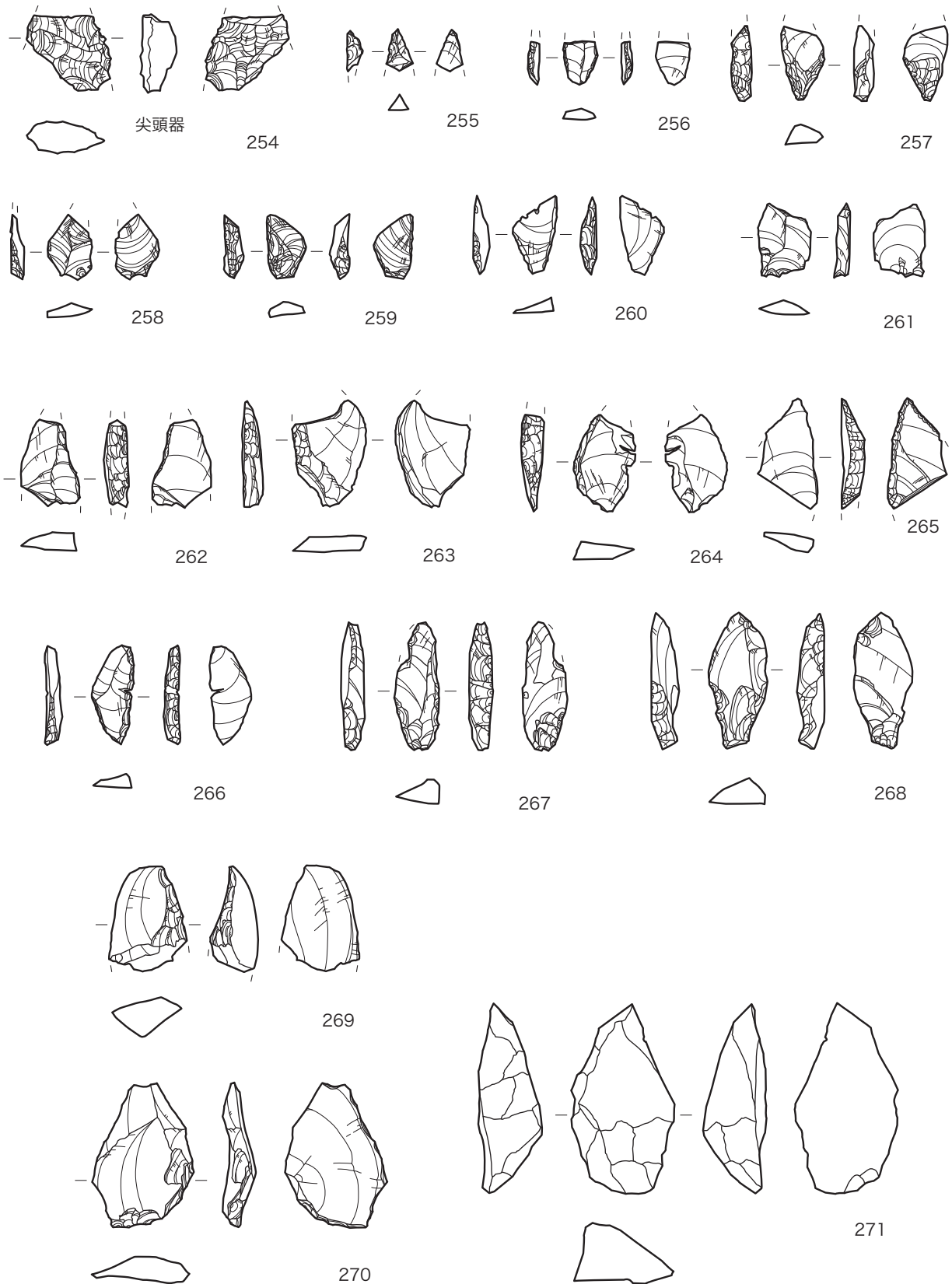


252

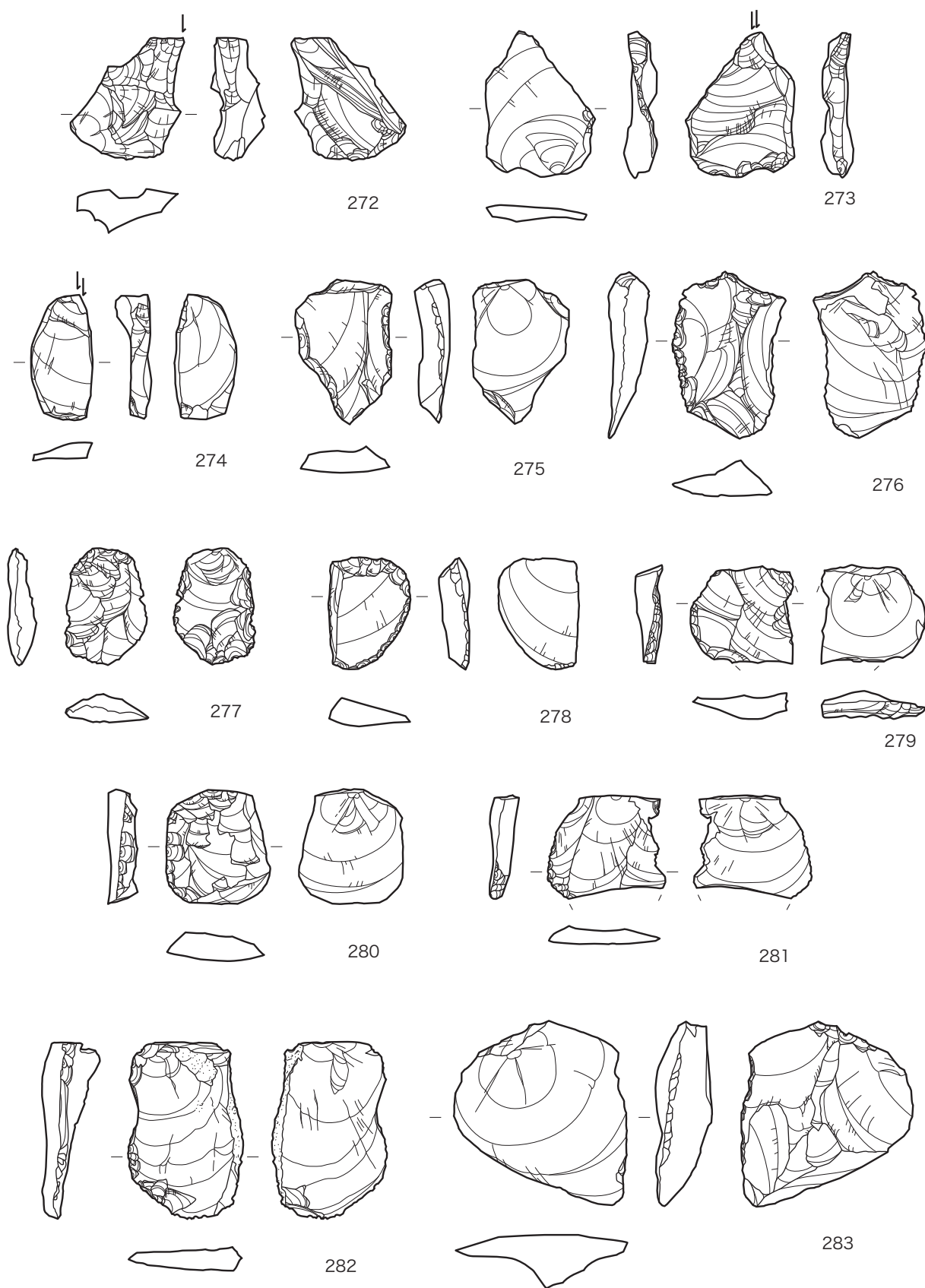


253

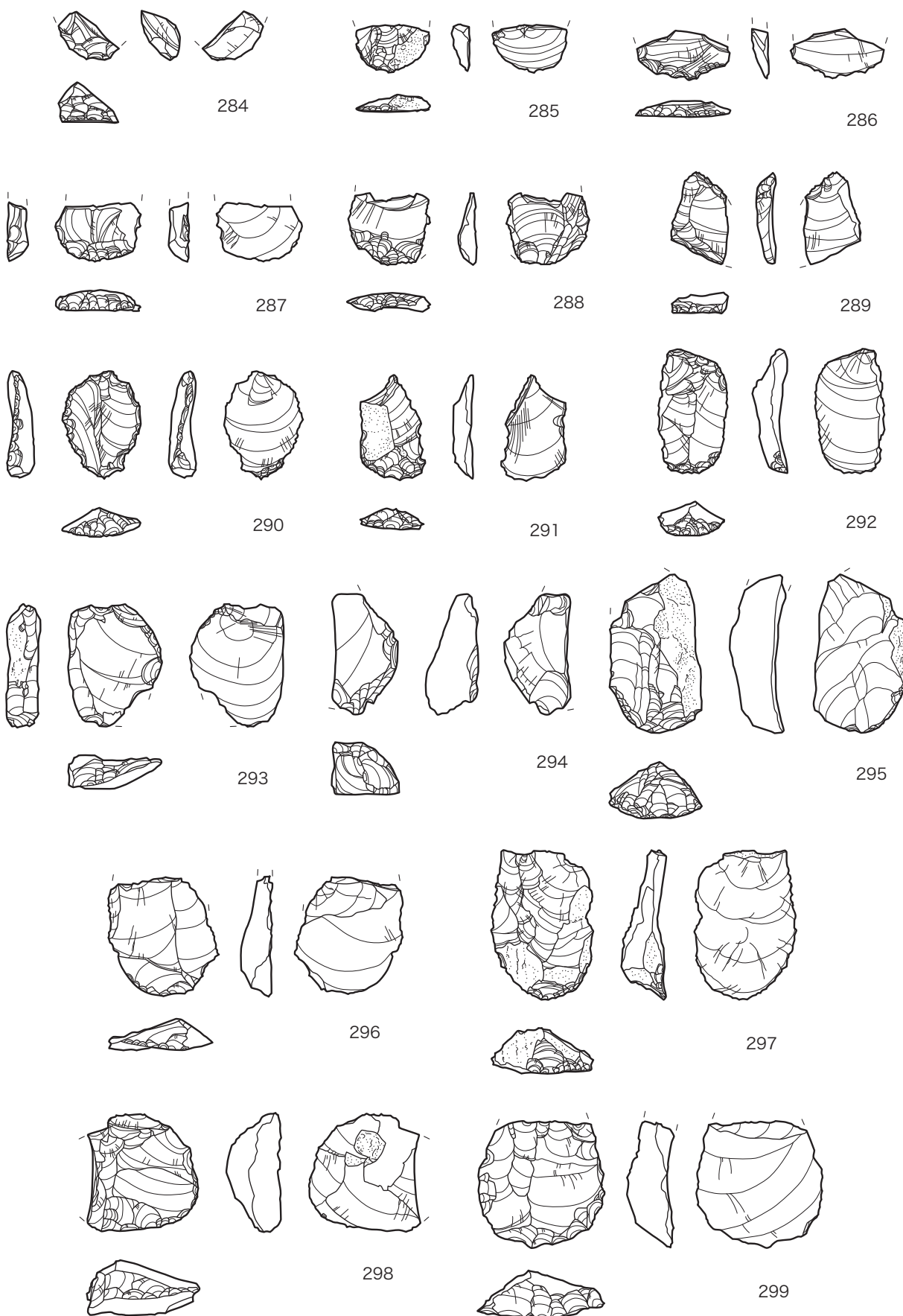
第 117 図 F 区出土石器 3 (S=2/3)



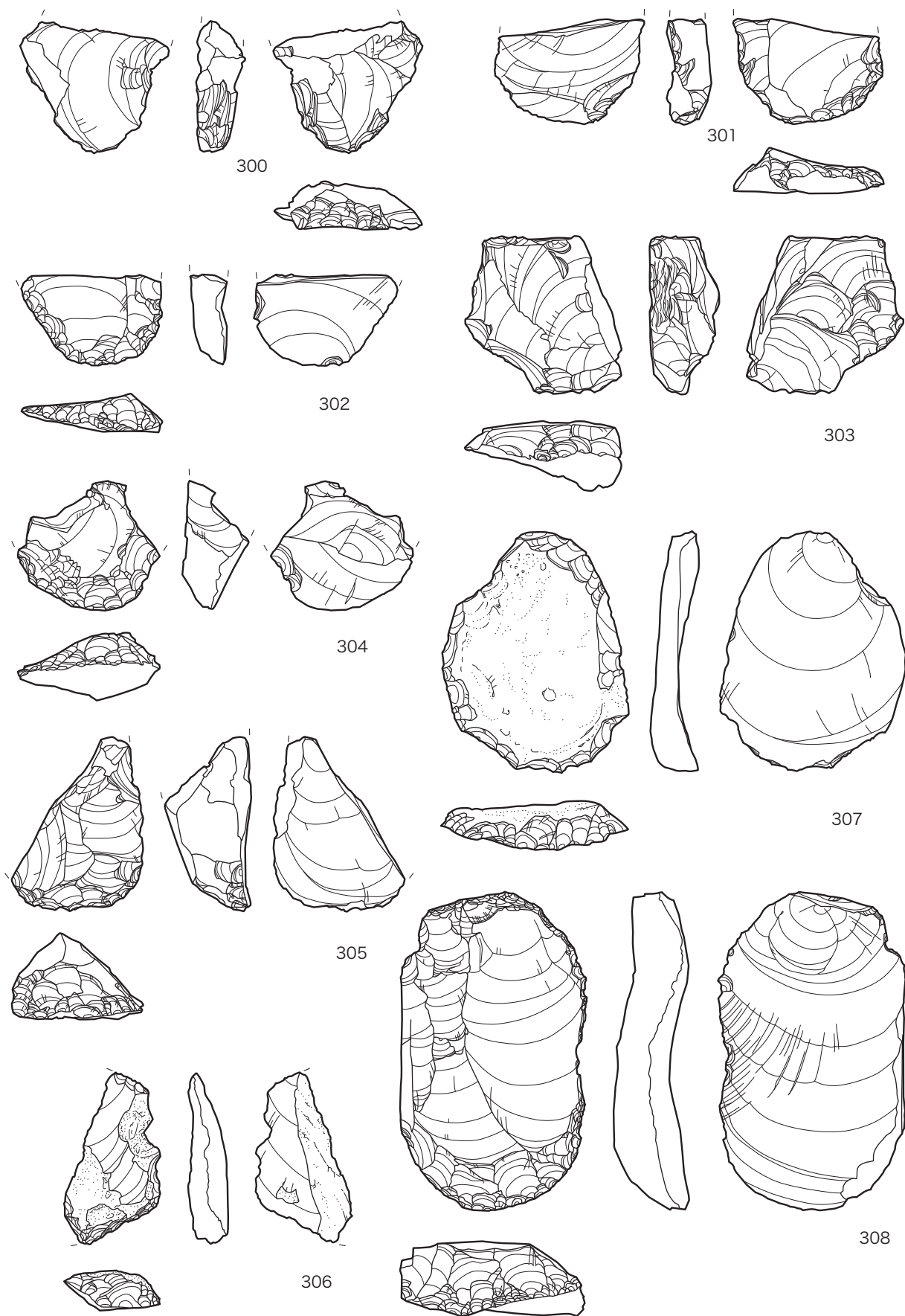
第 118 図 G 区出土石器 1 (S=2/3)



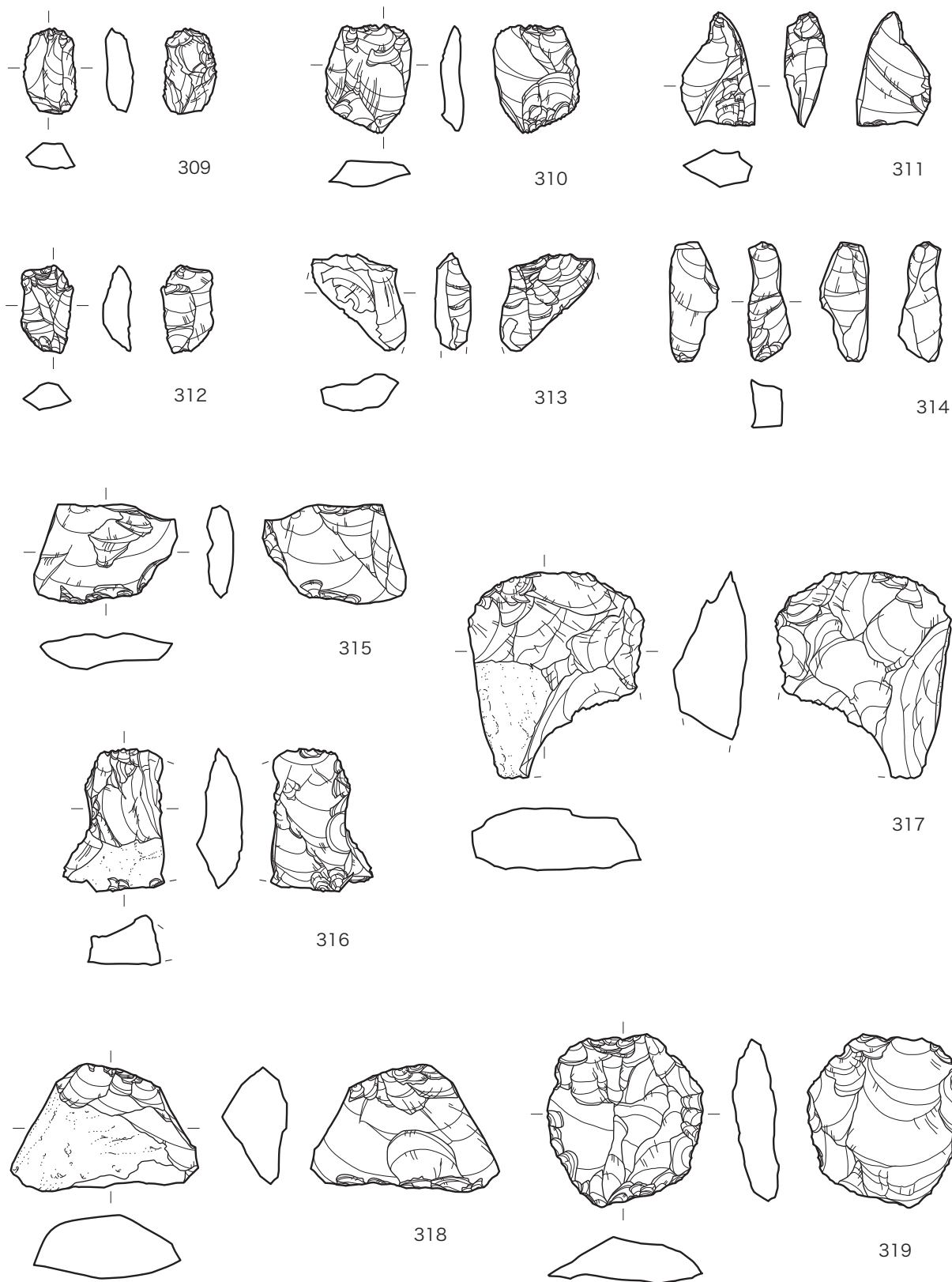
第 119 図 G 区出土石器 2 (S=2/3)



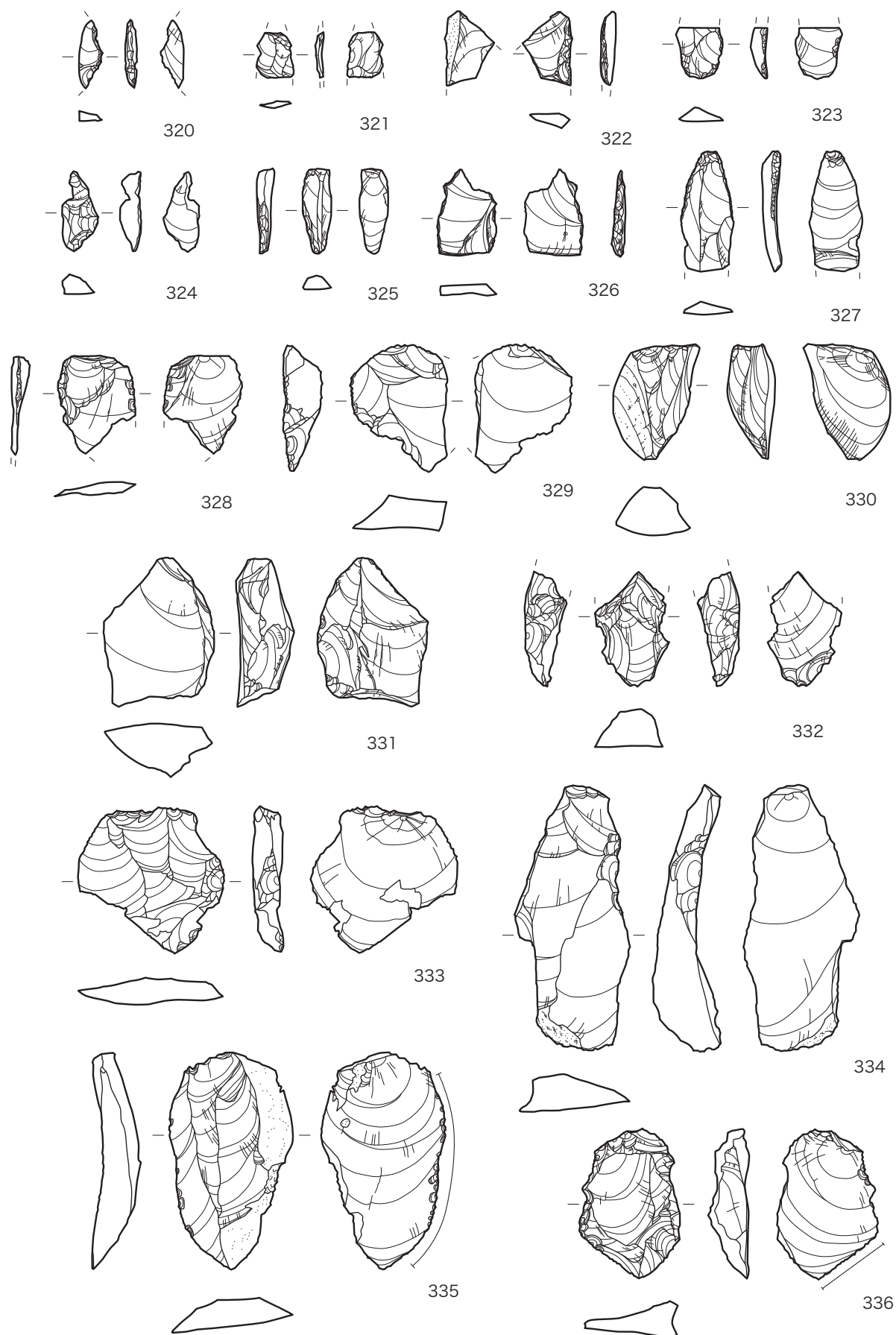
第 120 図 G 区出土石器 3 (S=2/3)



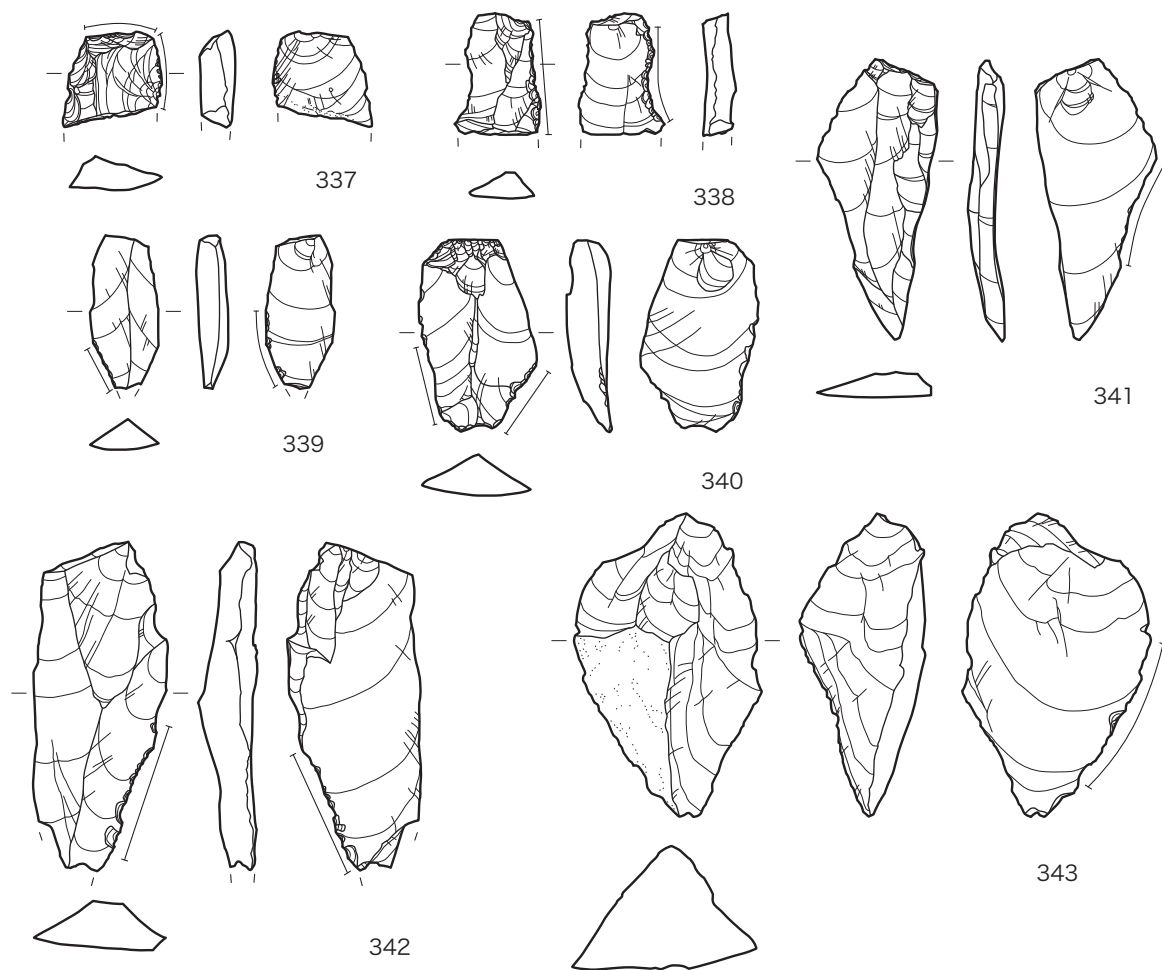
第 121 図 G 区出土石器 4 (S=2/3)



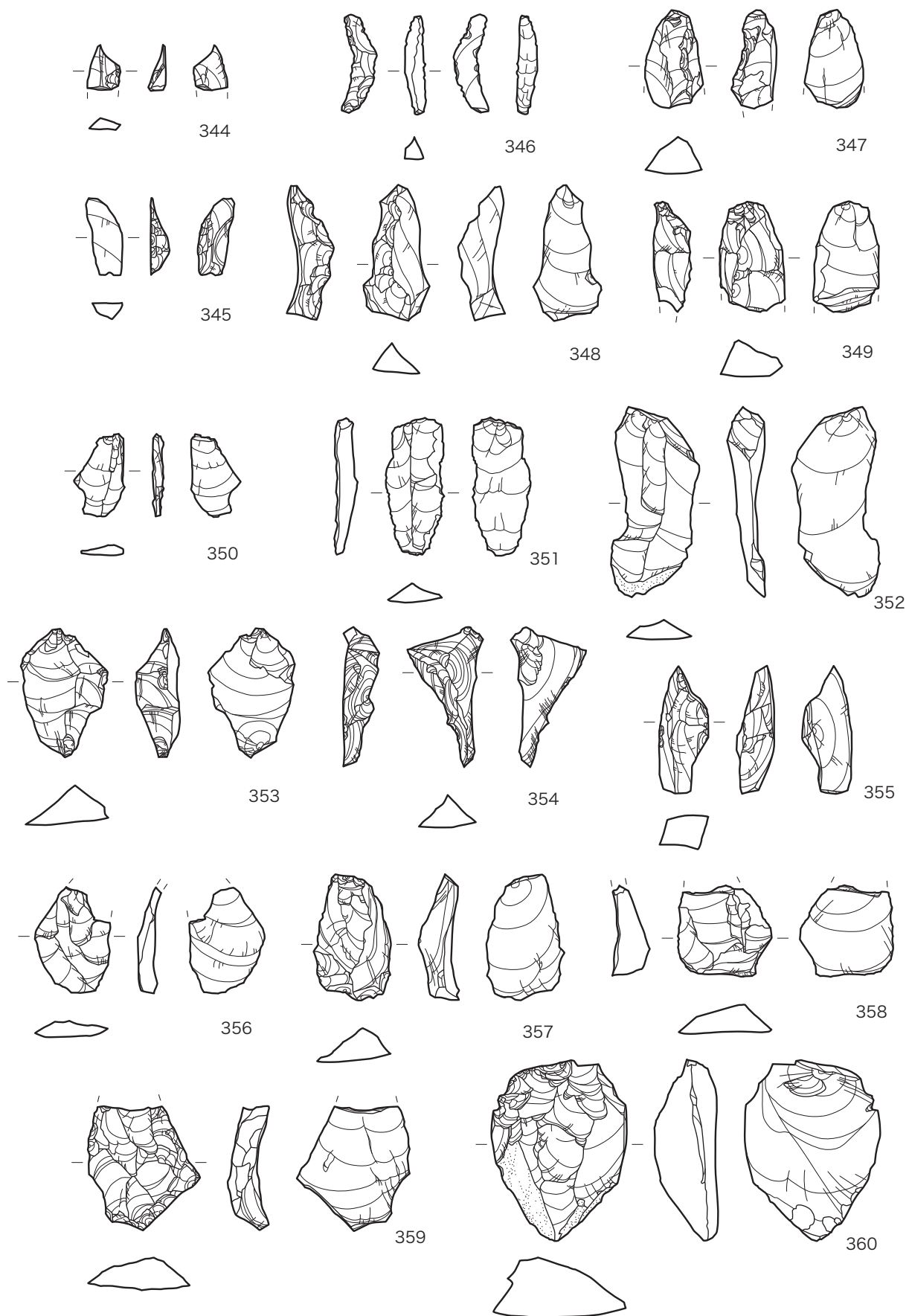
第 122 図 G 区出土石器 5 (S=2/3)



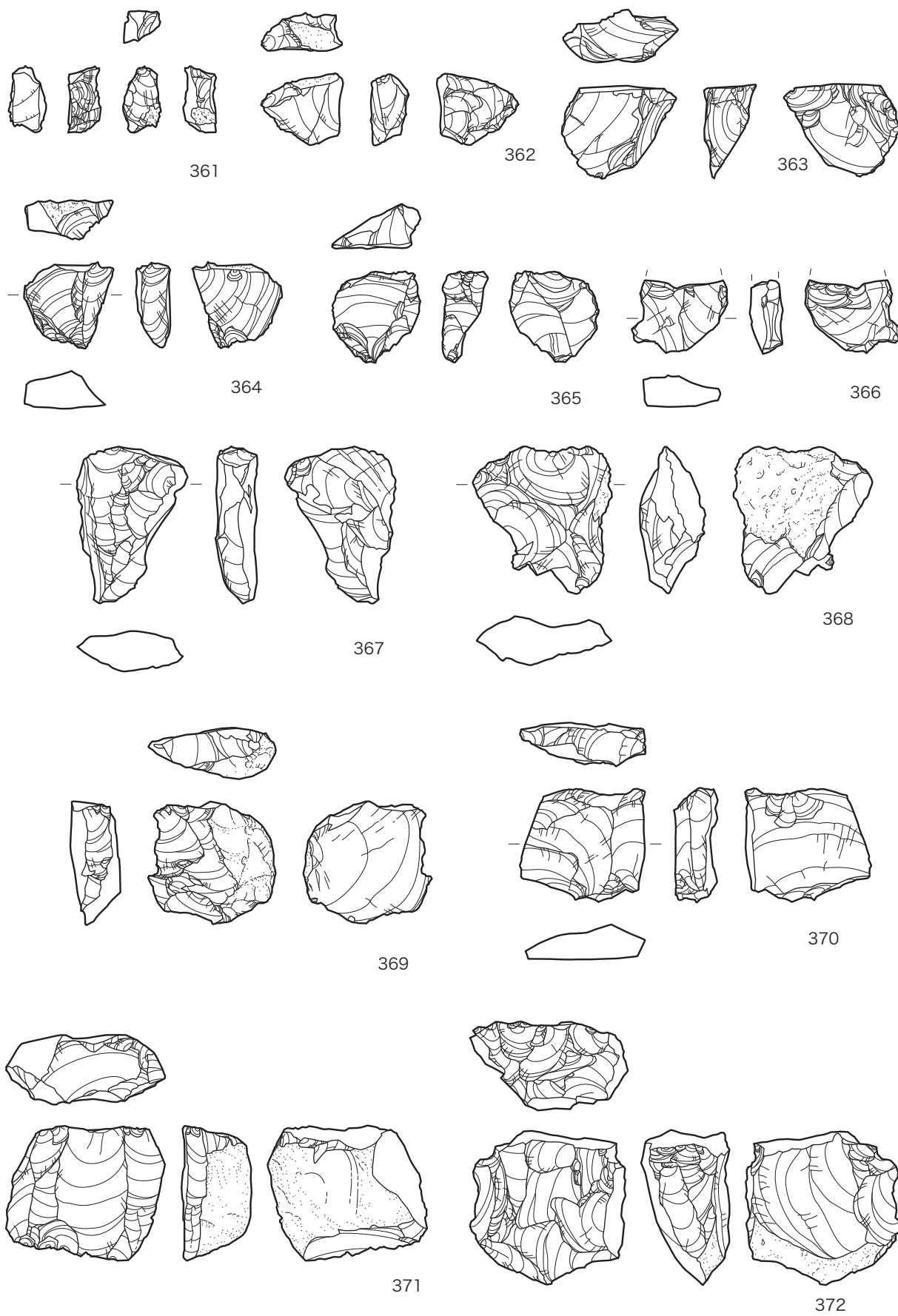
第 123 図 G 区出土石器 6 (S=2/3)



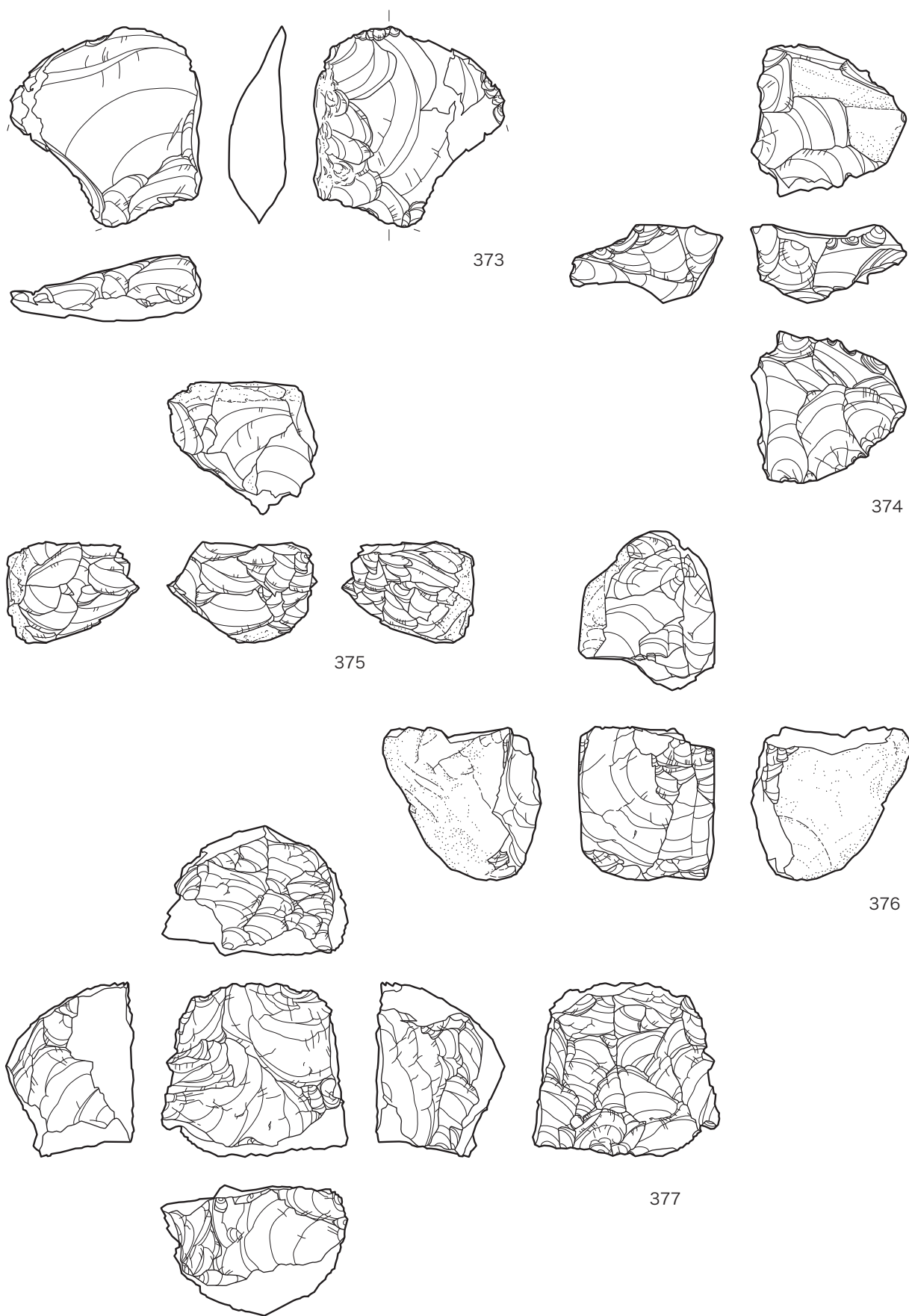
第 124 図 G 区出土石器 7 (S=2/3)



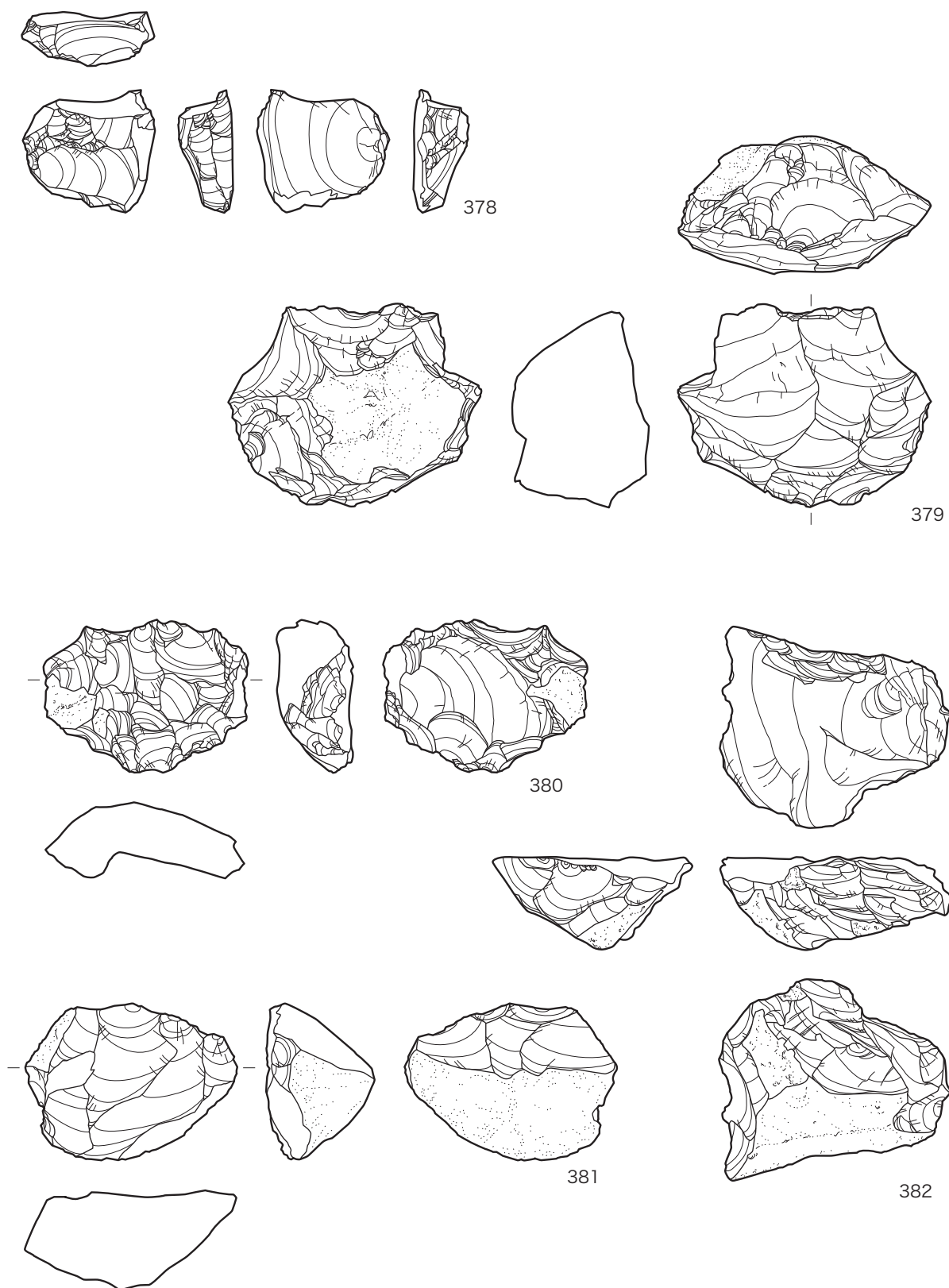
第 125 図 G 区出土石器 8 (S=2/3)



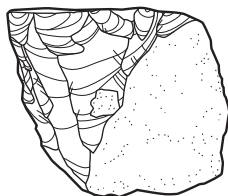
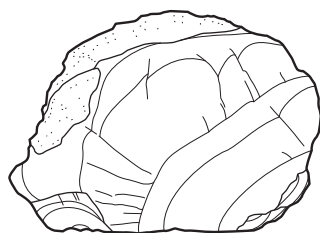
第 126 図 G 区出土石器 9 (S=2/3)



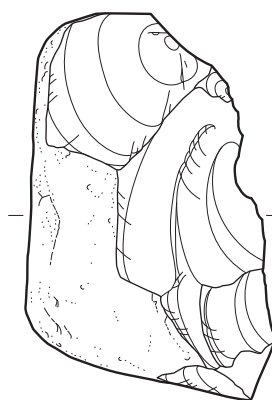
第 127 図 G 区出土石器 10 (S=2/3)



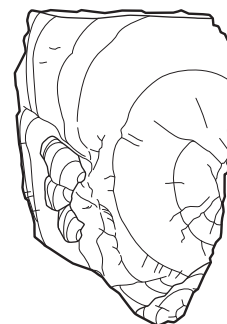
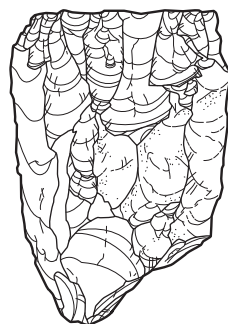
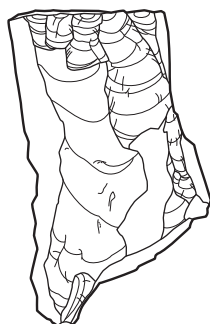
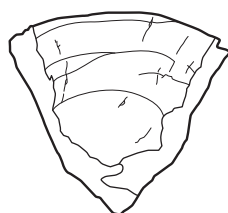
第 128 図 G 区出土石器 11 (S=2/3)



383

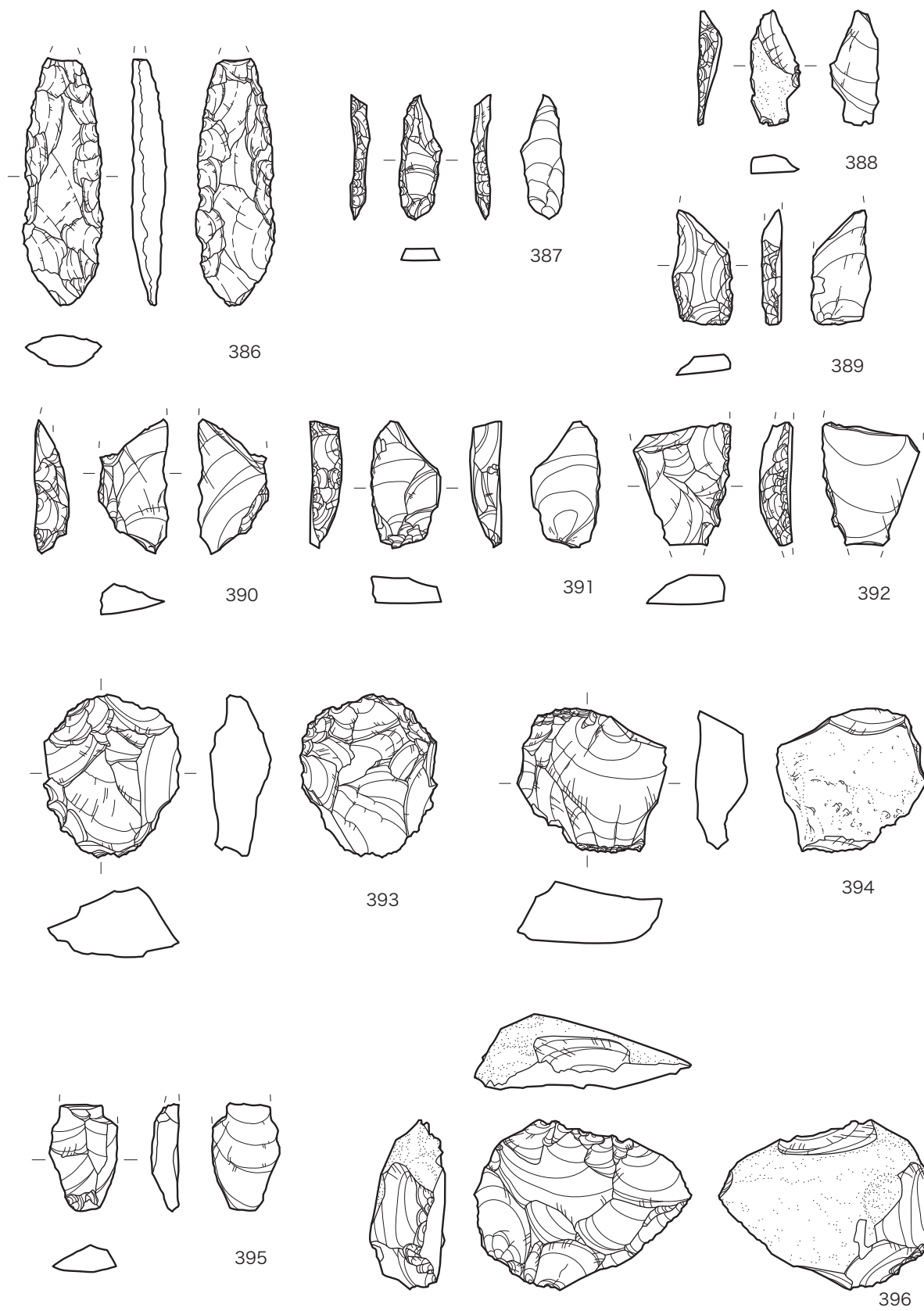


384

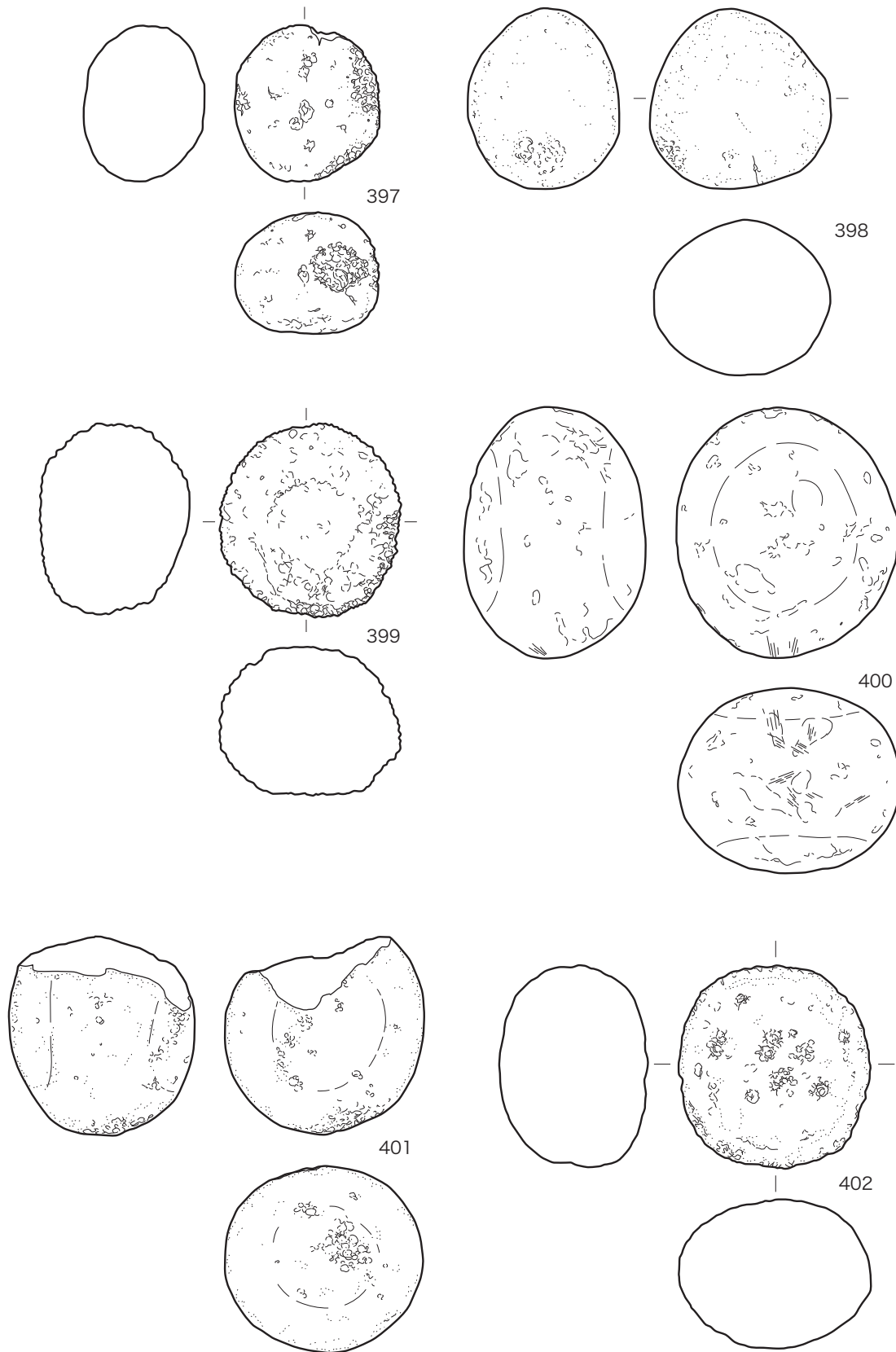


385

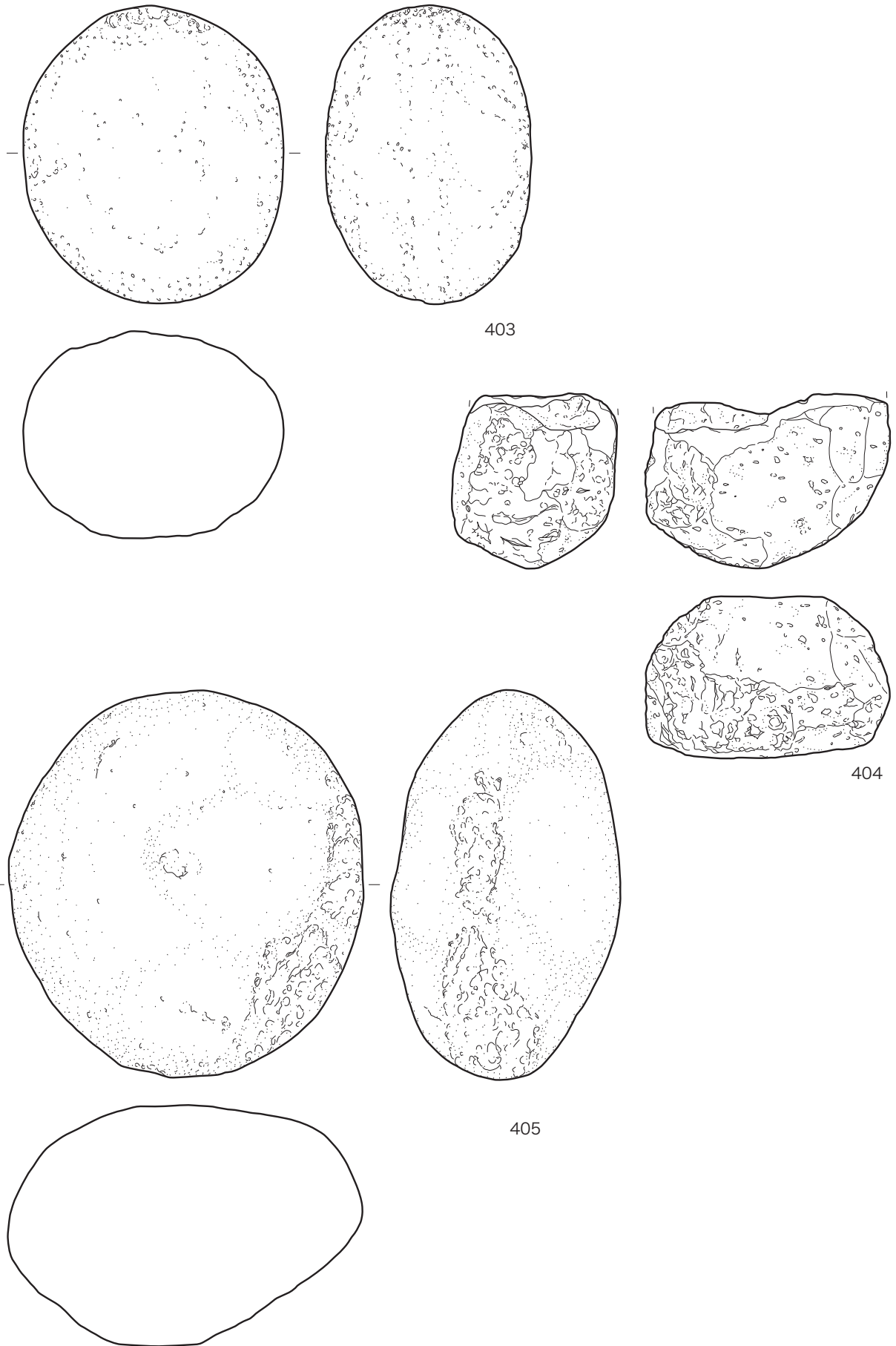
第 129 図 G 区出土石器 12 (S=2/3)



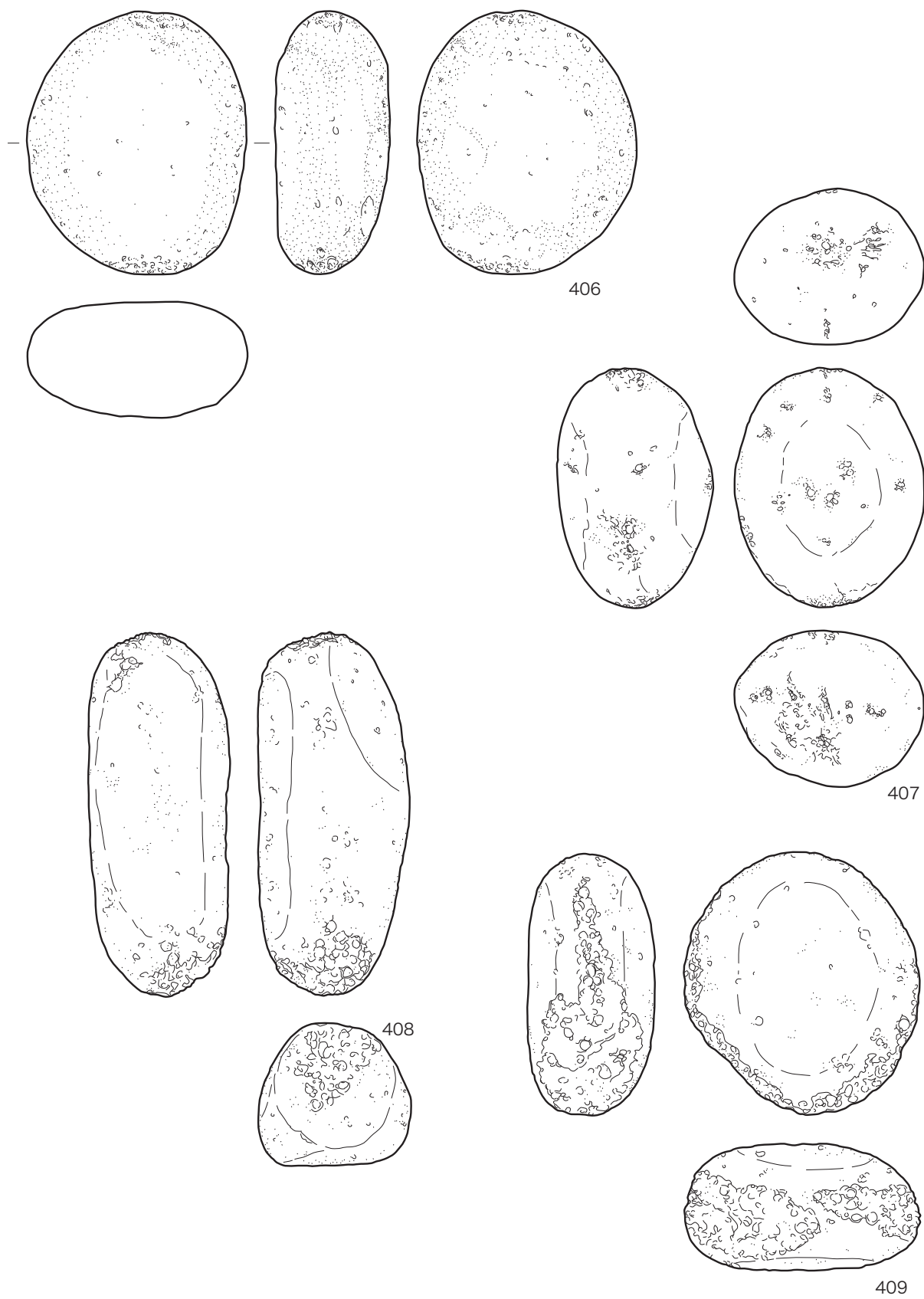
第 130 図 I 区出土石器 (S=2/3)



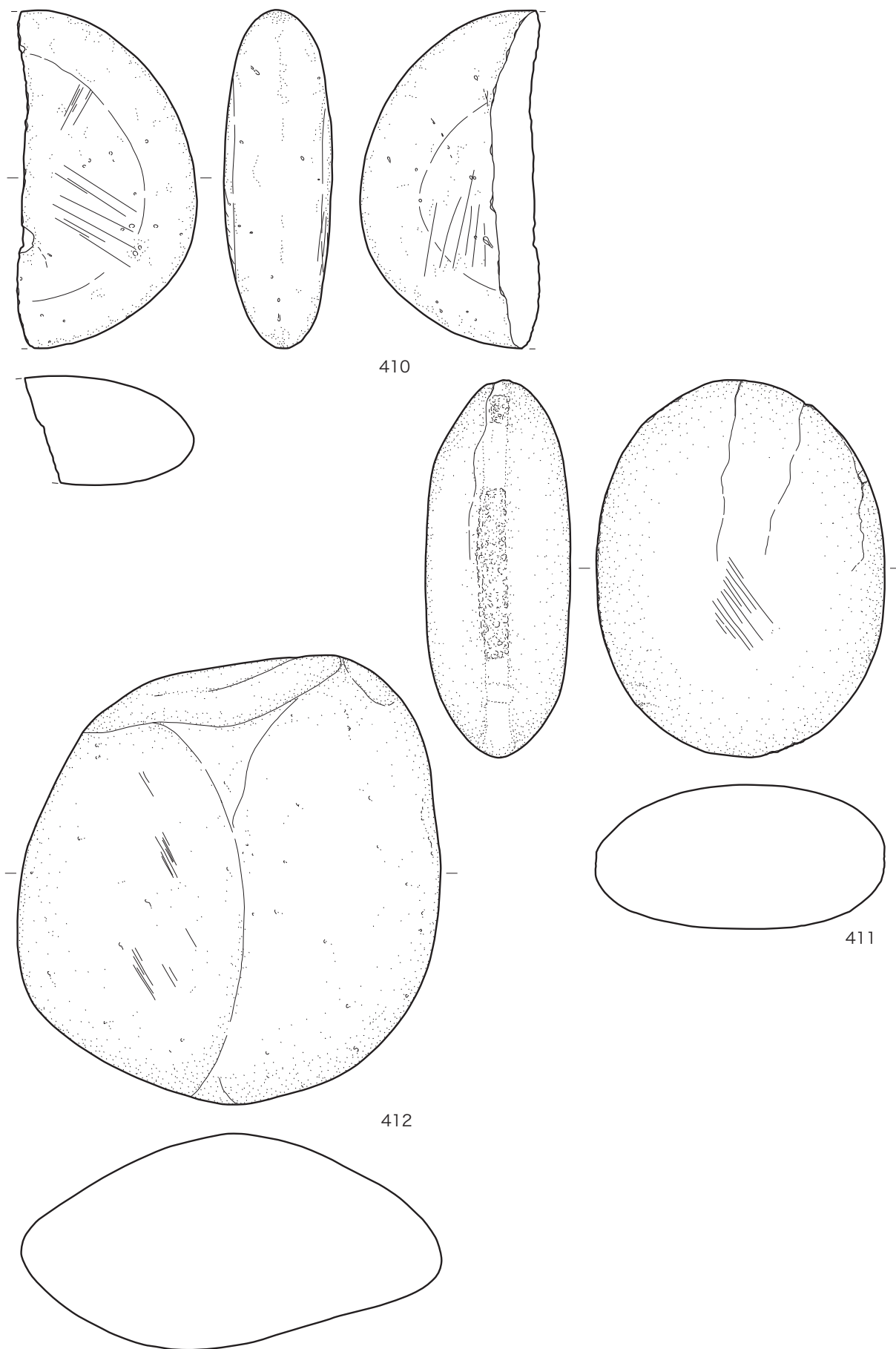
第 131 図 敲石 1 (S=2/3)



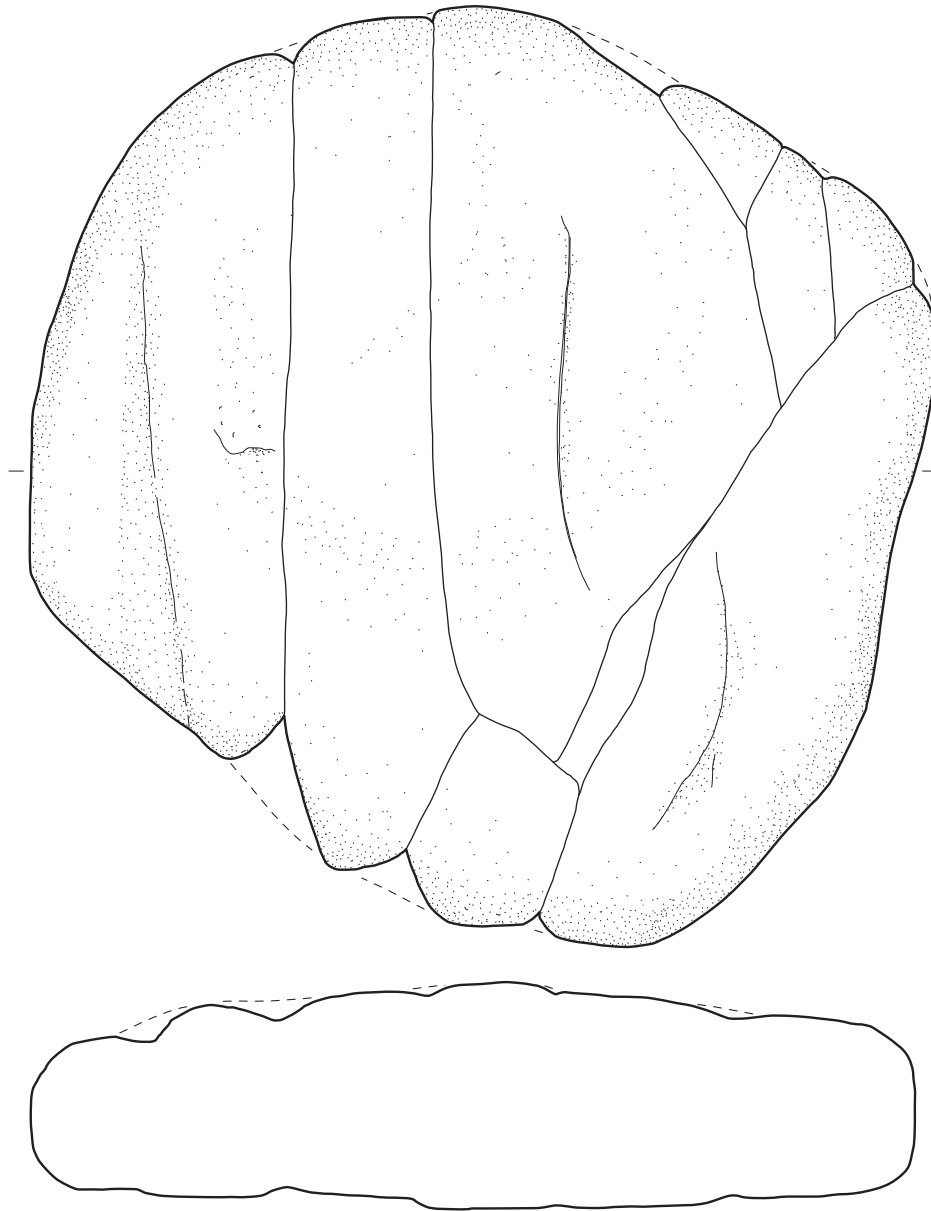
第 132 図 敲石 2 (S=2/3)



第 133 図 敲石 3 (S=2/3)

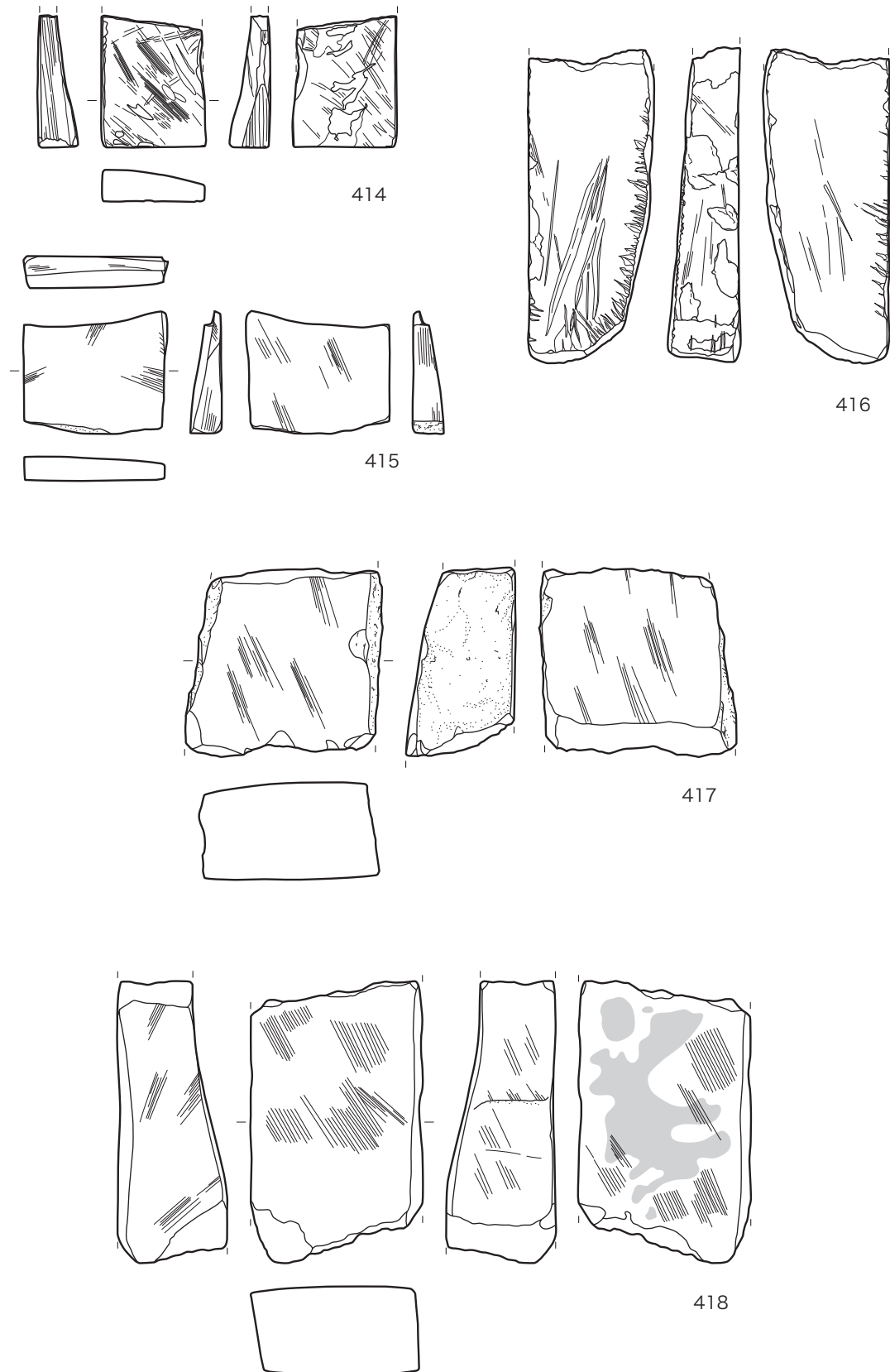


第 134 図 B・C・Da 区出土石器 (S=2/3)

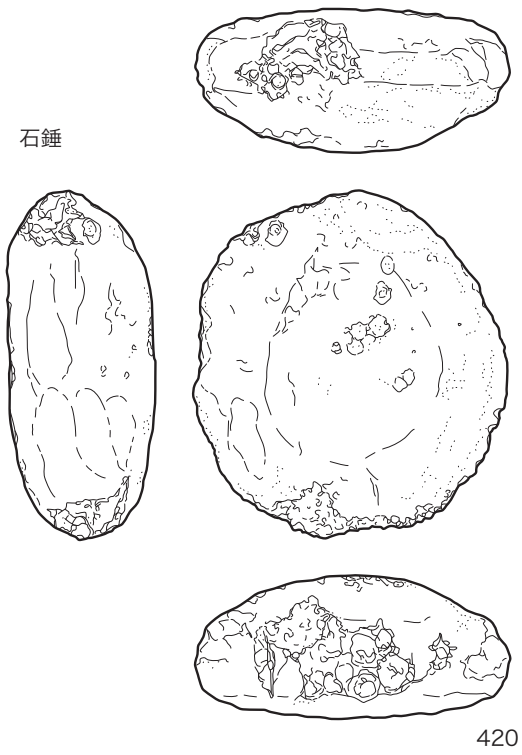
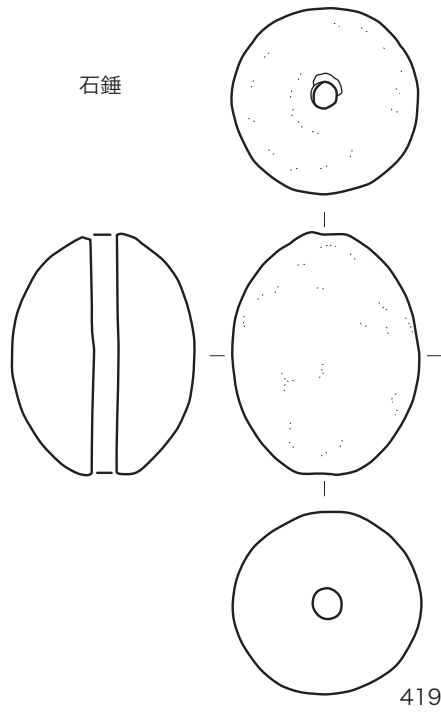


413

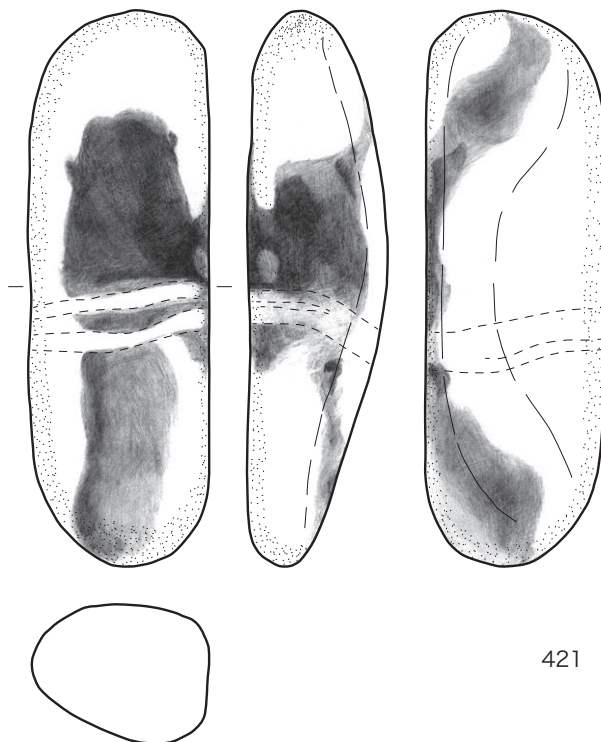
第 135 図 石皿 2 (S=1/2)



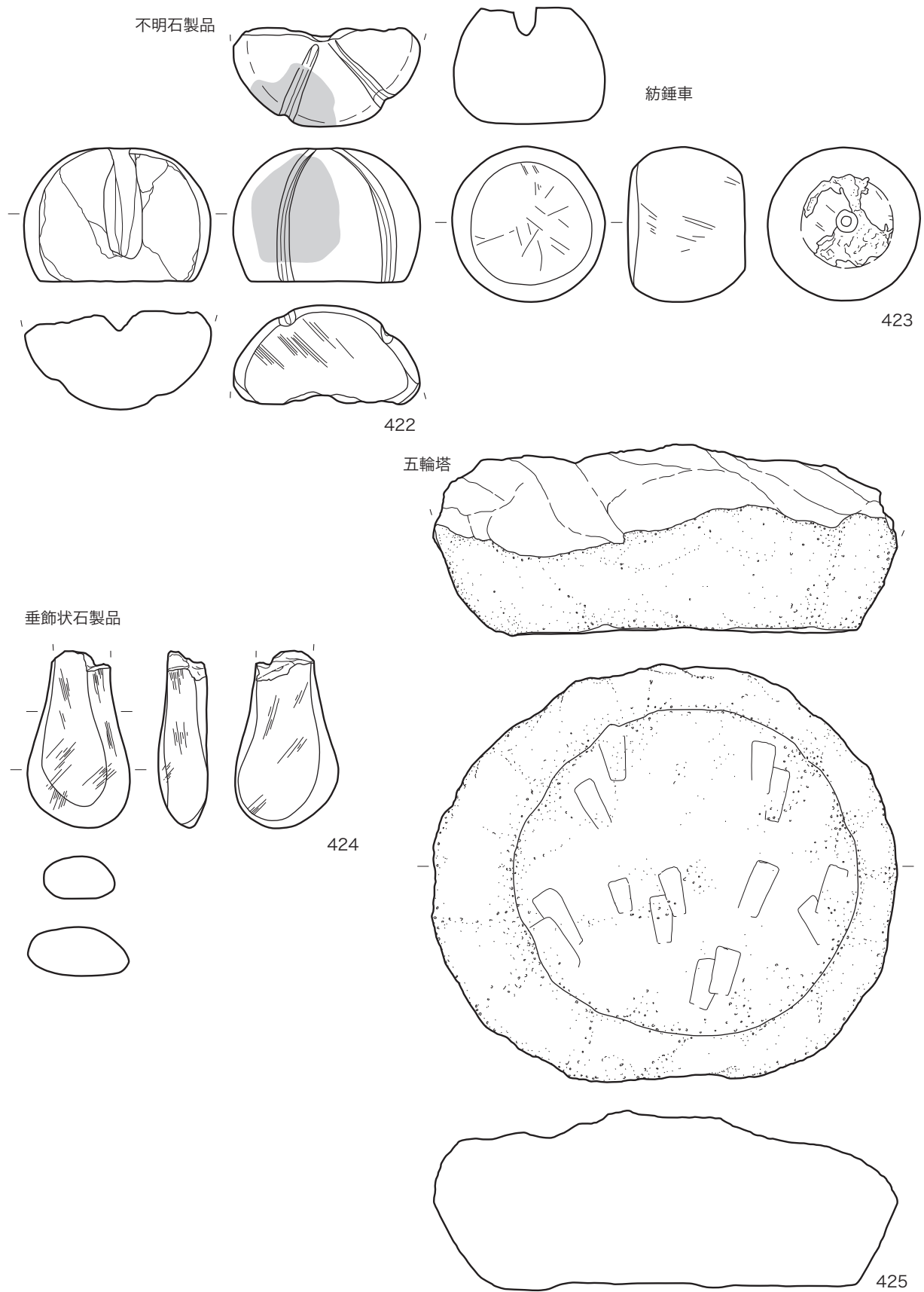
第 136 図 砥石 (S=1/2)



不明石製品



第 137 図 石製品 (421 は S=1/2、他は S=2/3)



第 138 図 石製品 (425 は S=1/2、他は S=2/3)

(10) 接合資料 (第 9 表)

今回の調査において出土した石器群は、平面・垂直分布ともに一定のまとまりが認められたため、接合関係をもつ資料の存在が想定された。そこで整理作業では約2ヶ月の期間で接合の検討を行った結果、計20個体の接合資料が得られた。これらのうち14個体が剥離面で接合し、6個体が垂直割れなどの剥離事故による折損面で接合する。また、接合資料が確認できた調査区は Db 区、F 区、G 区、I 区で、うち G 区が10個体、I 区が7個体であった。接合作業の中では、同一母岩とみられる資料も確認できたが接合には至らなかった。

接合資料の分布は、各調査区の隣接するグリッド内で接合関係は収まり、広範になることは確認できなかった。石器の分布状況から明瞭なブロック単位は抽出出来なかったが、緩慢な粗密をもって分布している状況はみてとれる。すなわち、各接合資料の分布は、その密の部分の中で収まり、その範囲は5m四方を超えない。I 区出土接合資料15のみ、構成する1点が調査区端のサブトレンチから出土しているのみである。出土位置がサブトレのため真偽の判断が付き難い。

また、接合資料を構成する器種は剥片類がほとんどで、石核が関係するのは接合資料12と接合資料14であり、接合資料12については剥離がねじれており、接合資料14は縦割れが生じて作業を終えたものである。一方接合資料13の接合状況からは、明らかに石核の部分がブランクとなっている。出土石器組成でみると、石核の出土比率は決して少なくないが、流紋岩質凝灰岩が在地石材であり、取得が比較的容易な石材環境の中にあってみれば、多くもないというのが感覚的な感想である。そこから考えられることは、石核を遺跡内で消費し切る剥片剥離作業があるか、あるいは遺跡外に搬出するのかといった点である。この石器群をより詳細に、接合関係の見直しを含めて検討を加えることで判明することも大いにあるとは期待できるが、限られた期間の中では個別の事実報告に終止せざるを得なかった。

接合資料1 (第139図・第150図426) Db区で出土する。2点1個体で構成する剥片である。打点直下から末端にかけて縦割れが生じており、その折損面で接合する。背面は一部に自然面が残存し、主剥離面と同一方向の剥離面で構成する。剥離面打面から剥離した肉厚な剥片である。全体に熱を受けており、接合面のリング及びフィッシャーは熱破碎時にみられる特徴があるため、剥片剥離時の潜在的な割れが熱を受けて破碎したと考えられる。

接合資料2 (第140図・第150図427) F区で出土する。2点1個体で構成する剥片である。打点下で横方向の剥離が生じ、その剥離面で接合する。背面は主剥離面と同一方向の剥離面で構成し、連続した剥片剥離作業で生じた剥片である。末端を折損し、接合面も剥離の際の同時割れと考えられる。

接合資料3 (第141図・第150図428) F区で出土する。2点1個体で構成する剥片である。打点直下から末端にかけて縦割れが生じており、その折損面で接合する。背面は主剥離面と同一方向の剥離面で構成しており、剥離面打面上で連続した剥片剥離作業の中で生じた剥片である。

接合資料4 (第142図・第150図429) G区で出土する。3点3個体で構成する。3点とも剥片で、同一打面上で打点を少しずつずらしながら同一方向に剥片剥離を行う。429-1の背面にも同一方向の剥離面がみられ、連続した剥片剥離作業の一部であることがわかる。接合を構成する剥片は末端が折損するしない寸詰まりは剥片である。

接合資料5 (第142図・第151図430) G区で出土する。2点2個体で構成する。430-1の大型剥片は背面全面が自然面で、打点後背には主剥離面と同一方向の剥離が集中する。430-2は先行する430-1に対して同一打点軸上で角度を変えて剥離している。打点直下から末端にかけて縦割れが生じている。原礫から剥離作業をはじめる段階の資料と考えられる。

接合資料6 (第144図・第152図431) G区で出土する。2点1個体で構成する二次加工剥片である。器面中央の夾雑物による折損面で接合する。背面は主剥離面と同一方向の、連続した剥離面で構成する縦長の剥片で構成する。剥片の一侧縁及び末端に背面側から散発的な二次加工を施しており、その際に折損したと考えられる。

接合資料7 (第145図・第152図432) G区で出土する。4点2個体で構成する。432の大型剥片

の背面は自然面が大きく残存するほか、方向が 90°異なる剥離面で構成する。剥離作業としては、背面に自然面を取り込む剥離を複数回行った後、90°打面転移をして自然面打面から 432 を剥離するが、その際に折損が生じる。その後、折損した 1 片の 432-1 を素材に、複数枚の剥片を剥離する。432 の折損は、意図的な分割行為の結果なのかどうかは不明瞭である。

接合資料 8（第 142 図・第 152 図 433） G 区で出土する。2 点 2 個体で構成する。433 の背面には主剥離面と同一方向の剥離面で構成し、連続した剥片剥離作業の一部であることがわかる。433-1 は先行する剥離面で形成する縦方向の稜線に沿って剥離するが、寸詰まりで末端がヒンジ状である。433-2 は打点を後退させて剥離し、末端は石核の下端を取り込み、やや肥大する。

接合資料 9（第 143 図・第 153 図 434） G 区で出土する。2 点 2 個体で構成する。背面に自然面が残存する石核 434-2 の剥離面打面から連続した剥片剥離作業を行う。434-2 の作業面末端はポジティブ面が残存し、大型剥片素材の石格とわかる。剥片 434-1 の末端は石理面によってステップ状に寸詰まりとなる。

接合資料 10（第 144 図・第 153 図 435） G 区で出土する。2 点 1 個体で構成する二次加工剥片である。背面は 180°打面転移した後、主剥離面と同一方向の連続した剥離で構成する剥片を素材とする。素材一側縁に背面側から二次加工を施すが、打点直下から縦割れが生じており、その折損面で接合する。

接合資料 11（第 145 図・第 153 図 436） G 区で出土する。2 点 2 個体で構成する。436 の背面には主剥離面と同一方向の連続した剥離面で構成し、連続した剥片剥離作業の一部であることがわかる。剥片 436-1 は先行する剥離面で形成する縦方向の稜線に沿って剥離し、後続する 436-2 は同一打面上で打点を後退して剥離するが寸詰まりになる。

接合資料 12（第 146 図・第 154 図 437） G 区で出土する。2 点 2 個体で構成する。背面に自然面が大きく残存する石核の周縁から剥片剥離を行う。剥片 437-1 は先行する石核作業面を打面として背面の自然面を大きく取り込む剥離を行うが、打点を折損する。末端は石核下端を取り込んで肥大する。

接合資料 20（第 146 図・第 154 図 438） G 区で出土する。2 点 2 個体で構成する。438 の背面には主剥離面と同一方向の剥離面で構成し、連続した剥片剥離作業の一部であることがわかる。剥片 438-1 と剥片 438-2 とともに先行する剥離面が形成する縦方向の稜線に沿って剥離している。特に 438-2 の末端には石核下端を取り込んでおり、石核の作業面長がわかる。そこから両剥片とも最大限の長さを得た剥離が得られたと考えられる。

接合資料 13（第 148 図・第 155 図 439） I 区で出土する。5 点 3 個体で構成する。原礫を素材に剥片剥離を行う。同一方向からの連続剥離で剥片 439-1 を剥離した後、打面を 90°転移させた自然面打面で剥片 439-2 を剥離する。更に 90°打面転移をして剥離方向を戻し、連続して剥離作業を行うが、剥離がねじれて打点直下から縦割れが生じて剥片 439-3 と剥片 439-5 が折損する。その際 439-3 は横割れも生じて 439-4 と折損する。接合状況 439 からは、作業面をずらしながら、背面に自然面を取り込むように剥片を剥離していく状況が見て取れる。

接合資料 16（第 149 図・第 155 図 440） I 区で出土する。5 点 4 個体で構成する。いずれも剥片であり、同一打面上で打点を後退させながら同一方向に剥離作業を行う。接合状況 440a の背面には剥離方向が異なる剥離面で構成しており、打面転移を 180°おこなった直後の剥片剥離作業であることがわかる。440-1、440-2、440-3 は剥離末端がヒンジ状になり、寸詰まりとなる。その後に剥離する 440-4 で、先行する末端ヒンジ状の剥離面を大きく取り込んでいる。

接合資料 14（第 148 図・第 156 図 441） I 区で出土する。5 点 3 個体で構成する。背面に自然面を大きく残存する剥片素材石核に対し、連続した剥片剥離作業を行った後に打面転移及び作業面転移をしていることがわかる。剥片素材石核と同一打面上から、素材主剥離面を作業面として剥片 441-1 を剥離する。石核下端を取り込み、作業面に対し最大限の長さを得た剥離を行っている。引き続き同一打面上で剥離作業を行うが、いずれも剥離が伸びず寸詰まりとなる。その後 90°の打面転移を行い、作業面も石核背面に転移して剥片剥離作業を継続して剥片 441-3 を剥離する。441-3 の打面直下からから末端にかけて縦割れが生じており、その折損面で作業を終えている。

接合資料 17（第 149 図・第 156 図 442） I 区で出土する。2 点 2 個体で構成する。楔形石器 442-2

第9表 接合資料

接合 番号	図版 番号	調査区	出土位置		器種	石材	法量 (mm・g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
1	426-1	Db	5i12i	GR23	剥片	凝灰岩	43.0	25.0	13.4	5.5	熱破砕接合か
	426-2	Db	5i12i	GR60	剥片	凝灰岩	37.5	22.0	2.2	11.1	
2	427-2	F	5i9c	GR25	剥片	凝灰岩	31.0	27.0	7.0	4.6	二次加工時折損
	427-1	F	5i9c	GR39	剥片	凝灰岩	13.5	13.5	4.7	0.4	
3	428-1	F	5i8c	GR69	剥片	凝灰岩	33.0	21.0	9.2	3.8	垂直割
	428-2	F	5i8c	GR69	剥片	凝灰岩	30.5	23.0	4.8	4.6	
4	429-1	G	5h14h	GR5	剥片	凝灰岩	15.5	28.0	5.6	1.4	剥離面接合
	429-2	G	5h14h	GR5	剥片	凝灰岩	36.0	28.0	10.0	3.7	
	429-3	G	5h14h	GR5	剥片	凝灰岩	23.0	23.0	6.3	1.5	
5	430-1	G	5h14h	GR5	剥片	凝灰岩	83.0	75.0	31.5	144.2	剥離面接合
	430-2	G	5h14h	GR5	剥片	凝灰岩	50.5	43.0	15.0	13.4	
6	431-2	G	5h14j	GR6	二次加工剥片	凝灰岩	21.5	28.0	8.3	2.7	折損面接合
	431-1	G	5h14j	GR6	二次加工剥片	凝灰岩	37.0	35.0	10.0	7.9	
7	432-2	G	5h11l	GR8	剥片	凝灰岩	26.5	47.0	12.0	10.9	折損面接合
	432-3	G	5h11l	GR8	剥片	凝灰岩	23.0	22.0	8.4	2.1	
	432-1	G	5h11l	GR8	二次加工剥片	凝灰岩	27.0	35.5	10.0	6.5	
	432-4	G	5h11l	GR8	剥片	凝灰岩	27.1	34.0	9.0	—	
8	433-2	G	5h14h	GR5	剥片	凝灰岩	57.5	33.0	15.7	12.0	剥離面接合
	433-1	G	5h14h	GR5	剥片	凝灰岩	30.0	13.5	4.0	0.7	
9	434-2	G	5h12d	GR2	石核	凝灰岩	51.0	45.5	23.0	26.6	剥離面接合
	434-1	G	5h12e	GR2	剥片	凝灰岩	20.0	27.0	9.0	1.9	
10	435-2	G	5h14j	GR6	二次加工剥片	凝灰岩	28.5	37.5	8.4	6.5	折損面
	435-1	G	5h14j	GR6	二次加工剥片	凝灰岩	32.5	43.0	9.5	8.1	
11	436-2	G	5h11m	GR8	剥片	凝灰岩	16.0	21.0	4.8	0.6	剥離面接合
	436-1	G	5h11l	GR8	剥片	凝灰岩	52.0	27.0	7.8	4.4	
12	437-1	G	5h13k	GR7	剥片	凝灰岩	41.0	27.0	11.0	7.9	1862と接合
	437-2	G	5h13k	GR7	石核	凝灰岩	36.0	27.5	8.5	4.5	1861と接合
20	438-2	G	5h13l	GR7	剥片	凝灰岩	50.0	19.5	7.4	2.8	
	438-1	G	5h12k	GR7	剥片	凝灰岩	50.5	17.5	9.0	3.6	
13	439-5	I	4g14o		剥片	凝灰岩	52.5	18.0	11.5	7.4	剥離面・垂直割
	439-1	I	4g14o		剥片	凝灰岩	34.0	29.0	6.8	2.9	
	439-4	I	4g14o		剥片	凝灰岩	22.5	14.5	6.8	1.2	
	439-2	I	4g14o		剥片	凝灰岩	21.0	22.5	5.2	1.4	
	439-3	I	4g14o		剥片	凝灰岩	14.0	16.0	5.0	0.6	
14	441-5	I	4g14o		石核	凝灰岩	54.0	21.0	15.5	12.0	剥離面接合
	441-3	I	4g14o		剥片	凝灰岩	36.0	30.5	11.2	8.1	
	441-2	I	4g14o		剥片	凝灰岩	40.0	38.0	7.4	5.8	
	441-1	I	4g14o		剥片	凝灰岩	24.5	18.5	9.3	2.0	
	441-4	I	4g14p		石核	凝灰岩	30.5	59.5	16.4	21.1	
15	443-2	I	4g15p		剥片	凝灰岩	61.5	32.5	11.0	9.4	剥離面接合
	443-3	I	4g16n		剥片	凝灰岩	59.0	24.0	16.5	11.0	
	443-1	I	4g16n		剥片	凝灰岩	33.0	36.0	7.0	5.5	
16	440-1	I	4g16n		剥片	凝灰岩	28.5	25.0	5.5	1.0	剥離面・折損接合
	440-2	I	4g16n		剥片	凝灰岩	34.0	34.0	11.5	—	
	440-5	I	4g16n		剥片	凝灰岩	6.5	13.0	4.2	0.1	
	440-3	I	4g16n		剥片	凝灰岩	15.0	20.0	4.8	0.6	
	440-4	I	4g16n		剥片	凝灰岩	37.0	30.0	9.6	3.8	
17	442-2	I	4g16n		楔形石器	凝灰岩	43.0	41.0	19.5	27.7	楔形石器
	442-1	I	4g16n		剥片	凝灰岩	12.0	14.0	4.0	0.3	
18	444-2	I	4g16n		剥片	凝灰岩	32.0	16.0	5.4	1.4	剥離面接合
	444-1	I	4g16n		剥片	凝灰岩	29.0	14.0	4.7	0.9	
19	445-2	I	4g16n		剥片	凝灰岩	20.5	9.5	4.0	0.5	剥離面接合
	445-1	I	4g16n		剥片	凝灰岩	15.5	10.0	2.0	0.1	



第 139 図 Db 区接合資料分布図（接合資料 1） S=1/50

と、両極打撃によって生じた剥片 442-1 で接合する。対向する辺に顕著な階段状剥離痕を有する。442-1 はその一部で、他の剥離痕同様に末端がヒンジ状になる。

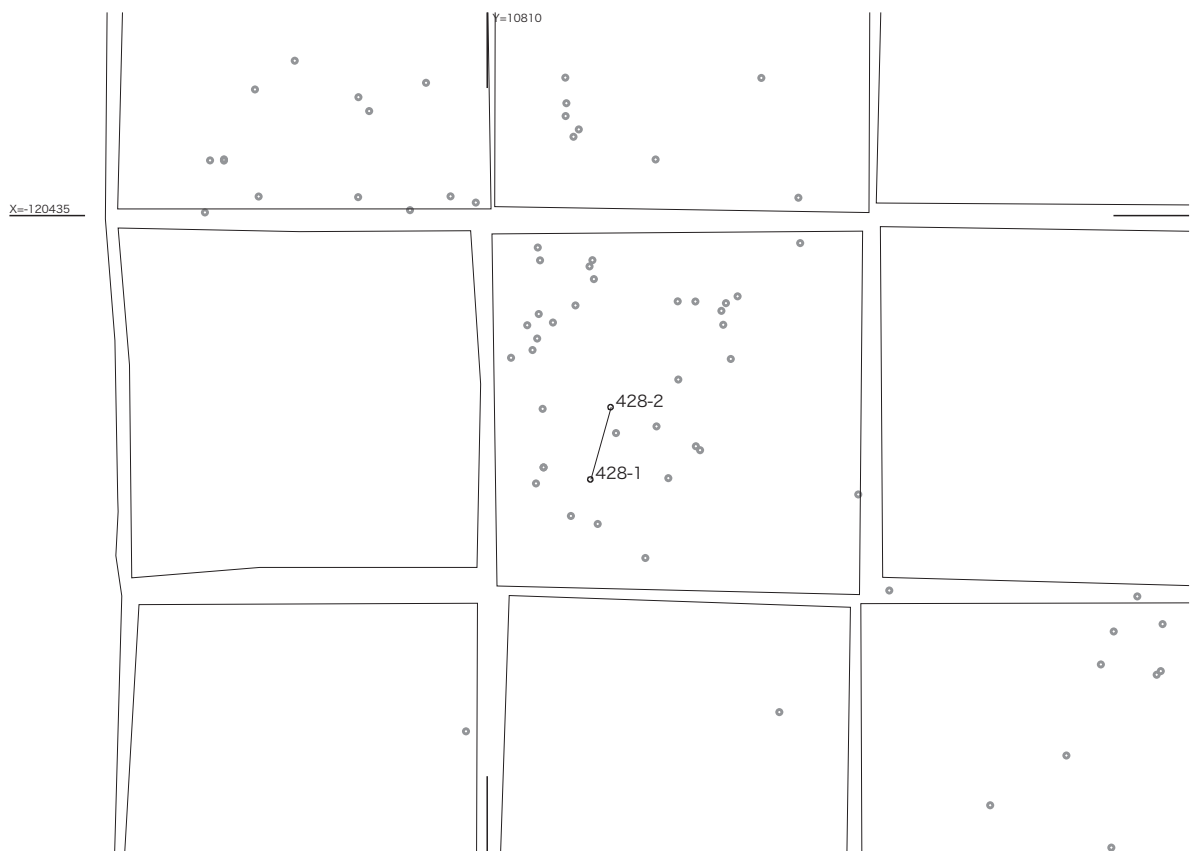
接合資料 15（第 147 図・第 157 図 443） I 区で出土する。3 点 3 個体で構成する。同一方向からの剥片剥離作業によって生じた剥片であるが、剥片 443-1 と剥片 443-2 の間に打点位置が低くなっている。残存する打面が小さく詳細は不明だが、443-1 と 443-2 の間に打面調整あるいは作業面転移による剥片剥離がなされたと考えられる。その後剥離方向を戻し、443-2 及び剥片 443-3 を剥離する。443-3 は先行する 443-2 に対して同一打点軸上で角度を変えて剥離している。

接合資料 18（第 149 図・第 157 図 444） I 区で出土する。2 点 2 個体構成する。背面全体が自然面の素材に対し同一方向から剥離した剥片である。剥片 444-1 は自然面の稜線に沿って剥離し、剥片 444-2 は先行する剥離面を取り込む剥離を行う。

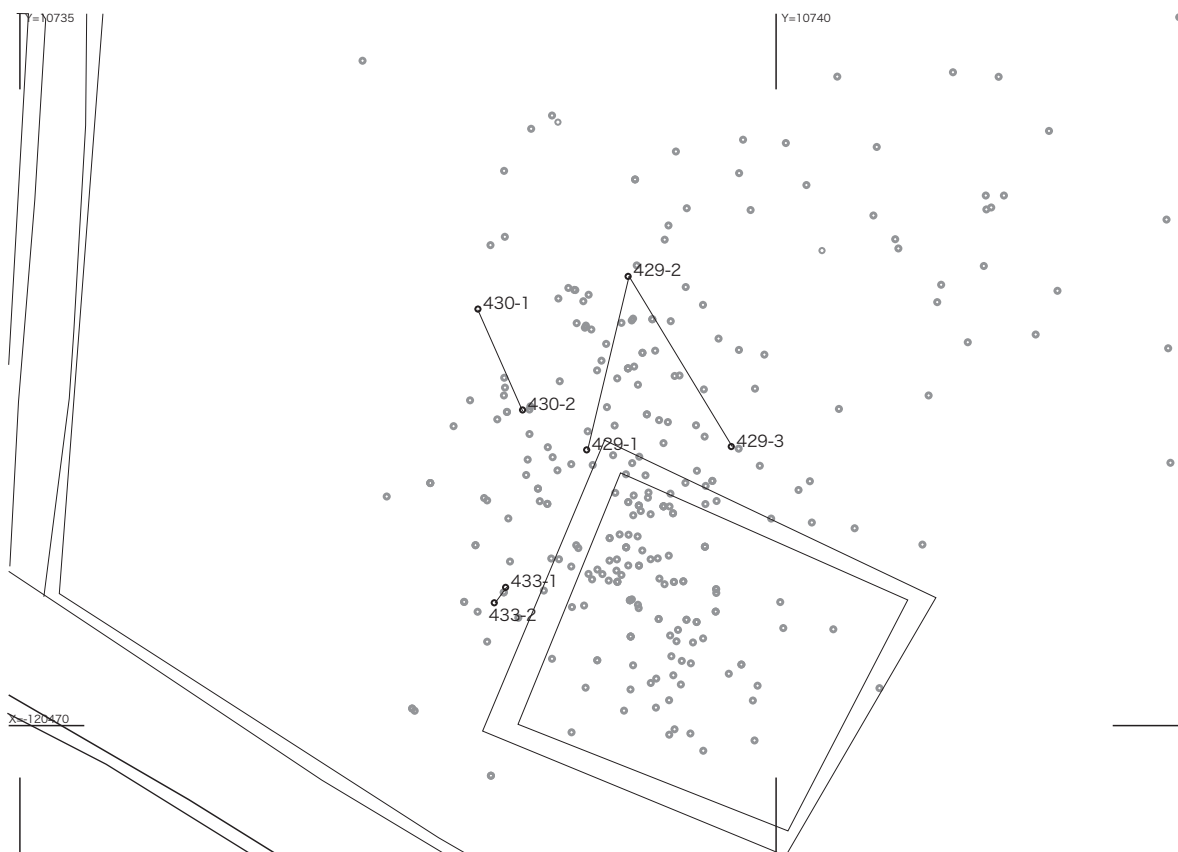
接合資料 19（第 149 図・第 157 図 445） I 区で出土する。2 点 2 個体構成する。445 の背面には主剥離面と同一方向の剥離面で構成しており、連続した剥片剥離作業の一部であることがわかる。剥片 445-1、剥片 445-2 とともに先行する剥離面が形成する縦方向の稜線に沿って剥離を行う。



第 140 図 F 区接合資料分布図（接合資料 2） S=1/50



第 141 図 F 区接合資料分布図（接合資料 3） S=1/50



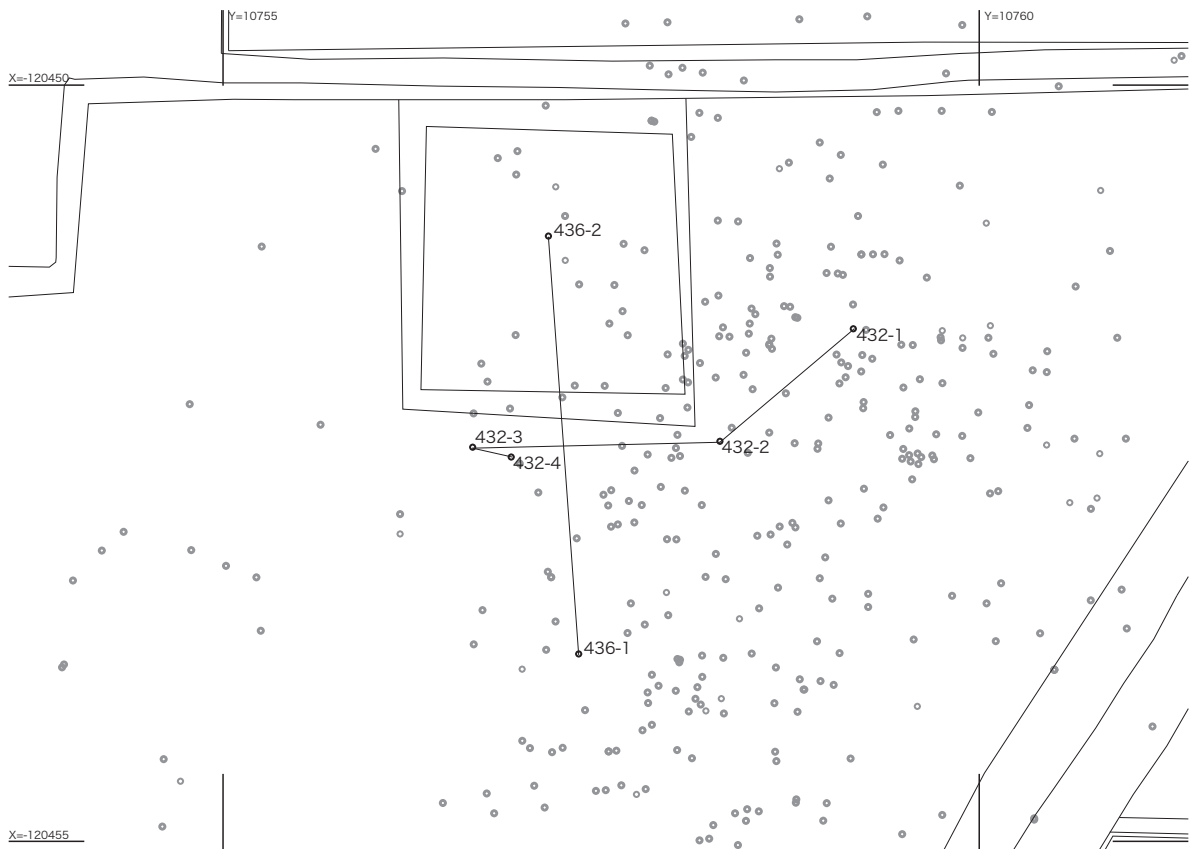
第 142 図 G 区接合資料分布図 (接合資料 4・5・8) S=1/50



第 143 図 G 区接合資料分布図 (接合資料 9) S=1/50



第 144 図 G 区接合資料分布図（接合資料 6・10） S=1/50



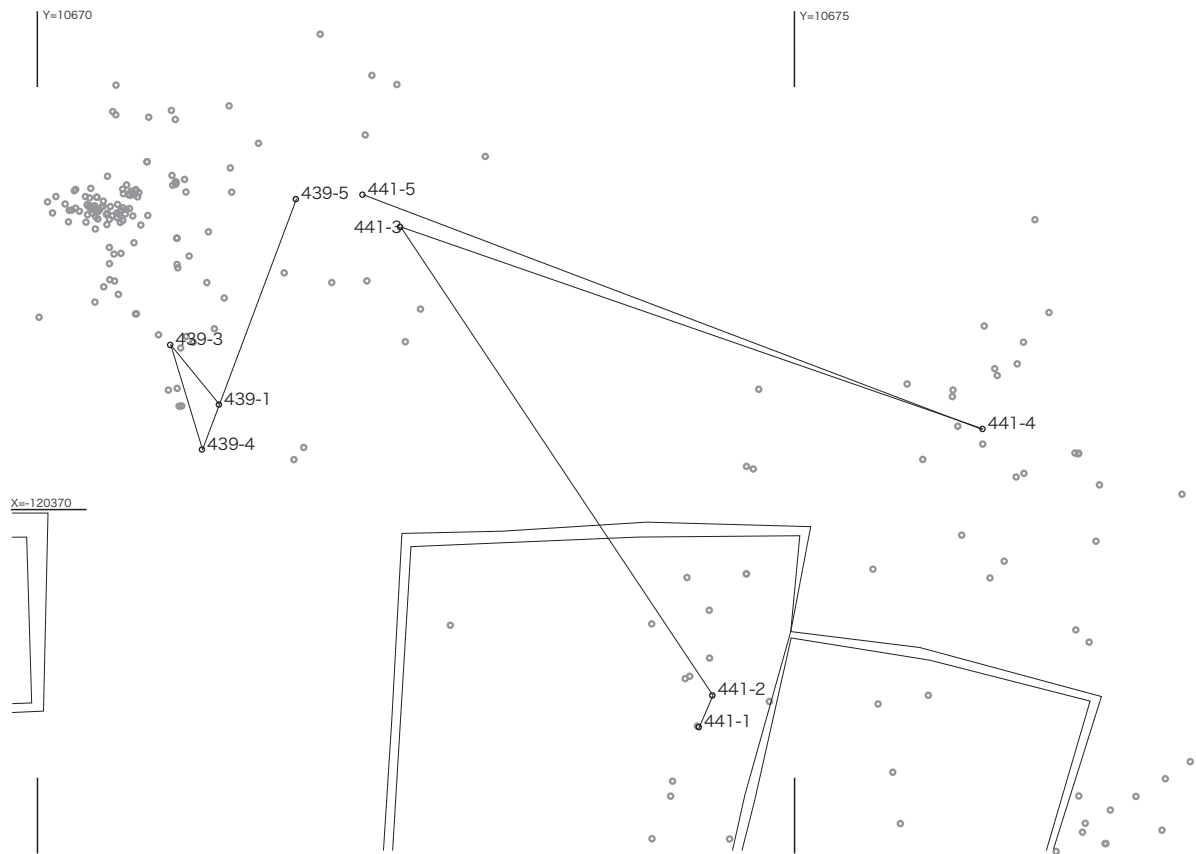
第 145 図 G 区接合資料分布図（接合資料 7・11） S=1/50



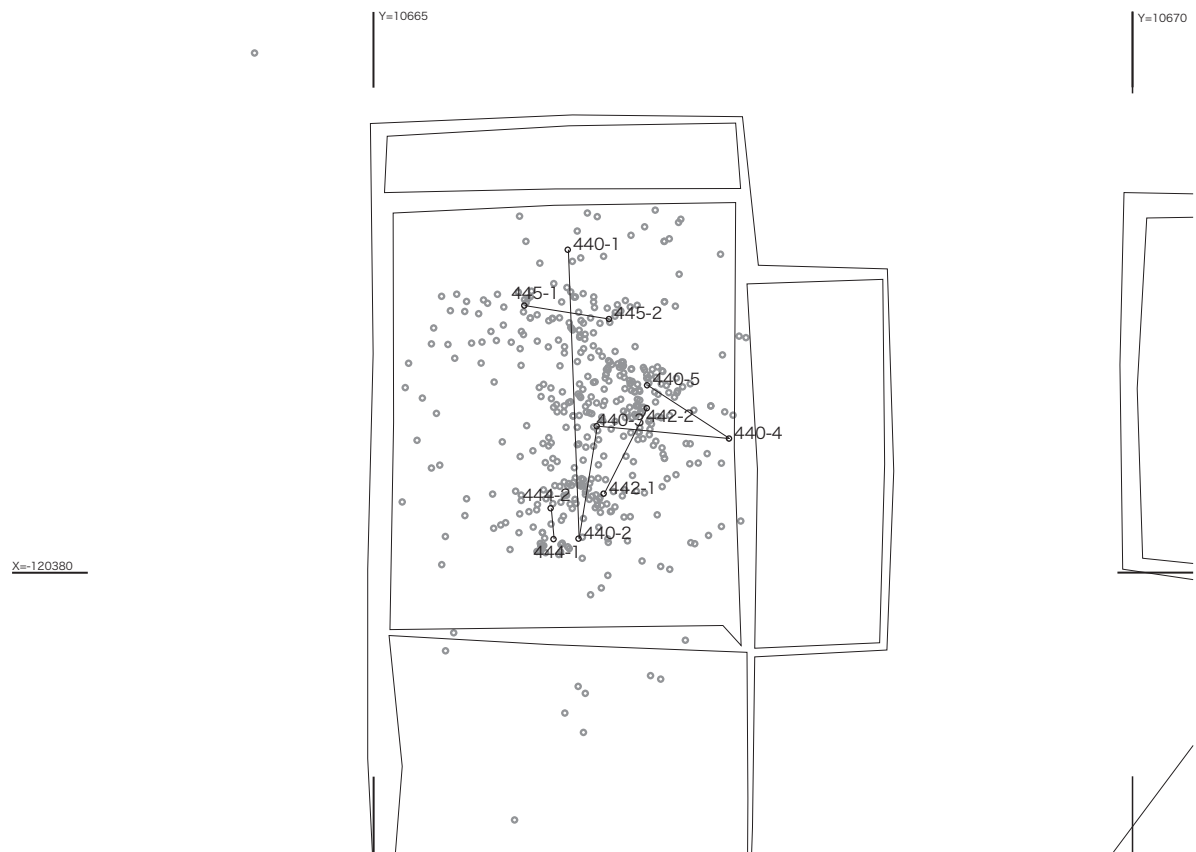
第 146 図 G 区接合資料分布図（接合資料 12・20） S=1/50



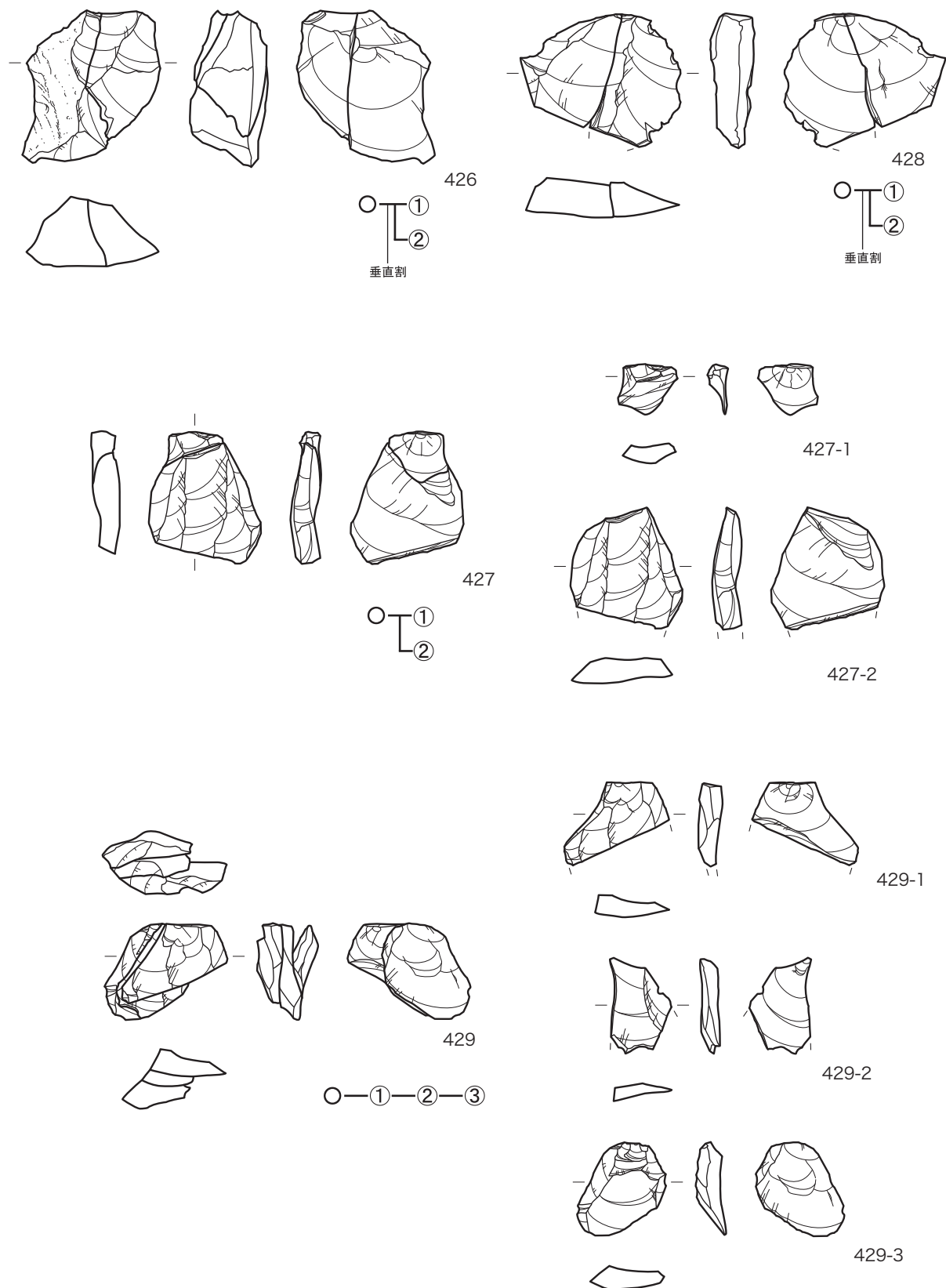
第 147 図 I 区接合資料分布図（接合資料 15） S=1/100



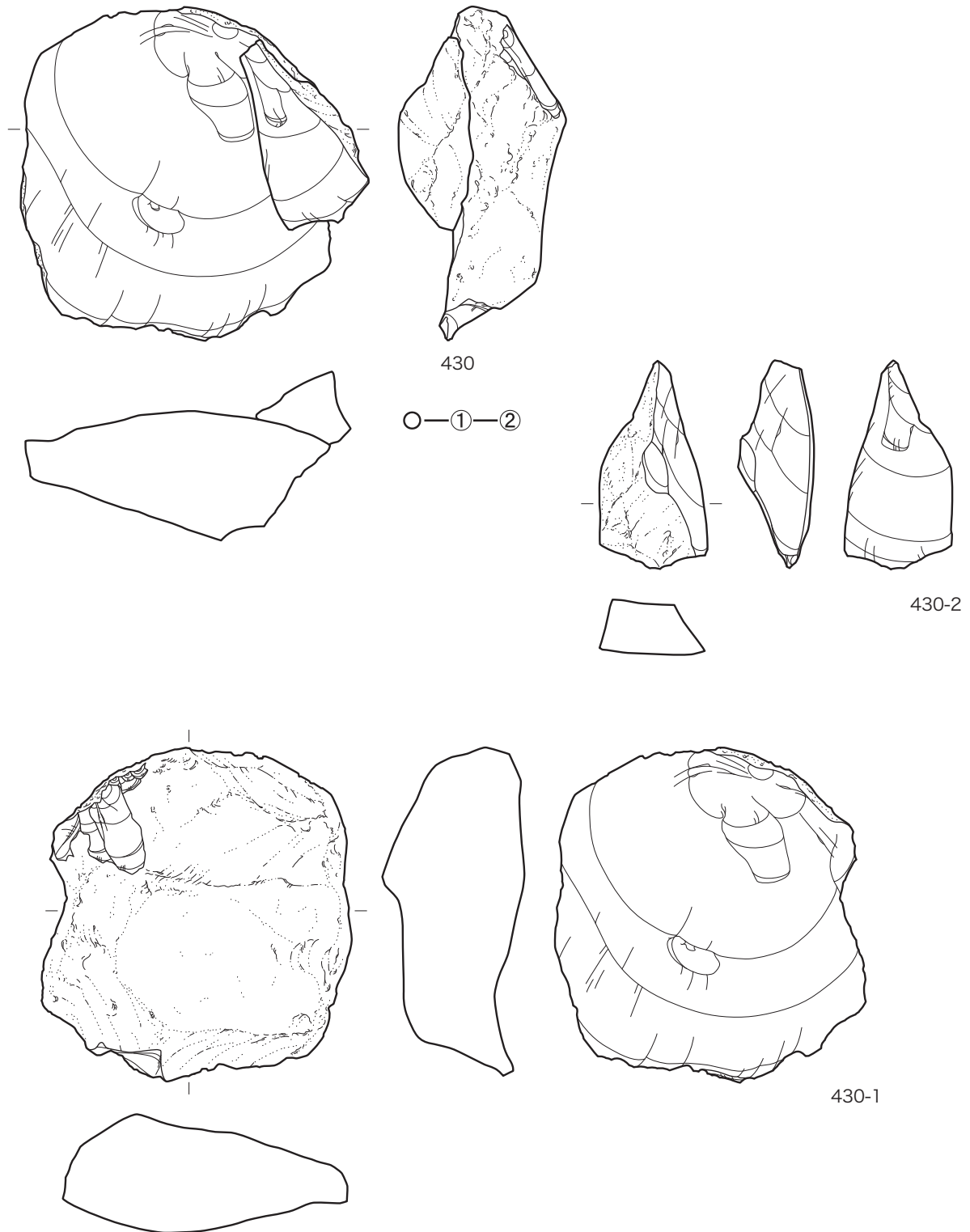
第 148 図 I 区接合資料分布図（接合資料 13・14） S=1/50



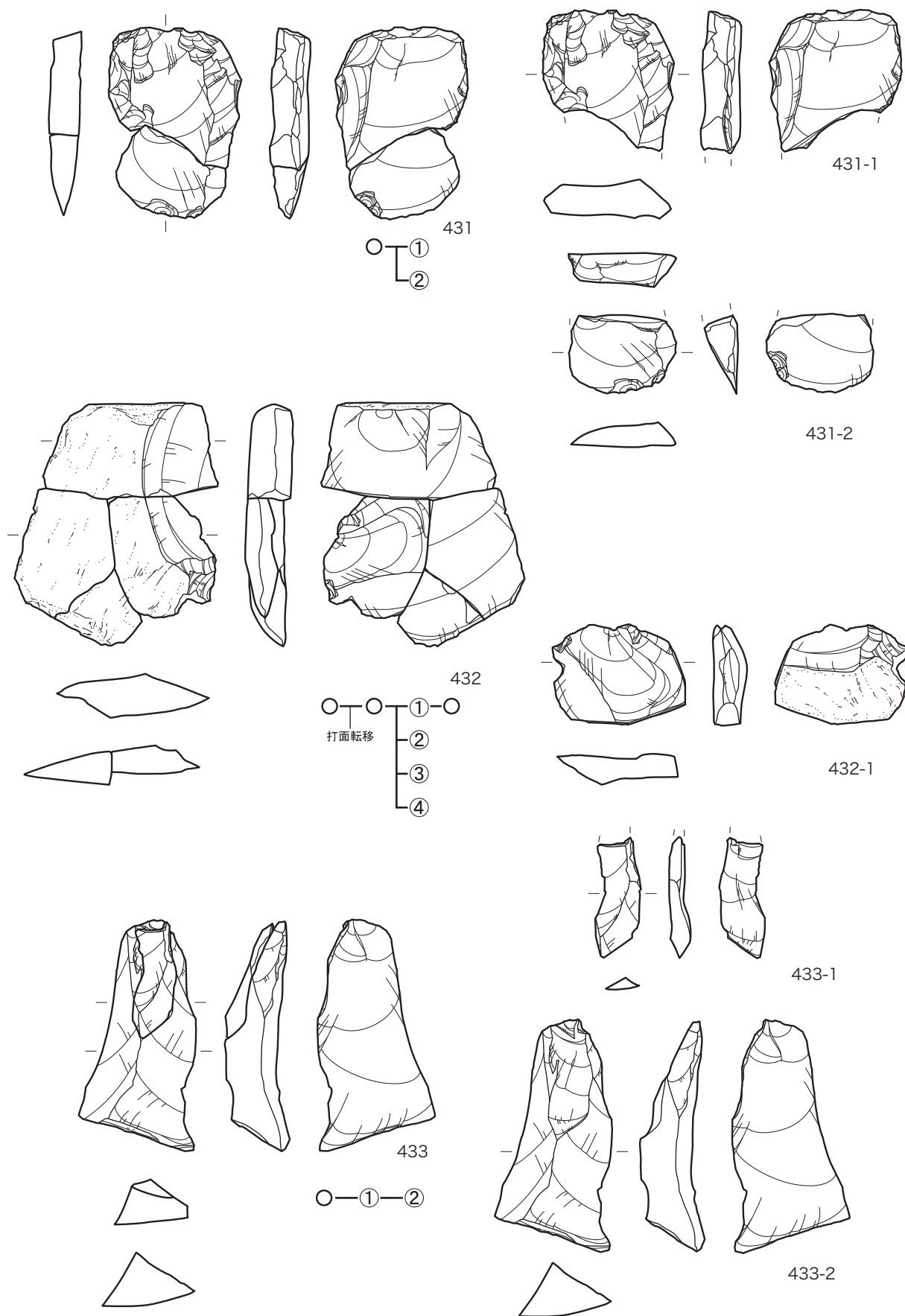
第 149 図 I 区接合資料分布図（接合資料 16～19） S=1/50



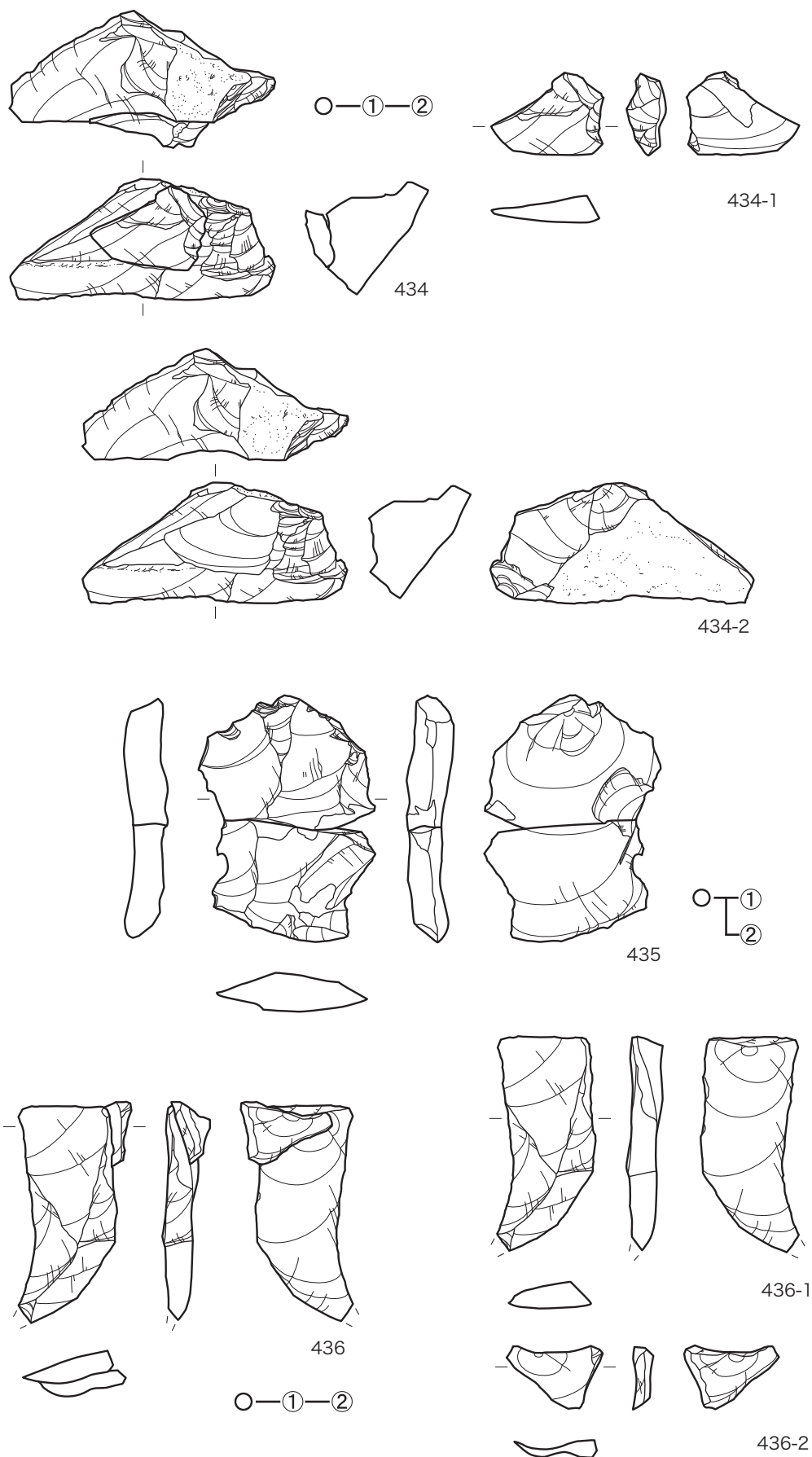
第 150 図 接合資料 1(S=2/3)



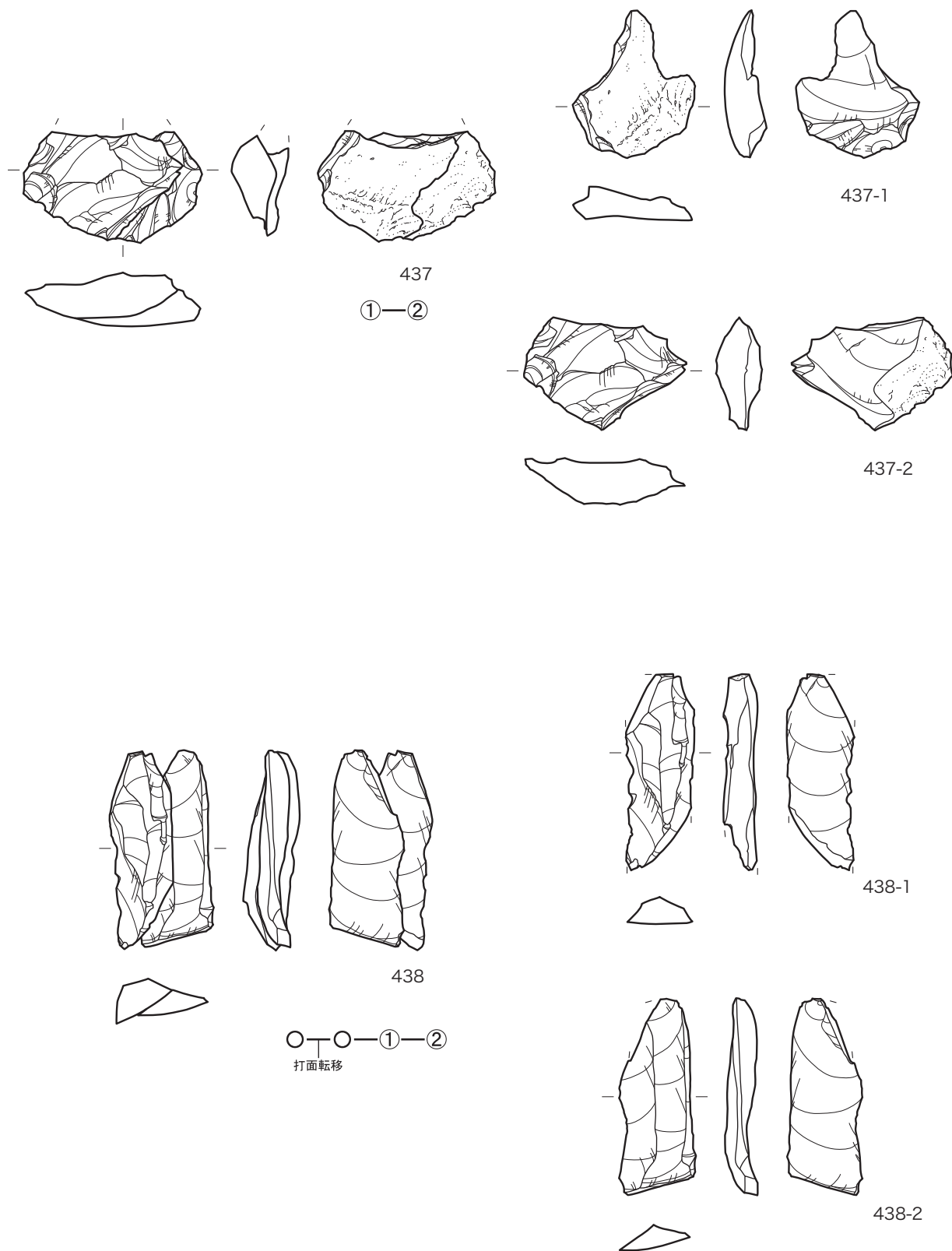
第 151 図 接合資料 2(S=2/3)



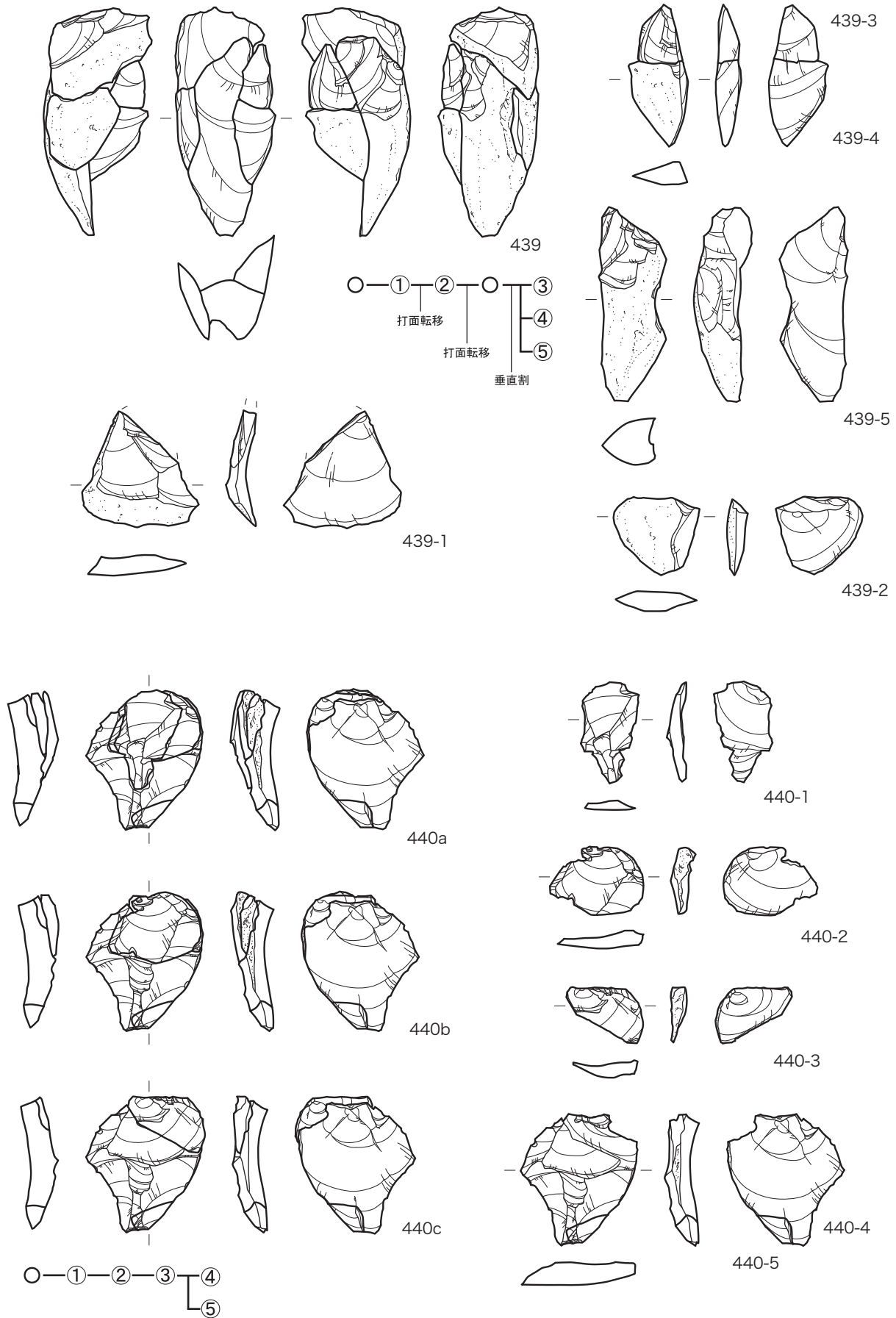
第 152 図 接合資料 3(S=2/3)



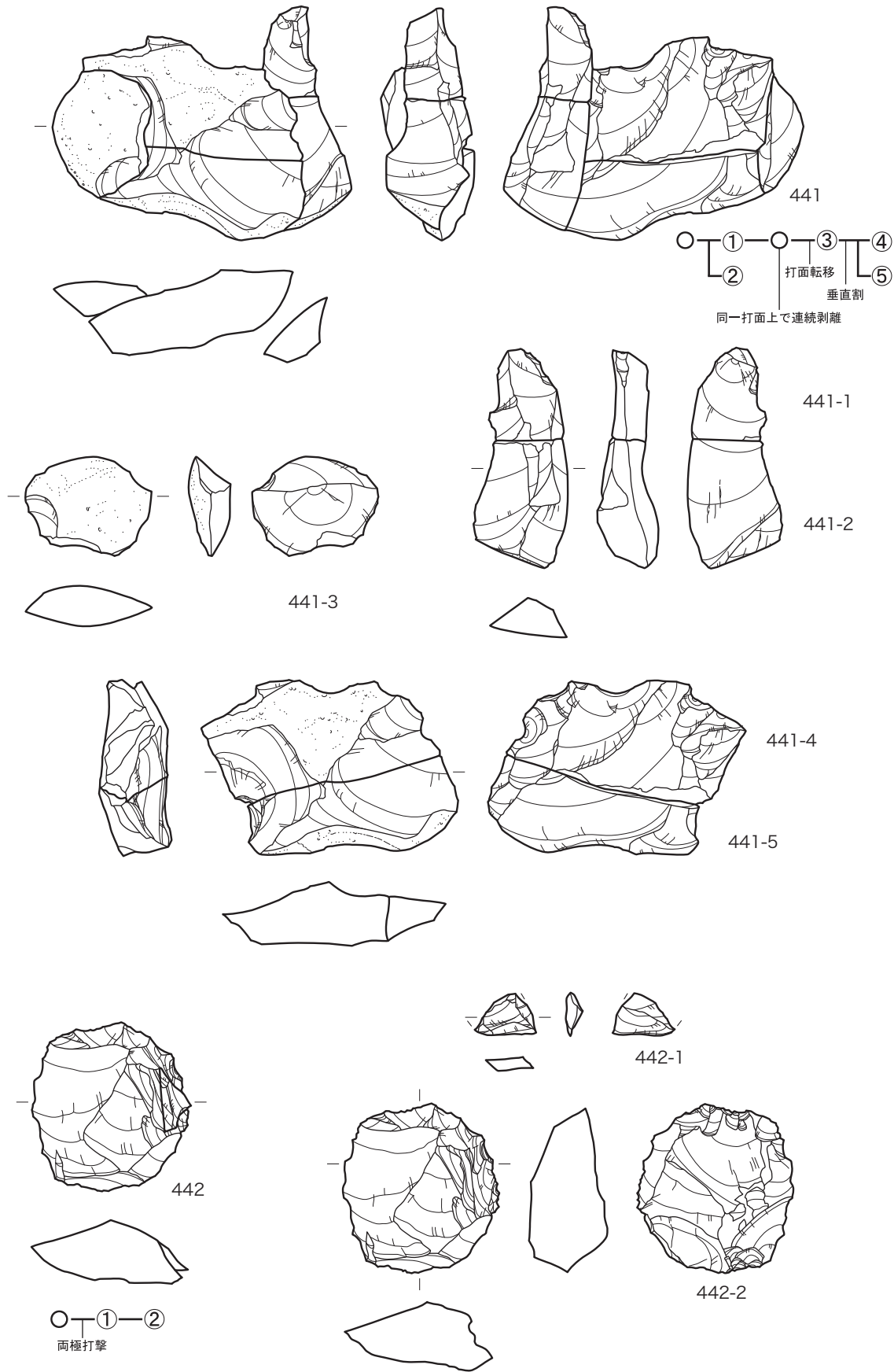
第 153 図 接合資料 4(S=2/3)



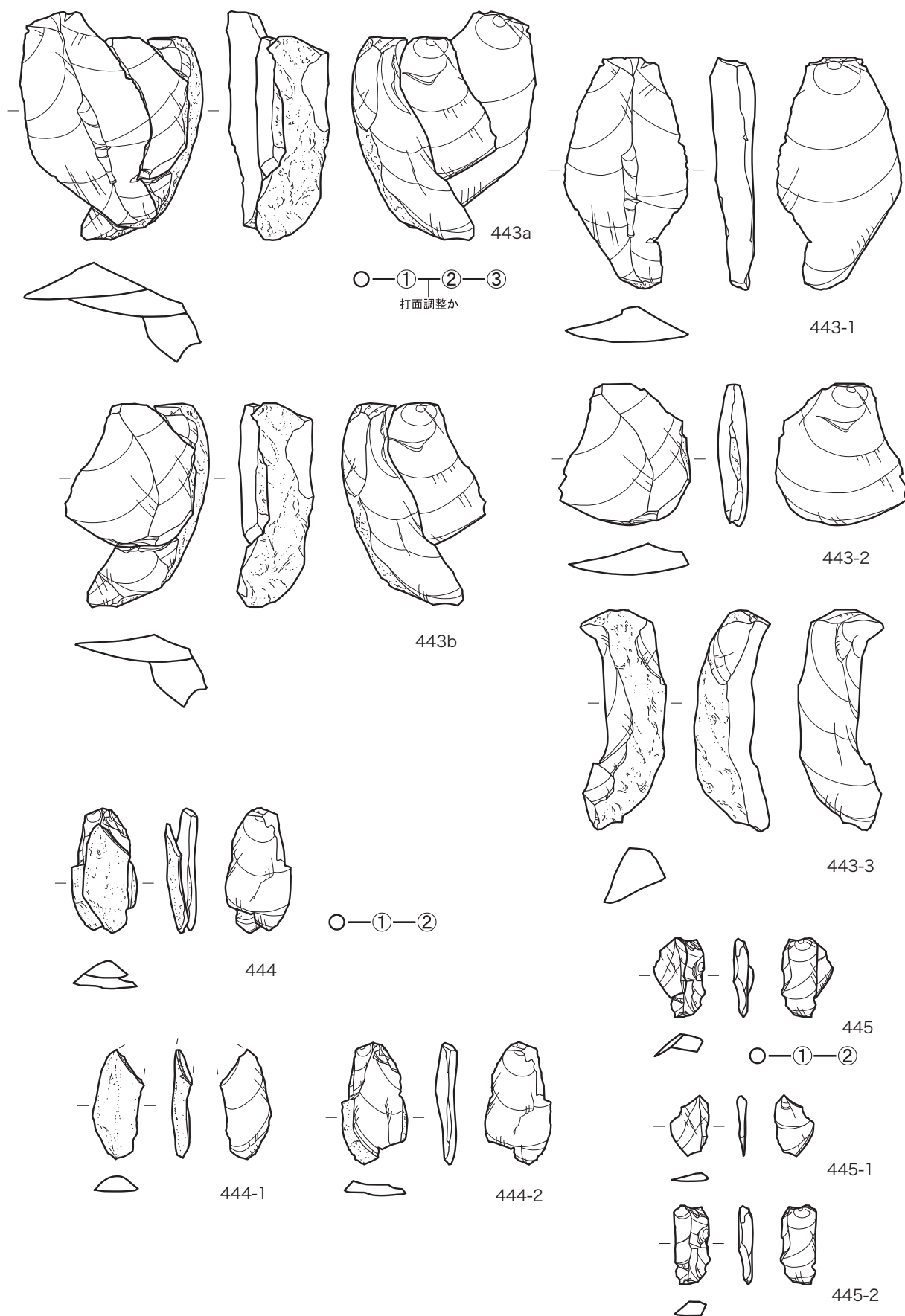
第 154 図 接合資料 5(S=2/3)



第 155 図 接合資料 6(S=2/3)



第 156 図 接合資料 7(S=2/3)



第 157 図 接合資料 8(S=2/3)

第4章 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

1. はじめに

愛知県岡崎市榎山・牧平町に位置する西牧野遺跡より検出された炭化物について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第 10 表のとおりである。

試料は炭化植物遺体 10 点である。試料が採取されたのは、E 区土坑 958SK (PLD-18709)、E 区 007SK (PLD-18710)、F 区 145SK (PLD-18711)、G 区住居址 060SI (PLD-18712)、I 区 299SI (PLD-18713) の各遺構および旧石器時代の層準 (PLD-18714 ~ 18718) である。

土坑と住居址から採取された PLD-18709 ~ 18713 はいずれも炭化材である。炭化材の部位は、PLD-18710 が最外年輪、PLD-18711 が最外年輪の可能性のある部位、それ以外が部位不明である。

旧石器時代の層準から採取された PLD-18714 ~ 18718 のうち、PLD-18714 (赤 No.2000)、18717 (赤 No.1996)、18718 (赤 No.2348) は炭化材、PLD-18715 (赤 No.1997)、18716 (赤 No.1988) は種類不明の炭化植物遺体である。部位はいずれも不明である。なお、PLD-18715 ~ 18717 は小さな破片を複数混ぜて測定している。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

第 11 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代と暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ: IntCal09) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

2σ 暦年代範囲 (確率 95.4%) に着目して結果を整理する。

土坑 958SK の炭化材 (PLD-18709) は、1401-1439 cal AD (95.4%) の範囲を示し、15 世紀前半、室町時代に相当する。ただし、958SK の炭化材は部位不明であるため、枯死・伐採年より古い年代を示している (古木効果) 可能性がある。007SK の炭化材 (PLD-18710) は、1681-1738 cal AD (27.6%)、

1757-1762 cal AD(1.0%)、1803-1893 cal AD(52.7%)、1907-1937 cal AD(14.1%) の範囲を示し、17 世紀後半～20 世紀前半、江戸時代～近代に相当する。17 世紀後半～20 世紀前半は較正曲線が比較的平坦なため、暦年代範囲が絞り込みにくい。007SK の炭化材は約 30 年輪あるので、ウィグルマッチング法により、暦年代範囲の絞り込みを試みることが可能である。145SK の炭化材 (PLD-18711) は、1432-1472 cal AD(95.4%) の範囲を示し、15 世紀、室町時代に相当する。ただし、145SK の炭化材は最外年輪の可能性のあるものの確定ではないので、古木効果に注意する必要がある。

住居址 060SI の炭化材 (PLD-18712) は、1265-1292 cal AD(95.4%) の範囲を示し、13 世紀後半、鎌倉時代に相当する。ただし、060SI の炭化材は部位不明であるため、古木効果に注意する必要がある。299SI の炭化材 (PLD-18713) は、1304-1365 cal AD(73.3%) および 1383-1406 cal AD(22.1%) の範囲を示し、14 世紀初頭～15 世紀初頭、鎌倉～室町時代に相当する。ただし、299SI の炭化材は部位不明であるため、古木効果に注意する必要がある。

旧石器時代の層準から採取された PLD-18714～18718 について年代の古い順に記すと、PLD-18714(赤 No.2000) は 29350-29058 cal BC (31299-31007 cal BP) (95.4%)、PLD-18718 (赤 No.2348) は 29232-28789 cal BC (31181-30738 cal BP) (95.4%)、PLD-18717 (赤 No.1996) は 28917-28364 cal BC (30866-30313 cal BP) (95.4%) の範囲を示した。PLD-18715 (赤 No.1997) は 25931-24927 cal BC (27880-26876 cal BP) (95.4%)、PLD-18716 (赤 No.1988) は 24719-23940 cal BC (26668-25889 cal BP) (95.4%) の範囲を示した。愛鷹・箱根山麓における層位ごとの暦年代範囲(三好, 2010) を参照すると、PLD-18714 (赤 No.2000)、PLD-18718 (赤 No.2348)、PLD-18717 (赤 No.1996) は愛鷹・箱根山麓における基本層序の第Ⅱ黒色帯 (BBⅡ) と並行する時期である。PLD-18715 (赤 No.1997) と PLD-18716 (赤 No.1988) は、愛鷹・箱根山麓で並行する年代値は無いが上下層の年代値を考えると、おおむね愛鷹・箱根山麓の第Ⅰスコリア層～休場層直下黒色帯 (SCⅠ～BB0) に並行する時期と思われる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 工藤雄一郎 (2010) 旧石器時代研究における年代・古環境論. 講座日本の考古学 1, 124-155, 青木書店.
- 三好元樹 (2010) 愛鷹・箱根山麓の旧石器時代 ^{14}C 年代の集成と検討. 静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要, 16, 1-8.
- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編 日本先史時代の ^{14}C 年代: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 51, 1111-1150.

第10表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-18709	調査区：10E グリッド：5I17b 遺構：958SK その他：110304,D-166,赤No.344	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明(数年輪) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-18710	調査区：10E グリッド：5I18e 遺構：007SK その他：110309,D-179,赤No.370	試料の種類：炭化材(半割,樹皮付,約30年輪,一部未炭化) 試料の性状：最外年輪(5年輪) 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-18711	調査区：10F グリッド：5H17r 遺構：145SK その他：110121,赤No.250	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪?(2年輪) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-18712	調査区：10G グリッド：5H12o 遺構：060SI その他：100913,赤No.144	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明(5年輪) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-18713	調査区：10I グリッド：4G15o 遺構：299SI その他：101102,D-068,赤No.143	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明(2年輪) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-18714	調査区：10G グリッド：5H14j 遺構：GR6 その他：101126,D-1674,赤No.2000	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明(年輪数不明) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-18715	調査区：10G グリッド：5H15I 遺構：GR6 その他：101129,D-1671,赤No.1997	試料の種類：炭化植物遺体 試料の性状：部位不明(小片複数) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.1N,塩酸:1.2N)
PLD-18716	調査区：10G グリッド：5H15J 遺構：GR6 その他：101126,D-1662,赤No.1988	試料の種類：炭化植物遺体 試料の性状：部位不明(小片複数) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.1N,塩酸:1.2N)
PLD-18717	調査区：10G グリッド：5H15j 遺構：GR6 その他：101126,D-1670,赤No.1996	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明(小片複数) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.1N,塩酸:1.2N)
PLD-18718	調査区：10G グリッド：5H15j 遺構：GR6 その他：101206,D-2016,赤No.2348	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明(年輪数不明) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.1N,塩酸:1.2N)

第 11 表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年 代	^{14}C 年代 (yrBP $\pm$ 1)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-18709	-24.41 $\pm$ 0.15	517 $\pm$ 19	515 $\pm$ 20	1410AD(68.2%)1430AD	1401AD(95.4%)1439AD
PLD-18710	-25.34 $\pm$ 0.19	124 $\pm$ 18	125 $\pm$ 20	1684AD(11.5%)1706AD 1720AD(7.4%)1733AD 1807AD(6.9%)1819AD 1833AD(33.8%)1880AD 1915AD(8.6%)1928AD	1681AD(27.6%)1738AD 1757AD(1.0%)1762AD 1803AD(52.7%)1893AD 1907AD(14.1%)1937AD
PLD-18711	-24.79 $\pm$ 0.17	432 $\pm$ 18	430 $\pm$ 20	1438AD(68.2%)1455AD	1432AD(95.4%)1472AD
PLD-18712	-24.65 $\pm$ 0.19	719 $\pm$ 18	720 $\pm$ 20	1272AD(68.2%)1286AD	1265AD(95.4%)1292AD
PLD-18713	-26.05 $\pm$ 0.17	596 $\pm$ 18	595 $\pm$ 20	1314AD(26.5%)1332AD 1338AD(28.4%)1357AD 1388AD(13.3%)1398AD	1304AD(73.3%)1365AD 1383AD(22.1%)1406AD
PLD-18714	-27.50 $\pm$ 0.21	26648 $\pm$ 91	26650 $\pm$ 90	29284BC(68.2%)29134BC	29350BC(95.4%)29058BC
PLD-18715	-25.09 $\pm$ 0.38	22673 $\pm$ 76	22670 $\pm$ 80	25791BC(32.2%)25502BC 25386BC(36.0%)25069BC	25931BC(95.4%)24927BC
PLD-18716	-26.14 $\pm$ 0.24	21815 $\pm$ 62	21820 $\pm$ 60	24321BC(68.2%)24004BC	24719BC(95.4%)23940BC
PLD-18717	-24.48 $\pm$ 0.14	25762 $\pm$ 81	25760 $\pm$ 80	28756BC(68.2%)28462BC	28917BC(95.4%)28364BC
PLD-18718	-23.51 $\pm$ 0.21	26269 $\pm$ 90	26270 $\pm$ 90	29149BC(68.2%)28948BC	29232BC(95.4%)28789BC

第5章 考察・総括

第1節 考察

(1) 西牧野遺跡の竪穴状遺構(第158図)

本調査における中世の遺構で特徴的なものとして、竪穴状遺構があげられる。竪穴状遺構と考えられるものは、2009年度調査では09B区に2基(169SK、178SK)、2010年度調査では10Da区に2基(300SK、314SI)、10E区に2基(137SK、326SI)、10G区に4基(060SI、1323SI、1324SI、1732SI)、10I区に2基(066SI、299SI)の計10基を数える。これらの遺構の時期は、出土遺物や放射性炭素年代測定などの結果から考えると13世紀末～15世紀初頭に展開していたものと推定される。

本調査で確認された竪穴状遺構の特徴は次のようなものである。断面形状が皿状で、床面は傾斜しているものや浅い土坑状のくぼみがあるものがある。焼土のまとまりや床面の一部が被熱している。床面が叩き締めたように硬化している。壁面のうち1方向もしくは2方向に緩やかなスロープ状の部分が存在する。立地としては掘立柱建物の柱穴と考えられるものが集中する区域の南東部分に立地しており、掘立柱建物と一体で機能していたと考えられる。こうした特徴をすべての遺構が備えているものではないが、このうちの複数の特徴をそれぞれが有している。

上記のような特徴から類例を探ると馬小屋の可能性が考えられる。篠崎譲治氏の研究によると馬小屋遺構の特徴として、カマド・炉がない、竪穴が設けられている、床面が傾斜している、尿だめがある、張り出しが付くものがある、スロープが設けられているものがあるなどが挙げられており(篠崎2010)、今回の調査で確認された竪穴状遺構はこうした特徴に概ね当てはまることから、本遺跡の竪穴状遺構に付いても同様の機能を有するものではないかと考える。

(2) 西牧野遺跡の中世遺構の変遷(第159図)

西牧野遺跡の中世の遺構は12世紀から15世紀後葉まで確認されており、これらを分類するとⅠ期(13世紀以前)、Ⅱ期(13世紀末～15世紀初頭)、Ⅲ期(15世紀)の概ね3時期に遺構の変遷を分けることができる。これらの3期の遺構の状況について確認しておきたい。

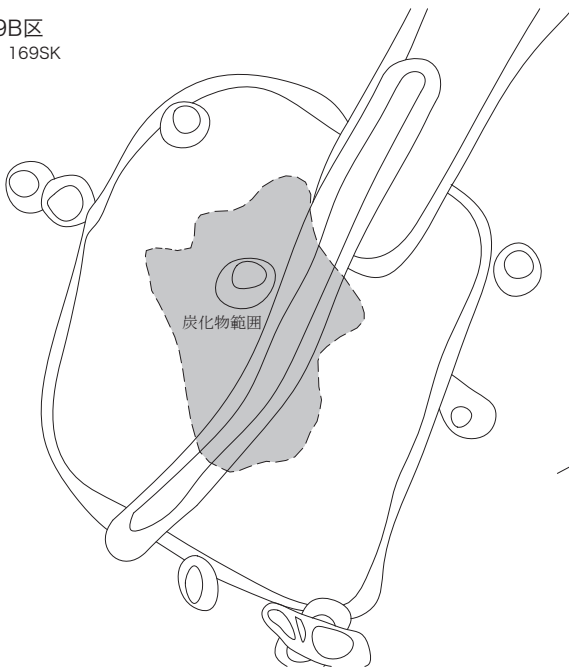
Ⅰ期(13世紀以前) この時期は、遺跡の東に位置する西野川西岸域の09A区・10B区の遺跡の東端とF区中央南端にあたるあたりに土壇墓と考えられる遺構がまとまって確認されており、墓域となっていたと思われる。他の調査区では当該期の遺構はほとんど確認されていない。

Ⅱ期(13世紀末～15世紀初頭) この時期に入ると調査区全体に広く遺構が展開をしている。遺跡の中央部には1辺75m前後の方形に区画溝が展開する屋敷地が作られ、10Da区・10E区から10I区にかけては竪穴状遺構を伴う屋敷群が展開しており、この地区に広く集落が展開していたことが確認された。この時期の墓域は、遺跡の東側ではなく、西側の岩田川に近い9Cb区に展開をしていることが確認されている。集落域と墓域は09Db区から10Iに向かって東西方向に走る区画溝を境に隔てられていたと考えられる。

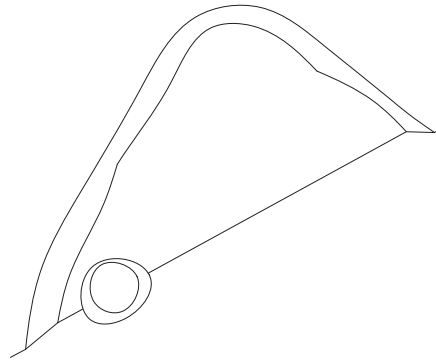
Ⅲ期(15世紀) 15世紀に入るとそれまで広く展開していた屋敷群が廃絶しており、その後調査区中央部の10E区・10F区を中心とする広い範囲で火葬墓や土壇墓と考えられる遺構が展開していることが確認されている。こうした遺構の範囲は、10Da区東よりの008SDから10F区西よりの022SDの間に限定されることからこの両溝の間の地域が墓域として機能していたと考えられる。墓域から外れた区域については東側も西側も当該期の遺構は掘立柱建物などが少数あるもののⅡ期の状況から考えると非常に希薄であり、集落の中心からは外れた地域となっていたと思われる。

こうしたⅢ期の変遷を経た後の15世紀末以降には該当する遺構も遺物も確認されておらず、この区域の土地利用の状況は定かではない。この後、遺構や遺物が確認されるのは17世紀以降のこととなる。

09B区
169SK

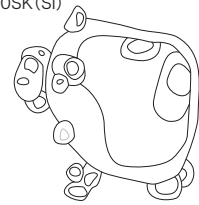


178SK

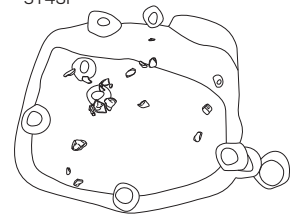


Da区

300SK (SI)

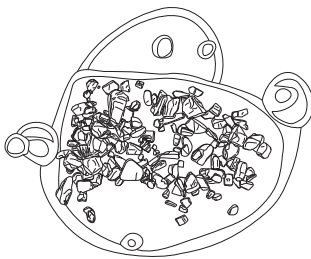


314SI

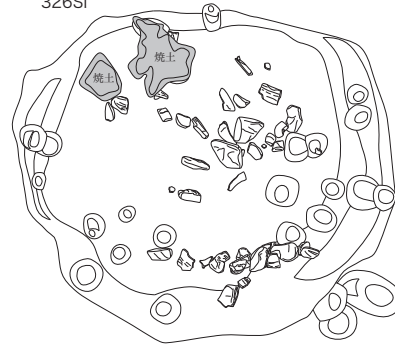


E区

137SK (SI)・666SK

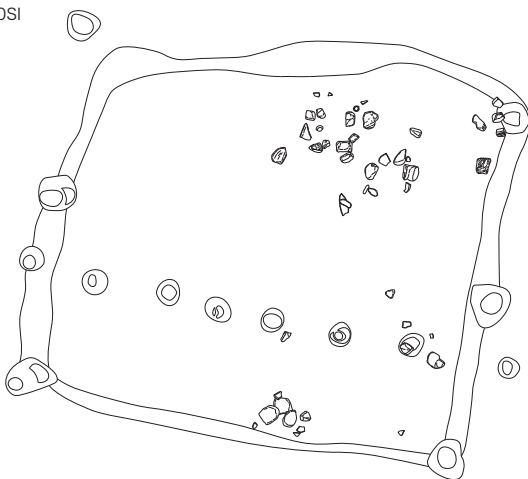


326SI

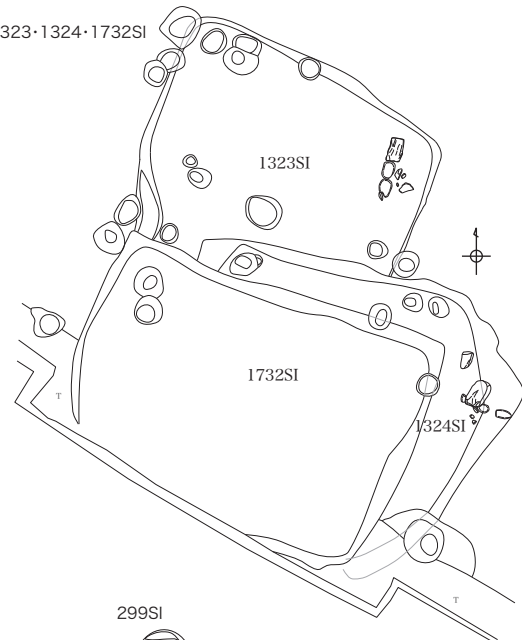


G区

060SI

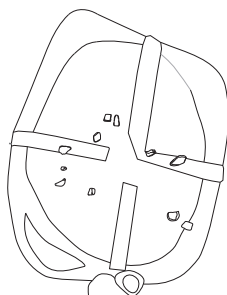


1323・1324・1732SI

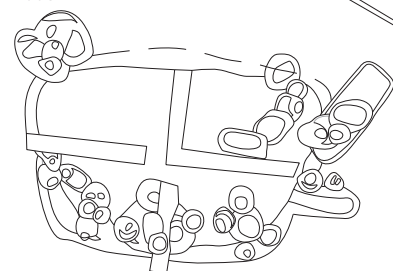


I区

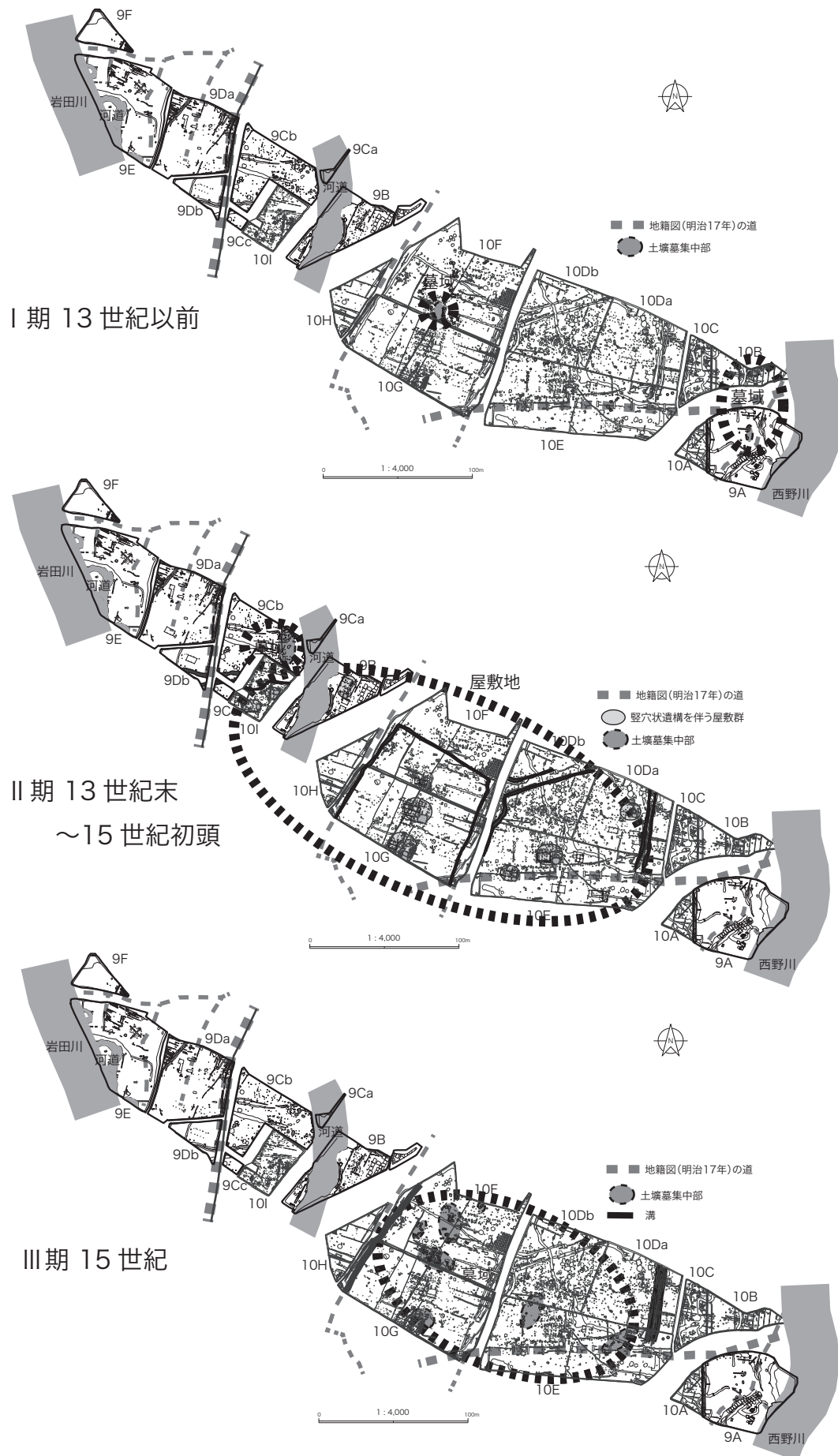
066SK



299SI



第 158 図 西牧野遺跡竪穴状遺構平面図 (S=1/100)



第 159 図 西牧野遺跡中世遺構変遷図 (S=1/4000)

第2節 総括

西牧野遺跡は旧石器時代から近世までつづく遺跡であり、今回の調査でその一端を確認することができた。そこで総括として、西牧野遺跡の成果をもとにそのまとめと課題を提起しておきたい。

本遺跡の最も大きな成果としては、旧石器時代の遺構、遺物であろう。特に3カ所確認された礫群は、豊川市の駒場遺跡に次ぐ県内で2例目となるもので非常に希少な史料となり得る。また、石器の石材の流通、製品の流通などを考える上でも重要な遺跡となると考えられる。前年度調査でこれらの時期が後期旧石器時代Ⅲ期・Ⅳ期と考えられており今年度の調査でも概ねこの時期と考えられるが、放射性炭素年代測定の結果からはもう少し年代がさかのぼる可能性も考えられる。しかし、これらについては限られた時間の中での整理・報告であり、十分な考察が加えられたとは言い難く、今後提示した資料などをもとに愛知県の旧石器時代の研究が進むことあれば幸いである。

遺物などから確認される西牧野遺跡は旧石器時代、縄文時代、弥生時代、中世、近世が存在することが確認されているが、遺構は縄文時代・弥生時代と考えられるものはそれほど多く確認されていない。これらの時期は、本遺跡の北側に展開する牧平遺跡とその周辺に集落などが展開していたとも考えられる。しかし一方で遺物の出土の状況では遺跡の東側を流れる西野川を有する谷からの自然流路と思われる遺構から出土したものが多くことから、谷の上流側に遺構の展開がある可能性を考慮しておく必要がある。

中世の西牧野遺跡は13世紀以前に土地の利用状況が不明瞭であったものが、13世紀末以降急速に屋敷地として整備され、15世紀には墓域に、15世紀末には再び利用状況がわからなくなっている。こうした変化を考える上でこの地域の支配権の推移を考慮に入れる必要があるのではないかとと思われる。「額田町史」によると中世の西牧野は牧平地区を支配する三浦氏と榎山地区を支配する榎山氏の勢力の境界にあたると考えられる。これを参考にして遺構の変遷を見てみると13世紀末以降に屋敷地ができ15世紀初頭に無くなる状況は榎山氏の勢力の衰亡に関連するものではないかと思われる。榎山氏は1350(観応元)年に起きた観応の擾乱で榎山十郎義胤が足利直義方についたことがわかっており、この影響で榎山氏は徐々に勢力を衰えさせていることから本遺跡の屋敷地の状況に合致する。その後、遺跡の中央付近は墓域になるがこれは牧平地区のものではないかと考える。牧平地区のものであるとすると集落の西のはずれであり、墓域の西側の溝が近世には榎山地区との村境の溝となったことにも説明がつく。ただ男川流域の額田の中世は史料などが乏しく、現在こうした推論を証明することは困難である。今後の研究課題であろう。

主要参考・引用文献

篠崎譲治 2010『馬小屋の考古学』

北村和宏 1996「尾張の伊勢型鍋」『鍋と甕—そのデザイン—』

鈴木正貴 1996「東海地方の土師器内耳鍋の生産について」『鍋と甕—そのデザイン—』

新編岡崎市史額田資料編編集委員会編 2012『新編 岡崎市史 額田資料編Ⅱ 古代・中世・近世』

中野晴久 1994「生産地における編年について」『「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所額田町史編集委員会編 1986『額田町史』額田町

藤澤良祐 2007「総論」『愛知県史 別編窯業2中世・近世瀬戸系』愛知県

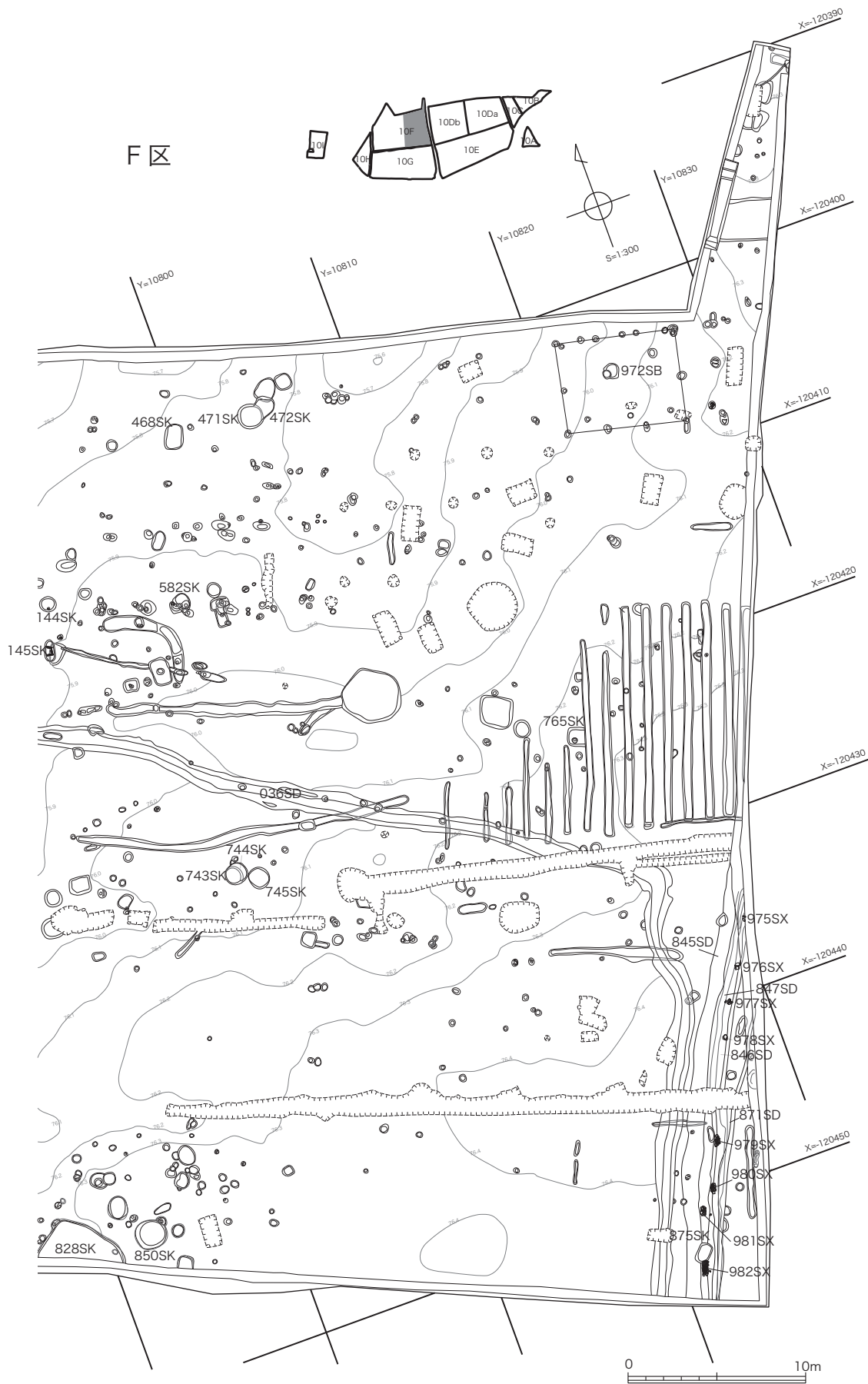
岩野見司・渡邊誠・齊藤基生 2002「総論」『愛知県史 資料編1 考古1旧石器・縄文』愛知県



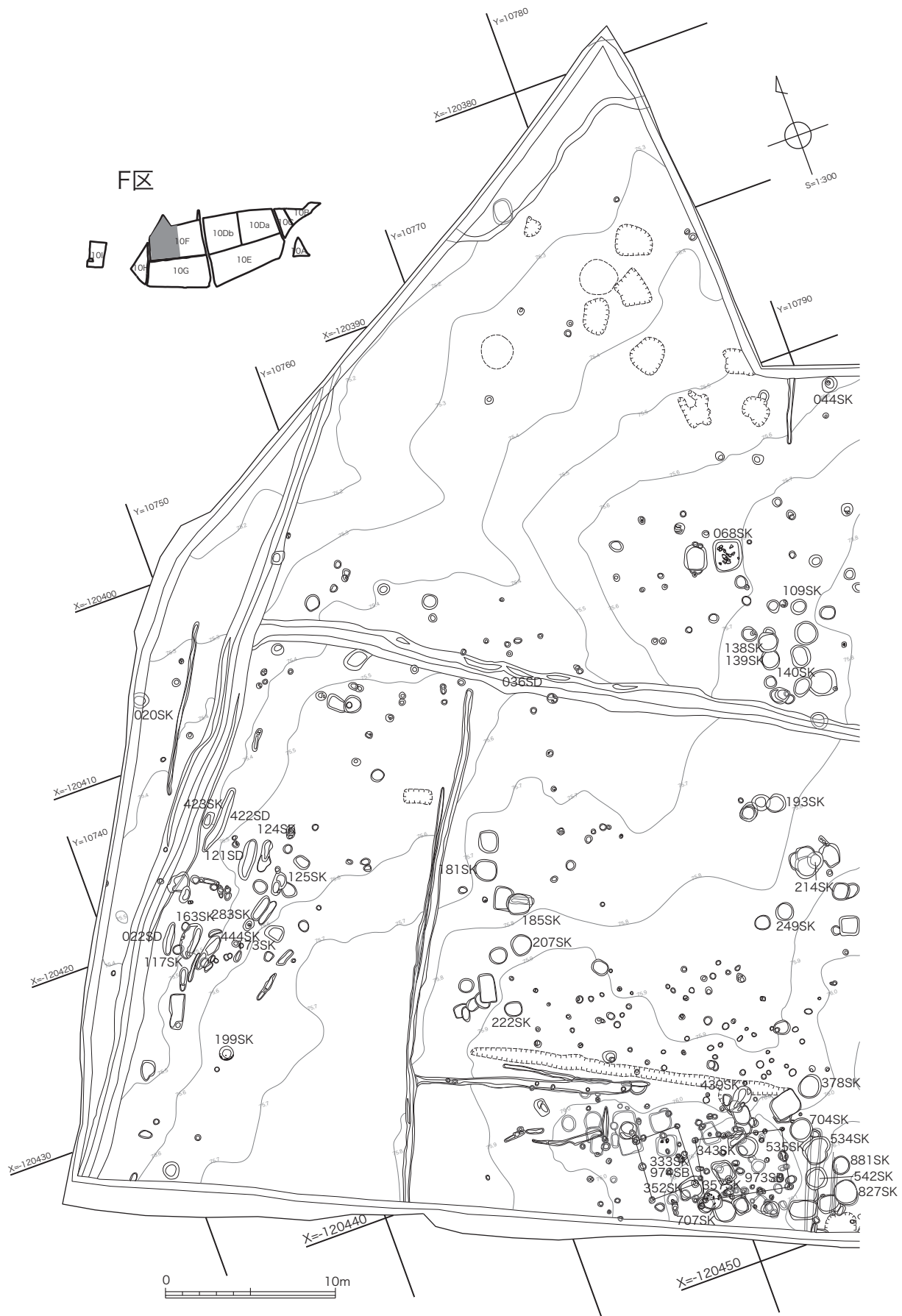
第 162 図 遺精図 3 (Db 区)



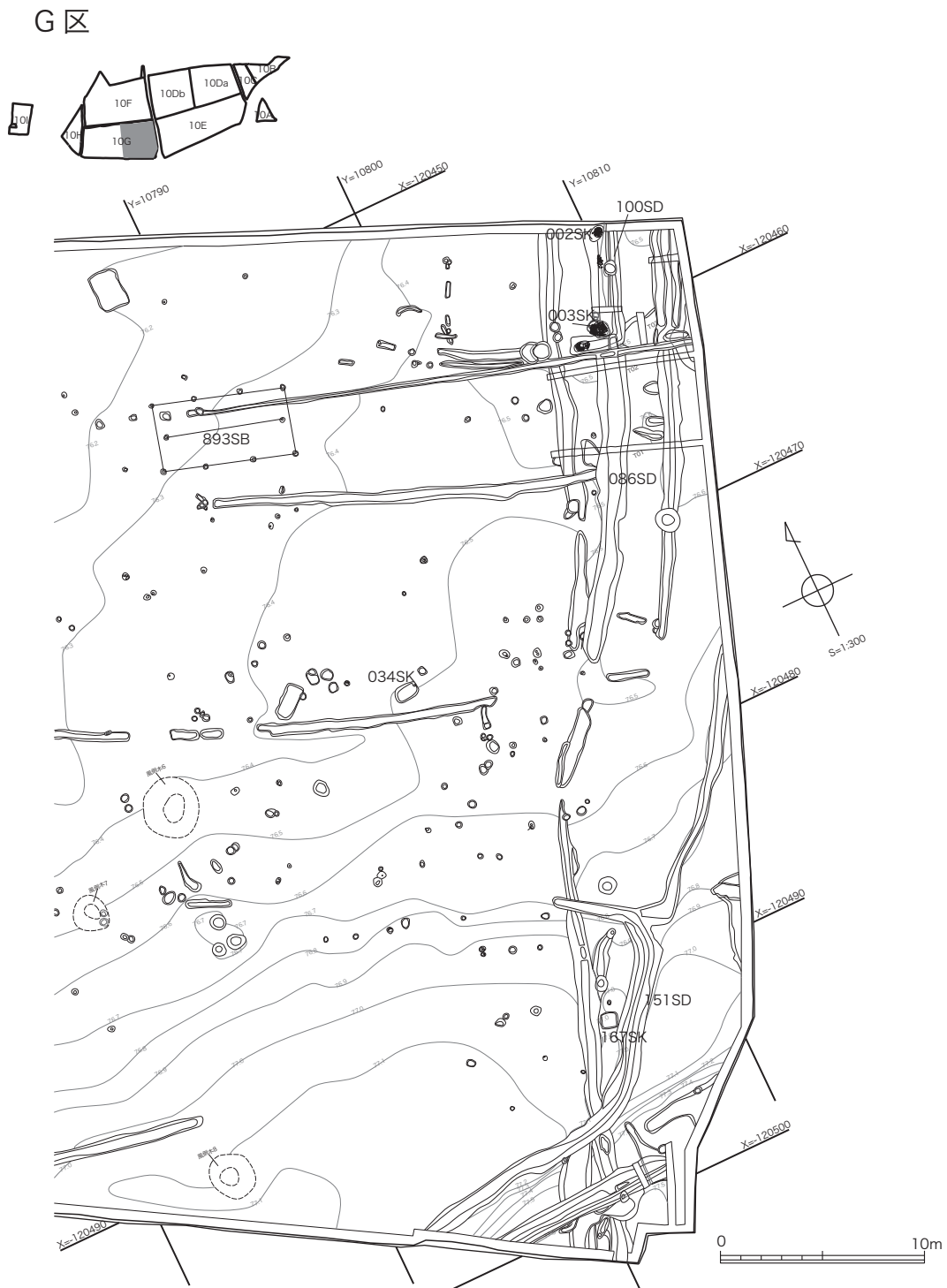
第 163 図 遺構図 4 (E 区東)



第 165 図 遺構図 6 (F 区東)



第 166 図 遺構図 7 (F 区西)



第 167 図 遺構図 8 (G 区東)



A区全景（南から）



A区 030SD 完掘状況



A区 030SD 土層断面



A区 049SK 遺物出土状況



A区 049SK 遺物出土状況



B区全景（東から）



B区 059SK 検出状況



B区 100SD・184SD 完掘状況



B区 188SD 完掘状況



B区下層石器出土状況



C区全景（東から）



C区 016・162SD 完掘状況



C区 016SD 完掘状況



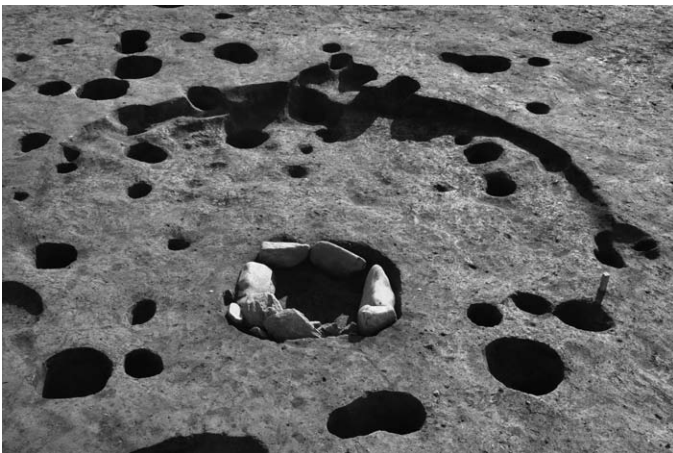
C区 016SD 遺物出土状況



C区 006SK 遺物出土状況



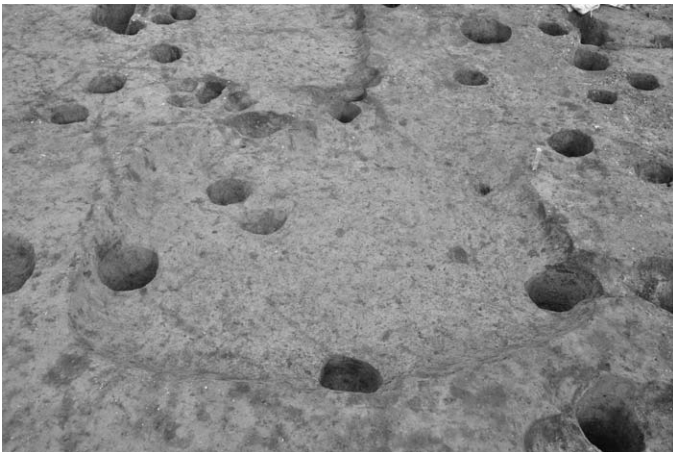
Da 区全景（東から）



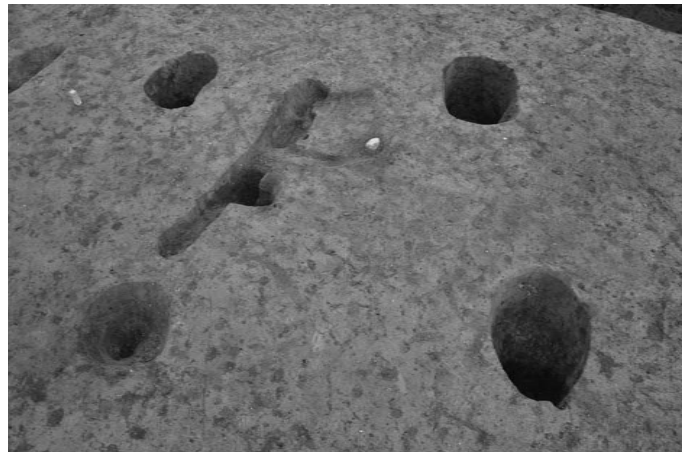
Da 区 281SI 完掘状況



Da 区 760SL 完掘状況



Da 区 314SI 完掘状況



Da 区 942SB 完掘状況



Da 区 971SB 完掘状況



Da 区 435SK 遺物出土状況



Da 区 821SK 完掘状況



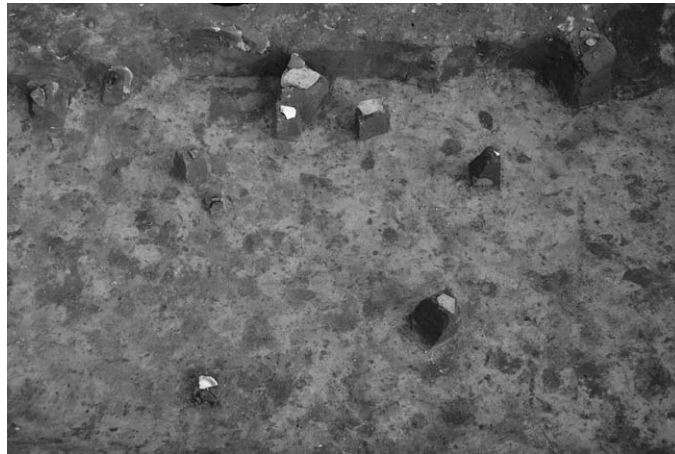
Da 区 008SD 遺物出土状況



Db 区全景（東から）



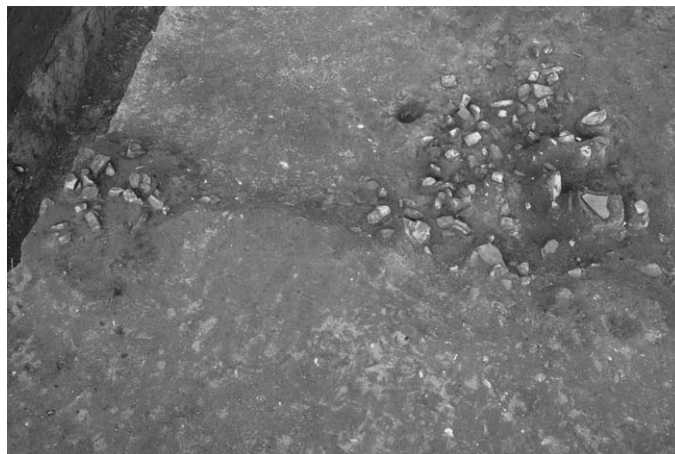
Db 区 1105SK 遺物出土状況



Db 区 1683SK 遺物出土状況



Db 区 1101SD・1116SD 完掘状況



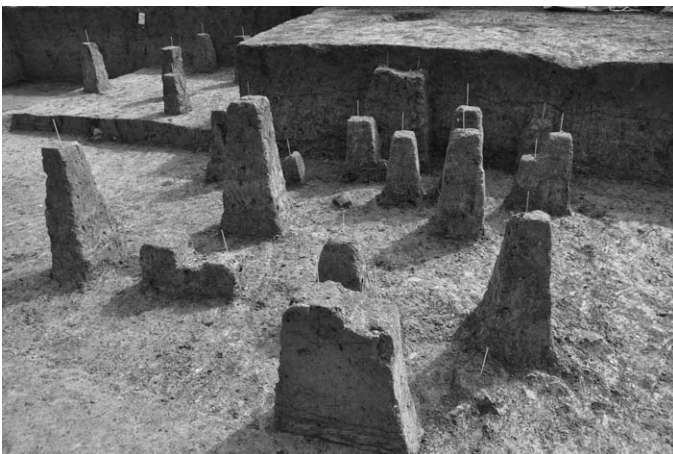
Db 区 1116SD 遺物出土状況



Db 区 1110SE 検出状況



Db 区 1110SE 断面



Db 区グリッド 58 石器出土状況



Db 区礫群出土状況



E 区全景（北から）



E 区中央遺構集中部



E 区 1748SB 完掘状況



E 区 137SK (SI) 礫出土状況



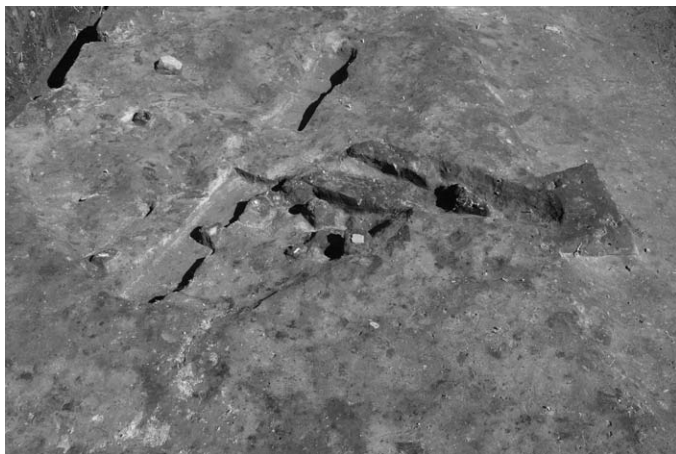
E 区 326SI 完掘状況



E 区 006SK 炭化材出土状況



E 区 007SK 炭化材出土状況



E 区 958SK 完掘状況



E 区 726SK 遺物出土状況



E 区 995SK 遺物出土状況



E 区 123SK (SE) 断面



E 区 420SE 断面



E 区 001SR 検出状況



F区全景（南から）



F区 972SB 完掘状況



F区 145SK 炭化材出土状況



F区 068SK 礫出土状況



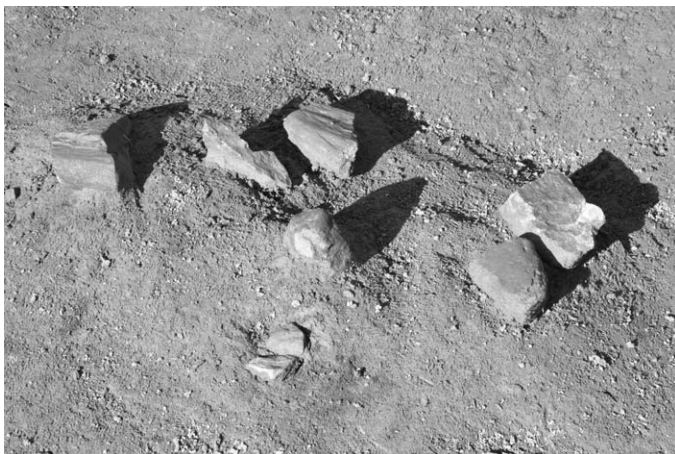
F区 378SK 断面



F区 199SK 遺物出土状況



F区 847SD と SX 完掘状況



F区グリッド 51 礫群出土状況



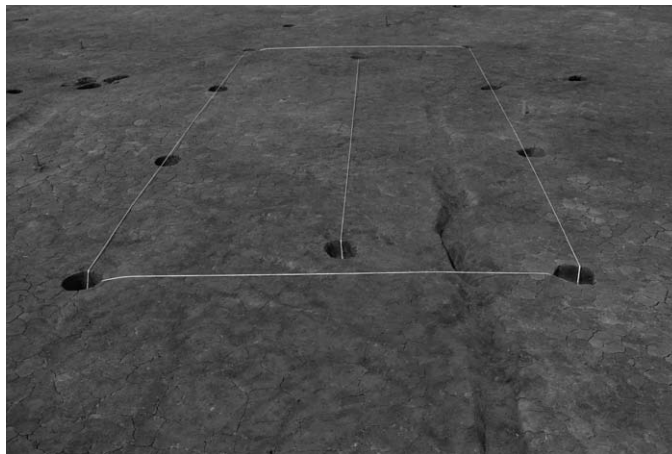
F区グリッド 69 石器出土状況



G区全景（北から）



G 区中央遺構集中部



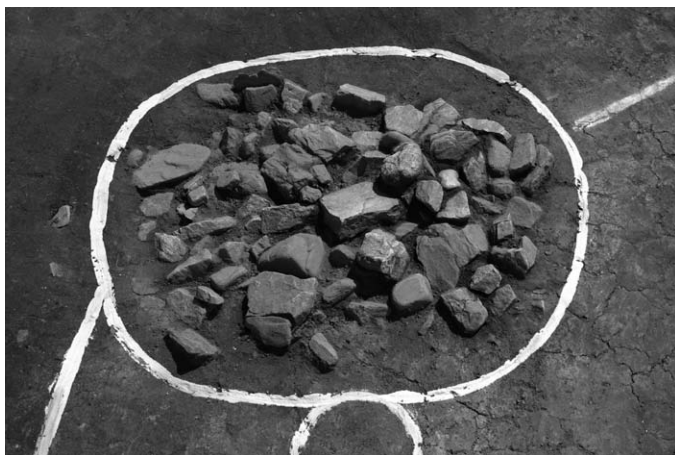
G 区 893SB 完掘状況



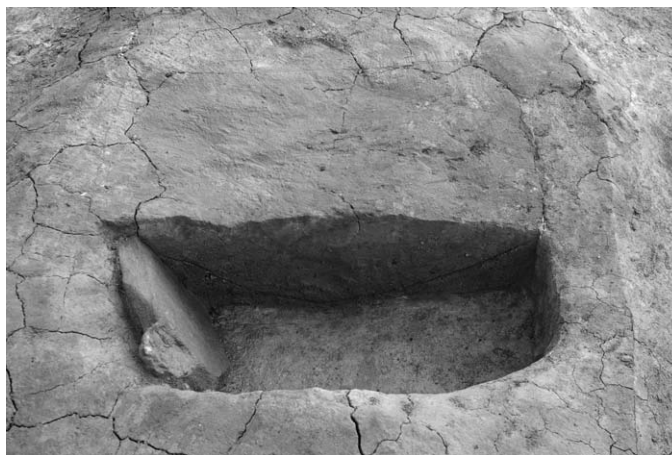
G 区 060SI 完掘状況



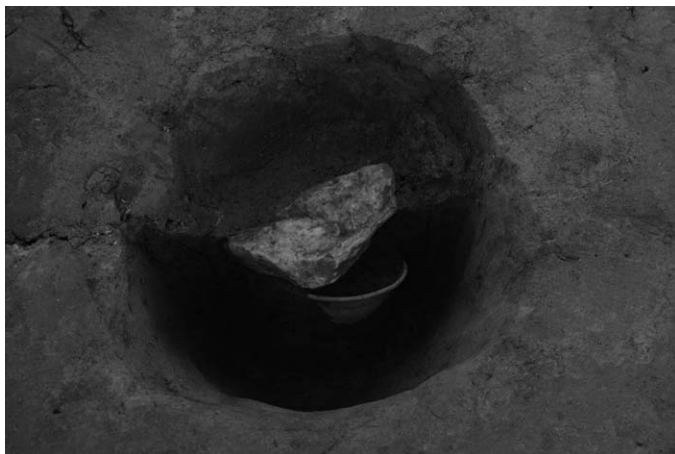
G 区 1323SI 礫出土状況



G 区 003SK 検出状況



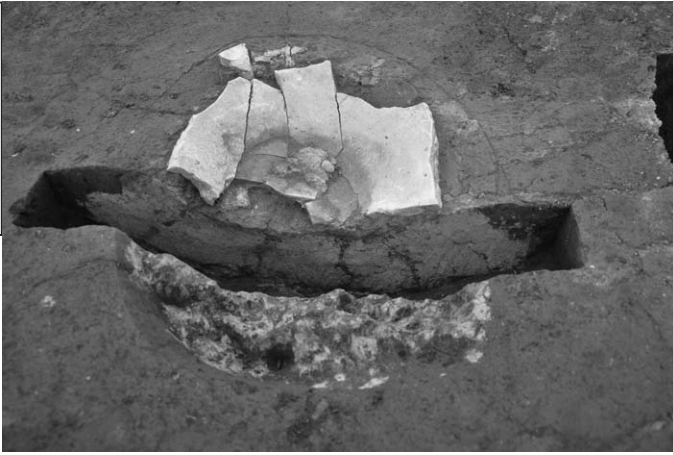
G 区 167SK 断面



G 区 495SK 遺物出土状況



G 区 821SK 検出状況



G 区 1423 断面



G 区 1548SK 断面



G 区 341SD 礫出土状況



G 区 180SE 断面



G 区 340SE 断面



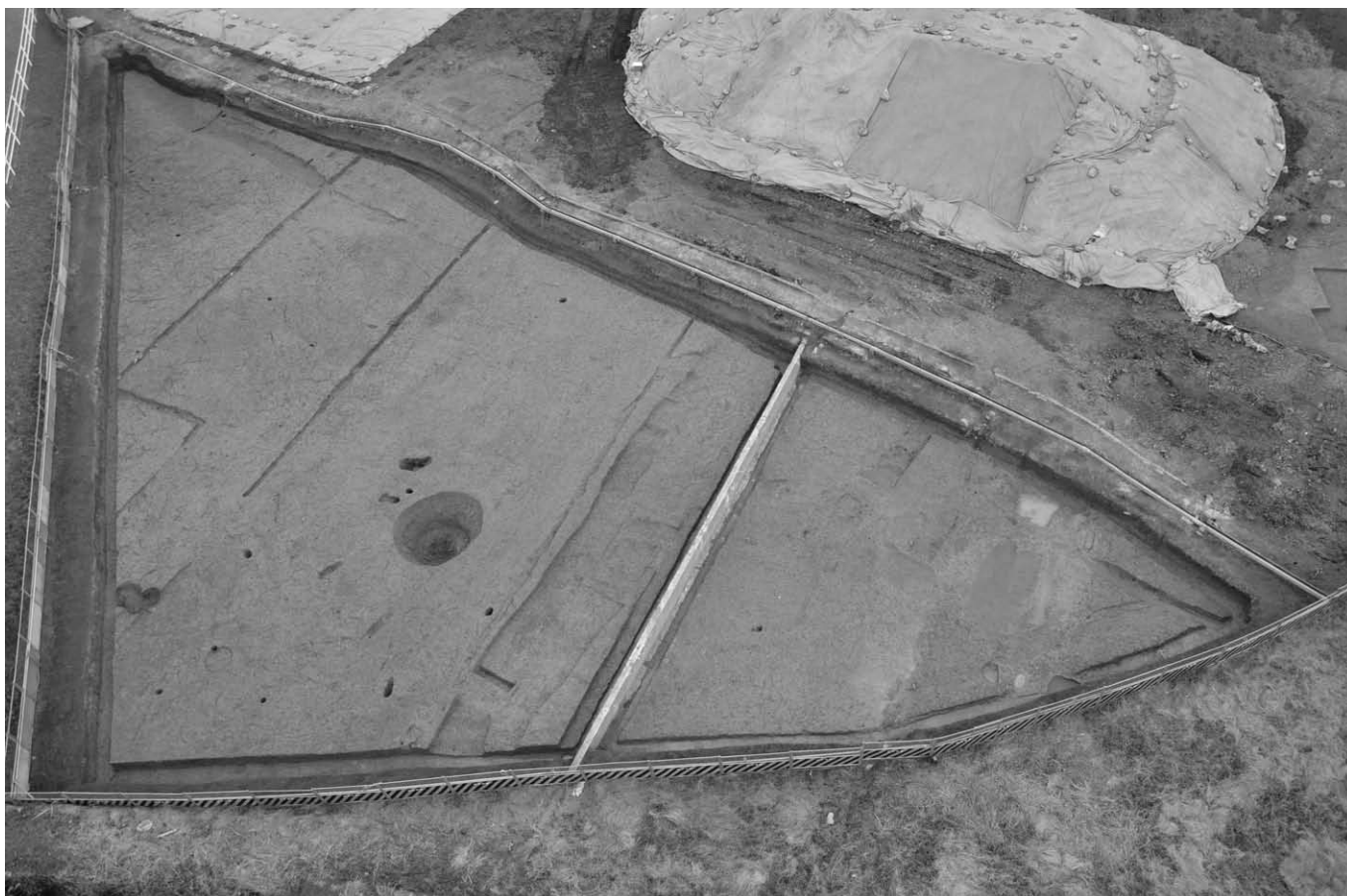
G 区 グリッド 6 礫群出土状況



G 区 グリッド 7 石器出土状況



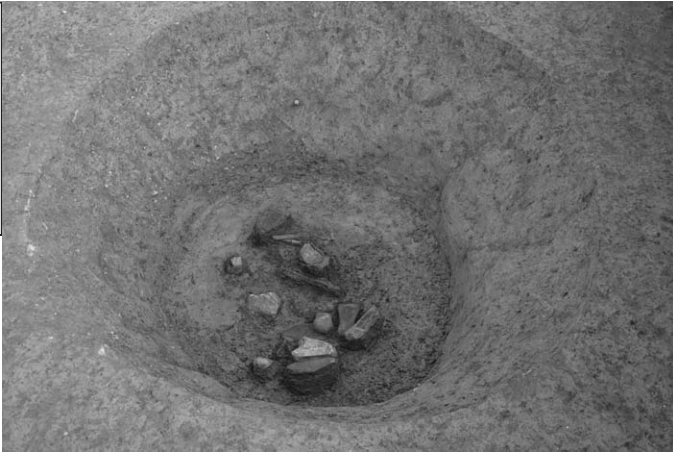
G 区 グリッド 8 石器出土状況



H区全景（南西から）



I区全景（北西から）



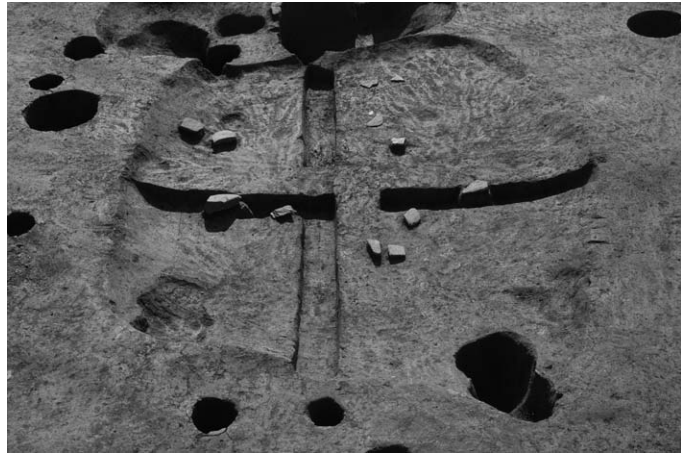
H区 050SE 上層遺物出土状況



H区 050SE 木桶出土状況



I区 025SD 遺物出土状況



I区 066SI 完掘状況



I区 299SI 完掘状況



I区 045SE 石組み



I区 656SB 完掘状況



I区 4G16n 南西グリッド石器出土状況



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



31



37



36



57



82



103



102



104



150



126



128



151



127



35



68



72



71



70



76



77



78



83



84



85



86



100



101



97



105



106



120



121



129



130



131



132



133



144



145



152



79



79



87



87



88



88



107



107



108



108



122



122



134



134



135



136



136



137



138



109



155



125



141



32



33



73



80



89



90



91



109



110



123



139



140



153



81



81



92



93



95



95



94



94



99



113



113



112



112



114



114



115



115



118



119



148



148



147



147



116



154



117



146



63



54



111



61



74



142



98



124



38



143



64



60



65



113



114



39



34



69



42



149



157



66



44



43



96



67



48



50



52



46



53



51



45



49



47



55



56



59



156



75



158



159



160



158



159



160



174



171



175



176



178



179



180



174



170



172



177



181



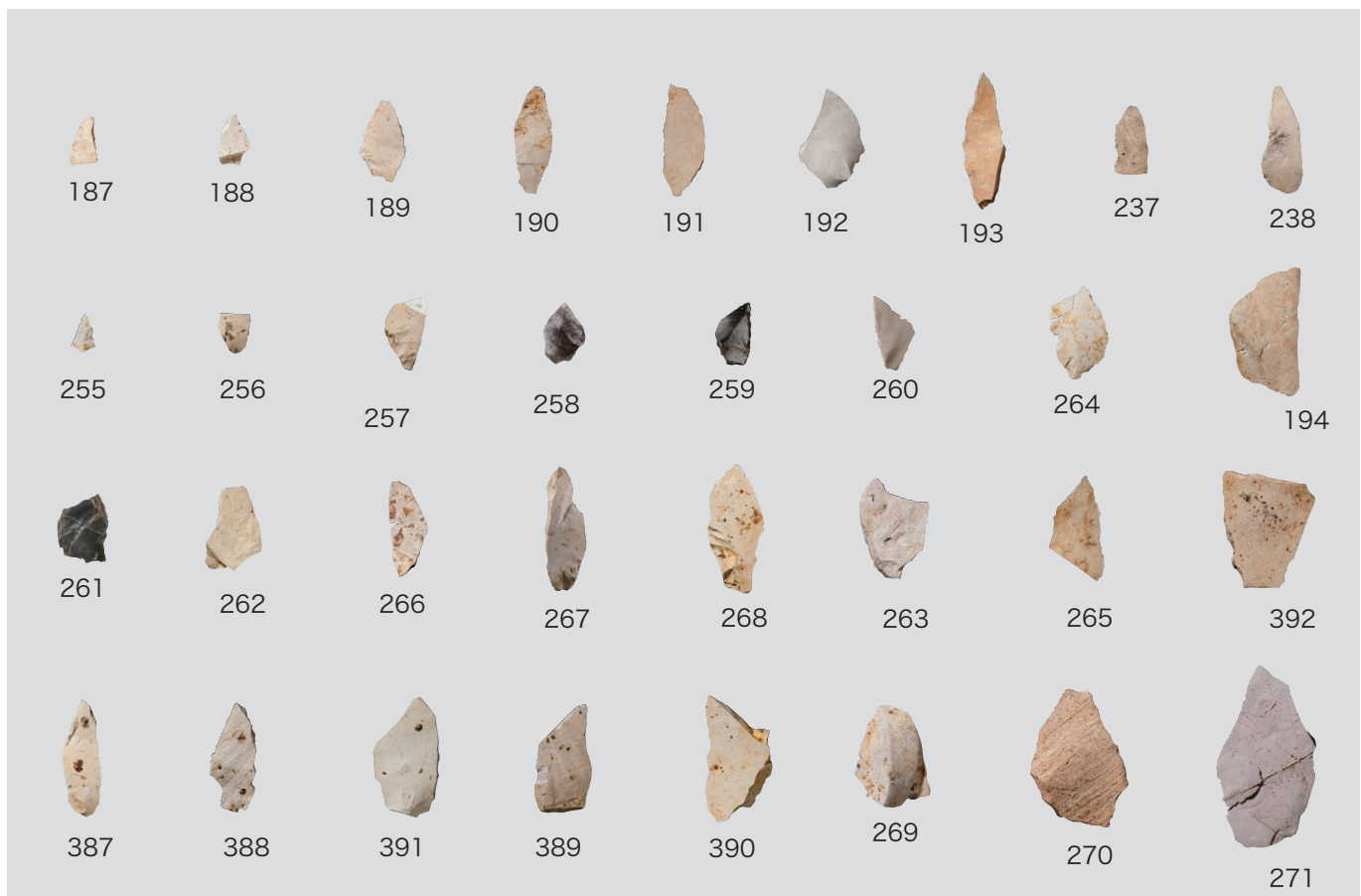
182



183



ナイフ形石器（表）



ナイフ形石器（裏）



195



196



233



239



240



277



278



279



280



241



275



276



281



282



283

削器 (表)



195



196



233



239



240



277



278



279



280



241



275



276



281

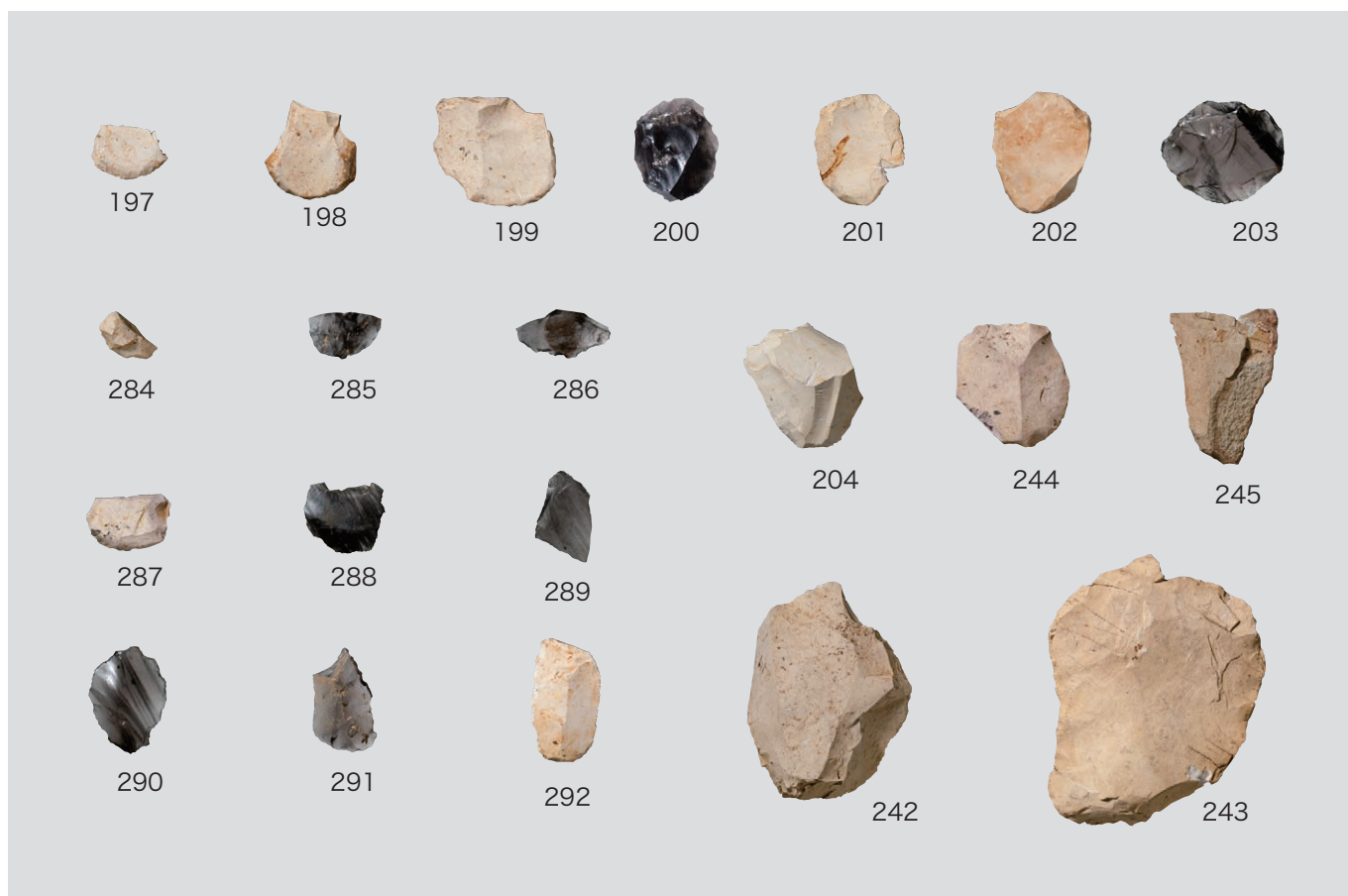


282

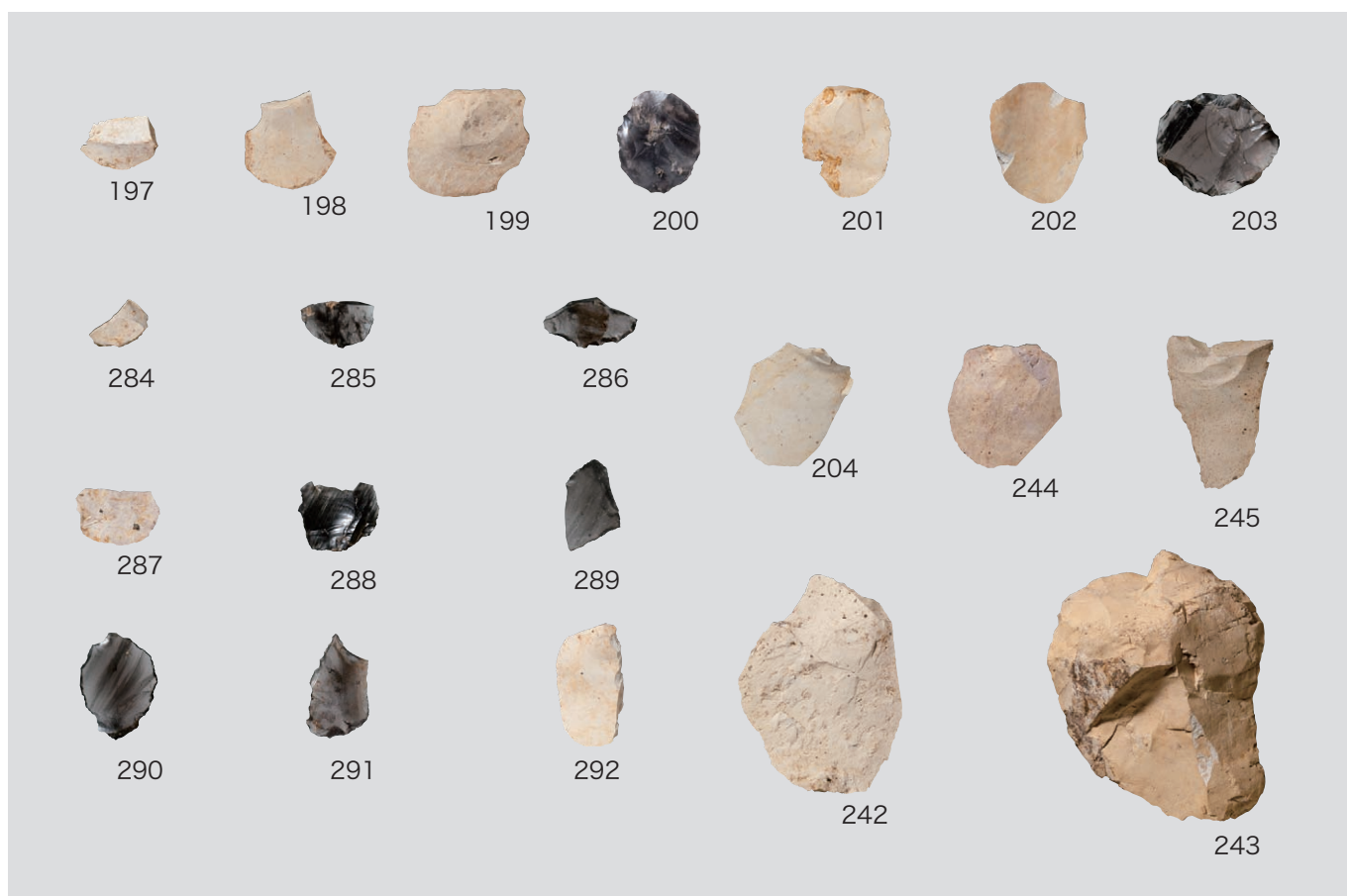


283

削器 (裏)



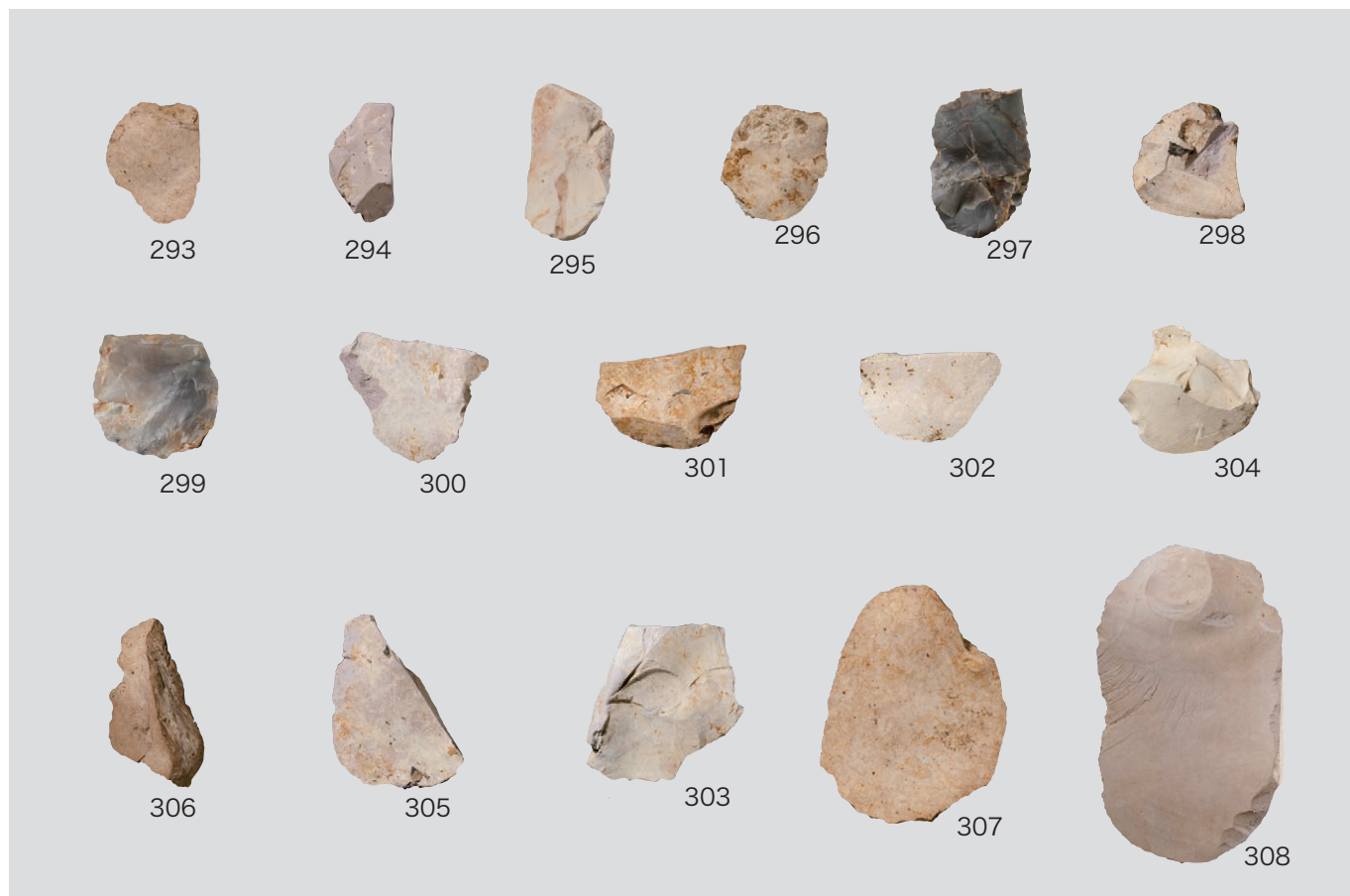
搔器 1 (表)



搔器 1 (裏)



搔器 3 (表)



搔器 3 (裏)



楔形石器（表）



楔形石器（裏）



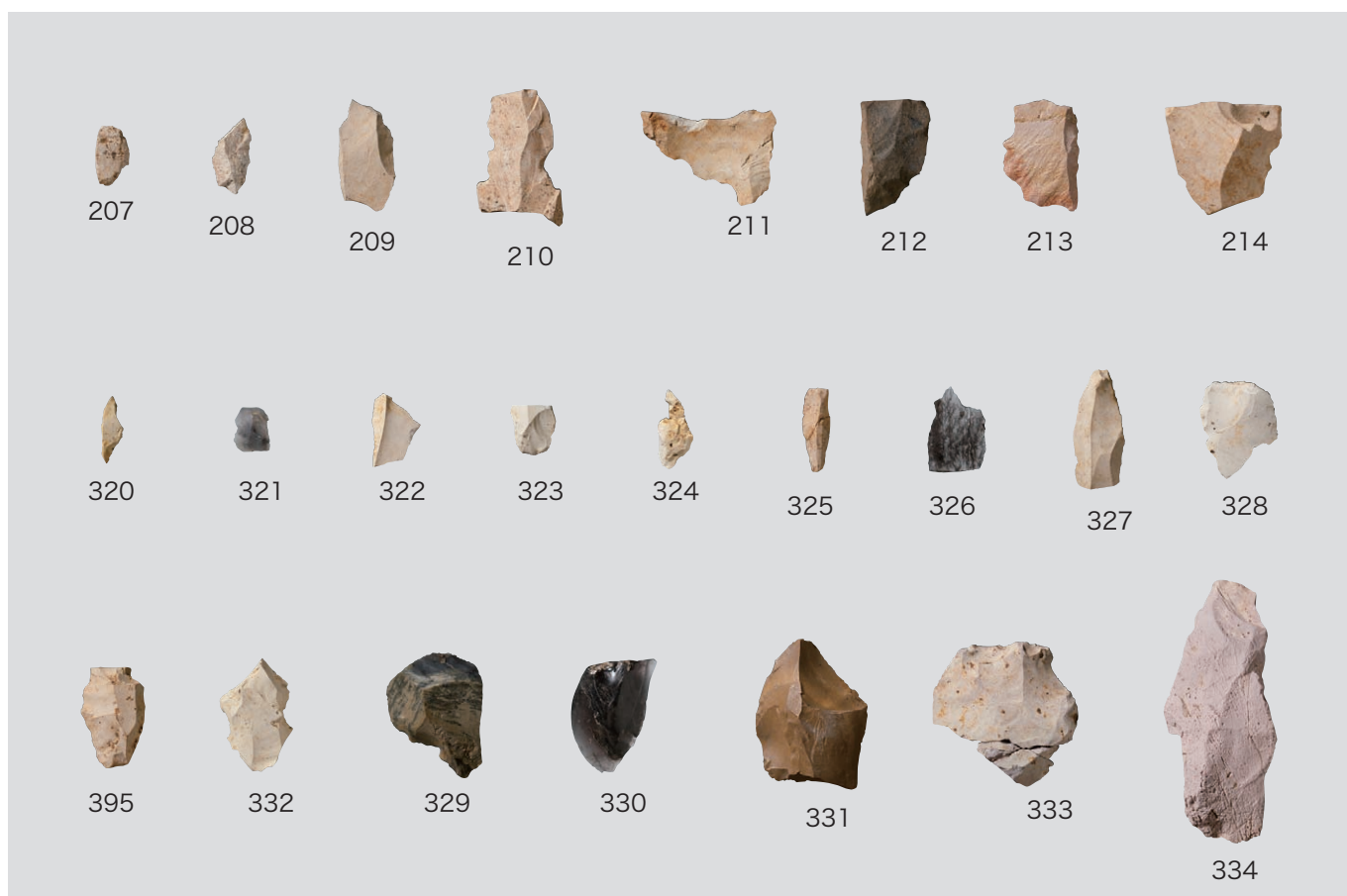
石鏃・尖頭器・彫器・石斧（表）



石鏃・尖頭器・彫器・石斧（裏）



二次加工剥片（表）



二次加工剥片（裏）



微細剥離痕を有する剥片（表）



微細剥離痕を有する剥片（裏）



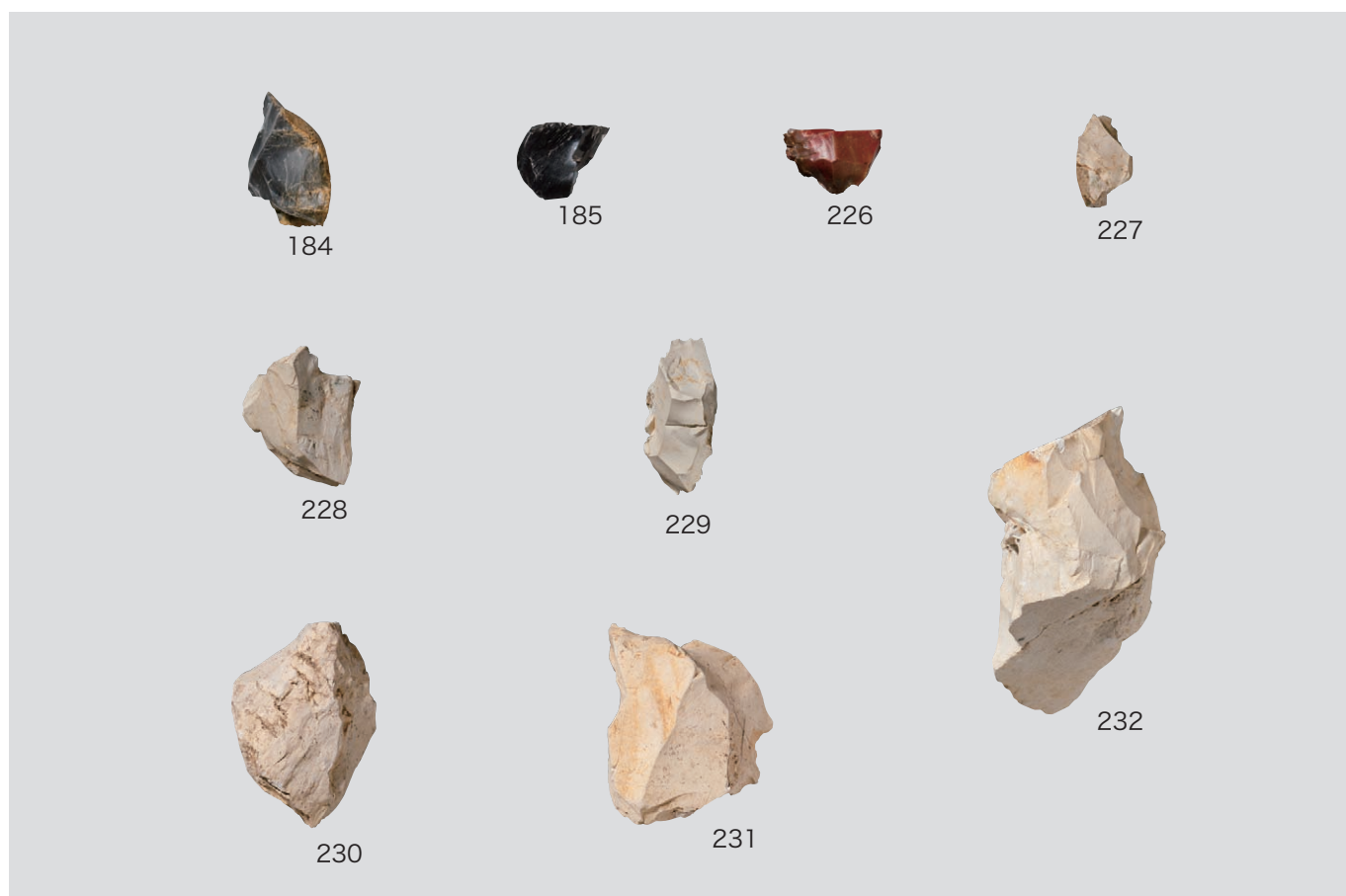
剥片（表）



剥片（裏）



石核 1 (表)



石核 1 (裏)



石核 2 (表)



石核 2 (裏)



石核3（表）



石核3（裏）



敲石



石皿 S=1/4



石錘・砥石



石製品



接合資料1・2・3・4・6・7・8 (表)



接合資料1・2・3・4・6・7・8 (裏)



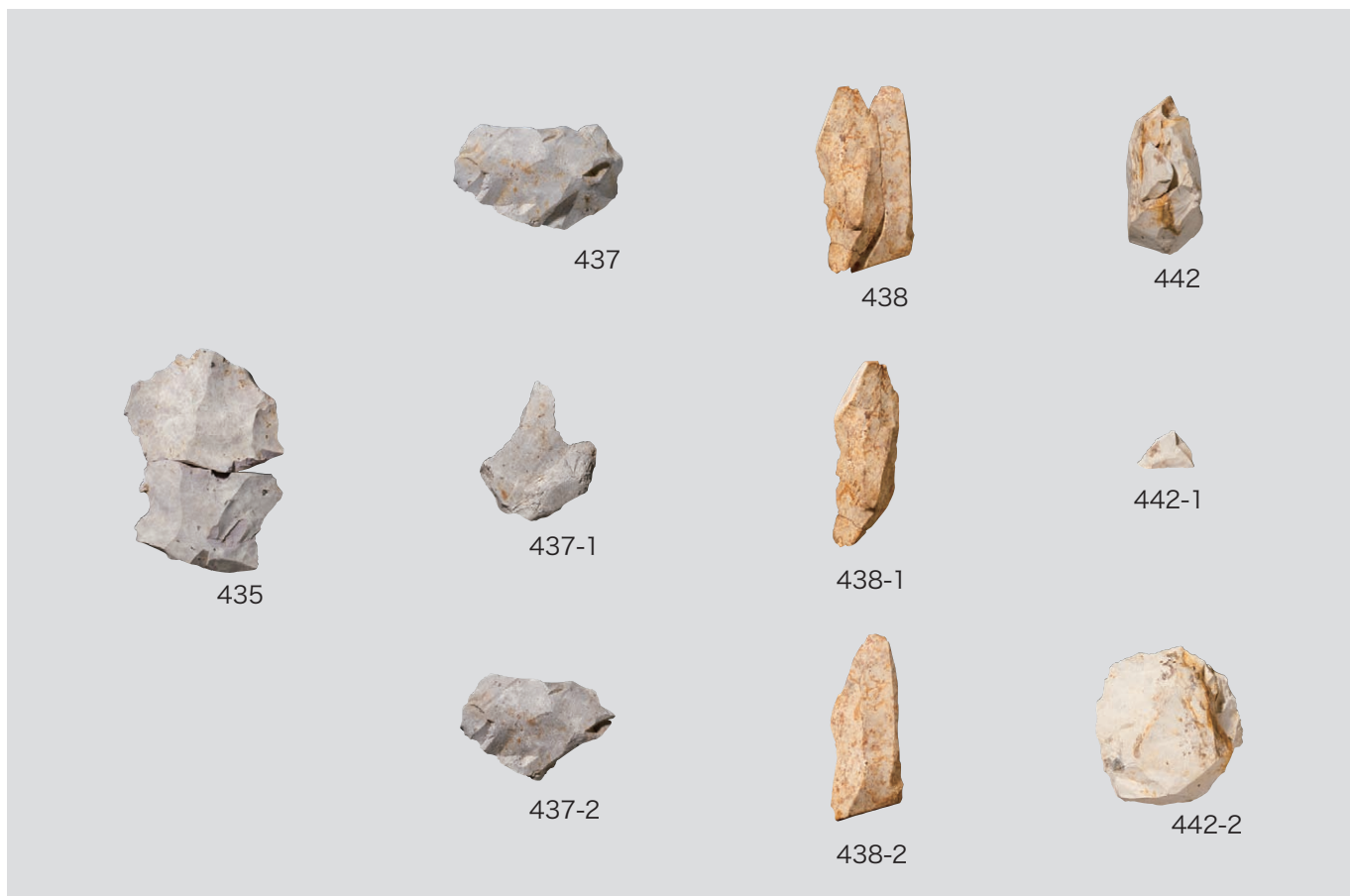
接合資料5・9・11 (表)



接合資料5・9・11 (裏)



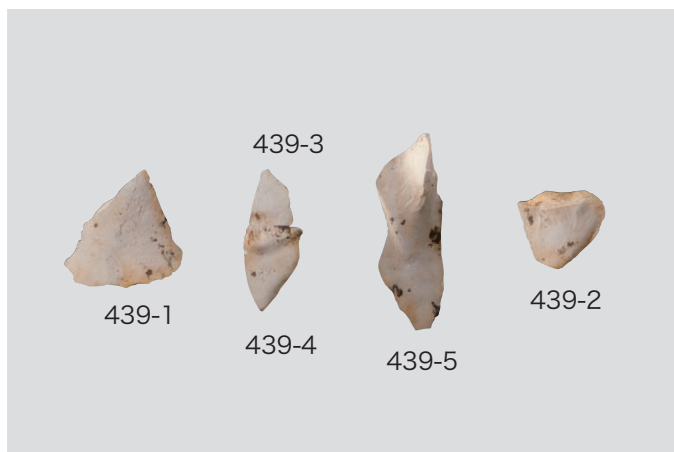
接合資料 10・12・17・20 (表)



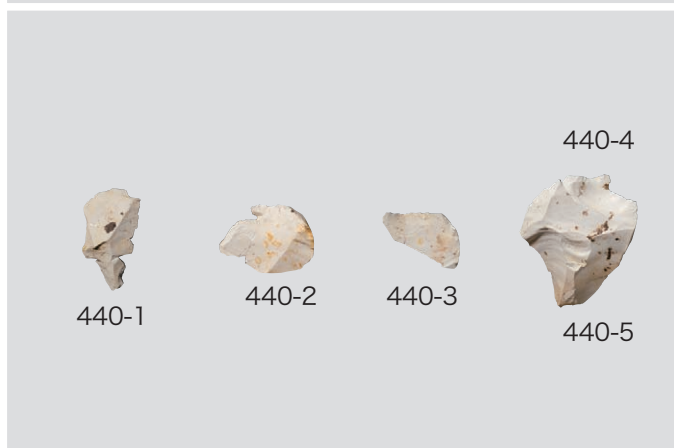
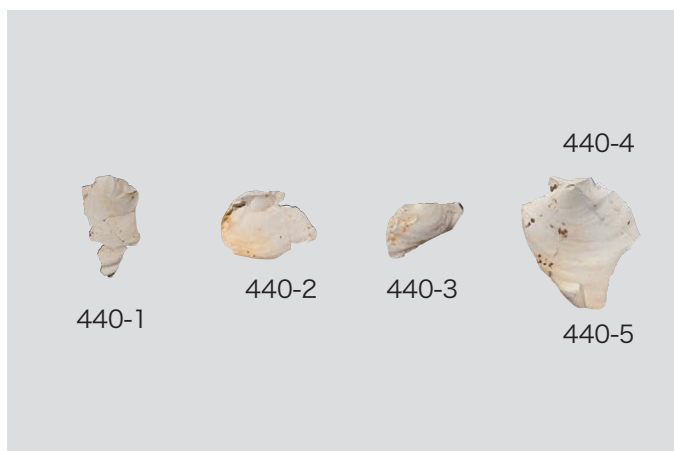
接合資料 10・12・17・20 (裏)



接合資料 13

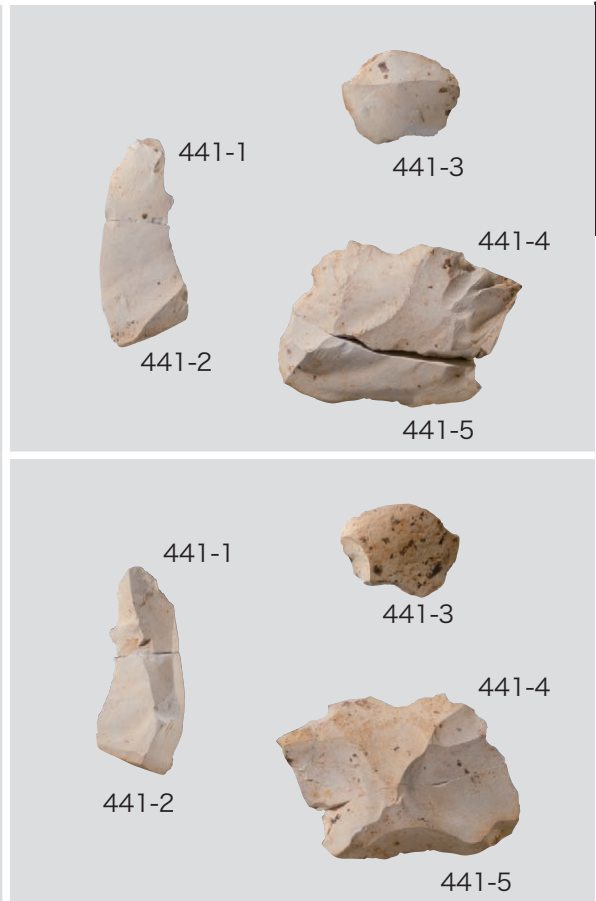


接合資料 16





接合資料 14



接合資料 15





444



444-1



444-2



接合資料 18



445



445-1



445-2



接合資料 19

ふりがな	にしまきのいせき							
書 名	西牧野遺跡							
副書名								
巻 次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財調査センター報告書							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	成瀬友弘・山内基樹・株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループ							
編集機関	愛知県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL.0567 (67) 4164							
発行年月日	2013年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市区町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
にしまきのいせき 西牧野遺跡	おかざきし 岡崎市 かしやまちょう 樫山町 まきひらちょう 牧平町	23190	620028	34° 54' 53"	137° 17' 8"	2010.6 ～ 2011.3	24810m ²	第二東海 自動車道 横浜名古屋線建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西牧野遺跡	集 落	旧石器時代	礫群		石器など		県内2例目の礫群	
		縄文時代～ 弥生時代	竪穴建物、土坑など		土器、石器など		石囲炉を持つ竪穴建物	
		中世	掘立柱建物、竪穴状遺構、土坑、溝、井戸など		瀬戸・美濃窯産陶器、土師器（鍋・皿）、金属製品など		竪穴状遺構を伴う屋敷群	
		近世	溝、土坑など		瀬戸・美濃窯産陶器、木製品など			
文書番号	発掘届出（22埋調第33号・2010.4.22） 受理通知（22教生第291号・2010.5.17） 終了届・保管証・発見届（22埋調第309号・2010.3.31）							
要 約	本遺跡は、旧石器時代から近世までつづく遺跡である。なかでも旧石器時代については多くの石器類とともに県内では2例目となる礫群が確認されており、希少な遺跡であるといえる。また中世についても竪穴状遺構を伴う屋敷群が展開しており、中世の集落を考える上で貴重な資料をえることができた。							

愛知県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第1集

西牧野遺跡

発行年月日 2013年3月31日

編集 愛知県埋蔵文化財調査センター

発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社

